
人形の救世主

すとりぼらんぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形の救世主

【Nコード】

N1582U

【作者名】

すところぼらんぷ

【あらすじ】

魔物や周辺諸国との戦いに明け暮れるグランディール王国に生まれた貴族の娘、フェリシア。彼女は世界を救うと予言されながら魂を持たない抜け殻だった。

しかしある夜、ついにフェリシアは覚醒する。刺客を蹴倒した救世様は呆然と呟いた。

「ここ、どこですか？」

予言の救世主に宿っちゃった現代日本の女子大生がトリップ先の

異世界を救う(?) 主人公最強系・愛と勇気と希望のスペクタクル
冒険記。 たぶん。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

初登場話数も併記しておきましたので、ネタバレが気になる方は参考にしてください。

読まなくても差し支えありませんが、よろしければ備忘録にどうぞ。

登場人物紹介

フェリシア・チェンバレン（第1話登場）

性別：女性

年齢：20歳

外見：ダークブラウンの長髪、黒い瞳。身長・体重共に平均値。グランディール王国最有力貴族の一つチェンバレン公爵家の一人娘。先のグランディール魔道師団長によって世界の救世主になると予言され、世界最強生物である竜族に匹敵する魔力を持って生まれてくる。

しかし、感情持たず、自発的には言葉を発することもない動く植物人間状態。人は彼女を皮肉って人形姫と呼ぶ。

斉藤 優花（第1話登場）

性別：女性

年齢：20歳

外見：ダークブラウンのセミロング、黒い瞳。

フェリシアの体に宿ることになった現代日本の女子大生。

基本的に楽観主義者で、考える前に手が出るタイプ。

何故か元の世界への執着が少なく、すんなり救世主フェリシアとして生きる道を選ぶ。

キアラン・グランディール（第1話登場）

性別：男性

年齢：22歳

外見：黒髪、琥珀色の瞳。長身で筋肉質。

グランディール王弟。

性格は生真面目、かつ冷淡（を、本人は目指している）。

兄王のことを深く敬愛しており、王と祖国に仇為すものには容赦し

ない。要はブラコン。

オズワルド・グランディール（第3話登場）

性別：男性

年齢：27歳

外見：金髪、琥珀色の瞳。正統派の美形。

グランディール王国の国王。

柔和で穏やかな外見と気性でありながら、知略に優れ貴族・庶民がかわらず国民からの支持も厚い。

フェリシアのことをとても大切にしている。

シャロン（第3話登場）

性別：女性

年齢：四十代後半

外見：淡い金髪。体形はスマート。

フェリシアの主治医。

幅広い知識と柔軟な発想を持つ。

メリッサ・ラングトン（第5話登場）

性別：女性

年齢：17歳

外見：赤毛のおさげ。小柄で小動物的。

フェリシアの侍女。

魔力の質も量も標準、下級貴族である男爵家の出身で公爵家の姫君に仕えるには家柄も低いが、フェリシアに近づいても体調不良を起こさないため、大抜擢を受けた。

ベネディクト・チェンバレン（第5話登場）

性別：男性

年齢：65歳

外見：ロマンスグレーの紳士。若い頃は勿論、今も懸想する女性が後を立たない。

チェンバレン公爵、位は宰相。フェリシアの父親。
仕事場では時に王すらも小童扱いする辣腕政治家。私生活では好々爺然としている。

四十過ぎてから授かった一人娘であるフェリシアを溺愛しており、優花にも優しい。

ダリル・スマイサー（第8話登場）

性別：男性

年齢：五十代

外見：灰色の髪、鋭い目つき。キアランに次ぐ大柄な体格。
魔法師団長。フェリシアの魔法の師匠。

寡黙で話すときも静かだが、妙な迫力がある。

ハロルド・アーデン（第10話登場）

性別：男性

年代：五十代

外見：金髪碧眼、整った顔立ち

チェンバレン家と比肩する有力貴族アーデン公爵家当主。位は將軍。
グランデール国軍の最高責任者であり、文官トップのベネディクトとは、対立していないが馴れ合ってもいない微妙な関係。

ヴェロニカ・アーデン（第10話登場）

性別：女性

年齢：18歳

外見：金髪碧眼、気の強い美少女

アーデン家の次女。

高慢ちきで高飛車、フェリシアに対しては敵意満々だが、キアランやオズワルドの前では猫を被っている。

マルグリット・アーデン（第13話登場）

性別：女性

年齢：24歳

アーデン家の長女。王国軍少佐の男勝りな美女。

妹とは正反対のサバサバした性格で、何故か女性からの人気が異様に高い。

フェリシアに対しても好意的で、冗談でよく口説いている。

キアランとは、子供の頃から共に訓練場で試合をする腐れ縁。故に彼の弱みを色々握っている。

エドモンド・アーデン（第19話登場）

性別：男性

年代：25歳

外見：金髪碧眼、女性と見紛う絶世の美青年

アーデン公爵家の嫡男。

魔道師団の副団長も勤める将来有望な青年のはずが、常に好奇心の赴くまま突飛な行動に出るため全てを台無しにしている。

デイラン・ハイグ（第23話登場）

性別：男性

年代：四十代

外見：熊のような巨躯

グランディール近衛騎士団団長。キアランの上司にして師匠。

貴族階級出身にもかかわらず一般兵からたたき上げ、後に騎士団へ転向した異色の経歴の持ち主。

細かいことにはこだわらない豪快な気質だが、部下からの信頼は厚く、腕も立つ。

設定集（前書き）

設定集というか、作者の備忘録です。

構想中のネタもあるので、ある日突然堂々と変わっていることもあります。

せっかく書いたので、興味のある方だけどうぞ。読まなくても特に差し支えはありません。

設定集

<地名>

レーア大陸

この物語の舞台。

大陸のほかに、いくつかの島もある。

グランディール王国

国家元首：国王オズワルド

三百年ほど前、魔物の侵攻から人の地を守った英雄が建国したかつての大国。

国土が分断されてなお人の国の中では最強の勢力を誇っているが、魔物と各国を同時に相手できるほどではなく、その国力は少しずつ衰えている。

ウルリーク魔法共和国

国家元首：大統領

グランディール初代国王没後、離反した人の国。

グランディールから見て、ローレル樹海を挟んだ大陸西部に位置する。

魔法技術の発展に力を入れており、マイペースな国柄。

ボニファーツ帝国

国家元首：皇帝

ウルリークと同じくグランディールから離反し、神への信仰を捨てた軍事国家。

サナデイス大河を挟んで東に位置する。

ミネレア教国

国家元首：教皇

グランディール南部の宗教国家。

世界中のグラノーヴァ信者達の総本山であり、小国ながらその影響力はグランディールを凌ぐともいわれる。

グラノーヴァへの信仰は絶対だが、創生神とは別の女神も信仰している。

コナリー山脈

レリア大陸の中央部を横に分断する峻嶒な山脈。

北部の魔物の地と南部の人の国を分断している。

大陸北部

レリア大陸コナリー山脈より北の、魔物の地。

ここでは魔王が魔物たちを治めている、上位の魔物や竜の巣が広がっている、古の邪神が眠っている等と人々は憶測するが、長らく深部に人が立ち入ったことはないため真相は定かではない。

牢獄島

かつて創生神が魔物などの「悪しきもの」を封じたとされる北の最も果ての島。

その詳細は勿論、実在すらも不明。

<魔法>

水呼び

水を精製する魔法。魔力があれば誰でも使える簡単な魔法で、日常的に使われる。

火起し

小さな炎を作る魔法。最も簡単で、水呼びと並びよく使われる。

停止

水呼びなど、一度使うと術者の魔力が切れるまで効果が持続する魔法を止めるための魔法。

消去

停止の上位魔法。魔法の効果を消し去る。自分の魔法にかける他、他人の魔法にかけて妨害することもできる。後者の方が難易度も消費魔力も高く、術者・被術者の双方にダメージが加わる。自分での魔法にかける場合は魔力の消費のみ。

閃光

強い光で対象を焼き貫く上級攻撃魔法。狙撃性に優れる。

爆風

広範囲をなぎ倒す上級攻撃魔法。多数相手に有効。

突風

強い風を起す魔法。

飛来してきたものを吹き飛ばす他、自身にかけて滞空することも可能。ちよつと腕のいい魔術師でなければ使うことのできない中級魔法。

火焰

対象を火で焼き尽くすポピュラーな攻撃魔法。

<時間表記>

レーア大陸の時間は十進法で表される。

一日の長さ、一年の長さは現実世界と同じ。

一の刻 00:00~02:24

二の刻 02:24~04:48

三の刻	0	4	:	4	8	∩	0	7	:	1	2
四の刻	0	7	:	1	2	∩	0	9	:	3	6
五の刻	0	9	:	3	6	∩	1	2	:	0	0
六の刻	1	2	:	0	0	∩	1	4	:	2	4
七の刻	1	4	:	2	4	∩	1	6	:	4	8
八の刻	1	6	:	4	8	∩	1	9	:	1	2
九の刻	1	9	:	1	2	∩	2	1	:	3	6
十の刻	2	1	:	3	6	∩	0	0	:	0	0

一年も十ヶ月。

一ヶ月は6日×6週間の36日間、年末に5日間の”何にも属さない日”がある。

<お金の単位>

青銅貨・赤銅貨・銀貨・金貨の四種類の貨幣が使われており、十枚ごとに一つ上がる。

青銅貨 10円

赤銅貨≡青銅貨10枚 100円

銀貨≡銅貨10枚 1000円

金貨≡銀貨10枚 1万円

円やドルなどの単位はなく、例えば一万五千円相当の品物は金一枚銀五枚という形で表される。

貴族の間では紙幣や小切手も使われるが、一般的ではない。

<国軍階級表>

元帥

軍事国家ボニファーツのみ存在する軍のトップ。皇帝が兼任。

将軍

ボニファーツ以外の総大将。

佐官（大佐・中佐・少佐）
皆や大隊以上の指揮を任される。

尉官（大尉・中尉・少尉）
左官の補佐・中隊の指揮。

下士官（曹長・軍曹・伍長）
尉官の補佐・小隊の指揮。

兵（兵長・一等兵・二等兵）
分隊以下のまとめ役。

ちなみにグランデイルの魔道師団長と騎士団長はだいたい同格。国軍とは独立した機関であるものの、無理矢理階級分けするなら左官と將軍の間ぐらい。ウルリークでは魔道師団が將軍より上だったり、ポニファーツでは魔道師団自体が存在しなかったりします。現実世界の軍の階級はまだもっと色々ありますが、あまり細分化すると逆にわかりにくいので、あえてこんな感じですよ。

元帥がポニファーツ以外にいないのも、帝国が軍事国家と言うことを際立たせたいためであって別に作者が忘れてたわけじゃないよ！
本当だよ！！

1・討伐（前書き）

この小説はフィクションです。
実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません。

1・討伐

塔は闇に包まれていた。今は真夜中、使用人たちが忙しく働いていた時は灯されていた魔法灯もすっかり消えて、分厚い雲に覆われた空には月や星の明かりもない。塔を上るキアランにとって、手にした小さな燭台の蝋燭だけが道しるべだ。しかし、堅固な石の塔を覆う暗闇は、頼りない明かりのためだけではなかった。

(今日は一段と重い……)

キアランは、ひととき足を止めて精悍な顔を顰めた。塔の頂上に近づくと、常人であれば気分を悪くするような、濃密な魔力の気配が濃くなっていく。魔力とは本来、善悪のない純粹な力だ。しかし彼には、まわりつくような重い空気が、何か禍々しい物に思えて仕方なかった。

(まさか俺を止めようか？いや、あの人形に意思などあるまい)

キアランは思い直して、使い慣れた愛剣を握りなおすと、再び階段を上り始めた。

塔の最上階には、四隅を金属で補強された木製の扉が佇んでいた。キアランは耳を澄まし、階下が騒ぎになっていないことを確認すると、昏倒させた見張りの兵から奪った鍵を扉の鍵穴に差し込んだ。鍵はあっけないほど滑らかに回り、音もたてずに扉が開く。豪華な内装や調度品が、蝋燭の光に照らし出された。慎重に部屋へ入り、猫足の机に燭台を置く。整いすぎた部屋の内部は、貴人の私室であることを差し引いても殺風景だった。人が住んでいればおのずと出てくる、私物や装飾品、嗜好品による生活感がまるでないのだ。しかし、この部屋は無人ではない。

「神よ、偉大なるグラノーヴァよ、わが宿命を照らし給え」

キアランは剣を抜き放ち、創生神グラノーヴァへの祈りの聖句を唱えながら、奥に設えられた天蓋つきの寝台へ歩み寄った。大気に歪

みを生じさせるほどの、強大な魔力の源へと。寝台を覆う布を取り払うと、まずはダークブラウンの髪が視界に飛び込んでくる。塔の最上階で暮らす莫大な魔力の持ち主は、長い髪を広げて仰向けに眠る人間の娘だった。娘の顔の造作自体は、平凡よりやや上といった程度だが、眠っていても滲み出る人にはあるまじき力が、この世の者ではないかのような妖艶さを醸し出していた。

「魔女が……」

しばしその顔を見つめたキアランは、吐き捨てるように呟いた。彼の琥珀色の瞳には、憎悪と殺意が浮かんでいる。

「お前のような者が、救世主であるものか。人を惑わす悪魔め、この俺が討ち取ってくれる」

下の方で、人の叫ぶ声と足音が遠く響いてきた。見張りを昏倒させて塔に忍び込んだことに気づかれたらしい。段々と近づいてくる複数の足音を忌々しく思いながら、キアランは抜き身の剣を構えた。

「グランデールに！オズワルド陛下に栄光あれ！！」

祖国と王を讃えながら、躊躇なく娘の心臓めがけて白銀の刃を振りかぶる。小さな炎の光を受けた刃が煌いた刹那。娘の目が見開かれた。

「！！」

深い闇の色をした瞳に見据えられ、キアランの動きが僅かに停止する。すると、娘が叫んだ。

「痴漢ー！！！！」

続けて、寝転がった体勢から見事な蹴りが放たれ、キアランの鳩尾に衝撃が走った。と、思う間もなくキレのある右ストレートが彼の頬を打つ。本来なら、騎士団で厳しい訓練を受けて育ったキアランが、女の力で殴り倒されるなどありえない。しかし魔術で抵抗される可能性は考えても、まさか蹴る殴るといったおよそ淑女とは思えない方法で反撃を食らうとは夢にも思っていなかった彼は、思わずよろめいた。それでも、騎士の意地で手にした剣は離さない。素早い動きでベッドから降り仁王立ちした娘は、キアランの剣を見て更に

捲くし立てた。

「刃物？じゃあ痴漢じゃなくて強盗殺人！！？正当防衛！！！」

娘は叫びながらキアランに肉薄し、膝を蹴り上げた。素人、それも年若い女の攻撃をまともに喰らったシヨックで呆然としていたキアランは、強烈なトドメの一撃をさされてうずくまる。

「ぐうっ……！」

二十二年間生きてきた中で、味わったことのない類の屈辱と激痛に彼はとうとう剣すらも放り出して股間に手を当てた。ガランと間拔けな音を立て、剣が転がる。

「フェリシア様、ご無事ですか！！？」

それと同時に激しい音を立てて扉が開き、武装した数人の兵士達が部屋へ駆けつける。彼らが灯した魔法の明かりで、部屋の中は昼間のように明るく照らし出された。

「え……キアラン殿下？」

槍を構えていた兵士の一人が、あっけに取られて呟いた。彼らの前には、きよとんと小首を傾げる娘の足下で、国一とも謳われた騎士が股に手を当てて倒れ呻く珍妙な光景が広がっているのだ。無理からぬことではある。しかし兵士達が更に仰天したのはその後だった。

「あの、すみません」

兵士達の誰一人として、能動的に喋るところを見たことなかった娘が、彼らの方を向いて尋ねた。

「ここ、どこですか？」

「フェリシア様が喋ったー！！！」

娘の問いに返って来たのは、まるで珍獣が喋ったかのように驚愕する兵士達の絶叫だった。

1・討伐（後書き）

ネットでよく見る異世界モノを書いてみた。初投稿よろしくおねがいします。

真面目っぽい章題と書き出しで始めましたが、イケメンが股間を蹴られて悶絶で第一話終わり。シリアスの皮を被ったコメディです。おそらく全編こんなノリです。

2・人形姫の目覚め

娘は混乱していた。目が覚めた瞬間刃物を持った男に襲われ、寝ぼけつつも撃退した安堵を味わう間もなく、気づけば見知らぬ部屋に立っている。そんな状況で混乱しない方がおかしい。ところが、騒ぎを聞きつけてやってきたらしい、コスプレ外国人集団はもっと混乱しているようだった。人間、自分よりも動転した相手を前にすると、いくら冷静になれるものだ。娘はもう一度、彼らに問いかけた。

「あの、すみません。ここどこですか？というかフェリシア様って誰ですか？」

問いかけに、西洋風兵士のコスプレをした集団は水を打ったように静まり返り、娘を凝視した。

「まさか私？ひ、人違いですよ！私の名前は斉藤優花です」

娘 自称斉藤優花、他称フェリシアがわたたと自己紹介すると、兵士たちは一人残らずひれ伏した。

「ついに、ついに救世主様がお目覚めになった……！」

「フェリシア様、どうかこの国に光明を！」

「グランデールに勝利を！」

「俺に彼女を！」

「明日の夕飯、豚の香草焼きになりますように！」

そして、感涙に咽び泣きながら懇願する声。

（後半は何かが違う気もするけど。私、妙な宗教団体にでも拉致されたのかなあ。逃げるにしても、海外じゃあどうすればいいのか…
…日本大使館ってどこにあるんだろう）

どう考えても生まれ育った日本とはかけ離れた、中世ヨーロッパ風の人々と内装をきよろきよろと見渡して、優花は嘆息した。

「ああ、フェリシア様がお嘆きだぞ！」

「何か足りないものがございましたか、救世主様！！？」

その様子を見た兵士達が優花に詰め寄る。

「もつと綺麗なお召し物を持ってきましようかつ!？」

「おい誰か果実水を差し上げる!」

「お菓子もありますよ!」

仄かに淡いオレンジ色に光る見た事のない飴を差し出され、思わず優花はふらふらと前に出た。

「美味しそう……って、そうじゃなくて!」

「お前ら……何をしている……」

うっかり菓子に釣られそうになった優花が我に返った足下で、地を這うような低音が唸った。

「?」

視線を向けると、床でうずくまっていた黒髪の青年　キアランががばりと身を起こし、しなやかな動きで立ち上がる。

(うわっ、いい男。ハリウッドの男優みたい)

自分で蹴り倒した相手であるにもかかわらず、優花はその顔に一瞬見とれた。欧州系の彫りが深い顔立ちをした青年の、不機嫌そうに眇められた琥珀の瞳が優花を一瞥し、次に周囲の兵士達を睨みつける。

「お前達、こんな娘のことよりも、まずは俺が倒れていることに気を配れ。ここは王の居城だぞ、侵入者でもあつたらどうする!」

「ハッ!申し訳ございません!」

自身が侵入者であることは棚に上げてキアランが一喝すると、持ち場を離れていた兵士たちは慌てて部屋から出て行った。キアランは改めて優花に向き直り、非友好的な態度でじろじろと眺め回す。

「雑兵どもは救世主の目覚めだと寝言を言っているが、お前……本当にフェリシアか?」

「だから、違うって言うていでしょう!？」

失礼極まりない言い草に、優花は一瞬前まで相手に見とれていたことも忘れて言い返した。

「ほう……フェリシアでないと言うなら、お前は何処の誰なんだ?」

「だから、日本国・東京都在住、斉藤優花です、つてば！」

「知らんな」

「は……？」

断言された言葉に、優花の目が点になる。

「ニホン？トウキョウ？そんな国も町も、聞いた事はないぞ。サイトー・ユウカなどという女も知らん」

「中国の隣の小さい島国です、富士山とか侍とかゲイシャとか有名でしょ！？そもそも、貴方達が私を拉致してきたんじゃないんですか！？」

問いかねながらどんどんパニックに陥っていく優花を冷たい眼差しで見下ろし、キアランはため息交じりに答えた。

「ニホンもチューゴクもお前の頭の中になしか存在しない国だろうが、教えてやる。ここはグランディール王国、お前が守護すべき神聖なる大国だ」

「ぐらんでいーる……？」

優花はとっさに世界地図を思い浮かべた。九年間の義務教育を終えた人間のたしなみとして、少なくとも「大国」と呼ばれるほどの国なら知っている。その中に、グランディールという国名は存在しなかった。

「……あの、まさか、ここ、地球上ですらない、とか言わないですよね……？」

自分の国が大国だと信じて疑わなかったあの痛い人であってくれ、と念じながら優花が恐る恐る尋ねると、キアランの眼差しは侮蔑を通り越して何かかわいそうなものを見る目になって来た。

「チキュウとは何だ？ここはレーア大陸に決まっているだろう」

「……」

聞いた事もない大陸名に、優花はとうとう沈黙した。

（まさかの異世界コースっぱいんですけど……）

「兎追いかけて穴に落ちたわけでも洋服ダンスに突っ込んだわけでもないのに、何でこんなことに……」

そもそも私、目が覚める前何してたっけ、と考えて米神を押さえる優花。なんだか頭痛がする。

「何をブツブツ言っている。とにかく、気が狂っているとしか思えないとはいえ、お前にも自我が芽生えたのならその使命を果たす義務が」

「あー、あのー、待って、待って下さい、実は私、異世界人なんです！ー！」

キアランの台詞を遮って叫ぶと、一瞬沈黙が降りた。

「……そうか」

（まさか、信じてもらえた？この部屋の明かりも魔法っぽいし、やっぱりファンタジーな世界なのかな？）

優花の期待は、すぐさま打ち破られる。キアランは整った顔に、凄絶な笑みを浮かべていた。本物の殺意が漲る笑顔で、優花を射抜くように見据える。

「そうか、そんな下らない偽りを吐いてまで、己が役目を放棄する気か、フェリシア・チェンバレン。貴様など、やはりこの俺が成敗してくれる！！」

「……！！」

叩きつけられる殺気に声も出せず優花は目を見開いた。キアランが拾い上げた剣で、今から刺し殺されるのだと、比較的能天気な彼女にもはつきりわかった。だというのに、あるいは、命の危機が迫っているからこそ、優花は疑問に思った。

（そういえば、私、なんでこの人と会話が成立してるんだろう。この外国人さん、日本語しゃべってるわけじゃない……私がこっこの言葉を、話してる……！？）

そのことに思い当たった瞬間、先程の比ではない激しい頭痛に襲われた。

「うあつ……！！」

膝をつき、ずきずきと痛む頭を抱える優花の脳裏に、情報の洪水が流れ込む。グランデール、予言の救世主、各国の侵略、魔物、な

どの言葉が暴力のように次々と浮かんでいく。

「おい……？この期に及んで、弱ったフリをしても、俺の気は変わらんぞ……？」

キアランはそう言いつつも、騎士として明らかに様子のおかしい女性を切り捨てる事も躊躇われ、剣を下ろした。目前でもがき苦しむ娘に近づくと、ガクガクと震える手が必死にすがり付いてくる。腕の中に倒れこんできた体は、高熱を発していた。

「たすけ、て……」

優花はそれだけ掠れた声で呟くと、激痛のあまり意識を手放した。

「……どうしてそれを、俺に言う」

呟くキアランの声は、彼自身も思いがけず途方にくれていた。

2・人形姫の目覚め（後書き）

この小説、ジャンルは間違いなくファンタジーですが、異世界の後につくのは召還なのか転生なのかトリップなのか、ちょっと分類に困ります。多分全部足して割るのが一番正しい。

3・予言

世界は神代の時代、創生の神グラノーヴァによって生み出された。一つの大陸といくつかの島からできたその世界は、善いものも悪きものも混沌としており、争いが耐えなかった。そこでグラノーヴァは悪しきものたちを北の果ての牢獄島に封じ、信心深い人々や気性の穏やかな動物達を大陸や他の島々に住まわせ、天上の国へ帰っていった。

レーア大陸と名づけられた大地は肥沃で、牢獄島を除いた島々もそれぞれに美しく、善いものたちは平和に暮らしていた。ところが、牢獄島に押し込められた悪しきものたちはそれを妬み、呪った。彼らの執念は神の施した結界すらも徐々に弱めていき、ついには一部が外の世界へと漏れ出したのだ。悪しきもの醜く獰猛な魔物たちの前に、善いものたちは無力だった。知能を持つ魔物たちは瞬く間に大陸の北部を占領し、自分達の国を立ち上げ、知能を持たない低級の魔物を大陸中に放った。

人も家畜もただ殺戮されていく現実には、人々は恐怖した。その中で一人の青年が立ち上がり、悪しきものたちに戦いを挑む。グラノーヴァの加護を受けた青年は最強の魔物である竜をも倒す力を持ち、果敢に戦った。その姿に心打たれた人々も団結し、戦い方を学び、魔物を撃退するようになった。人々の国は創生神の名前を冠してグランディール王国と呼ばれ、青年は初代国王となった。

初代国王の尽力により、人々は悪しきものたちに対抗する手段を得たが、彼も万能ではなかった。やがて老人となった初代王は亡くなり、身体能力で魔物たちに劣る人々は抵抗しながらも、徐々に国土を侵されていった。さらに、強力な守護者を失い不安に駆られた人々は、人間同士でも争い、王国は四つに分断された。

そして、建国から三百年余りが経過したグランディール王国は、最盛期の半分以下の領土と国力で、魔物やグランディールに成り代わ

ろつという周辺諸国と戦っていた。そんな敵ばかりの絶望な状況の中、先代の魔道師団長が、ある予言を残した。

『私の死後、グランディールに救世主が生まれるだろう。初代国王陛下に匹敵する魔力を持つ救世主は、世界を救う。だが気をつけよ、その力が奴らの手に渡れば、我らに未来はない』

高名な預言者だった魔道師団長は、全ての力を振り絞るようにその言葉を残した後、息絶えた。そして彼の急逝からわずか一カ月後、予言通り強力な魔力を持つ赤ん坊が生まれる。その赤ん坊　チエンバレン公爵の長女フェリシアは、王宮に引き取られ、大切に育てられた。

「それが、こんな木偶の坊だとはな……」

ひとまず、斉藤優花と名乗るフェリシアを王宮の医務室に運んだキアランは、眠る娘の顔を見下ろしてため息をついた。

王宮で大切に育てられたにもかかわらず、フェリシアは感情を持たなかった。朝になれば目を覚まし、食事をし、勉強を教えれば理解はしている様子の彼女だが、幼い頃から遊んだり、趣味に興じたりすることはなかった。笑わず、泣かず、まるで魂だけが抜けたようにいつも無表情で過ごす彼女を、人々は人形姫と皮肉った。また、フェリシアの強い魔力に当てられた力の弱い者は体調を崩すこともあったため、今では一日の大半を結界の施された塔に閉じ込められるようにして彼女は暮らしている。

「木偶の坊とは酷い言い草だな。フェリシアは、自分で物を考えて話している様子だったのだろう？」

背後からかけられた声に、キアランは立ち上がった。振り返ると、肩まで伸ばした金の髪に琥珀色の瞳の、豪華な夜着を纏った男が一人で医務室の戸口に立っていた。

「陛下！このような時間に、このようなところへ、共もつけずに出歩かれては危険です！」

国王オズワルドは、大声を出すキアランに微笑みかけ、そつと口に指を当てると、控えていた医術士に簡単な挨拶をして部屋に入って

きた。

「非公式の場だ、兄上で良いといつも言っているだろう、キアラン。大丈夫だよ、私も自分の立場はわきまえている」

琥珀色の瞳以外、あまり弟には似ていない柔和な美貌に笑い皺を刻み、オズワルドはキアランの傍らに立った。

「何より、私の愛しいフェリシアの一大事だと言っじゃないか。執務中だろうと就寝中だろうと駆けつけるに決まっているさ」

「おやめください……」

キアランは短い黒髪をがしと掻き毟った。オズワルドは、フェリシアを予言の救世主として以上に、大切にしている。敬愛する兄王が、予言と魔力ばかりで実際には何の役にも立たない娘に傾倒する様子は、キアランにとってひたすら不愉快だった。

（いや、兄上は悪くない。悪いのは、抜け殻の分際で兄上を誑かすこの女だ）

子供の頃から積もり積もった鬱憤で、キアランのフェリシアに対する心証は最悪である。もっとも、今宵ついに彼女へ剣を向けるに至ったのは、それだけが原因ではないのだが。

「部屋に戻ってお休みください、と申し上げても無駄でしょうから、簡潔に報告させていただきます」

キアランは諦めて、オズワルドに塔で起こったことを話し始めた。勿論、自分がフェリシアを暗殺しようとしたことは伏せておく。

「なるほど、今のフェリシアは異世界人だと名乗っているのか」

説明を聞いたオズワルドは、愉快そうにくつくつと笑う。

「面白がらないで下さい、兄上。そんなもの、使命を果たしたくないが為の出任せに決まっています。何処まで無責任な女だ」

嫌悪と侮蔑を込めて娘を見下ろすキアランを、オズワルドは咎めた。「いくらお前でも、彼女を侮辱するのは許さないよ、キアラン。責任の如何を問うなら、一人の女性に全てを押し付けようと言う貴々の方が、よほど無責任なのだから。ねえ、シャロン先生？」

オズワルドが話を振ったのは、部屋の隅で試験薬を解析している中

年の女医だった。夜中にもかかわらず皺一つない白衣を着た医術士のシャロンは、フェリシアの主治医である。

「さて。そもそも、フェリシア様が異世界人、というのは案外正しいかもしれませんよ」

試験薬から視線を上げて、中年医師は人の悪い笑みを浮かべる。

「どういうことだ？」

キアランの剣呑な眼差しに、シャロンは怖い怖いと口先だけで首をすくめた。

「ご存知の通り、フェリシア様は人形と揶揄されるほど感情の欠落された方ですから。体調管理はもとより、精神面の診断も定期的に行っております。胡散臭い言い方をすれば、魂の状態を調べるのです。姫君は、魂が空っぽの状態でした」

「その話は聞き飽きた。フェリシアは精神疾患を抱えているのではなく、魂そのものがない、とかいう怪しげな話だろう？」

「それが、今のフェリシア様には魂があるのですよ。しかも、召還術を行った際に現れる異世界の残滓、この世界には存在しない魔力の名残を帯びた魂です。その影響か、フェリシア様の莫大な魔力も、常人が傍に寄っても耐えられる程度には抑えられている」

シャロンは新たに手帳を捲り、複雑な計算式を書き付けながら続けた。

「異世界は、百年ほど前ウルリク魔法共和国の空間術学者がその存在を唱えて以来何度も賛否が分かれてきた議題ではありませんが、簡単な召還術は我が国でも成功しており、信憑性は近年高まりつつあります。同時並行的に存在するどこかの世界に住んでいた、『サイトー・ユウカ』さんの魂が、何らかの原因でこちらの世界に飛ばされ、フェリシア様の体に宿ったのだとしたら。ありえない話ではありません」

「だが、シャロン。フェリシアはグランディールの標準語を話したのだぞ。この娘の中身が本当に異世界人ならば、こちらの世界の言語を理解すると思うか？」

キアランの指摘に、シャロンは初めて少し困った顔をした。

「確かにその点は、私にもわかりません。あるいは、彼女の魂がこちらに来るときに、グラノーヴァ様に授かったか」

最後は冗談めかして付け加えたシャロンに、キアランは呆れた眼差しを向けた。明らかに信用していない様子である。一方それまで黙って話を聞いていたオズワルドは、神妙な顔つきで頷いた。

「そうか。フェリシアの魂は、フェリシアのものではない可能性もあるのだな」

「陛下といえど、ご不安ですか？」

「いいや」

シャロンの問いに、オズワルドはきつぱりと首を横に振った。

「フェリシアの人格が異世界人であろうとなかろうと、彼女は私の大切な人だ。シャロン、引き続き看病を頼む。フェリシアが目覚ましたらすぐに呼んでくれ」

「御意」

かしまるシャロンには目もくれず、世界で一番大切な宝物でも触るかのように、優しくフェリシアの髪や頬を撫でるオズワルド。その様子を不機嫌そうな顔で眺めていたキアランは、さっと立ち上がり、恭しく手を差し出した。

「もうよろしいでしょう、兄上。部屋までお送りいたします」

「そうだな、そろそろ休まなければ、明日の政務にも差しさわりが出るか。名残惜しいが」

オズワルドはため息混じりにキアランの手をとり、重い腰を上げた。そして、二人の兄弟は部屋を出て行く。

真夜中を過ぎた廊下は暗く静寂に満ちており、二人が進む硬質な足音だけが響いていた。キアランが携帯用の魔法灯に灯した光は、先程使っていた蠟燭よりは明るい。廊下の先は闇に包まれている。

「……………」

「……………」

二人ともなんとなく黙って歩いていたが、王族の居室がある棟に差し掛かって、オズワールドが何気なく口を開いた。

「ところでキアラン。フェリシアを嫌って、最近ではめつきり彼女の塔には近づかなかったお前が何故、あの塔にいたのだ？」

その質問に、不覚にもキアランは一瞬足を止めた。先程は上手く話を逸らせたと思っていたが、とんだ思い違いだった。

「それは、塔の見張りが騒いでいたので、仕方なく様子を見に行っただけです」

苦し紛れにまったくの嘘ではない言い訳をすると、オズワールドが背後で笑む気配がした。

「お前は相変わらず嘘が下手だね。まあいい、そういうことにしておいてあげよう」

二人は王の居室の前までやってきて、足を止めた。キアランはゆっくりと兄王の方を振り返る。魔法灯に照らされたオズワールドの笑みは、何故だかいつもより物騒な気配がした。口付けでもするかのように至近距離から顔を覗き込まれ、キアランは背中に冷や汗を浮かべる。

「キアラン、お前は賢い子だ。まさか私の宝を、勝手に壊したりはしないね？」

瞳の笑っていない笑顔の、小さな子供に言い聞かせるような優しくゆっくりとした問いかけに、キアランはぎこちなく頷いた。

「勿論です」

「なら、いいんだ。妙なことを聞いて悪かったね。おやすみ」

そしてキアランの頭を幼い頃のように撫でるオズワールドは、いつもの彼だった。穏やかな笑みを浮かべた彼は、部屋の中に控えた不寝番を呼び出し扉の向こうへと消える。

「……」

キアランは無言で長い息を吐き出し、自室に帰るべく歩き出した。

3 予言（後書き）

ここでようやく世界観を少し出してみました。とりあえず、救世主だと予言されたのに植物人間状態のお嬢様、それに宿っちゃった現代日本人の主人公、デレデレの王様、ツンツンの王様弟、だけわかっていただければ問題ないです。

ここまでの三話が一文で済んでしまったよ……。

4・救世主

翌朝優花が目を覚ますと、夜中にいた豪華な部屋と違った内装に目を瞬いた。まだズキズキと痛む頭痛を押して起き上がると、つんとした薬の香りが鼻をつく。すると、奥の机で書き物をしていたシヤロンがこちらを向いた。

「おや、目が覚めましたか？おはようございます、フェリシア様」
女医は挨拶をしつつ立ち上がり、自分の下で働く若い医術士のたちの一人に小声で指示をする。指示を受けた医術士は、頷いて医務室を出て行った。

「あの、私……」

「待って、お話は後にしましょう」

戸惑った様子で言葉を紡ごうとする優花を制し、シヤロンは傍らの水差しからグラスに中身を注いだ。そして、グラスを優花の前に差し出す。

「まずはこれでも飲んで、落ち着いてください」

「ありがとうございます……」

穏やかながら有無を言わずグラスを渡され、優花はそつと中身のぞきこんだ。中に満たされているのは淡い黄緑色の液体だ。思い切って口をつけると、さわやかな甘みと薄荷に似たスッキリとした後味が残る。水差しは常温で置かれ、氷の入っているような音もしなかったのに、程よく冷えていた。

（美味しい……アイスハーブティだ）

優花はこくこくとグラスの中身を飲み干し、ほうと一息ついた。その様子を見たシヤロンが笑みを深める。

「リラックスできましたか？では、お話を聞きましょうか」

シヤロンが切り出したときだった。医務室の出入り口の向こうから、入室を求める声があった。

「早かったですね。入ってもよろしいですよ」

シャロンが許可を出すと、先程出て行った若い医術士に先導されたオズワルドがやってきた。オズワルドはシャロンへの挨拶もそこそこに、真っ直ぐ優花の元へ歩いてきて、ベッドの上に身を乗り出し満面の笑みを浮かべた。

「フェリシア！よかった、目が覚めたのだね。どこか具合の悪いところはないかい？」

「だ、大丈夫です」

美形の青年に抱きつかんばかりの勢いで迫られ、優花は後ろに身を引きつつ頷いた。実際、先程の頭痛はシャロンから貰ったハーブティとオズワルドの勢いによって吹き飛んでいる。

「ああ、すまない。今の君はフェリシアではなく、サイトー・ユウカ殿、だったね」

困惑気味の優花に気づいたオズワルドは、身を引くと胸に手を当てて一礼する。

「信じて、もらえるんですか？」

この世界で目覚めてから、初めてまともに名前を呼ばれた優花は目を見張った。異世界人だと言った瞬間、まともに取り合ってもらえないどころか殺されそうになったことは覚えている。驚く彼女を安心させるように、オズワルドはにこりと微笑んだ。

「もちろん、君を信じるよ。君が嘘をついているようには見えないからね。それに、君の魂が異世界の者である可能性が高いこともわかって……おや？」

気がつけば、優花はボロボロと涙を零していた。自分の言うことを全面肯定され、緊張の糸が切れたらしい。

「泣かないでくれ、君が泣いていると私も悲しいよ」

「ご、ごめんなさい、私、なんだか安心しちゃったみたいで……」
何とか涙を止めようと目を擦る優花の頭に、ぽんとオズワルドの暖かな手が乗せられた。女性のように優美な顔立ちから想像していたよりは大きな手が、滑らかに動く。

「大丈夫、泣かなくてもいい。君は何も悪くないのだから」

「あ、ありがとうございます」

半ば抱きかかえられるように頭を撫でられ、今更恥ずかしくなってきた優花は身じろいだ。亡くなった祖父と父親、「いいこいいこ」を覚えた幼稚園児の弟をカウントから外せば、男の人に撫でられるなど初めてだ。そんな彼女の胸のうちを知ってか知らずか、オズワルドは優花を放す様子もない。自分を慰めてくれている相手を邪険にすることも躊躇われ、優花が固まっていると、廊下からバタバタと足音が響いてきた。次いで、医務室に二人目の来客が現れる。

「失礼する！」

それだけ告げて勢いよく扉を開けたのは、キアランだった。

「ここは医務室ですよ、静かになさってください」

シャロンの注意に等閑な謝罪を返し、キアランはずかずかと優花たちの元まで歩み寄った。

（この人……！）

それが昨夜二度に渡って自分に剣を向けた相手だと思い当たり、優花はオズワルドにその事を訴えかけようとした。キアランはそんな彼女からオズワルドを引き剥がすように間に割って入り、小声で呟いた。

「余計なことを話せば、殺す」

「！」

ひやりとした感触に視線を横へ移すと、優花の首筋にナイフが当てられていた。キアランの体で死角になっているらしく、オズワルドやシャロンが咎め立てする気配もない。必死で悲鳴を飲み込んだ優花は恐怖に青ざめたが、不意に先程オズワルドから言われた言葉を思い出した。

君は何も悪くはない。

（そうよ、私は何も悪いことなんてしてない）

自分を信じると言ってくれた人の言葉を、信じようと思った。

（なのに、なんでこんな奴に殺されなきゃならないの）

同時に、恐怖を怒りが凌駕した。傲岸不遜な目の前の男を負けじと

睨み返すと、キアランはフンと鼻を鳴らしてナイフを引っ込める。そして、オズワールドの方を振り向いた。

「おはようございます、兄上。この女に、何もされませんでしたか？」

「おはよう、キアラン。お前も大げさだね、少し彼女を宥めていただけだろう。私の至福の時を奪わないでくれ」

「戯れはおやめください。御身に何かあつてからでは遅いのですよ？」

小言じみた注意を繰り返す弟を脇に退けて、オズワールドは優花へさわやかな笑みを向ける。

「弟が失礼したね、サイトー・ユウカ殿。そうだ、私たちはそもそも、自己紹介もしていないじゃないか。丁度いい、お前も挨拶していきなさい、キアラン」

「俺は兄上のご様子を見に來ただけですよ！？何故」

いいから、と引っ張り出してきた椅子に無理矢理弟を座らせようとするオズワールドに、優花はおずおずと声をかけた。

「あ、あのっ……多分、それには及ばないと思います」

「どうして？キアランはともかく、私のことは知っていて欲しいな」「それは、その、私、皆さんの名前がわかるんです。貴方のことも知って、いえ存じ上げています、オズワールド陛下。女医さんは、シヤロン先生ですよね？」

優花の口から飛び出した王と主治医の名前に、オズワールドは目を見開き、シヤロンは片眉を上げて驚きを示し、キアランは思いつきり顔を顰めた。

「どういうことだ。お前はやはり、フェリシアなのか？」

尋問口調で問い質すキアランをむっとした表情で一瞥し、優花は主にオズワールドとシヤロンに向けて話し始めた。

「ええっと、私は斉藤優花、で間違いないんですけど……フェリシアさん、ですか？彼女の記憶も、あるみたいなんです」

本人が一番信じられないと言う顔をして、優花は告げた。

「どついついことか、話していただけるかしら、サイトー・ユウカさん」

「斉藤か優花でいいです。斉藤が家名で優花が個人名なんですけど、お好きな方で呼んでもらえれば」

シャロンにそう返し、優花は推測を交えて自分の身に起きたことを話し始めた。

優花がグランデールで目を覚ます以前。日本での最後の記憶は、トラックのヘッドライトだった。大学からの帰り道、雨の降る夕暮れの歩道をぼんやりと歩いて帰宅していた優花の背後から、突然運転を誤った大型トラックが突っ込んできたのだ。

(即死、だったんだろうなあ、あれは)

振り返った瞬間衝撃を受けて、目の前が真っ暗になった。その後のことは覚えていない。無理に思い出そうとすると、恐怖で体が震えるのだと話せば、オズワルドもシャロンも無理に聞こうとはしなかった。キアランだけは不満げだったが。

「ちなみにトラックっていうのは、物を運ぶための乗り物で……大きくて速い馬車のようなものです」

物凄くアバウトな説明だなあと自分で呆れる優花だったが、オズワルドの表情は沈痛だ。優花は罪悪感に駆られつつも、気を取り直して話を続ける。

「あの時たぶん死んでいたはずの私が、どうやってこの世界に来て、フェリシアさんの体に入ることになったのかは、私にもわかりません。私の世界の天使や神様に面会したわけでも、こちらの世界のグラノーヴァ様にスカウトされた覚えもないですから。それで、目が覚めたら……」

キアランと目が合う。首筋に、冷たいナイフの感触がよみがえった。

「あの騒ぎだったんです」

キアランの暴拳は許しがたいとはいえ、王弟殿下に二度も殺されそうになりましたとは言えず、適当に言葉を濁す。

「その時点では、フェリシアさんの記憶なんてなかったんですけど。こちらの言葉を話していたということは、無意識にその記憶を使っていたんでしょうね」

今の優花は、グランディールの標準語を理解できるようになっていた。日本語を話すように流暢にグランディール標準語を話すことができるが、一つ一つの音は日本語とは全く違う。

（英語でもここまで流暢には喋れないのになあ）

異世界の言葉をまるで母国語のように話す自分に不気味さを感じないでもなかったが、今後の生活を左右するであろう相手と意思の疎通ができるのはありがたい。

「それで、何で私、こつちの世界の言葉が話せるんだろう、って疑問に思った瞬間に、フェリシアさんが知っている情報が一気に雪崩れ込んできて。知恵熱出して倒れました」

「知恵熱だったのか、あれは」

「多分。その節はお世話になりました、王弟殿下」
キアランのツッコミに棒読みで礼を返しながら、優花は小首を傾げた。

（そういえばあの時はうつかり目の前の相手に助けを求めてしまったけど、この人、私の事殺そうとしてたのよね。私がああの世じゃなくて医務室にいるってことは、助けてくれたのかしら）

実はいい人なんだろうか、と思いキアランの方を窺うと、不機嫌そうな顔で睨まれた。

（まさかね）

心の中で舌を出し返し、思い直す。

「そういうわけなので、私が体をお借りしているフェリシアさんが予言の救世主様だとか、それなのに私が入るまでは動く抜け殻だったとか、大体わかってるつもりです」

「それが全部本当なら、随分と難儀な死後体験ね」

同情すると言いたげなシャロンに、優花はこくりと頷いた。

「はい。本当、とんでもないところに迷い込んでしまったというか

……私、どうしたらいいんでしょう?」

「そんなもの、決まっている」

オズワルドの方を見上げると、彼が答えるより早くキアランが口を出した。

「フェリシア・チェンバレンに宿っている以上、お前はこの国の救世主だ。グランディール王国と国王に尽くし、戦え。お前にそれ以外の価値などない」

斬って捨てるような言い方に、シャロンが青ざめた。オズワルドにいたっては渋面だ。

「キアラン殿下、それではあまりにも……たとえ同じことをお願いするにしても、もっと丁重になさった方が良いのでは」

冷静なシャロンには珍しく、言葉選びに迷いながら進言する横で、優花がこくりと頷いた。

「わかりました」

静かな声に、キアランすらも驚きを露にした。不覚にも瞠目した彼は、目を見開いたまま優花に詰め寄る。

「妙に物分りがいいが、何を企んでいる、異世界人。お前が本当に異世界人ならば、元の世界に帰せだとか、自分にかかわりのない戦いに巻き込むとか、もっと抵抗するのが普通じゃないのか!？」

「それがわかっていて、どうしてあんな言い方するんですか、王弟殿下は。まあ、わかりやすくてよかったですけど」
ため息混じりに呟く優花。

「多分、数ヶ月前の私なら、元の世界に帰してって駄々を捏ねたと思います。でも、フェリシアさんの記憶曰く、この世界に魂だけ別の世界に飛ばす魔法なんて無いでしょう?」

フェリシアは予言の救世主として、高度な魔法の授業を受けていた。その知識は、そのまま優花に受け継がれている。

「万が一戻ることができても日本での私は死んでいるだろうし、生きていたとしても」

言いかけて、優花ははっと口をつぐんだ。

「とにかく、元の世界に戻れない以上、こつちの世界で頑張ってみようかなと思っただけです。強いて企んでいることと言えば、衣食住の保障だけですよ。異世界人と動く植物人間が合体しただけの私、一人で放り出されて生きていくのは難しいと思うので。そのかわり、私にできることがあるならやります」

本音を言えば、戦争に巻き込まれ魔物と戦うのはやはり恐ろしい。しかし働かざるもの食うべからず、と教育されてきた優花にとってこのままニートを続けるのも気が引けた。

「いいのかい、ユウカ？その道を選ぶなら、君はこの先フェリシアとして生きることになる。もう誰も、君をユウカとは呼んでくれないよ？」

気遣わしそうなオズワルドの声に、優花は笑みを返す。この細やかで心優しい王様の役に立ちたいと思った。

「大丈夫です。フェリシアさんの体を借りている以上、いつまでも優花でいられないのはわかっています。それとも、私の力は必要ありませんか？元の世界にいた頃は護身の体術を習っていたし、フェリシアさんの記憶を使えば、魔法も使えると思うんですけど」

優花の申し出に、オズワルドはとんでもないと首を振る。

「予言の救世主殿の助力が得られるなら、国王としてはとても心強いよ。フェリシア・チェンバレン、私とこの国を救ってはくれまいか？」

差し出されたオズワルドの手を、握手の形で優花は握り返す。

「私でお力なれるのなら、よろこんで」

そうして優花は、フェリシアになった。

4・救世主（後書き）

これまで主人公名「優花」と「フェリシア」が混在していましたが、今話の主人公の選択を受けて、次回から基本的に地の文は「フェリシア」の方で統一していきます。異世界で救世主として生きる選択に、覚悟が伴っているかはまた別問題ですが。

5・侍女と父

優花の魂が宿り、魔力の自然放出を抑えることができるようになったフェリシアには、王族棟の隅に個室が与えられた。メインとなるリビングルームに、寝室、風呂場、トイレ、使用人が控える小部屋までが一続きになった、華麗な内装や調度品の部屋である。高級ホテルのような部屋を見たフェリシアは、今まで住んでいた塔でも十分すぎるほどだとオズワルドに訴えたが、食事や洗濯物の運搬など、世話係たちもこちらの方が楽だからと押し切られてしまった。

「ここは王族棟の中で一番質素な部屋だよ。今城に住んでいる王族は私とキアランだけなのだから、本当はその次に豪華な部屋を君に割り当てたかったのだけれど」

フェリシアの様子見に訪れたオズワルドが残念そうにそう言うと、兄に付き従ってやってきたキアランがとんでもないという顔をする。「チェンバレン家は名家であるとはいえ、家臣を王族棟に住まわせるなど俺は反対ですよ！それとも兄上はこの女を王妃にでもするおつもりですか？」

「もちろん、フェリシアさえ良ければ、それが一番いいね」
のほほんと微笑みながら返すオズワルドと、兄を見て蒼白になるキアランの図に、フェリシアは噴き出した。

「オズワルド陛下、そんな冗談を言ったら、キアラン殿下がまた癩癩を起こしますよ」

すると今度はオズワルドが笑顔のまま固まった。どうしたのだろうか。と小首を傾げるフェリシアと、照れることすらされず落ち込む兄王とを見比べたキアランは、複雑な表情で失礼すると呟いて、呆然としたままの兄を連れ部屋を出て行った。

「なんだったんだらう、あの二人。仮にも王様とその弟なら色々お仕事も忙しいだろうにね」

フェリシアが言いながら振り返った先には、メイド服を纏った赤毛

の少女が所在なさに立っていた。フェリシアの生家であるチェンバレン家から派遣された唯一の専属メイドだが、主と目が合うと脅えたような表情になる。

「あのね、メリッサ。中身が異世界人といっても取って食うわけじゃないし、そんなに怖がらないで欲しいな」

「は、はい、お嬢様」

メイドの少女メリッサは、小さな声で頷いた。メリッサはフェリシアより三つ年下、男爵家出身の娘である。まだ年若い低級貴族の彼女が、大貴族チェンバレン家の娘の専属メイドに抜擢された理由は、その体質にある。メリッサは強い魔力に耐性があり、抜け殻だったフェリシアの無尽蔵に流れ出す魔力にも体調を崩すことがなかったのだ。しかしメリッサ本人の魔力や質は大多数の一般人と変わらず、フェリシアに対してもぎこちない。

（せっかく私の正体を知っているんだし、仲良くなりたいたいんだけどな）

フェリシアの魂が異世界人であることは、現在ごく一部にしか知らされていない極秘事項である。国王兄弟とシャロンの他は、専属メイドのメリッサと、フェリシアの父親チェンバレン公爵のみである。フェリシアが予言の救世主として生きる道を選んだ今日は、チェンバレン公爵との対面の日でもあった。

（フェリシアのお父様、か。どんな人なんだろうな。優しい人のような気はするんだけど）

この世界で生きてきたフェリシアには、無論両親も居る。体が弱かったという母親は既に他界しているが、父親とは何度か面会した記憶があった。しかし抜け殻だった頃のフェリシアは情緒面の記憶が酷く曖昧だ。例えば父親の名前や職業といった情報は明確にわかるが、実際に会ったときの話の内容や相手の表情は霞がかかったようにぼんやりとしている。

（名前はベネディクト、年は六十五歳、職業はグランデール王国有数の大貴族チェンバレン公爵家の当主で、宰相。日本で言う総理

大臣。とつつきやすい要素が何処にも見当たらない……なんでそんな人の娘なんてやることになっちゃったんだか)

フェリシアは肩を落として鏡台の前に立った。全身が映る大きな鏡には、二十歳前後の娘の姿がある。

(でも、一番不思議なのはこれだよ……)

フェリシアはそつと鏡に触れた。こげ茶色の癖のある長い髪に、黒い瞳、平均よりは可愛らしいが、絶世の美女ではない、ヨーロッパ風の顔立ちの娘。それは、気味が悪いほど『斉藤優花』そっくりの姿だった。

(おばあちゃんがアメリカ人だから、純日本人の顔じゃなくても違和感はないけど。ここまで前の世界と同じ顔だと怖い気がする)

初めて鏡を見たときは、体ごと異世界に飛んできたのかと仰天したものだ。フェリシアが日本で斉藤優花として生きていた頃セミロングだった髪は腰まであり、護身に習っていた空手の稽古でできた膝の傷跡も無い。すぐによく似た別人だと気づきはしたが、気を抜けば斉藤優花のままだと錯覚しそうになる。

「あの、お嬢様。お召し替えはいかがいたしましたでしょうか？」

そんなフェリシアの思考を破ったのは、メリッサだった。我に返ったフェリシアは、困惑した表情で振り返る。

「やっぱり、この服のままじゃダメかな？」

フェリシアは身に着けている上質な生地ワンピースを摘み上げた。目覚めたときに着ていた寝巻きや、今着ているような普段着はフェリシア一人でも着替えが可能なシンプルな作りだ。しかし、ドレスとなるとさすがにそうもいかない。

「と、当然でございます！旦那様は、王族の方の次に高貴な宰相閣下でいらっしゃるのですから」

珍しく語気の強いメリッサに気圧されて、フェリシアは頷いた。

(ついさっきこの格好で王様兄弟に会ったわけだけど、それはいいのかしら?)

そんな疑問を問いかける間もなく、メリッサは何だか一人で盛り上

がっている。

「旦那様の大事なお嬢さまを、簡素なお召し物のままお引き合わせするわけには参りません！」

そして、衣装棚を開けてドレスの吟味を始める。ふりふりフワフワのウェディングドレスのような物を出されたらどうしよう、とフェリシアは危惧したが、メリツサが候補に選んだのは準正装の比較的シンプルなドレスだった。それでも背中には細かなボタンやリボンがいくつもあしらわれており、一人では着られそうに無い。

「失礼します、お嬢様」

当然のように、メリツサがドレスの着替えを手伝い始めた。

（これは着物の着付けと一緒に、着付け）

現代日本人として、同性とはいえ人に着替えを見られるのは恥ずかしいが、一人で着る訳にもいかない。フェリシアは自分に言い聞かせながら、少しでも恥ずかしさを紛らわせようとメリツサに話しかけた。

「ねえ、メリツサ。メリツサは私のお父様に会ったことがある？どんな人だった？」

「えっ……？」

怪訝そうな顔をするメリツサに、父親の情報は知っていても人柄はわからない旨を説明すると、彼女は納得したように頷いた。俯いた頬は、心なしか赤い。

「旦那様には、お嬢様のメイドとして採用されたときに、一度だけお会いしたことがあります。没落寸前で明日にも身売るしかないと考えていた私に働き口を下さった、大恩人です。それに、お人柄も大変優しい方で」

そう語る素朴そうな少女の顔は穏やかで、メイドが主人の娘に雇い主の陰口を叩く筈がないことを差し引いても、信頼できる言葉だとフェリシアは感じた。初めて父親に対して安心材料ができたところで着付けは終わり、鏡台の前に移動して髪を結い上げる。

「こんなに長い髪、一人で大変じゃない？」

「いいえ、大丈夫です」

言葉通り、メリッサは手際よくフェリシアの髪にブラシを当てて長い髪を編み上げていた。フェリシアとしては邪魔な髪を切つてしまいたいのだが、キアランの前でそれを言うとは蔑む目つきで見下された。曰く、髪の短い女は罪人くらいのものだという。

「お前には短い髪が似合いかもしれないがな」

などと言っていた台詞まで思い出し、自然に表情が険しくなるフェリシア。彼女を鏡越しに見たメリッサが脅えているのに気づくと、慌てて表情を正した。

「ご、ごめんね、怖がらせちゃって。あの馬鹿王弟のことを思い出したらつい」

「ば、ばか……？」

髪を結う手を止めて目を丸くするメリッサに、フェリシアはいけないと口を手で押さえた。

「いくらなんでも王弟殿下に馬鹿は無いか。内緒にしててね？」
お願い、と念を押すと、メリッサは初めて口元に笑みらしきものを浮かべてこくんとうなずいた。

身支度も無事に終わると、程なくして控えめなノックの音が響いた。まずはメリッサが対応に出ると、扉の前に立っていたのは執事風の壮年の男だった。

「ベネディクト・チエンバレン公爵の先触れに参りました」

「どうぞ、こちらへ。お嬢様がお待ちでございます」

優雅な物腰で挨拶する執事に緊張気味で返し、メリッサは二人の男を部屋の中へ案内する。一人は先程の執事。その後続くのは、きらびやかな装束を纏った初老の男　チエンバレン公爵ベネディクトだ。フェリシアは座っていたソファから立ち上がり、礼をとった。

（格好いいおじいちゃんだあ……）

若かりし頃はさぞかし女性に人気だっただろうと思わせる整った顔

立ちに、派手な衣装を下品に見せない気品のある佇まい。現国王であるオズワルドさえ敵わない威厳と風格を漂わせたベネディクトは、しかしフェリシアの姿を見ると相好を崩した。すると、一気に親しみのある雰囲気になる。

「おお、私の可愛いフェリシア。元気にしておったか？」

「は、はい。あの、はじめましてというか、お久しぶりです、と言
うか……」

どう挨拶をしたものか今更になって迷うフェリシアがオロオロして
いるうちに、ベネディクトは足早に娘へ歩み寄り、その体を抱きし
めた。

「ふえっ!？」

「ああ、本当に、この娘が、フェリシアが自ら言葉を発するとは…
…神よ、グラノーヴァよ、感謝いたします」

フェリシアは眉根を寄せた。突然抱きしめられたことに嫌悪を覚え
たのではない。驚きはしたが、いやらしさが一切感じられない抱擁
は、ベネディクトがどれだけ娘を思っているかよく伝わってきた。
だからこそ、本当は彼の娘ではないことが申し訳ない。するとフェ
リシアの様子に気づいたのか、ベネディクトが腕を解き、執事を下
がらせた。

「いや、驚かせてすまなかった。お嬢さんの魂が、異世界の者であ
る事は聞き及んでいるよ」

滑らかな動きでフェリシアをテーブルまでエスコートし、椅子を引
く。今日の面会では、共に昼食をとる事も含まれていた。主たちの
様子を見た執事が料理を申し付けに部屋を退出し、メリッサも慌て
てお茶の用意を始める。フェリシアの正体を知るものだけになった
部屋で、口火を切ったのはベネディクトだった。

「まずはサイトー・ユウ力殿、貴女に最上級の感謝を捧げたい」

フェリシアの向かいに座ったベネディクトは、穏やかな笑みを浮か
べて感謝の言葉を告げた。

「そ、そんな、感謝だなんて。私はただ、とりあえずの生活を確保

したくてフェリシアさんとして生きようと思っただけです……よくも娘の人生をのつとたな、って、怒られても仕方がないのに」

「怒るなど、とんでもない。一生自意識が芽生えない可能性が高いとシャロンから言われ続けて、諦めかけていたのだよ。そのフェリシアが自分の意思で動いて、話しているところを見られただけで、親としては感無量だ。それにフェリシアは並みの娘ではない。生まれながら救世主としてのお役目を背負わされた子だというのに、よくぞこんな重大な決心をしてくれた。ありがとう」

感極まった表情で語るベネディクトに、フェリシアは居心地悪く身じろぎした。やれるだけのことをするつもりはあるが、そこまで重い覚悟の元選択した道でもないことに、罪悪感が募っていく。メリッサの用意してくれた紅茶を一口飲み、深呼吸して切り出した。

「あの、私、まだ実感ができていないこと、たくさんあると思います。魔物との戦いや、人間同士の戦争なんて、前の世界でも似たようなことはあったけれど、私自身の生活とは無縁だったから。どこかで投げ出してしまうかもしれません。それでも、ここにいて、いいですか……？」

最後の方は消え入りそうな声で、フェリシアは尋ねた。するとベネディクトは、笑顔で頷く。

「勿論だ、そもそもこんなか弱い娘に世界を救えと言う予言の方がおかしい。おかげで可愛い娘を王城に取られて、面会もままならん万が一救世主としてのお役目を果たせなくても、フェリシアはチェンバレン公爵家のただ一人の跡継ぎ、いつでも帰ってきなさい。国王や重鎮がなんと言おうと、私が黙らせよう」

「ありがとうございます、公爵様」
力強い確約の言葉に、フェリシアは泣きたいような、笑いたいような気持ちで頭を下げた。すると、初めてベネディクトが表情を曇らせる。

「公爵様、か。ユウ力殿にも、元の世界にご両親が居るのは承知の上で、こんなことを頼むのも気が引けるのだが……どうか、私を父

とは呼んでくれまいか？卑怯な言い方になるが、私は君を娘のフェリシアとして扱っているつもりだよ」

思いがけない頼みに、フェリシアは一瞬躊躇った。

「ありがとうございます。お父様とお呼びするだけなら、できると思いますが、でも、私の父は、やっぱり……」

『斉藤優花』の父親はアメリカ人と日本人のハーフではあったが、西洋風とはいえ無骨な顔立ちだった父と、気品溢れるベネディクトは似てもつかない。優花にとってはやはり他人でしかない相手を、いきなり父親とは思えない。

「それでも構わんよ。ユウカ殿から、本当の父上を取り上げてしまうつもりは無い。父と呼んで欲しいのは、私の我侷だ。ただ、いつか私をこの国での父と思ってくれる日が来れば、存外の幸せでもある」

「では……お父様」

父と呼ばれ本当に幸せそうに笑うベネディクトを見て、フェリシアも自然と笑みがこぼれた。命をかけるほどの覚悟はまだできないが、これで恩を返したい一がまた一人増えた。

その後、運ばれてきた昼食を親子二人で口に運びながら、和やかに会食は進んだ。グランディールでのテーブルマナーは大貴族の令嬢として作法を叩き込まれているフェリシアの記憶に従っていればそつなくこなすことができる。何より、一国の宰相でもあるベネディクトの話術は多岐に渡り、会話も弾んだ。

（礼儀作法だけじゃなくて、生活習慣までわかるっていうのは地味にありがたいよねえ……トイレの使い方なんて、メリッサにでも聞きづらいし）

ちなみにグランディールのトイレは魔法を使った水洗式である。そんな、食事中には相応しくない感慨を抱きながらも、楽しい食事の時間はあっという間に終わった。

「ふむ、そろそろ時間か」

懐中時計を取り出したベネディクトが、不機嫌そうな顔になる。

「お時間があれば、また来てください、お父様」

しかしフェリシアがそう言つと、たちまち笑顔に戻つた。

「勿論だとも。また会いに来るまで、元気でいなさい」

「はい」

「メリッサも、娘を頼んだぞ」

思いがけず声をかけられたメリッサは、大きな目を更に丸く見開いて飛び上がった。

「は、はい！お嬢様のことはお任せください、旦那様！」

そして、真っ赤になつて背筋を伸ばす。

（赤面症なのかしら……小動物みたいで可愛いなあ）

フェリシアがほっこりとした気分で隣を窺い見れば、ベネディクトも似たような表情を浮かべている。親子二人で和んでいると、無粋な咳払いが響いた。

「旦那様、お時間も押ししておりますので」

彼とてこの場で声をかけるのは不本意なのであるう、恐縮と言わんばかりの表情で告げた執事に、ベネディクトはため息混じりに頷いた。

「わかつている。では、お父様は仕事に戻るよ、フェリシア」

「はい。お父様もお体に気をつけて」

フェリシアの一礼に遅れて、メリッサもぺこりと頭を下げた。

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

二人の声を背に、ベネディクトは名残惜しげに娘の部屋を後にした。

5・侍女と父（後書き）

こういう系統の話で大体障害になる言葉や文化の壁は、フェリシアの場合ほぼ無問題です。お風呂も一人で入れます。作者と主人公は楽ですが、異世界トリップ物の醍醐味は薄れてしまったかもしれないですね。とはいえ、フェリシアが知らないことは優花にもわかりません。人形姫フェリシアはほぼ塔の中で引きこもり生活だったので、城内のこともよくわかってない主人公です。と言うわけで次回はお城を探検します。

6・城内探索

翌朝、寝巻きのネグリジエから普段使いのワンピースに着替えたフェリシアは、リビングルームへ移動した。忙しく朝食の用意をするメリッサの仕事が落ち着くのを待つて、話しかける。

「おはよう、メリッサ。今日の私の予定って、何か言われてる？」

「おはようございます、お嬢様。今のところ、本日は何もございません。自由時間で大丈夫だと思います。まずはお食事をどうぞ」

まだ緊張気味ながら、初日に比べれば打ち解けた様子でメリッサも返事をした。

「ありがとう。メリッサも食べる？」

昨夜の夕飯時はメリッサが忙しそうで声をかけそびれていた。多分断られるだろうと思いつつ誘うと、意外にもメリッサはこくりと頷いた。

「はい、お毒見でございますね」

「お、お毒見？」

「専任の方がいらっしゃるので、大丈夫とは思うのですが」

そう言つてカトラリーを手に取つたメリッサを、フェリシアは慌てて押し留めた。

「ま、待つて、私、そんなつもりじゃなかったの。そもそも、毒殺の危険性なんて、考えもしていなかったし」

「……？」

きよとんとつぶらな瞳で見上げられ、フェリシアはため息をついた。

「食べる？つて聞いたのは、一緒に食事をしないか、つてこと」

「そ、そんな、メイドが主人と食事の席を共にするなんて、畏れ多いことでございます」

ようやくフェリシアの意図を理解したメリッサは、とたんに青くなつて頭を振つた。

「それにお嬢様は、世界を救つと予言された方。お命を狙う勢力は

いくらでもあります」

「うん……それは私が軽率だった。ごめん」

フェリシアには専属の護衛こそいないが、今も部屋の前ではオズワルドに命じられた兵士が二人、扉を守っている。それが誰のためなのか、実感できていないとはいえ、考えもしなかったなどと軽々しく口にするべきではない。

「メイドと一緒に食事しようとしたり、謝ってくださったり……

お嬢様は、不思議な方ですね」

ぼつりとメリッサが呟いた言葉に、今度はフェリシアが小首を傾げる番だった。

「そう？昨日もそうだけど、お仕事している人の横で休んだり食べたりって、何か落ち着かなくて」

「控えの間に居りましょうか？」

「ううん、そこまで気を使わなくていいよ。何かそつちで別の仕事があるとか、メリッサも休みたいとかだったら別だけど」

「では、寝室のベッドメイキングをしまいります。何かございましたらお呼びくださいませ」

メリッサが頭を下げて、隣室へと向かう。

（一応お布団は整えてきたんだけど……まあいいか）

あまり人の仕事に五月蠅く口出しするのもまずかろうと、フェリシアは朝食の並ぶ席についた。グランディールの食べ物は、どちらかと言えば洋食に近い。今日の朝食はふっくらと焼きあがったパンにオムレツ、サラダとチーズだ。使われている野菜の種類や卵、チーズの風味は日本で食べていたものと若干異なるものの、口にするのに抵抗があるほどでは無い。フェリシアの食卓に出されるものもどれも最高級品らしく、口当たりがいいので尚更だ。主食の穀物は麦だが、この世界の麦は米にも似ており、パンやリゾット風の粥にして食べる。

（このパン、米粉パンっぽいなあ。そのまま炊いたら麦ご飯みたいになるのかしら？）

そんな事を考えながら朝食を堪能した後、フェリシアはふと気がついた。

(どうしよう……暇だ)

抜け殻だった頃は魔法や礼儀作法の授業、中庭の散歩をしていたらしいが、今は特に何かをしるとも言われていない。

「ねえ、メリツサ。お城の中って、勝手に歩き回っていいの？問題ないなら、少し部屋の外に出てみたいんだけど」

なにしろ幼い頃から王城で暮らしているといっても、溢れ出る魔力のためほとんど塔から出たことが無いのだ。フェリシアは意外なほど城内の地理に疎かった。ならば観光してこようと、食器を片付けていたメリツサに尋ねる。すると彼女は頷いた。

「はい。お嬢さまがご希望なら、王族棟の内部と中庭は自由に歩いてよいと、陛下の侍従様から言伝がありました。それ以外の場所も、兵士の方に言えば案内してもらえるそうですよ」

「そうなんだ。じゃあ、ちよつと出てくるね。お昼までには戻ってくるよ」

「かしこまりました」

丁寧にお辞儀をするメリツサに見送られて、フェリシアは廊下に出る大扉を開いた。すると扉の両脇で控えていた兵士が彼女を迎え、そのうちの一人が申し出た。

「フェリシア様、陛下から城内を案内するよう仰せつかっているのですが、いかががいたしましょう？」

「ありがとうございます、お願いできますか？」

「もちろんですとも。グランデールの救世主様を案内できるなんて、光栄です」

物腰柔らかな女兵士に先導され、フェリシアはまず王族棟から一番近い行政棟へと向かった。国王の執務室や謁見の間、会議場や大広間がある中枢部と、中枢部での決定を処理する市政部に、図書館や医務室などが併設されている。その位置を説明しながら、女兵士は侍従を通して聞いたオズワルドの言葉を告げた。

「図書館は自由に使ってよいとの事です。医務室も、シャロン先生が居られますから、おいでになる機会は多いかと。それ以外の場所には、あまり立ち入らない方がよいでしょう」

「ええと、図書館は一階渡り廊下の奥、医務室は市政部の二階ですよね。王族棟も立派だけど、行政棟も大きいなあ」

フェリシアは威圧的な石造りの建物を見上げ、呟いた。
「それにお城つてもっと煌びやかなイメージだったのに、飾り気も少ないし」

口に出してから失言だったかと言葉を飲み込んだが、案内の兵士は気にした風もなく説明を続けた。

「この城は元々、宮殿ではなく砦ですから。それに外装は無骨ですが、陛下の謁見室や舞踏会も開かれる大広間は大層美しいのですよ？」

「そうなんですか。見られる機会があるといいけれど」

二人は話しながら更に先へ進み、使用人棟へと出た。建物には木造部分が混ざり始め、行政棟周辺までは綺麗に手入れをされていた庭園は木の生い茂る小規模な森のようになっており、この周辺から庶民的な雰囲気が変わり始める。森の入り口には創生神グラノーヴァを祀る礼拝堂、遠く森の外れには塔が見えた。フェリシアが元々住んでいた塔だ。

「この建物は城に住み込みで働く人々の生活スペースですね。行政棟に近いほど上の者が使っています。それから洗濯場、厨房や家畜小屋もありますよ」

「厨房？王族棟までお料理運ぶの、大変じゃないですか？」

「いいえ、王族棟内部には専用の炊事場がまた別にございますから大丈夫です」

フェリシアは再度塔の方を仰ぎ見た。確かに王族棟内にあるという厨房から今の私室に食事を運ぶより、使用人棟からあの塔の最上階に運ぶ方が労力は大きい。

（それはそれで、今までの世話係さんの苦勞を思うと何だか申し訳

ないけど)

どちらにしる恐縮するフェリシアだった。

最後に案内されたのは軍事棟だ。訓練場と王国軍部、近衛騎士団の支部、魔道師団から為るその建物は、王城内の他の施設を守るように横に長い造りになっている。

「騎士団だけ、支部なんですね」

「軍と魔道師団は国を守りますが、近衛騎士団は王を守る組織です。から。騎士団の本部と魔道師団の研究室は行政棟にありますよ。他の部署より小さいので、先程の説明からは省かせていただきました」
軍事棟の向こうには、高い城壁がそびえていた。城門をくぐれば城下町が広がっていると、さすがに今日は城の外まで出るつもりは無い。フェリシアたちは学校の校庭を思わせる訓練場をぐるりと回り、王族棟へと引き返した。

「まだ昼食には時間がございますが、お部屋まで案内いたしましたしよ
うか？」

王族棟の玄関ホールまで戻つてくると、兵士は壁にかけられた時計を見て尋ねた。

「王族棟の中は一人で出歩いてても大丈夫なんですよね？なら、まだ
ちょっと見て回りたいです」

「そうですね。では、私は失礼します」

「はい。案内ありがとうございます」

礼を言うフェリシアに敬礼を返し、女兵士は颯爽とフェリシアの自室へ戻っていった。その方角が自分の記憶と間違いないことを確かめ、フェリシアはまず目の前の大階段を上り始めた。吹き抜けの階段にはふかふかの赤絨毯が敷かれ、歩き続けた足に優しい。最上階の四階にたどり着くと、左右に長い廊下が続いていた。右へ進めば、先程の女兵士より豪華な鎧を着込んだ騎士が、長槍を掲げて制止して来る。

「フェリシア・チェンバレン様ですね？これより先はオズワルド陛下の私室でございます。ご遠慮くださいませ」

「ごめんなさい、知らなかつたんです」

なるほど入ってはいけなところにはちゃんと見張りが立っているのかと納得して、フェリシアは素直に引き下がった。とはいえ、この調子で無駄足を踏むのも面倒である。

「他に入らない方がいいところって、ありますか？キアラン殿下の部屋とか」

聞いてみると、騎士は今来た通路を引き返し、左側に入った突き当たりだと教えてくれた。

「手前の部屋などは、入っても差し支えないかとは存じますが……」
「ありがとうございます。でも四階の部屋はまた次の機会に見学させてもらいますね」

わざわざあのいけ好かない王弟に近づくこともあるまいと、フェリシアはさっさと下の階まで引き返した。二・三階はフェリシアが使っているような私室のほか、日当たりのいいテラスや遊技場、音楽室が備えられていた。絢爛豪華な内装を楽しみ、陽だまりに和み、遊び方のわからないゲームの遊戯盤を眺め、ピアノとはまた趣の異なる音を出す鍵盤楽器を叩き、すっかり観光客気分であちらこちらの部屋を覗いて回る。そして、空腹を覚えて自室に戻ろうとし、はたと立ち止まった。

「……ここ、どこ？」

気がつけば、玄関ホールに通じる大階段もわからないほど奥まで迷い込んでいた。

（とにかく一階に降りなきゃ）

自室のある一階に通じる階段を求めて歩き回るが、人っ子一人見当たらない。

（そういえば、今王族棟を使ってるのって、王様兄弟と私だけってオズワルド陛下が言ってたような……だからメイドさんや兵士さんも他のところと比べてずっと少ない……？）

嫌な推測を振り払うように頭を振って、フェリシアは再び歩を進めた。すると、細い通路の奥に幅の狭い階段を発見する。

（使用人用かな？炊事場に出られるかも）

期待を込めて駆け寄り、先の見えない階段を慎重に下る。しかし、下りきるとまた代わり映えのしない廊下が続いていた。

「まあ、一階に降りられただけよしとしよう」

フェリシアは自分に言い聞かせるように呟き、部屋の窓から自分の使っている部屋が見られるかもしれないと、とりあえず手近な扉のドアノブに手をかけた。

「ふえ？」

しかし彼女の視界は豪華な内装の部屋ではなく、黒色に覆われた。

否、それはよく見れば黒い布だった。金の縁取りがされた、黒い騎士服。

「……おい、フェリシア・チェンバレン。貴様、ここで何をしている」

同時に、頭上から最も会いたくない人物の声が振ってくる。地獄の底から響くようなドスの聞いた声にゆっくり顔を上げると、そこにはグランディール国王王弟キアランの苛立ちに満ちた顔があった。

「え、と……迷子になりました」

キアランの迫力に気圧されて正直に打ち明けると、右の二の腕に鈍い痛みが走った。続けて、ドンという音と共に背中に衝撃が走る。腕を掴まれて背後の壁に押さえつけられたのだ、と理解した瞬間、耳のすぐ横の壁を殴られた。

「迷っただと？下らない嘘を吐くな、阿波擦れが」

「わ、私は、本当に迷っただけで……お、王低殿下こそ、お部屋はもっと上なんでしょう、どうしてこんなところに!？」

「五月蠅い、詮索好きの嘘つきめ!!聞いてるのは俺だ!!!!」
びりびりと空気が震えるほどの怒声に全身を打たれ、フェリシアは恐怖に目を見開いた。今にも泣き出しそうな様子に、キアランはフンと顔を顰める。

「勝手に嗅ぎまわって虚言を吐いた拳句、都合が悪くなるとすぐ泣き出す。女とは便利な生き物だな、見ているだけで胸糞が悪い」

敵意に満ちた視線に、フェリシアの体が震えた。忘れようとしていた記憶がよみがえる。クォーターの優花に、理不尽な言葉の暴力を浴びせていた中学時代の同級生達。

(何でそこまで言われなきゃならないのよ)

あの頃、祖父から暴力で解決してはいけないと教えられていたというのに、何故か今は手が出た。

パンツ！

掴まれていない方の手でキアランの頬に平手を打ち付ける。思いがけずいい音が響き、僅かに溜飲が下がった。

「放して！迷っただけだって言っているでしょう!？」

一瞬拘束がゆるんだ隙に抜け出して、キアランから距離をとる。そのまま後ろを向いて廊下を走って行ってしまいたかったが、それをするに逃げ出したようで癩だ。長身のキアランの顔を睨み上げると、不愉快そうな目で睨み返された。

「迷った、か。もし本当なら、それはそれで暢気なことだな、救世主殿」

今度は嫌味で返され、フェリシアは言葉に詰まった。暇だからと城内を観光して迷子になったのは、確かに間抜けだと自分でも思う。

「こ、これからお世話になる場所のことを知っておこうと思っただけです。私には、塔の周辺の記憶しかなかったから」

「それで、王族棟の中くらい自由に歩けると判断した挙句迷ったのか」

小馬鹿にしきった口調に腹は立つたが、先程の恐怖は薄れてきた。フェリシアは慎重に距離をとりながらも、目覚めたときから気になっていたことを尋ねてみる。

「どうして王弟殿下はそんなに私に対して敵意満々なんですか。他の皆さんは優しいのに。私、貴方に何かしましたか？」

すると一瞬、キアランの表情が歪んだ。それが苦惱ゆえだったこと

は、フェリシアは知る由も無い。

「何もしていないからこそだ。世界を救うなどと大それた予言をされたお前の力を奪おうと、魔物を含めた各国がこの国を狙っている。お前が生まれて二十一年間、人形の救世主など守るためにどれだけの人手と国税が無駄になったと思っている？」

「それは……」

すうっと胃の腑が冷えていった。今朝、食事に誘ったメリッサが当たり前のように毒見と結びつけた衝撃が蘇る。

「何より許せないのは、お前が兄上の足枷でしかない事だ。オズワルド陛下は、グランディール史上最も賢く、慈愛に満ち優れた名君。何の役にも立たない人形姫に傾倒さえしていなければ、だ！俺が予言の救世主なら、とつくに世界を救って兄上に捧げているものを！」

「……つまり、大好きなお兄さんを取られて悔しいと？」

「だ、黙れ誰がそんな話をしている！」

キアランが若干動揺している。あながち的外れでもないなと推測して、フェリシアは内心ほくそ笑んだ。前半の話はシヨックだったが、後半はブラコンの戯言と思っていれば聞き流せないことも無い。

「だから、私を殺そうとしたんですか？私を生かしておいたらお金も護衛も無駄になるうえ、オズワルド陛下のためにもよくないから？」

「……そんなところだ。くれぐれも、俺が剣を引いたからといっていい気になるなよ。今は一応この国のために動く気があるようだから生かしておいてやるが、役に立たなければ殺す」

フェリシアはその言い様にむっとしたが、深くは追求しないでおいた。もう十分怒鳴られて睨まれたというのに、これ以上つついて蛇を出すことも無い。

「お前の周囲が好意的なのは、兄上が人員を選んで配置しているからだ。お前は常に兄上に守られている。それを肝に銘じて、一刻も早くそのご恩に報いるのだな」

「わかってます、私だって王弟殿下はともかくオズワルド陛下の役

には立ちたいし。さよなら」

フェリシアは会話を打ち切り、踵を返した。

「おい」

その背中に、キアランから声が掛かる。

「……まだ何か？」

嫌味を言い足りないのかと振り返ると、妙なものでも見るような顔のキアランが反対方向を指差していた。

「お前の部屋は向こうだぞ」

「……それはどうも、ありがとうございます」

穴があつたら入りたい気分で、フェリシアはぐるりと引き返し足早にその場を後にした。

6・城内探索（後書き）

お城のざっくりとした構造と、後半はVS王弟殿下編でした。キアラン君はツンデレというよりツンギレですね。一応恋愛物なのに、今のところ好意をもたれる要素がまったく無いよ！オズワルド陛下がデレデレしているから別にいいのか……？

フェリシア（というか優花）は元苛められっこ。特に方向音痴という設定ではないんですが、入り組んだ構造の建物の中でふらふらしているうちに迷いました。

7・中庭の麦畑

コンコン、というノックの音に、フェリシアは顔を上げた。傍に控えて繕い物をしていたメリッサがこちらを窺うので、一つ頷く。

「どうぞ、お入りください」

メリッサが開けた扉からは、昨日フェリシアに城内を案内した女兵士が入ってくる。手には数枚の紙をとじた薄い冊子があった。

「失礼します、フェリシア様。城内の見取り図をお持ちしました」

「ありがとうございます」

彼女が持つてきたのは、城の地図だ。

「私の案内に、不備がございましたでしょうか？」

不安げに問う女兵士に、フェリシアは首を振った。

「ううん、そういうわけじゃないんです。ただ、王族棟を一人で歩いているときに迷子になっちゃって。おまけに王弟殿下と出くわして……ちよっと、色々言われたから、慣れるまでは地図でも携帯しておこうと思って」

「キアラン殿下に？四階は確か、見張りの騎士が立っていたかと思えますが……？」

「あ、会ったのは本人の部屋じゃなくて、一階だったんです。随分奥のほうにある、狭い階段の傍の部屋に入ろうとしたら、中に殿下がいて」

それを聞いた女兵士は、ますます怪訝そうな顔をした。

「それはひよつとして、『影王妃の間』……？」

「知っているんですか？」

尋ねるフェリシアに、あまり気持ちのいい話ではありませんがと前置きして、女兵士は話し始めた。

「正式な名称ではないのですが、王族棟にそう呼ばれる部屋がある」と先輩から聞いたことがあります。何代か前の王が正妃の目を盗んで側室に会いに行くために、人目を憚んで階下に下りられる階段を

設けたとか。それ以降、代々の王は正妃以外に寵愛深い側室をその部屋に住まわせるようになったそうです」

「だから、影の王妃様のお部屋、で『影王妃の間』……」

「はい。私も実在を確かめたことはございませんが。あつたとしても現国王のオズワルド陛下には正妻も側室もいらっしやいませんし、無人だと思えますよ？」

「ふうん……」

いまひとつ腑に落ちず、フェリシアは首を捻った。昨日のキアランの反応は、ただ曰く付きの部屋に入ろうとしたところを咎めたというには、過剰反応が過ぎる気がする。そもそも無人の部屋から出てくることからして怪しい。そこまで考えて、突然ひらめいた。

「あ、じゃあ、王弟殿下がその部屋に恋人を住まわせているとか。だから昨日あんなに怒ったんだ」

納得するフェリシアに、女兵士は懐疑的だ。

「キアラン殿下も独身ですし、それなら早く公表してしまえば良さそうなものですけど……そもそも、殿下に恋人がいるだなんて、聞いたことはありませんよ？」

「確かにあの性格じゃあ、王様の弟でももてないか。……まあいいわ、いつまでもあんな人のこと考えるのは時間の無駄だし。地図、ありがとうございました」

「いいえ。城の内部構造は一応軍事機密ですから、無くさないようにお気をつけ下さいね」

「は、はい。気をつけます」

受け取った小冊子をこわごわ見つめるフェリシアに敬礼し、女兵士は颯爽と部屋を出て行った。フェリシアは早速ページの一枚一枚目を捲る。すると、一枚の紙が挟まっていた。

「オズワルド陛下？」

それはオズワルドからフェリシアへ宛てた短文の手紙だった。微妙かに花の香りのする薄紅色の上質紙には、なかなか様子を見にいけなくて申し訳なく思っていること、キアランがまた何か言ったのでは

ないかという心配、手配した冊子を役立てて欲しいということなどが、綺麗に整った字で綴られていた。

「この冊子、陛下が用意してくれたんだ……すぐにお礼の返事を出さないとまずいわよね、やっぱり。それともお忙しくて、私の出した手紙なんて読んでられないかしら」

悩んでいると、メリッサがおずおずと話しかけてきた。

「お花をつけてお贈りすれば、私的なお便りの目印になると思いますが。そうすれば後で渡すか先に渡すか、陛下の侍従様が本文を見なくても判断してくださるでしょうから。今の時期なら、感謝を表す春告げ花がぴったりじゃないでしょうか」

貴族の礼儀作法は一通り心得ているフェリシアでも、状況による対応は難しい。思いがけない助言を得て、彼女は手を打った。

「いいね、それがありがとう、メリッサ」

「い、いいえ。春告げ花は中庭の花壇にたくさん生えていますから、摘んでまいりましょうか？」

「ありがとう。でも、せっかく地図もあることだし、自分で選んで採ってくるよ」

フェリシアはそう言うと、軽やかな足取りで部屋を出た。

城内見取り図曰く、中庭とは王族棟と行政棟が建っている区域の手入れが行き届いた庭園のことを指す。行政棟より外側の、庭というよりも森に近い場所は外庭だ。今フェリシアがいるのは、王族棟周辺の最も華やいだ庭だった。一面敷き詰められた芝生に煉瓦の飛び石、両脇の花壇には色とりどりの花が咲き乱れており、遠目には瀟洒な東屋や温室が見える。そんな美しい庭園の風景を愛でながらも、フェリシアは少し困っていた。

（春告げ花ってどれだろう……？）

メリッサに教えられた花の種類がわからないことに、今更気づいたのだ。一緒に来てもらえばよかったと後悔しながらも、部屋に戻るのも面倒で、そのまま進む。

（メリッサの言い方からしてメジャーな花だよな。小難しい魔法の

論理はいくらでも知っているのに、有名な花の名前もわからないで、年頃の娘としてどうなの)

宿主の偏りすぎた知識に文句をつけつつ、花の名前を書いた札でもないかと庭園の奥へ奥へと進んでいく。そして、フェリシアは奇妙なものを見つけた。

「……畑？」

華やかな庭園に突如として現れたそれは、麦畑だった。二十五メートルプールほどの広さの土地に、まだ青い麦が揺れている。洒落たイングリッシュガーデン風の庭に突如として現れた場違いな光景に興味を引かれ、フェリシアは麦畑に近づいていった。天に向かって力強く伸びた麦に手を伸ばさず。

「何をしておる！」

しかし穂に触れる寸前で、しわがれた老人の声に咎められた。驚いて横を見ると、庭師の格好をした初老の男が、険しい表情でこちらへやってくるところだった。

「大事な麦に、悪さしておらんだらうな!？」

仁王立をして、素朴な訛りのある話し方で牽制する庭師に、フェリシアは素直に謝った。

「ご、ごめんなさい。綺麗な麦だったから、ちよつと触つてみたくなつたんです。筆つたり千切つたりはしていません」

するとそれを聞いた庭師は、少し表情を和らげた。

「そうじゃ、良い麦じゃろう。気持ちはわからんでもないが、素人が触ると受粉前の雌蕊を潰してしまう恐れがある。そつとしておいてくれんかの？」

「はい」

フェリシアは頷き、数歩下がった。入れ替わりに庭師が麦畑の傍に屈み、草取りを始める。その合間にフェリシアの方を見上げ、声をかけてくる。

「怒鳴つて悪かったの、お嬢さん。何しろ貴族の娘といえ、花ばかり可愛がつて地味な麦なぞ雑草扱いするものじゃからの」

「そうなんですか？穀物って大事なものでしょう、食べ物が必要ならば私たちは生きていけないんだから。主食なら尚更」

「当たり前顔をして言うフェリシアに、庭師は意外そんな顔をした。「変わったお嬢さんだの。城の客人かね？」

「客……うん、まあ、一応そういう扱いでいいと思います。おじいさんは、庭師さんですよ？どうしてお城の中庭で麦を？」

尋ねると、庭師は立ち上がって誇らしげに胸を張った。

「ここはキアラン殿下の畑じゃ。わしは時々様子を見に来る程度での、普段は殿下が世話をなさっておる」

「王弟殿下が？」

高慢な王弟と畑仕事。あまりにも似合わない組み合わせに目を丸くするフェリシアに、庭師は頷いた。

「キアラン殿下はこの畑で、麦の品種改良を進めておられる。戦争で土地は荒らされ、農地は減る一方。不作の年には餓死者も出るから。荒廃した土地でも育つ強い麦を作ることがこの国を救うことになる、殿下は自ら中庭の一角を耕して、麦の栽培をなさっておるのじゃ」

「そう、なんですか……」

意外な話に、フェリシアは麦畑をただ見渡した。時折吹く風に心地良さそうに揺られ、小波を描く麦畑。両親　優花の両親はガーデニングが趣味だった。家族そろってよく土いじりをした記憶が蘇り、フェリシアの瞳が揺れる。もう絶対に戻れない、幸せだった頃の記憶だ。彼女は小さく頭を振って、それを取り払った。するとその様子をどう思ったか、庭師が片眉を上げる。

「意外かね、キアラン殿下が民草のことを考えて土に塗れておるのが」

「あ、いえ、ちょっと昔のことを思い出していただけなんですけど……確かに、王弟殿下についてもすごく意外です。あの人がこんな立派な麦を育てているなんて。民衆なんてどうでもいい、とか言いそうなのに」

「随分と、正直なお嬢さんだの」

「からからと庭師は笑い、膝を打った。

「お嬢さんの言うとおり、殿下はとても愛想が良いとは言えん方じやからのう。誤解されがちじゃが、殿下は偉い方の中の誰よりも、国を思い民に尽くす方じゃよ。少なくとも、わしはそう思っておる」
誠実そうな庭師の言葉に嘘は感じられず、フェリシアは複雑な心境だ。

「おじいさんの言うことを、疑っているわけじゃないんです。でも私は、お国のために働くためにここへ来たのに何もしていなくて、王弟殿下に睨まれていているから」

大雑把な説明にもかかわらず詳細は聞かずに、庭師は頷いた。

「殿下はご自分に厳しい分、他人にも容赦ないからのう。じゃが、お嬢さんはいい娘さんじゃ。これからたと働けば、殿下の目も変わってくるじゃろ。有能な者を、いつまでも冷遇するお方ではないよ」

「そうだといいんですけど」

庭師の励ましにフェリシアは笑い、それから不意に本来の目的を思い出した。

「あ、そうだ。おじいさん、お庭の春告げ花を少し頂きたいんですけど、いいですか？」

「数輪なら特に断りはいらんぞ？こんな奥の方に来なくとも、手前の花壇に植えたはずじゃが」

「それが、春告げ花がどの花なのか、知らなくて。お仕事の邪魔でなければ、他の花の名前もいくつか教えていただけるとありがたいんですけど」

「はて？麦は知っていて、春告げ花を知らんとは、本当に変わったお嬢さんだの」

そう言いながらも、庭師は快く中庭の花を教えてくれた。地球上の植物はそれなりに詳しいと自負しているフェリシアだが、異世界の植物の知識は無に等しい。とはいえ、中には麦のように、地球上に

存在するものと同じ名前と姿の植物もあった。薔薇や百合などは、こちらでも好まれていたらしい。春告げ花はマーガレットに似ており、黄色い花芯の周りを小さなたくさん白い花びらが縁取っている。名前の通り春先に咲く可憐な花だ。

（グランデールは日本ほど変化が激しくは無いみたいだけど、一応四季はあるんだね）

庭師の説明を聞きながら、春告げ花の他にもいくつか花を摘む。やがて花壇一つの花の種類が尽きたところで、話は打ち切られた。

「有名な花はこの辺りかの。こんなところですよ。よかったかい、お嬢さん」

「はい。ありがとうございます、助かりました」

丁寧に頭を下げるフェリシアに、庭師は照れた笑みを浮かべた。

「いや、わたしも楽しかった。花が必要なら、また来なさい」

「ありがとうございます」

フェリシアは再度頭を下げると、小ぶりの花束ほどになってしまった花と城内見取り図を両手に、自室へと戻っていった。

7・中庭の麦畑（後書き）

お気に入り登録してくださっている方々、ありがとうございます！拙作ではありますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

傾向的に、やっぱり女性向けと思われるのでしょうか。確かに否定できない要素満載ではありますが、そのうち魔物相手にドンパチしたり戦場の描写が入ったりする予定（なので残酷表現あり）です。でもR15はどちらかというとエロ描写のためにつけました。本当にエロくなるかは未定ですが。とりあえず作者はおっぱい星人です。

8 ・魔法実践（前書き）

残酷描写ではありませんが、部屋に水が溢れる（腰の高さ程度）描写があります。気になる方は飛ばしてください。

8・魔法実践

オズワルドに花と手紙を送るよう兵士に言付け、昼食を終えたフエリシアは、再び暇をもてあましていた。城内の見取り図があるので散歩に出ても良いのだが、今の彼女にはそれよりも気になっていることがあった。

「魔法、使ってみたい……」

グランディールの伝説的英雄である初代国王に匹敵する魔力を持つと言われながら、フエリシアは魔法の発動方法を知らなかった。例えて言うならば、どんなに複雑なプログラムでも組み立てられるのに、実行キーとなるスイッチがわからなくて起動できない、という間抜けな状態。フエリシアの魔法の教師は現在の魔法師団長で、その授業は巧妙にスイッチの場所を隠して行われていた。

（魂抜けた人形が、うっかり大規模攻撃魔法なんて発動させようものなら大変だし、隠す理由はわかるけど。魔法さえ使えば、役に立てるのになあ）

すると、難しい顔で考え込んでいた主を見かねたメリッサが、おずおずと話しかけてきた。

「お嬢様、簡単なものでよろしければ、私も存じ上げておりますが

……」

「本当！？教えてくれる？」

「は、はい」

メリッサの手を取り、身を乗り出すフエリシアに彼女は小さく頷いた。

「ええと、私が見えるのは、火起こしと水呼びの魔法です」

火起こしはマツチ程度の小さな炎を作る魔法、水呼びはコップを満たすほどの水を精製する魔法である。どちらも平均的な魔力の持ち主であれば発動できる初歩の魔法だ。特に火起こしは、数多ある魔法の中で最も簡単とされている。

「火起こしの魔法でよろしいでしょうか」

しかし、メリッサの提案にフェリシアは頭を振った。

「ううん、できれば水呼びの方を教えて欲しいかな。火は、事故になつたら怖いし」

「かしこまりました。では、水呼びを使ってみますね」

メリッサはティーセットの中から小ぶりのポットを取り出し、蓋を開けて手をかざした。

「えいっ！」

勇ましくも可愛らしい掛け声と共に、メリッサの手からポットへ、魔力の奔流が流れる。するとまるで手品のように何処からともなく沸いた水が、ポットの中を満たしていった。

「ふう。もつと魔力のある方は、これに発熱の魔法をかけて熱湯を作つたり、逆に冷却の魔法で飲み物を冷やしたりできるんですが、私にはこれが精一杯です」

「それでもすごいよ、メリッサ！便利だねえ」

無邪気に喜ぶフェリシアに、メリッサは少し疲れた顔ながら、はにかんだ笑みを浮かべた。

「発動方法は、体の中の魔力を使う魔法に合わせて丁度よく混ぜて対象へ流す感じ、なんですけど……あの、私、上手く説明できていますか？」

「大丈夫、実践してくれたのが良かったみたい。なんとかかなりそう」ポットの横に空のティーカップを置き、フェリシアは目を閉じた。

日本にいた頃は意識もしなかった、エネルギーの塊が体を循環しているのを感じる。それを練り上げ、膨らませ、カップへ落とし、魔力を魔法へと変換する。詠唱はあっても良いが、なくても良い。要は魔力を変換させるためのイメージの問題で、メリッサの「えいっ！」も一種の詠唱だ。

（水出て来い！）

フェリシアの場合は、強く念じることで魔法のスイッチを入れた。すると、ぱしゃんと音を立ててカップに水が溜まる。

「できた！見てメリッサ、成功だよ！……っつて、あれ？」

はしゃいで水の入ったティーカップを差し出していたフェリシアは、すぐに首をかしげた。ティーカップの中に満たされた水はとどまることなく、みるみるうちに溢れ出しフェリシアの腕を濡らす。

「ぎゃあっ！？ちよつと嘘、止まってよ！！」

泉のように滾々と水を吐き出すカップを手で押さえたが、水は指の間から溢れ出た。

「お嬢様、ひとまずこれを！」

メリッサがとりあえず水を受けるための洗面器や桶をありったけ持ち出したものの、すぐさまそれも水でいっぱいになり、上等な絨毯の上に染みを作っていく。

「ど、どどどうしましよう！？」

「だ、大丈夫よ、簡単な魔法だもの、止める方法はいくらでもあるはず」

とりあえずフェリシアはカップを浴室に移し、パニックに陥って右往左往するメリッサを宥め、必死に対処法を考えた。

（カップを壊せば……いや駄目だ、受け皿を壊しただけじゃ発動途中の魔法は止まらない。寧ろ「カップに水を満たす」という制限が外れて、一気に大量の水が溢れて悪化する恐れがある。こういうときは、ええつと、そうだ、停止の魔法！）

常人であればカップから水が溢れる前に魔力が一時的に枯渇し、強制的に魔法が終了する。この事態は、フェリシアの無尽蔵の魔力によって引き起こされたものだ。強い魔力を持つ者が簡単な魔法を使う場合、発動中の魔法を中断する停止の魔法を併用するのが常識である。それに思い当たったフェリシアは、早速叫んだ。

「よし、止まれ！」

そして、カップに向けて魔力を流し込む。

バシャアッ！！！！

しかし水は止まるどころか勢いを増し、噴水のようにカップから水が噴き出した。

「な、なんでえっ!? 止まれ! 止まって!!」

カップに魔力を流すたびに水の勢いは強くなる。反動でティーカップが固い床の上に転がり、砕け散った。次の瞬間、カップのあった場所を基点に水の爆発が起こる。

「きゃああっ!」

瞬時に浴室が大量の水で満たされ、水の流れに足を取られたメリッサが悲鳴をあげて倒れる。

「メリッサ!」

フェリシア自身も濡れてまわりつく服に足を取られながら、壁に手を付いてメリッサに近づき助け起した。浴室の扉を打ち破った水は、洪水のように部屋を流れ廊下にまで溢れていく。

「た、大変だ……!」

椅子や机などの軽い家具が流され水浸しになった部屋を見て、フェリシアの全身から血の気が引いた。次の瞬間、頭に殴られたような衝撃を受けて浴室の床に倒れる。

「お嬢様!？」

突然倒れた主に悲鳴に近い声を上げたメリッサは、ふと周囲の水が引いていることに気づいた。フェリシアの魔力に限界が来て、魔法が停止したのではない。それならば、今までに出した水はそのまま残っているはずだ。しかし今は、二人の髪や服は湿っているものの、先程まで部屋中に溢れていた水が無くなっていた。

「う……だ、大丈夫。水は……?」

何とか起き上がったフェリシアが疑問を口に出す間もなく、複数の足音と、バンツ、ドタンと何かを打ち付ける音が近づいてくる。

「フェリシア・チェンバレン!!! 貴様、今すぐ出て来い!!!」
次いで、びりびりと空気を振るわせるキアランの怒声が響いた。

机や椅子が転がったままの自室に、フェリシアとメリッサは並ん

で立たされていた。正面には、精悍な顔を憤怒に歪めたキアランが腕を組んで二人を睨みつけている。その後ろには、こんな騒ぎを起したフェリシアに対して変わらず気遣わずなオズワルドと、フェリシアの師である魔道師団長ダリル・スマイサーが無表情で立っていた。

(怖い……)

今回ばかりは全面的に自分が悪いと自覚しているフェリシアは、そつとキアランから目を逸らす。

「おい」

その瞬間、不機嫌絶頂の声で呼びかけられた。

「説明しろ」

「水呼びの魔法を使いました」

簡潔な要求に、フェリシアも必要最低限の言葉で答える。この状況で、長々と言い訳できるほど凶太くは無い。

「お前のような化け物じみた魔力の奴が停止魔法の併用なしで下級の魔法を発動させて、どうなるのか想像はできなかったのか？」

「はい。発動させた後に気づいて、一応停止の魔法も試みてはみたんですけど、使い方がわからなくて」

「馬鹿が。ダリルがすぐに駆けつけて対処していなかったら、どうなっていたか」

フェリシアが倒れたのは、発動中の魔法に他人から無理矢理除去の魔法をかけられたためである。彼女の魔法の効果自体を無に帰したのは、ダリルだった。灰色の髪に猛禽を思わせる鋭い目つき、苦み走った五十絡みの魔道師団長は、魔術師というより歴戦の猛者といった風情の大柄な男だ。

「軽率な行動でした。申し訳ありません」

フェリシアが頭を下げると、キアランはフンと鼻を鳴らし、今度はメリッサの方へ視線を移す。

「侍女。この馬鹿に水呼びなど教えたのはお前だな？」

「ひっ……！」

キアランの険しい眼光に射抜かれ、メリッサは縮み上がって息を呑んだ。

「俺の質問に答える！」

「ちよつと！」

キアランがメリッサへ詰め寄ろうとした瞬間、フェリシアはとつさに二人の間へ割って入っていた。メリッサの震える手が遠慮がちにフェリシアの服を握るのを背中に感じながら、庇うように両腕を広げる。

「この騒ぎを引き起こしたのは私です。メリッサは何も悪くない、脅さないで！」

「その娘に咎があるか否かを決めるのはお前ではない。下がれ！」

「嫌よ！だいたい、メリッサの立場で主人に逆らえるはずないでしょう！？悪いのは全部私、でいいじゃない！」

「五月蠅い！！！」

激昂の末、キアランが大きく腕を振りかぶる。

「キアラン！」

オズワルドの鋭い声と共に、キアランの手首が背後から掴まれた。見れば、キアランの手をダリルが掴んでいる。決して強い力で掴まれているわけではないが、キアランは振りほどけずただ不機嫌そうにダリルを睨んだ。

「そこまでになさいませ、殿下」

静かな声で制止した魔道師団長は手を離すと、魔法のようにすんなりとキアランを押しつけフェリシアの前に進み出た。教え子を見下ろす彼はやはりポーカーフェイスを保ったままだ。状況が状況なので彼にもフェリシアの魂が異世界人であることは説明したのだが、その表情からは何を思っているのか窺い知れなかった。

「フェリシア」

「は、はい、お師匠様」

シャロンが先生なので、とりあえずダリルにはお師匠様とつけることとして、フェリシアは返事をした。

「私が教えたことは、記憶しているか？」

「はい。閃光の魔法でも爆風の魔法でも、発動方法さえわかればすぐに使えます」

どちらも最上級の高等攻撃魔法である。物騒な返事にキアランが顔を顰め、オズワルドは引きつった笑みを浮かべた。

「低級魔法を使うときは停止魔法と組み合わせる、基本中の基本もか？」

「知っていました。けど、使うまで失念していました。せつかく教えていただいたのに、申し訳ありません」

再度、フェリシアが頭を下げると、ダリルは足元に落ちていたポットを拾い上げた。メリッサが水呼びに使ったポットである。彼は瞬き一つでそのポットに水を満たした。

「魔法の効果は、消去の魔法で消し去ることができる」

ダリルの言葉と共に、ポットから水が消えた。停止の上位魔法である消去は言うほど簡単に使えるものではないのだが、フェリシアは黙って師の言葉を聞いている。

「しかし、魔法によってもたらされた結果まで元通りにすることはできない。水に流されて倒れた椅子は倒れたままであるし、溺死者が息を吹き返すことも無い」

決して教え子を責めるのではなく、ただ淡々と話すダリルの言葉にフェリシアの全身が震えた。ダリルがいなければ、自分の魔法が何の罪も無い人を殺していたかもしれない。それはキアランの罵詈雑言よりもよほど恐ろしい事実だった。

「だから、以後気をつけるように。侍女殿も、魔法の発動を知らない者にはそれなりの理由がある。不用意に教えたりしないように」

「は、はい。申し訳ありませんでした」

フェリシアの後ろで弱々しく謝罪するメリッサの声を聞いたダリルは、くるりと踵を返した。拍子抜けしてぽかんとその背中を見上げるフェリシアに変わり、キアランが彼女の言いたいことを代弁する。

「おい、魔道師団長！それだけでいいのか！！？」

するとダリルはキアランの方を振り返り、こくりと頷いた。

（お師匠様って……体が大きいところといい寡黙なところといい、なんだかチェンバレンのお父様よりよっぽどお父さんに雰囲気似てるなあ）

優花の実父を思い出し、フェリシアがしんみりしていると、今度はオズワルドが進み出てくる。

「大丈夫かい、フェリシア？下級魔法とはいえ、この部屋の周辺一帯が水浸しになるほどの魔法を使ったんだ、疲れてはいない？」
心配そうな琥珀の瞳に、フェリシアは笑顔を返した。

「大丈夫です、陛下。ご心配とご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません。あの、メリツサのことは……」

「ああ、君の言うとおり、使用人が主人の要求に逆らえるはずもないからね。今回のところは不問に付そう。勿論君もだ、フェリシア」とすると、それを聞いたキアランが更に眉を吊り上げた。

「兄上！こんな騒ぎを起して何の罰も無いとは甘すぎます！本来なら極刑に処されるべきところですよ！？」

「お前は どうしてそう、フェリシアが絡むといちいち騒ぎ立てるんだい、キアラン。幸いにも人的被害は出なかったんだ、いいじゃないか。これは不幸な事故だ、私が決めたことだよ」

穏やかながらきっぱりと宣言され、まだ不満そうにしながらもキアランは押し黙った。そんな彼の様子を横目に、フェリシアは躊躇いがちにオズワルドへ話しかけた。

「あの、陛下。メリツサのことを不問に付してくださいるのはありがたいと思います。でも、私は許されるべきではないと、自分でも思うのですけれど……」

「おや、お仕置きして欲しいのかい？私は歓迎だけれど」

にこやかに不穏なことを口走るオズワルドに、フェリシアは啞然とした。そんな彼女の反応を見て、オズワルドはくすくすと笑う。

「冗談だよ。だが、そうだな。今まで、フェリシアが自我を持ったことは、ダリルにすら知らせていなかった。けれど、こんな騒ぎが

起こっては隠し通すのも難しい。そこで、君のお披露目を開こうと開こうと思うんだ」

「お披露目会、ですか」

「ああ、各国への牽制にもなるしね。本当は、もう少し根回しをしてから開こうと思っていたんだが……仕方ない」

一瞬為政者の顔で思案したオズワルドは、次の瞬間にはまた甘い笑みを浮かべてフェリシアに向き直っていた。

「フェリシア、君は何も心配しなくてもいい。綺麗に着飾って、美味しいものを食べて、できれば笑っていてくれれば、それでいいからね」

「は、はい……?」

戸惑うフェリシアと、楽しそうに彼女へ話しかけるオズワルドを洗面で眺めたキアランは、そっと重いため息をついたのだった。

8・魔法実践（後書き）

ここでそろそろ、主人公最強の片鱗を少し。本気になれば災害級の魔法も使えます。

このご時勢に津波を連想させるような描写をするのは不謹慎だったかと、書いた後から思い当たった不届き者です。万が一気分を悪くされた方がいらっしやいましたら、申し訳ありません。ストーリーの進行上必要な箇所でもありますので、どうかご容赦ください。

9・披露会準備

翌日から、退屈だったフェリシアの生活は一変した。ついに自我を持つに至った救世主の、お披露目会の準備のためである。フェリシアは基本的な礼儀作法ならば問題ないが、流行の衣装や社交場での話題選びには疎く、舞踏会必須のダンスも踊れない。多くの貴族令嬢を育てたという家庭教師が何人もつき、朝から夕方までみっちり勉強させられた。他にもダリルの魔法学授業が始まり、忙しい時間の合間を縫ってシャロンの元で健康診断を受ける日々。

「うう……着飾って食べて笑ってるだけでいいなんて、オズワルド陛下の嘘つき！」

特訓が始まって十日目。午前のダンスで体力を使い果たし、午後の勉強で精神力を限界まで削られたフェリシアは、医務室のベッドに頭から突っ込み、この場にはいない国王に向かって暴言を吐いた。

「大分煮詰まっていますね、フェリシア様。体調はいかがですか？」
子供のようなフェリシアの様子に苦笑しつつ、徐々に顔を合わせるシャロンが特製アイスハーブティを差し出してくる。フェリシアはがばりと起き上がり、すっかり好物になったそれをいそいそと受け取った。

「元気ですよ。毎日へとへとになるまで勉強漬けですけど、ご飯は美味しいし、疲れているからよく眠れるし。それにダリルお師匠様の授業は、どんどん使える魔法が増えて楽しいです」

前の世界では、こんなにも充実した日常を取り戻せる日が来るとは思ってもみなかった。そう言い掛けて口をつぐんだフェリシアに気づかない振りをして、シャロンは首肯した。

「それは何よりです。魔道師団長とは昨日少し立ち話をしましたが、貴女の成長は著しいと仰っていましたよ。人を貶すことは無いかわりに、褒めることも滅多にない方なのに」

「本当ですか？嬉しいなあ」

くすぐったそうに笑うフェリシア。それから時計を見て、ベッドから立ち上がる。グランディールの時間表記は一日を一から十の刻で表す十進法だが、魔法仕掛けで動くその時計にもようやく慣れたところだ。

「いけない、もうすぐ八の刻だ。これからお師匠様の授業なんです、失礼しますね。ハーブテイ、ごちそうさまでした」

「はい、どういたしまして。無理はなさらないで下さいね」

心身共に疲れているとはいえ、一番好きなダリルの魔法授業が控えているとなれば足取りも軽い。医務室の水場で洗ったカップをシャロンに返すと、フェリシアは急ぎ足で建物の外に出た。七の刻の終わりといえば、日本で言う午後四時半ごろに相当する時間で、早めに仕事を終えた役人達が使用人棟や自宅に戻っていく。その流れとは逆方向に向かう背中を発見して、フェリシアは声をかけた。

「お師匠様、こんばんは！」

フェリシアの声に振り返ったダリルは、口の端に笑みらしきものを浮かべて頷いた。そのまま二人は連れ立って、王族棟の中庭に向かう。王族棟正面の開けた広場まで移動した二人は、そこで立ち止まった。国王兄弟とフェリシアの三人で使っている建物の周囲には、人もいない。

「授業を始める」

はじめて、ダリルが口を利いた。

「よろしく願います！」

フェリシアはぺこりと頭を下げ、ダリルから一步距離を置いた。既に机上で勉強する魔法論理は叩き込まれた状態のフェリシアにとって、魔法の授業とはすなわち純粋な実践を意味する。

「まずはいつも通りに」

「はい」

初めて水呼びを使ったときの散々な結果のためか、ダリルはまず、いついかなるときでも停止の魔法を使えるようにすることを徹底的に教え込んだ。停止の魔法は魔力を断ち切るイメージである。魔力

を注げば、初日そうだったように、対象の魔法を増幅してしまう。彼が虚空に指先で丸を描くと、フェリシアは水呼びと停止の魔法で指定された場所と大きさに水の玉を作った。今日はそれに、消去の魔法をあわせてみる。次々と描かれる円に寸分違わぬ大きさを水の玉が現れ、次の瞬間には弾けて夕日に煌きながら消えた。幻想的な光景でありながら、それを作り出す二人は真剣そのものだ。

「っ!？」

不意に、フェリシアが作った物ではない水の玉が彼女の横に現れ、足元に降ってきた。

「集中を乱すな。次は当てるぞ」

ダリルに声をかけられた時にはもう、三つの玉に周囲を囲まれている。水の玉の動きは早く、足に布地がまとわりつくワンピースを着たフェリシアが逃げるのは至難の業だ。

(でも別に、避けるとは言われてないよね)

フェリシアはそれを突風の魔法で防ぎながらも、ダリルが指示する水の玉の精製も忘れない。お返しに水の玉の一つを、ダリルの真上に誘導して落としてみるが、完璧な消去の魔法で揺らぎもせず消されてしまった。速度や軌道を変えて何度か試してみるものの、水の玉はやはりダリルにぶつかる寸前で消える。

「そこまで」

やがてダリルが終わりを告げると、フェリシアは肩を落とした。他人から魔法を消去されると双方に負荷がかかるものだが、小さな水の玉を消された程度では、ダメージはさほどでも無い。純粹に悔しさからの落胆である。

「まだまだ、お師匠様を出し抜けるようにはならないなあ……」

「気にするな。経験が違う」

「と、思わせてもう一発!」

叫びながらダリルの背後に水の玉を作り、高速で飛ばす。自分ながら最速の出来とフェリシアは思っていたのだが、彼女の目の前でダリルが飛んだ。

「え？」

突風の魔法を駆使してダリルが滞空した一瞬の間に、水の玉は彼の体があったところを通過し、フェリシアの額にぶつかる。

「きゃー、せめて消去してくださいよ、お師匠様！」

顔面から水を被ったフェリシアは、猫のようにごしごしと顔を拭いながら泣き言を言った。

「もう春だ、すぐ乾くだろう。さて、次の段階だが」

ダリルは魔法に関してはなかなかスパルタである。幸い、手早く作った小さな水の玉が服を濡らすことは無かった。フェリシアは諦めて、師匠の言葉を待つ。

「本格的な火の魔法に移る」

言われて、フェリシアの瞳が揺らいた。火は苦手だ。最低級の魔法である火起し程度なら問題ないが、最も攻撃に適しているという火の魔法は、忌まわしい記憶と直結している。

「これができなければ、いくら巧みに魔力を扱おうと、魔術師と名乗ることすらおこがましいぞ」

そんな弟子の心を見透かしたように厳しい言葉を投げつけるダリルへ、頷いたときだった。

「フェリシア、スマイサー魔道師団長」

名前を呼ばれて二人同時に横を向くと、行政棟から帰ってきたオズワルドの姿があった。背後には護衛の騎士やお付の使用人たちが十人ほど、ずらりと並んでいる。その最前列に、キアランの姿もあった。

「フェリシアに話があるのだが、今日は授業を打ち切ってもらっていいだろうか？」

いつもなら残念に思うところだが、フェリシアは正直ほっとした。ダリルも頷き、退出の礼をとって使用人棟の方へと歩いていく。その姿を横目にしながら、オズワルドはフェリシアに歩み寄った。

「授業中にすまないね、フェリシア。急ぎ伝えたいことがあるものだから」

「いいえ。陛下こそお忙しいのに、わざわざ申し訳ありません。お話というのは？」

「ここでは憚られる。私の部屋に来てくれないか？」

オズワルドの言葉にフェリシアは目を丸くし、キアランが眉間に皺を刻んだ。

初めて訪れる国王の私室は、広々として煌びやかだった。毛足の長い最上級の絨毯に、金箔や精緻な彫刻の施された家具、高い天井からぶら下がるシャンデリア。

（私の部屋も豪華だと思っていたけど、さすが王様の部屋は違うなあ）

魔法光の数は少ないというのに、昼間のようにまぶしい部屋を見回すと、キアランが不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「きよるきよるするな、兄上のお部屋が穢れる」

「何よ、人を黴菌みたいに」

小声で言い合う二人に、オズワルドが声をかけた。

「やめないか、キアラン。フェリシア、弟の言うことは気にしなくても良いからね」

今この部屋にいるのは三人だけだ。フェリシアとキアランは、ふかふかのソファの上に距離を置いて並び腰掛けていた。その正面では、オズワルドが泰然と座っている。

「まずはフェリシア、君の披露会の日取りが決まった。明後日だ」

「明後日……」

「重鎮達が五月蠅くてね。もう少し猶予期間を伸ばしたかったんだが、これが限界だった。大丈夫かい？」

オズワルドの問いかけに、フェリシアは覚悟を決めて頷いた。

「大丈夫です。その日の為に、今まで勉強してきたんだから」

「たった十日ばかりの付け焼刃で大した自信だな」

フェリシアはちらりと横を睨み、すぐに正面へと視線を戻した。オズワルドの言う通り、相手にするだけ無駄というものだ。寧ろ余裕

と言わんばかりの涼しい顔を造って見せるが、その表情も長くは続かなかつた。

「披露会の形式自体は、一般的な舞踏会と同じものだ。そして舞踏会には、パートナーが不可欠だからね。キアラン、フェリシアのパートナーをお前に頼む」

『はい！？』

オズワルドの言葉に、指名を受けたキアランばかりか、フェリシアも裏返った声で返事をした。

「兄上！何故俺が、この女のパートナーなど務めなくてはならないのです！？」

「そうですね、コレがパートナーだなんて披露会を始める前から失敗させる気ですか！？考え直してください、陛下！」

互いに隣を指差し、身を乗り出して国王に訴えかける二人に、オズワルドは苦笑いを零す。

「本当は、私がフェリシアにつきっきりでいたいだけだね」

「論外です！」

一言で切り捨てるキアランに、オズワルドはわかっていると頷いた。「披露会に招かれる各国の代表者の興味を私へ逸らすためにも、一緒にいられないのはわかっている。だからフェリシアの正体を知っていて、なおかつ信頼の置けるお前に頼んでいるのだよ」

「そっ……」

信頼の辺りでややぐらついたキアランだったが、それでも彼は反論を試みた。

「それならチェンバレン公爵やスマイサー魔道師団長だっていいでしょう！？」

「フェリシアがあらゆる勢力から命を狙われていることを、忘れたわけではないだろう？フェリシアのパートナーは護衛もできなくて。万一刺客でも紛れていればチェンバレン公爵には太刀打ちできない。かといって平民出のスマイサー魔道師団長では、披露会に出席させること自体が難しい。お前が一番適任だ、キアラン」

「ですが！」

声を荒げるキアランを、フェリシアは初めて心の底から応援した。ただでさえ緊張するであろう披露会で、こんな男が一緒では気も休まらない。しかしオズワルドは無情だった。

「誰が反論して良いと言った？これは命令だよ、キアラン・グランデール。披露会の間フェリシアのパートナーとして、彼女を守れ」命令と言われてしまえば、キアランには拒めなかった。彼は苦虫を噛み潰したような顔でしばらく目の前のテーブルを睨み、低い声でぼそぼそと答えた。

「……御意」

弟の返事に満足げに頷いたオズワルドは、フェリシアにも顔を向ける。

「というわけでフェリシア、弟をよろしく頼むよ。愛想が無くて悪いけれど、剣の腕だけは保障するから」

「は、はい……」

確定事項を語る笑顔は、フェリシアにすら反論を許していなかった。

それから披露会当日の打ち合わせを終えたフェリシアは、王の私室を出て大きくため息をついた。そのすぐ後ろに、キアランがついてくる。披露会の予行練習だといって、フェリシアを彼女の自室まで送り届けてくるようオズワルドに命じられたのだ。

「別に、本当についてこなくていいですけど、王弟殿下」

顰め面のまま一階までついてきたキアランを振り返り、フェリシアは剣呑な声音で辞退した。日の暮れた廊下は薄暗く、使用人の姿もなく、魔法灯の仄かなオレンジ色の光だけが二人を照らしている。

「兄上のご命令に逆らうわけには行かない。無駄口を叩いていないで行くぞ」

キアランはフェリシアの方を見ようとせせず、彼女を追い抜かしてさっさと歩き始めた。フェリシアは仕方なくその背中を追いかけながらも、我慢できずに愚痴を漏らす。

「そこらの刺客より王弟殿下の方がよっぽど危険よ、突然横からグサツとやられそう。オズワルド陛下も、貴方が私を殺そうとしていたの知らないとはいえ、酷い采配」

「兄上を悪く言うな。……それに、兄上はおそらく」

フェリシアに優花の魂が宿ったあの夜、キアランが彼女を殺そうとしていたことを、知っている。思わず口に出しかけて咄嗟に言葉を切ったキアランに、胡乱げな眼差しが向けられる。

「いや、なんでもない。心配しなくとも、兄上の許可無くお前を殺すつもりは今のところない。披露会も、命の保障だけはしてやる」

「いちいち引つかかる話し方ね。この間は私が国のためにならないから殺そうとした、なんて仰ってましたけど、本当は個人的な恨みでもあるんじゃないですか？」

敵愾心満々のフェリシアに、キアランはそっぽを向いて歯切れ悪く答えた。

「別に、魂の抜けた人形姫にどうこうされるほど落魄れてはいない。それにお前こそ、本当は今まで兄上と」

「フェリシア様！」

キアランを遮るようにして、甲高い娘の声が響いた。二人が正面を向くと、頬を高潮させたメリッサが駆けて来るところだった。いつの間にか二人は、フェリシアの部屋のすぐ近くまで来ていたのだ。

「お帰りなさいませ、今日のお夕飯は子羊のローストですよ！お疲れでしょう、たっぷり召し上がってくださいね！」

「ありがとう、メリッサ」

王弟を完全に無視した侍女の非礼な態度に、キアランがますます顔を顰める。その怒りがメリッサに向かないうちに、フェリシアは話を切り上げることにした。

「じゃあ、ここまでありがとうございました、王弟殿下」

「あ、おい」

一応感謝の意を告げて完璧な礼をとると、呆然と立ち尽くすキアランをおいて、メリッサと二人そそくさと自室に引っ込む。

「もう、王弟殿下に目をつけられたらどうするの？」

キアランから逃れてほっとしたものの、主人の義務としてメリッサをたしなめると、彼女はしゅんと肩を落とした。

「申し訳ございません。お嬢様が、嫌な事を言われたら大変だと思つて」

「うん、気持ち嬉しいよ。ありがとう。でも、私だってメリッサがあの人に怒られるところを見るのは嫌だからね？」

フェリシアが言うと、メリッサはぱつと顔を輝かせた。水呼びの魔法の失敗に巻き込んで以来、フェリシアはメリッサに嫌われることも覚悟していたのだが、結果は逆だった。怒鳴るキアランから庇ったのがよかったのか、メリッサはこれまで以上に甲斐甲斐しくフェリシアに仕えている。一方キアランには並々ならぬ敵意を抱いている様子で、今日のように非礼な態度に出ることも珍しくなかった。

（おっとりした子だと思つてただけだなあ……）

意外な過激さに驚くフェリシアだったが、今日のように助かる場面も多々あった。深くは気にせず、メリッサの給仕してくれる夕食の席に着いたのだった。

9・披露会準備（後書き）

本格的に魔法の授業が始まりました。

ところでキーワードに恋愛？とつけているからには主人公は誰かといずれ恋仲になる予定です。相手はオズワルド陛下（王道）かキアラン（どうせデレるんだろ）と思われていそうですが、アレですよ、メリッサという可能性もありますよ。何か変なフラグ立ってるし。女の子同士がイチャイチャしてるのいいよね。ガールズラブつけたほうがいいのか。でもそれをするボーイズラブも必要になってくる気がする（キアランの兄上命ぶりに）。注意書きだらけなものか？なものは、ってことでこのまま行きます。多分注意が必要なほど酷いことにはならない、はず。

10・披露会にて（前編）

そして、披露会の当日がやってきた。午後からの開催ではあるが、その日は朝から忙しかった。昼食をとってはいられないので通常の倍近い量の朝食を詰め込み、それが終わればすぐに正装の華やかなドレスに着替える。

「うわぁ……動きにくそー」

薄絹とレースがふんだんに使われたドレスを見たフェリシアは、暗澹とした表情で呟いた。フェリシアとて、綺麗なものは好きだ。しかし自分で身につけるものは使いやすいのが一番だ、という彼女の信条は通用しない。

「チエンバレン公爵家のお嬢様の正装ですもの！ 今日お見えになる王族の方々に女性はいらっしやいませんし、遠慮なく着飾りましょー！」

主とは反対に、メリッサは張り切っている。そんな彼女にドレスの減量を申し出ることもできず、フェリシアは乾いた笑みを貼り付けて頷いたのだった。

コルセットやペチコートといった下着類から始まって、何重にも重ね着するドレスをメリッサ一人で着付けるのは至難の業だ。城で働くほかのメイドたちも呼ばれ、一気に華やいだフェリシアの私室で着付けが始まった。この世界のコルセットは中世ヨーロッパのコルセットとはつくりが違うのか、息もできないほど締め付けられることは無い。しかし、嬉しい誤算といえはその一点くらいだった。フェリシアは寢室の中央で突っ立って、指揮を取る王族棟の侍女頭に従い時折屈んだり足を上げたりを繰り返す。手伝おうと指示以外の動きをしようものなら全員から鬼の形相で睨まれ、身じろぎ一つままならない。

「ねえ、舞踏会があるたびにこんなにしなきゃならないの……？」

たまりかねて泣き言を言つと、メリツサが当然といわんばかりの顔で頷いた。

「大丈夫ですよ、お嬢様。とつてもお綺麗です！絶対、苦労したか
いがあるつて思つていただけますから！」

そして着付けが終わり、今度は鏡台の前に連行される。大きな姿見には、午前中だというのに疲れきつた表情のフェリシアが映つてい
た。

（お綺麗なのは私じゃなくてドレスだよねえ）

などと卑屈なことを考えているうちにも作業は続く。丁寧に梳つた
長い髪を高く結び上げ、髪飾りや生花で飾り立てる。顔の両脇に垂
らした髪には縷を当て、緩やかにカールさせられた。顔にはうつつ
らと白粉がはたかれ、ほんのりと紅をさされる。

「意外と薄化粧なんだね」

顔に何もされていない僅かな隙を縫つて呷くと、化粧を担当してい
たメイドが首をかしげた。

「濃い化粧は下品ですよ？それにフェリシア様はまだお若いのです
から、素材を生かさなくては。ご命令とあれば厚化粧にもいたしま
すが」

「あ、いえ、このままでいいです」

これ以上時間をかけてこねくり回されてはたまらない。即答するフ
ェリシアに微笑んだメイドは、再び作業に戻つた。化粧が終われば
手足の爪を磨かれ、ペディキュアを塗られ、長時間立ち、踊ること
を見越してマツサージが施される。足の刺激にうつつりしている間
もなく、気づけば昼を過ぎていた。

「さあフェリシア様、準備ができました。そろそろ広間に向かいま
しょう」

「ありがとう」

最後に薄く透けるレースの長手袋に腕を通し、足元に用意された靴
を履いて立ち上がったフェリシアは、ちらりと姿見に目を向けた。
鏡にはベビーピンクのドレスを纏つた彼女が映っている。色合いこ

そそれほど派手ではないが、幾重にも布地を重ねて作った襞と繊細なレース、散りばめられた小粒の宝石で飾られたドレスは可憐で、やや幼い顔立ちのフェリシアによく似合っていた。結い上げられた髪や化粧の映えも美しく、フェリシアは本当に自分なのかと二度見したほどだ。

（なるほど、苦労した甲斐はある、か。メイドさんたちはすごいなあ）

着飾っている間は鬱屈としていたフェリシアだが、いざ完成形を目の前にしてみればやはり嬉しい。最後は軽やかな足取りで自室を後にしたのだった。

披露会の行われる大広間は、行政棟の中央、最も立派な入り口から、ホール中央の扉をくぐるとすぐに出られるという。行政棟の前は、貴族や各国の重鎮が乗りつけた馬車や、着飾った紳士淑女たちで溢れ賑わっていた。しかしフェリシアは来客ではなく、お披露目される側である。極力来客から姿が見えないようベールを被り、メイドたちに囲まれて、行政棟の裏手から建物の中へ入った。

「ここからは、お付はメリッサ嬢お一人です。よろしいですね？」

「大丈夫、道順は覚えています。ここまで、ありがとうございます」

王族棟の侍女たちは他の仕事が残っているのでここまでだ。人垣を作ってくれた彼女達に礼を告げて、フェリシアとメリッサは広い廊下を歩き始めた。今日はメリッサもいつものメイド服ではなく小花柄のドレスを着て、お下げにしている赤毛はゆるく後頭部で纏めてあった。

「私の準備もあったのに、よくそんなに可愛くできたね、メリッサ」
半歩遅れてついてくるメリッサを振り返って声をかけると、彼女はぽっと頬を赤らめる。

「そ、そうですね？変じゃ、無いでしょうか」

「ううん、可愛い。よく似合ってるよ」

「ありがとうございます。でも、お嬢さまの方がもっとお綺麗です」

はにかみながら笑うメリッサに癒されているうちに、フェリシアは大広間の控え室までたどり着いた。見張りの騎士に名前を告げると、恭しく扉を開けられる。中はフェリシアの私室のリビングルームと同程度の広さと内装の部屋で、奥の一人掛けソファにオズワルド、その両脇の簡素な椅子にキアランとベネディクトが座っていた。

「遅い」

フェリシアの顔を見るなり顔を顰めたキアランは、相変わらず黒い騎士服だ。普段の物よりは上等らしく、金のラインやボタン、飾り襟なども豪華だが、ただでさえ短い前髪を上げているので強面度が上がっている。そんな王弟殿下には目もくれず、フェリシアは部屋の中央に進み出てオズワルドとベネディクトに向かって優雅に腰を折った。制服をただきちゃんと着ただけのキアランと違い、二人はそれぞれ華やかに着飾っている。

「ご機嫌麗しく、オズワルド陛下、お父様。お待たせして申し訳ありません」

楚々とした令嬢を演じるフェリシアに、オズワルドは満面の笑みを浮かべて立ち上がった。

「とんでもない、披露会には十分時間があるよ。いつもの君も可愛らしいけれど、今日は一段と綺麗だね、フェリシア」

「まあ、ありがとうございます。陛下もとても素敵ですよ」

にっこり笑うフェリシアの横で、ベネディクトがうんうんと頷いた。「綺麗で当然、私の愛娘ですぞ。やはりフェリシアにはこの色がよく似合う」

「このドレス、お父様の見立てですか？ありがとうございます」
道理でセンスがいいはずだと自分の着ているドレスを見下ろすと、オズワルドが苦笑した。

「私もドレスを贈ろうとしたら、チェンバレン公に先を越されてしまったよ」

「そんな、お気持ちだけで十分です、陛下」

和やかに会話する二人と、それを顰め面で睨みつける王弟という

つもの図をしばし眺めたベネディクトは、不意に部屋の隅に控えるメリッサに視線を移した。目が合い飛び上がるメリッサに微笑みかけ、立ち上がる。

「久しぶりだな、メリッサ。今日のお前も可愛らしいよ」

「あ、あ、ありがとうございます……」

真っ赤になつて消え入りそうな声でぺこぺこ頭を下げる彼女に、楽にしているとベネディクトは手を振るう。

「私も今日は各国の使者と会談がある。ずっとフェリシアについてはいられないから、娘を頼んだよ」

「は、はい！お任せください！私、絶対にお役に立って見せます！」
少なくとも王弟殿下よりは、と胸の内では付け足したメリッサの心を知つてか知らずか、ベネディクトは鷹揚に頷くとフェリシアたちを振り返つた。

「さあ若人達よ、そろそろ宴の時間だ。準備はよろしいかね？」
その言葉通り、披露会の始まりを告げる七つの鐘が鳴り響いた。

披露会場は四段の高さに分かれた広大な扇形の部屋だった。頂点の部分が最も高い段で、王の座る玉座が据えられている。そのすぐ下に、王弟のキアランや宰相ベネディクトらが控える段。それから一段下がった広いスペースに集まつた来客たちが並び、扇の弧にあたる最も低い段に、料理や酒の載つたテーブルが設えられている。まだ外は明るいにもかかわらず天井から吊り下げられたシャンデリアには残らず明かりが灯され、精緻な彫刻の施された柱や美しい絵の描かれた壁や天井を明るく照らしていた。

「皆の者、今日はよく集まってくれた。社交シーズンには早い今、城にご招待したのは他でもない。我が国に真の意味で救世主が誕生したためである！」

厳肅な空気の中、まずはオズワルドの朗々とした口上が広間に響いた。オズワルドの合図を受けたフェリシアは覚悟を決めて控え室から玉座の横に出る扉を潜ると、ゆっくりと胸を張って彼の横に並び

立つ。その姿が観衆の目に映った瞬間、静かだった広間が俄かにざわつき始めた。

「静粛に！」

フェリシアが聞いた事もないようなベネディクトの鋭い声が飛び、人々はすぐに静まり返る。しかしその目は好意的なものも訝しげなものもすべて、フェリシアに向けられていた。ごくりと唾を飲み込み、まずは淑やかに一礼する。

「はじめまして、皆様。わたくしは、フェリシア・チェンバレンと申します」

打ち合わせどおりに自己紹介を始め、フェリシアが考えたのではない抱負を語る。予言の救世主として生まれながら、今まで国に貢献することなく恥じていること、そのかわり今後は身を粉にして王国と国王に仕えるつもりであること、そして世界を平和に導きたいこと等々、一夜漬けで覚えた選挙演説のような台詞をなんとか間違えずに言い終えると、拍手と歓声が上がった。本当に歓迎されているかはともかく、表面的には喜ばれている様子に、ひとまず胸をなでおろす。

「聞いての通り、長らく病床の身であったフェリシア嬢の回復とその力添えは近年最大の慶事である！グラノーヴァの奇跡に感謝を！」

『我らが神に感謝を！』

オズワルドの神に捧げる感謝の言葉を人々が復唱し、宴は本格的に幕を開けた。広間の隅に集まって歓談する貴族、中央に躍り出て、楽隊の生演奏にあわせて踊る貴公子や令嬢、人々の間を忙しそうに動き回る給仕。御伽噺のような光景にしばし見入っていたフェリシアに、オズワルドが苦笑交じりに声をかけた。

「フェリシア、君も楽しんでおいで」

「は、はい！」

下の段に移動すると、キアランが心底嫌そうな顔で腕を差し出してくる。

「どうぞ、フェリシア嬢」

ベネディクトの手前、言葉遣いは丁寧だが声音は棒読みである。

「……よろしくお願ひします、王弟殿下」

フェリシアも最低限の礼儀としてそれだけ挨拶して、その腕に手を伸ばした。とはいえ完全に頼り切るのも癪なので、キアランの腕に触れるか触れないかのところで手を浮かせる。

「おい、どういづつもりだ馬鹿女」

「馬鹿女に触られるなんて嫌だろうから、気を遣って差し上げているんじゃないですか」

すると、キアランの表情がくしゃりと歪んだ。

「いいから掴まっている、転ばれでもしたらみつともない。これ以上兄上の顔に泥を塗るな」

「あら、いいんですか？私が見ただけでお部屋が穢れるんでしょう。私が触ったりしたら、腕、腐り落ちちゃうかもしれませんよ？」

「貴様ッ……」

埒の明かない嫌味の応酬に、ベネディクトがごほんとか払いをする。フェリシアもキアランも、今の会話を観衆に聞かれてはまずいと思うくらいには冷静だった。よってそのやり取りは小声で為されていたのだが、腕を組んだままその場から動かず囁きあう二人の会話の内容が、睦まじい愛の言葉だと周囲に誤解されるのは当然の流れだ。その事実気づいた二人はそろって青くなり、そそくさと段を降りた。すると人々が一斉に、フェリシアに向かって話しかけてくる。

「フェリシア嬢、この度は目出度く意識を回復されたということですが、お話を窺ってもよろしいですか？」

「近々戦場に出られる予定は？お父上はそれについてどう思っておられるのかな？」

「そんなことより、僕と一曲踊っていただけますか？」

「あら、私はフェリシア様の魔法が見てみたいですわ、すごい魔力の持ち主でいらっしやるのでしょうか？」

老若男女問わず四方から質問攻めにされ、控えていたメリッサが近

づくことも敵わない。そんなフェリシアを救ったのは、キアランだった。

「失礼。チェンバレン公爵令嬢はまだ社交に不慣れだ。歓談やダンスの申し込みは、まず俺を通していただきたい」

真つ当な助け舟の出し方にフェリシアとメリッサが意外そうな顔つきでキアランを見上げる間にも、興味本位で声をかけてきた貴族たちがキアランの迫力に負けて去っていく。残った中からキアランが問題なしと判断した者はフェリシアと主に魔法について言葉を交わした。その合間を縫って、メリッサが軽食や飲み物を運び、甲斐甲斐しくフェリシアの世話を焼く。

各国からの招待客やフェリシアやチェンバレン家に害意を持つ貴族たちは、オズワルドとベネディクトが相手をしていた。そんな中、何度キアランにあしらわれてもやってくる金髪の男がいた。年代も体格もダリルに似た、逞しい体躯の男。しかし雰囲気はどちらかといえばオズワルドやベネディクト側で、中年ながら端正に整った顔立ちをしている。その青い瞳は先程から品定めするようにじろじろとフェリシアに向けられていた。

「ねえ、あの人、何？」

周囲の人が途切れたのを見計らってキアランに尋ねると、相変わらず不機嫌そうな声が返ってくる。

「ハロルド・アーデン将軍。アーデン公爵家の当主だ」

それを聞いたフェリシアは思い当たった。知識だけならば知っている。フェリシアの生家チェンバレン家と双壁を為す王国最大の貴族だ。

「やっぱり、お父様と仲が悪いの？」

「さあな。表立って対立してはいないようだが、お前が救世主となるのを苦々しくは思っているだろう」

宰相であるベネディクトが文官のトップならば、ハロルド将軍は軍のトップだ。国防の領域にチェンバレン家の娘がしゃしゃり出てくるとなれば、なるほど確かにいい気はしまい。父の政治家生命のため

めにも事を荒立てない方が良さそうな相手だと、フェリシアは將軍の顔を記憶した。

「しかし、捌いても捌いてもきりがないな……」

また数名、こちらへ向かってくる貴族の団体を見つけて、キアランが疲れたため息をついた。口には出さないがフェリシアも同感だ。

かれこれ半刻、まずいことを口走らないよう神経を削りながら喋りつばなしだ。丁度そのとき、広間に張り出したバルコニーで音楽を奏でていた楽隊が新しい曲に入った。

「……致し方ない。踊るぞ」

「え、ちよつと」

心底仕方なさそうな顔で広場に進み出るキアランに引つ張られ、フェリシアは彼の向かいに立たされた。途端に、周囲の令嬢達が騒がしくなる。

「キアラン殿下が踊りを！！？」

「私、殿下が踊るところなんて初めて見るわ……」

「何度お誘いしても踊ってくださらないのに」

「あの娘、予言の救世主だからっていい気になって！」

しかしフェリシアは、そんな囁きも耳に入らないくらい慌てていた。

「こんな速い曲無理だつてば！聞いてますか馬鹿殿下！！？」

ダンスの手ほどきは受けているとはいえ、フェリシアが知っているのはゆっくり踊る初歩のステップのみだ。それ以外は、強いて言うなら優花が学校で習った盆踊りとフォークダンス。ハイテンポな前奏に慌てるフェリシアの腰を攫い、腕を取ったキアランはにこりともせずに告げた。

「五月蠅い、誰が馬鹿だ。だいたい、踊りなんざテンポが速いほうが踊りやすいものだ。知っているステップでいいから俺に合わせたいればいい」

横暴極まりない態度と言葉に、フェリシアは半眼で目の前の男を睨みあげる。

（人の足を存分に踏みつけてストレス解消する気じゃないでしょう

ね？それとも兄上の顔に泥を塗るなど言っておきながら、すつ転ぶところを笑ってやろうという魂胆？)

ついにはそんな疑心暗鬼に陥りながらも、曲が始まると体は滑らかに動き始めた。基本的なステップは初歩のものでも代用が利く上、早いメロディは案外リズムも取りやすい。それから、意外に小学校の運動会で踊ったフォークダンスの動きも役に立った。マイムマイムのテンポで動けばいいのだ。軽快な音楽に合わせてくると舞い、跳ねる。フェリシアのドレスがふわりと広がって、腰のリボンが羽根のように翻った。

(悔しい……ちょっと楽しいんだけど。型にはまったダンスの先生相手より踊りやすいし)

ちらりとキアランを見上げると、彼は仏頂面のまま踊っていた。自分だけ楽しんでいたことにまた腹が立ち、フェリシアはパートナーの足めがけて踵を振り下ろすが、あっさりとかわされる。しかし反撃されることも無く、結局フェリシアは足を踏まれることも転倒することも無く一曲を踊りきった。

「お相手ありがとう、フェリシア嬢」

いかにも決まりごとなので嫌々やっていますという態度で礼をとるキアランは、そのポーズだけを見るなら完璧な貴公子だ。フェリシアは一瞬見惚れそうになった自分に活を入れ、負けじと美しく一礼する。

「こちらこそ、楽しゅうございましたわ、王弟殿下」

顔を上げて見詰め合う二人の間には、静かに火花が散っていた。互いに「心にもないことを言いやがって」という心境だが、少なくともフェリシアの楽しかったという気持ちに嘘はない。なんとなくフェリシアが勝ち誇った気分していると、急に周囲が騒がしくなった。

「キアラン様あ！」

「？」

黄色い声に二人して横を向くと、数名の貴族令嬢達が突進してくるところだった。もちろん、動きにくいドレスを纏った令嬢達はし

たなく走るわけではないのだが、向かってくる様子は獲物を見つけた獵犬のようだ。フェリシアがちらりとキアランの顔を見上げると、彼の顔は引きつっていた。

（この人にも苦手なものがあるんだ）

内心にやにやと笑っていると、腕を引つ張られた。

「おい、移動するぞ」

切羽詰ったキアランが促すも、時既に遅し。二人はドレスという名の戦闘服に身を包んだ狩人達に囲まれていた。

「王弟殿下、今日も素敵でいらっしやいますわね」

「私、殿下が踊りを嗜まれるだなんて存じ上げませんでしたわ」

口々にキアランを褒め称える彼女達の中から、特に派手な衣装を着た娘が進み出る。

「当然、私とも踊っていただけでしょう？」

言い放つ娘の表情は自信に満ちていた。それも無理からぬ事で、彼女は美しかった。黄金の巻き髪に、宝石のような青い瞳を縁取る長い睫毛、白い肌に薔薇色の頬も、金糸銀糸で刺繍を施した目にも鮮やかな青いドレスも、いつそ傲慢さを滲ませたその笑顔すら、娘の魅力を引き立てる一因だ。一緒にいる他の娘たちは彼女の取り巻きなのだろう、今は一樣に口をつぐんでいた。

「……申し訳ないが、ヴェロニカ・アーデン嬢」

どこか疲れた様子で、キアランは言葉を返す。

「今日の俺は救世主様のお守りだ。お誘いは嬉しいが、謹んで辞退させていただく」

（ちよつとなによその断り方、こっちに矛先が向くじゃない！女の嫉妬は怖いのよ！？）

フェリシアの心の叫び通り、令嬢はこちらを睨みつけてきた。恐ろしいことにその怒りに満ちた顔までも、女のフェリシアが見とれるほど美しい。フェリシアはぎこちない笑みを浮かべて相手の情報を思い出した。ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢、十八歳。先程見かけたハロルド・アーデン公爵の次女。その人となりまでは知らないが、

この短い間に嫌でも判らざるを得なかった。すなわち、高飛車、高慢、典型的な権力者の娘。

「あら、フェリシア様はこの世界を救う偉大なる救世主様でいらっしやいますもの。初歩のステップで誤魔化した滑稽な踊り手よりも、見た目も技量もずつと華麗な踊り手のほうが、キアラン様には相応しいと認めてくださいますわよ。ねえ？」

挑戦的な美少女の眼差しに、フェリシアは戸惑った。

（ずいぶんわかりやすい嫌味を言う子だなあ。社交界でちゃんとやっつけていけるのかしら？）

的外れな心配をするフェリシアだが、アーデン公爵家は王国最有力貴族の一つだ。大抵の貴族は、何を言われようとアーデン家には逆らえない。ヴェロニカには、他人の顔色を窺う必要など無いのである。そしてチェンバレン家がアーデン家に比する数少ない貴族であることなどまったく意識の外にあるフェリシアは、渡りに船とばかりに頷いた。

「ええ、キアラン殿下が私のパートナーといっても、形ばかりのことですし、どうぞお二人で踊ってきてください」

「おい！」

裏切り者と言いたげな声を上げるキアランから、フェリシアはそそくさと離れた。ヴェロニカに睨まれた分の仕返しとしては上出来、してやったりと満面の笑みを浮かべてやる。

「勿論殿下はお優しい方ですもの、ヴェロニカ様だけではなく他の皆様とも踊ってくださいますわ。どうぞ楽しんできてください、殿下」

それを聞いて黄色い歓声を上げる娘達が、キアランに詰め寄った。次は私、いいえ私がという声を背に、なぜか浮かぬ顔をしているヴェロニカの様子は気になったが、フェリシアは「ごきげんようと腰を折りさつさと退散したのだった。

10・披露会にて（前編）（後書き）

「ごきげんよう」というとマリみてを思い出すんですが人形姫の（というか一般的な上流階級の）お嬢様方の交流はもつと殺伐としていそうですね。いかに美しく洗練された言い回しで嫌味をぶつけ相手に確実なダメージを与えるか。ちくしょう夢が壊れる。

それはさておき主人公の披露会です。実は披露宴と間違えて打つこと数回。いったい誰との結婚を披露するというのが。見落とした誤字が残っていないことを祈るばかりです。これは今回に限ったことじゃないですが。

長いので前後編に分けました。

11・披露会にて（後編）

（あー、スカツとした！）

キアランの青い顔に思い出し笑いを堪えながら、フェリシアは大広間を出た。メリッサが健気に次々と運んでくる飲み物をつい断れず、飲みすぎたようだ。巡回兵にトイレの場所を聞いて用を足すと、息抜きに庭へでてみる。さすがに盾、もといキアランなしで広間に戻って訪問客達を捌き切る自信はないので、花でも眺めて時間を潰すことにした。夕暮れ時にはまだ早い庭園内には、同じく息抜きをしようと思いついてきた貴族の姿がちらほら見えるが、誰もフェリシアに気づかない。機嫌よく庭園を回っていたフェリシアは、建物の角を曲がってぎよつと立ち止まった。

「オズワルド陛下!？」

人気の無い池のほとりで、金の髪と衣装の国王が一人佇んでいた。その様子はまるで彼の方こそが美しい人形のような。オズワルドはフェリシアの声に振り返ると、いたずらっぽく微笑んだ。

「やあ、フェリシア。キアランはどうしたんだい？」

「嫌いな私と一緒に気詰まりでしょうから、置いて来てあげました」

あくまでも親切心からだということを強調すると、オズワルドはくすくすと笑った。

「あのキアランを出し抜くとは、君もなかなかやるね」

「陛下には言われたくないです、お供の方々はどうしたんですか？」
護身程度の嗜みしかないオズワルドには、フェリシアの比ではない数の護衛騎士がついていたはずだ。彼らの行方を問うと、君と同じだよと返される。

「私にだって羽を伸ばしたい時くらいあるさ」

「それはわかりますけど。……根回しは不十分なんでしょう？私が、馬鹿なことをしでかしたせいで」

フェリシアが水呼びの失敗などしなければ、急いで披露会を開く必要も無かった。

「私のせいで、暗殺者でも入り込んでいたら、大変なことに」

そこでオズワルドはフェリシアの顔に指を伸ばし、彼女の鼻をちょんと摘んだ。

「ふにやつ!？」

オズワルドは驚くフェリシアに微笑み、言い聞かせる。

「あまり、私とこの国の騎士団や軍部を見くびらないで欲しいな。城の警備は完璧だよ?ここにいる誰一人、命の心配なんてしないでいい」

「でも、もつと根回しする時間が欲しいって?」

「それは例えば、自分が貴族社会の女主人だと誤解している馬鹿な娘が、君に酷いことを言わないようにするための時間が、少し足りなかったというだけだ。すまなかったね、私の不用意な言葉と力不足が君を不安にさせた」

「そんなこと!」

ありません、と続けようとしたフェリシアの頬を、オズワルドは掬い上げる。

「安心して、フェリシア。君は、私の大切な人だ。誰にも、傷つけさせはしない。渡さない」

次の瞬間、フェリシアは抱きすくめられていた。男にしては華奢とはいえ、女性では決してありえない力強い腕が腰や背中に回され、引き寄せてくる。フェリシアははじめて、国王兄弟に瞳の色以外の共通点を見出した。強引なところが、似ているかもしれない。

(でも……)

ぞくりと背中が栗立った。キアランに引っ張っていかれたとき腹は立ったが、あのととき、こんなに怖かっただろうか。

「陛下……離して下さい。人に見られたら大変です」

震える声でそれだけ言うと、腕は名残惜しそうに離れていく。

「こんなところで君に無体を働く気は無いよ。ただ、君を放したく

ないだけなのに」

オズワルドの目には、何かどろりとした独占欲じみた光が宿っていた。それでいて、見えているのはフェリシアではなく、フェリシアを通じた別の誰かのような、強烈な違和感。フェリシアが一步後退すると、それが合図だったかのように、オズワルドは再び優しく理知的な笑みを浮かべていた。

「いや、か弱い娘がいきなり男に抱きつかれて、怯えない方がおかしいな。すまない」

「い、いいえ……」

頭を振るフェリシアに弱々しく礼を言っ、オズワルドは傍の裏口から行政棟の中へ戻っていった。

ところで、この二人の一連の動きをこっそり覗き見ている人物がいた。ヴェロニカだ。覗き見など恥ずべき行為だと心得てはいたが、大貴族の娘にして予言の救世主であるフェリシアが自我を得た今、ヴェロニカの地位を揺るがしかねない。オズワルドと親しげに話すフェリシアに、ヴェロニカは歯を食いしばった。

（そういう、ことだったのね）

ヴェロニカがいくら声をかけてやっても断りの言葉以外は発しなかったキアランが、フェリシアと踊っているのを見たとき、腸が煮えくり返るようだった。何でも自分が一番でなければ気がすまないヴェロニカは、フェリシアから彼を取り上げる事にあっさりと成功した。しかし簡単に手に入るものに興味などない彼女は一曲だけ王弟と踊ってやり、侍従にフェリシアの後をつけさせたのだ。そして、国王とフェリシアが逢引をしているという報告を聞いて飛んできたのである。

（王弟を囷にして、自分は本命の国王陛下と逢引だなんて、ずる賢くてはしたない女……！）

フェリシアが偶然オズワルドと出くわした可能性も考えず、覗きをしている自分のことも棚に上げて、ただ一人憎悪を募らせていくヴ

エロニカ。その目の前で、オズワルドがフェリシアを抱きしめる。
「！」

それはほんの少しの間のこと、すぐに抱擁をといたオズワルドは行政棟へ戻って行ったが、ヴェロニカは怒りと屈辱で白い顔を真っ赤に染めていた。

（あの女、あの女、あの女！！！）

ヴェロニカはいずれ王妃になるのは自分だと確信していた。そのために美貌と教養を磨き上げ、オズワルドに面会のかなう催しには必ず出席し、卑しい出自の王弟にも媚びてやったのだ。

（私がこの国の、世界の全てを手に入れるべきなのに！邪魔だわ、フェリシア・チェンバレン！！魔力以外の全てが私よりも劣っている、人形の分際で！！！！）

今にも無防備な背中に刃物でも突き刺してやりたいところだったが、ヴェロニカは姉と違って武術のことなど何もわからない。護身用に多少の攻撃魔法は心得ているが、フェリシアに魔法で勝てるはずも無い。そもそも、救国の英雄になると予言された相手に殺傷事件を起せば反逆罪ものだ。そこでヴェロニカは、もっとも得意とする陰湿な女の戦いに出ることにした。

（あの女の評判を地の底まで落としてやればいいわ。そして目を覚ました国王陛下に、私を見てもらうの）

まずはこの披露会を台無しにしてやることだ。この会には国内の貴族だけではなく、各国の使者や外交官も招待されているという。さぞ効果的にフェリシアの失態を広めてくれることだろう。オズワルドが姿を消した後の一瞬でそこまで考えたヴェロニカはおもむろに立ち上がり、周囲が無人であることを確認すると、大胆にフェリシアの方へ歩いていった。フェリシアは逢瀬の余韻に浸っているのか、ヴェロニカに背を向けたまま気づく様子も無い。

（あのドレスと髪が泥水でグチャグチャになれば、いくら急いで準備しなおしたって、夜まで間に合わないわ）

貴族の舞踏会は夜こそが本番だ。ヴェロニカは愉快そうに唇の端を

吊り上げ、渾身の力を込めてフェリシアの背中を突き飛ばした。

「！」

突然背中に強い衝撃を感じたフェリシアは、声も無く前に倒れこんだ。すぐに受身を取ろうとし、目の前が池では意味が無いと思いつす。思い切り体を捻れば、先程見た美しい少女の、憎悪に歪んだ笑顔があった。ほんの一瞬にも満たない間にそれだけのことを認識したフェリシアが最後に行ったのは、

ゴオオオツ！！！！

魔法に頼る、だった。大規模な突風の魔法を発動して池の水を吹き飛ばしつつ、宙に浮いた自分の体を滞空させる。とつさに加減できずに必要以上の大風を吹かせてしまい、轟音を立てて風が吹き荒れ軽い草木が千切れ飛び、巻き上がった大量の水が降り注いだ。しかしその場にいた二人の娘の髪や衣服には、ほんの些細な乱れや汚れも残さない。

「……………！」

ヴェロニカはその魔法のあまりの巧みさに、逃げることも忘れて立ちすくんだ。魅入っていたと言ってもいい。なにしろ魔法は大きな魔力を扱うほど細かな計算が難しく、難しい突風の魔法を、髪の毛一本乱さずに使うのは至難の技なのだ。

「……………どうしてくれるの」

突風の魔法を持続させて池の上に浮いたままのフェリシアは、静かな声でヴェロニカに問うた。

「どうしてそんなに私を敵視するのか知らないけど、もう少しでドレスと髪がグチャグチャになるところだったでしょ！お父様が心を込めて選んで、メリツサたちが朝御飯も食わずに整えてくれたのよ！？」

「ひっ……………！」

「お庭に至っては本当に台無しじゃない、庭師のおじいさんがいたらなんて言うか!……やったのは私だけだ」

風で植物がなぎ倒され、泥水塗れの惨憺たる光景を見て、フェリシアは苦い表情になる。庭を心から愛する素朴な庭師から、説教の一つでも覚悟しなければならぬかもしれない。一方、ヴェロニカはフェリシアを恐れながらも、相手の激怒するポイントがいまひとつよくわかっていなかった。衣装が台無しになると怒るのはわかるが、メイドや庭師の労力などヴェロニカにとってはどうでもいいことだったからだ。そして、無自覚に地雷を踏んだ。

「こ、こんな来る者もない裏庭の雑草が何だというのです!?!取るに足りない身分の者のことなど、私には関係ないでしょう!?!」その言葉にフェリシアは目を据わらせた。事を荒立ててはまずい相手だから穏便に済ませてやろうと思っていたが、限界だった。ヴェロニカは本当に、自分より下の身分のものなどなんとも思っていない。今日はフェリシアに向かってきたからいいものの、メリッサや世話係たちに憎しみの矛先が変わる恐れがあった。

(そんな事、させるもんか)

フェリシアは水呼びと氷結の魔法を駆使して数本の氷の矢を作り上げると、瞬時にヴェロニカの足元に向けて氷の矢を放った。

「きゃああああっ!?!」

目にも留まらぬ早業に一瞬息を呑んだヴェロニカが悲鳴をあげる。すると、フェリシアの突風の魔法とヴェロニカの悲鳴に気づいた兵士達が駆けつけてきた。

「お二人とも、どうなさいました!?!」

血相を変えて駆けしてきた兵士に、ヴェロニカがフェリシアの仕打ちを訴えるよりも早く、フェリシアはにこりと微笑んで彼に言った。

「ヴェロニカ様に助けていただいたの」

「!?!」

どうということだと言いたげなヴェロニカを尻目に陸地へちよこんと降り立ったフェリシアは、堂々と虚偽の証言を続ける。

「突然、そこに刺さっている氷の矢が飛んできて、ヴェロニカ様が突き飛ばして助けてくださったのよ。でも突き飛ばされた先が池だったものだから、とっさに突風の魔法を使ってしまつて。お庭を荒らしてごめんなさいね？」

なるべく可愛らしくて頭の足りない深層の令嬢を装つて小首を傾げると、兵士達は「刺客だ」「賊だ」と叫んで散り散りに駆け出した。その間、ヴェロニカは声も出せないまま口を開閉していた。下手に騒げば、自分が害意からフェリシアを突き飛ばしたことが知られかねないのである。むしろフェリシアの恩人に仕立て上げられたこの状況はヴェロニカにとって幸運のはずだったが、彼女は訝しげにフェリシアを見上げた。

「どういうおつもりですか？」

「別に、私はお嬢様同士の権力争いに興味はありませんから。変にこじれてお父様の邪魔になりたくないし、私に嫌がらせしてくる程度なら穩便に済ませようと思つただけです。この程度、如何様にも防げますし」

それでも疑わしげなヴェロニカに、フェリシアはとっておきの笑みを浮かべた。

「でも、私の周りに迷惑をかけるようなら容赦はしません。次は当てますから、そのおつもりで」

それを聞いたヴェロニカは、蒼白になつて踵を返した。重いドレスでできるだけ急いで逃げ帰る彼女の背中をのんびりと眺めながら、フェリシアは重い息を一つ吐いたのだった。

その後、披露会は中止されることもなく続けられた。十分に脅しておいたヴェロニカも、特に何かしてくる様子はない。しかし裏庭での騒動は国王兄弟やベネディクトの耳に入ったようで、フェリシアは主にキアランからの小言をたつぷり聞かされる羽目になった。

「だいたいだ、パートナーを他の娘に預けて女一人で裏庭散策など、非常識にもほどがある。貴様など一度頭から池に突っ込んでいれば

よかつたんだ、この大馬鹿者！」

披露会が終わった後の控えの間。令嬢の輪の中へ置き去りにされ、散々玩具にされたらしいキアランは疲れきった顔だった。罵倒にも力がなく、当然怖いはずはない。涼しい顔で聞き流すフェリシアの前に、今度はベネディクトが進み出た。

「フェリシアや、私のことを気遣ってくれるのは嬉しいが、あまり無茶をせんでおくれ。私の政治基盤は、アーデン公と対立した程度で揺らぐほど脆弱ではないのだから」

「う……ごめんなさい、お父様」

年老いた父親に心配そうな顔をして言われては、さしものフェリシアも罪悪感に駆られた。力なく頭を下げたフェリシアを庇うようにメリッサが口を挟む。

「旦那様、悪いのは私です。お嬢様専属メイドとあるう者が、主人のお姿を見失ったばかりか嫌な思いをさせるだなんて」

「何言ってるの、メリッサはちつとも悪くないよ」

寧ろあの場にいたらフェリシアより先にヴェロニカの標的になっていたかもしれないことを考えると、メリッサが不在の方がよかった。などと言えるわけもないフェリシアに、ベネディクトも加勢する。

「そうとも。そもそもフェリシアを守るのはその悪たれ黒小僧の仕事だったのだから、お前が気にする必要はないのだよ、メリッサ」
敬愛する主人父娘の言葉に感激して真っ赤になるメリッサを尻目に、キアランはじろりとベネディクトに目を向けた。

「チェンバレン公、誰が悪たれ黒小僧ですか、誰が」

「お前さんのほかに誰がある。か弱いご婦人ひとり守れずに、国王陛下を守るのか？近衛騎士の名が泣くわ」

王弟相手にも齒に衣着せない物言いでキアランをやり込めたベネディクトは、最後に黙って成り行きを見守っていたオズワールドにも苦言を呈した。

「陛下にも今一度万全の対策で当たっていたら良かったいものですな」
するとオズワールドは当然といわんばかりに頷いた。

「もちろんだとも、チェンバレン公。私達の大切なフェリシアに、万が一のことがあっては大変だからね。何なら、専属の護衛でもつけようか？」

その言葉に、フェリシアは首を振った。

「いいえ、部屋の入り口に兵士さんたちがいるだけでも窮く…：ありがたいのに、そんなお話受けられません。心配なさらないで下さい、自衛はできます」

するとこちらにも本気ではなかったのか、オズワルドはあっさりと引いた。

「フェリシアが言うのなら、そのように。さあ、今日はもう遅い。

おやすみ」

「はい…：ありがとうございます。失礼いたします」

フェリシアは退出の礼をとってメリッサを伴い、控え室を出た。こうして、長い一日が終わったのだった。

11・披露会にて（後編）（後書き）

舞踏会編、これにて終幕です。フェリシアは基本暢気ですが、やられたらやり返す主義です。特に自分自身よりも周囲へ向けられた悪意に敏感です。穏健の仮面を被った過激派。そして最近、主人公以上にオズワルド陛下の化けの皮が剥がれてきている気がしてならない。

次はいよいよ戦闘！に、なるといいな……。

12・戦闘訓練（前書き）

愈々本格的に戦闘描写入ります。

残酷表現ありにしているので大丈夫かとは思いますが、血とか内臓とか飛び交ったりするので苦手な方はご注意ください。

12・戦闘訓練

披露会から数日後。貴族たちの間で、フェリシアの評判はゆつくりと、しかし確実に上がってきていた。実績のないフェリシアの実力を疑問視する声や、単純にチエンバレン家に反感を示す勢力もあるが、先日の披露会の成功によりフェリシアが抜け殻でないことは誰の目にも明らかになった。加えて、フェリシアがヴェロニカをやりこめた一件も貴族令嬢達の間で静かな噂として広まっていた。

「後は実戦で戦えるようになるのみだな」

披露会が終わった後、毎日のように行われていた礼法やダンスの授業は五日に一回となったが、ダリルの授業はそのまま続いている。ある日の授業中、王族棟の前で一通りいつもの鍛錬が終わると、ダリルはまずそう切り出した。

「実戦、ですか」

「うむ。訓練用の人形を巧みな魔術で切り裂いて見せても、実際の魔物を前に恐慌状態に陥るようではいかん。実戦でこそ実力以上の力が出せねば、救世主としてのお役目など果たせまい？」

「はい……」

オズワルドは、フェリシアが軍の最後尾にいただけで士気が上がるから戦わなくていいと言うのだが、フェリシア自身はお飾りに甘んじるつもりはなかった。せめて、魔物に襲われても自分の身くらは守れるようになっておきたい。だから師匠の言葉に頷きはしたものの、彼女には心配事があった。

「まだ、炎は苦手か？」

「すみません、お師匠様。自分でも、上手く使おうとは思っていますけど」

発動方法がわかる魔法ならばどんな高等魔術だろうと難なく連発してみせるフェリシアが、唯一思い通りに使えないのが炎を操る魔法だった。しくじらずに使えるのは最低級の火起し程度で、最もポピ

ユラーな攻撃魔法である火焰の魔法すら安定させることができない。
「火が怖いのか？」

言い当てられて身を竦めるフェリシアに、ダリルは相変わらず感情の起伏に乏しい声で続けた。

「恐れは悪いことではない。それを忘れた人間は、力に溺れ身を滅ぼす。だが、怖がってばかりでは何処にも進めんよ」

淡々と言われる言葉が、ダリル流の励ましの言葉だということとはわかってはいる。フェリシアは迷いを振り切って顔を上げた。

「大丈夫です。今すぐは無理でも、いつか克服できるように頑張りますから、今日の課題を教えてください」

教え子の真剣な眼差しに、あまり感情を表に出さないダリルには珍しく微かに微笑み、頷いた。

「今日は王都郊外の平原にて魔物狩りを行う」

フェリシアは首をかしげた。城と城下町は高い城壁に囲まれて魔物に侵入されることはない。たまに鳥の魔物が飛んできて、三交代制で一日中城壁に詰めている兵士達が見つけれ次第、すぐに弓矢や魔法で撃ち落している。しかし城壁の外ではいつ魔物と遭遇してもおかしくない。王都や主要都市周辺は定期的に討伐隊が派遣されるので弱い魔物ばかりだが、それでも街道を行く商人や旅人が襲われることはよくあるのだ。ダリルはそういった弱い魔物で実践訓練をするつもりだった。

「ということはお城の外に出られるんですか？」

「ああ。昨日、ようやくオズワルド陛下から許可が下りてな」

本来ならもっと早くこの段階に進みかけたのだがとため息をつくダリルの横で、フェリシアが歓声を上げた。なにしろこの世界で暮らすようになって以来、城の外に出るのは初めてなのだ。

「わーい、町が見られる！」

「フェリシア、気持ちはわかるが観光ではないのだぞ」

「うっ……ご、ごめんなさい」

ころころと表情の変わる弟子に苦笑を漏らし、ダリルはフェリシア

の背後に向かつて手招きした。

「今日は遠出になるからな、昼食を用意してもらった」

「お嬢様、お昼ご飯ですー！」

振り返ると、大きなバスケットを抱えてボンネットを被った外出着のメリッサが駆けて来る。

「メリッサ！？何でお出かけ服なの！？まさかと思うけど……」

「私もご一緒します！」

予想通りの専属メイドの言葉に、フェリシアは頂垂れた。

「あのね、一応これから、魔物と戦いに行くんだよ？」

「私のお仕事はお嬢様に気持ちよく過ごしていただくことですから！郊外だろうと戦場だろうとお供します！」

一歩も引かない様子のメリッサを見て早々に説得を諦めたフェリシアは、縋るような目つきでダリルを振り返った。

「お師匠様も止めてください、危険ですって」

しかしダリルはあっさりフェリシアを裏切った。

「ふむ、いいのではないか？守り手は何も、私たちだけではない」

「へ？」

わけがわからない、という顔の教え子に、ダリルはオズワルドから賜ったというフェリシアの外出許可証を差し出した。その条件の第一文を見て、フェリシアは顔を顰める。

「なんですかこれ！私の外出の第一条件がキアラン殿下を護衛にすることってー！」

「それはこちらの台詞だ」

フェリシアの背後からのそりと姿を表したのは、黒髪黒服の王弟殿下だった。

「うわ出た！王弟殿下って近衛騎士団の所属でしたよね、確かこの国戦争してましたよね、騎士って暇なんですか！？」

「そんなわけがあるか馬鹿娘。俺は日々鍛錬と兄上の護衛で忙しい」
心底鬱陶しそうな顔でフェリシアに答えたキアランに、ダリルが補足する。

「戦場に行くのは国軍と魔道師団の役割だからな。近衛騎士は王が戦場に行かない限り、戦場で剣を振るうことはあまりない」

むしる魔道師団の長であるダリルが長期間戦場に行かない方が問題である。そんな事情もあってダリルはフェリシアの教育を急いでいたのだが、弟子に余計な心配はさせまいとその事は黙っていた。

「だから王弟殿下との遭遇率が異様に高かったのか……」

頭を抱えるフェリシアを見かねて、メリッサがダリルを見上げた。

「魔道師団長様、だとしてもどうして陛下は王弟殿下なんかを同行させるようお命じになったのでしょうか？ 団長様にお嬢様がいらっしやれば、百人力ですのに」

さらりと王弟をなんか呼びわりしたメリッサを咎めることもなく、ダリルは至極真面目に答えた。

「滅多にみないが、世の中には魔法の効かない魔物もいる。だから剣を使える殿下に同行していただくのではないだろうか」

すると、フェリシアが師匠を仰ぎ見た。

「剣くらいお師匠様使ってくださいよ、その筋肉は飾りですか！！？」

「……」

八つ当たり気味の暴言を吐かれてちよつと悲しそうなダリルに、フェリシアははつと口をつぐんだ。決して、この魔法絡み以外はいたつて優しい、寡黙な師匠を傷つけるつもりではなかったのだ。

「ご、ごめんなさい、お師匠様。失言でした……」

しどろもどろに謝罪するフェリシアに気にするなというように首を振ってみせるダリル。そんな二人とメリッサを、キアランがため息混じりに急かした。

「おまえたち、そこで日が暮れるまで師弟漫才を繰り返すつもりか？ 早く行くぞ」

確かにこんな同行者がいるのだ、さっさと行って帰ってくるに限る。フェリシアは歩き出したキアランの後を慌てて追ったのだった。

使用人棟の厩舎で馬車を借りた四人は、女性陣の強い希望でキアランが御者台、他の三人が馬車の中に乗り込んでいた。貴人が使う豪華な馬車ではなく、下級役人が公務で使う一般的な馬車だ。がらがらと車輪の回る音を立てて、馬車は門へと向かっていく。

「ところで、王弟様が御者なんてできるかしら」

舌先三寸でキアランを言いくるめて御者台に追いやっておきながら、今更不安になったフェリシアがポツリと呟くと、ダリルが黙って頷いた。

「大丈夫だろう。キアラン様の出自を考えれば」

そう言われたフェリシアは、今まで考えもしなかったキアランの生い立ちについてざっと思い出してみた。キアランの母親は平民出の町娘である。妾腹、それも母親が平民という出自から遠慮したキアラン自身が、成人の折に王位継承権を放棄していた。ちなみにオズワルドは前王の正妻である上級貴族の女性が生んだ由緒正しい血筋だ。

（あの二人、腹違いの兄弟だったんだ。似てないはずだ）

うんうんとフェリシアは頷いた。先代国王と、オズワルドの母親である正妃は既に亡き人で、キアランの母親だけが実は今も存命である。フェリシアの記憶によると、理由まではわからないが田舎の離宮で暮らしているらしい。キアランが幼い頃に引き離されたようだ。幼少時のキアランは、大衆食堂で人気の看板娘をしていたという母親に連れられ、市井に顔を出す機会も多かった。母親から引き離された後もそれは変わらず、馬車の御者くらいお手の物というわけだ。（何だか複雑だなあ……それでひねくれて育ったのかしら）

同情する気持ちも沸かなくなかったが、フェリシアはすぐに初めて見る町の景色に目を奪われた。基本的にはやはり中世ヨーロッパ風の町並みに、どこかエキゾチックな香りのする屋台が並んだ大通り。威勢のいい売り子の声に忙しく動き回る人々、時折覗く裏道の、家から家に渡されたロープに干された洗濯物に至るまで、フェリシアにとっては驚きの連続だ。

「わあ……」
窓に張り付いて外を眺めるフェリシアの頭からは、既にキアランのことなど消えていた。

五の刻を半分回った頃、町を抜けた馬車は北へ行く街道を少し進み、脇道にそれて停車した。勢いよく扉を開けて草地に降り立ったフェリシアは、気持ち良さそうに伸びをする。最近のダリルの授業ではいつも乗馬服を着ており、動きやすいのもご機嫌の理由だ。
(これであの黒いのがいなければ、ちよつとしたピクニックみたいで楽しいのになあ)

一瞬そう思ってしまったが、すぐにこれは授業の一環なのだからと思い直し辺りを見回す。南には高い城壁と深い堀に囲まれた城下町と王城がそびえており、北には石畳の街道が続いている。街道の両脇は見晴らしのよい草原だが、地平線を望む前に、遠く霞がかかって見える森や峻険な山々が北の大地を覆っているのが見えた。

「あれがコナリー山脈だ」
じつと北の方を見つめるフェリシアの横で、ダリルがぼそりと呟いた。大陸を南北に両断する険しい山々は、北からの魔物の侵入を防ぐ最大の自然防壁だ。これがあるから人間同士で争っていられる、とすら言われている。

「ここからは見えないが、東に流れるサナデイス大河を挟んで向こう側が軍事国家ボニファーツ帝国。西はローレル樹海の向こうにあるウルリーク魔法共和国。南はミネレア教国」
地図や本でしか知らない国名、土地の名前を聞いたフェリシアはそれぞれの方角に目を凝らしたが、一番近い国内の街すらも見えない。世界の広さを痛感して、軽いめまいを覚えた。

「では、そろそろ実習に移ろう。私が魔物を炙り出すから、自力で倒せ」

「わかりました」
シンプルな指示に、フェリシアはこくりと頷いた。メリッサは今に

も馬車から飛び降りそうな顔で手を握り締め、キアランは退屈そうに御者台で胡坐をかいている。そんな二人に背を向けたフェリシアは、青空の下縁の草が揺れる平原に目を凝らした。

「
」
ダリルが何事か呟くと、草原を縦横無尽に光が走った。それに驚いた虫や数羽の兎が、一目散に飛び出してくる。その傍の木立ちから、兎を獲物に狙っていたらしい魔物が躍り出た。

「うわっ」

魔物の醜悪さに、フェリシアは思わず声を上げる。魔物は大きな狼のような生き物で、薄汚れた灰色の毛皮を纏い、牙の生えそろった大きな口からよだれを撒き散らし、ギラギラと光る鋭い目で食事を邪魔したダリルを睨みつけた。対してダリルは、いつもの無表情ながら内心焦っていた。王都周辺に生息する魔物は、せいぜい凶暴なイタチ程度のはずだ。この魔狼は、新米の魔術師が対応できる相手ではない。

「お師匠様、あぶない！」

しかし、ダリルが自分で始末すると宣言するよりも早く、フェリシアが閃光の魔法を放っていた。フェリシアのかざした手から放たれたレーザー光線が、飛び上がった魔狼の尾を焼き焦がし、嫌な臭いが立ち込める。

「む、外れた」

十分な精度に練り上げた魔法を避けられ口をへの字に曲げるフェリシアに向かつて、魔物が唸りをあげながら突進する。迎え撃つフェリシアは魔物を狙って次々に魔法弾を撃ち放った。側面から、正面から、巧みに角度を変えて撃つも、動きの素早い魔狼はその悉くを避けていく。

「それなら、これでどうだ！」

フェリシアは一際大きな魔法弾を魔狼の鼻面めがけて放った。大気を焦がしながら吹き飛ぶエネルギーの塊を、飛び上がって避ける魔物。すると、そのまま後方に飛んで消えるはずの魔法弾が大きく向

きを変え、標的を背後から襲った。

『ギャオオオオツ!!!』

断末魔の咆哮をあげて魔物が倒れたのは、フェリシアから数歩と離れていない距離だった。メリッサが悲鳴とも歓声ともつかない声を上げるのに振り返って応えようとし、フェリシアはその場にすくと尻餅をつく。

「あ……」

見下ろせば、今頃足がガクガクと震えていた。

「お嬢様！大丈夫ですか!!!？」

途端に真っ青になったメリッサが馬車から飛び降り、駆けてくる。そばにいたダリルも早足で歩み寄ってきた。

「あはは……こ、怖かったあ。今頃腰が抜けたみたい」

ダリルの手を借りて立ち上がりながら、フェリシアは後ろを振り返った。目前に迫っていた魔物の、狂気じみた光を宿した目や荒い息遣いまでがはつきりと蘇る。対峙していたときは咄嗟に追尾機能をつけた魔法弾など放つことができたが、あと一歩恐怖を覚えるのが早ければ、どうなっていたかは考えたくもない。

（やっぱり映画やゲームのようにはいかないね）

どんなにリアルな3D映像よりも真に迫っていた光景を無理矢理追い出すように首を振るフェリシア。

「お嬢様、早く馬車に戻りましょう。檸檬水を用意いたします」

「う、うん……ありがとう、メリッサ」

そして、メリッサの言葉に頷いたときだった。

「伏せる!!!」

ダリルの鋭い声に、フェリシアは咄嗟にメリッサを押し倒して草の上に倒れていた。

「きゃっ!?!」

「グオオオツ!!」

メリッサの小さな悲鳴と、背後から獣の唸り声。そして、何かが破裂したような爆音が響く。ちらりと振り返ると、ダリルが放ったと思しき爆風の魔法で数匹の魔狼が吹っ飛んでいくのが見えた。馬車のほうに目をやれば、キアランが魔狼の一匹を切り伏せたところだ。いつの間にか、複数の魔物たちに囲まれている。

「何故こんなところに魔狼の群れが!？」

魔狼はここより更に北、コナリー山脈の麓に多い魔物である。はぐれならともかく、群れで平原に現れることなど考えられなかった。

「何者かが、我々に対して喚けた可能性があります!」

そんなやり取りするキアランとダリルは、驚愕しながらも応戦する手並みは鮮やかだった。キアランの操る剣は一切の無駄もなく確実に魔狼たちの喉を貫き、ダリルの魔法は広範囲に散らばった敵を一網打尽にしていくな。

(…って、呆けてる場合じゃない!)

フェリシアは慌てて立ち上がると、震えるメリッサの手を引いて馬車へと急いだ。それを見たダリルも、撤退しようとして後退する。その一瞬が、隙となった。魔狼の一匹がダリルの守りを突破し、馬車へ向かって突進したのだ。

「フェリシア!!」

ダリルは咄嗟に弟子の名前を叫んで注意を促したが、その他複数の魔狼の相手をしながら援護をするには至らなかった。メリッサを馬車に押し込み、師匠の声で振り返ったフェリシアの目前に、鋭い爪が迫る。

「……!!」

悲鳴も出せず辛うじて目を瞑り、腕をかざして来るべき衝撃に備えたフェリシアは、次の瞬間何かに覆いかぶさられていた。そして肉の裂ける音と微かな呻き声に薄目を開ける。

「王弟殿下!？」

フェリシアを庇うように抱きかかえて魔狼の爪を受けていたのは、キアランだった。左肩をざっくりと裂かれて血を零しながらも、横へ突き出された剣は魔狼の頭部を正確に刺し貫いている。

「騒ぐなとつとと乗れ。時間がない」

キアランは馬の様子をチラチラと窺っていた。突然の魔物の襲撃に脅える馬は暴走寸前だ。馬が暴れ出せば、唯一の逃走の足を失うことになる。その意図を察したフェリシアは急いで馬車に乗り込むと、キアランの右腕を引っ張った。

「それなら貴方も早く乗って！」

「何をする！俺はまだ戦う」

「怪我人が無茶しないの、逃げるわよ！お師匠様、御者をお願いします！」

じりじりと後退していたダリルはその声に一気に馬車へと駆け寄り、御者台へひらりと飛び乗った。そして馬車は間一髪、魔物の包囲を抜けて町へと走り出す。魔狼たちはしばらくそのあとを追いかけたきたが、フェリシアが爆風の魔法で蹴散らすと散り散りになっていた。その様子を、険しい表情のキアランが睨みつける。

(……怒ってるんだろなあ。予言の救世主ならあのぐらい殲滅して見せる、とか言いそう)

最後の魔狼を追い払ったフェリシアは、いつにも増して不機嫌そうなキアランを窺ってそう思いながらも、自分を庇って彼が負った傷を無視することもできずに声をかけた。

「王弟殿下、肩、見せてください。治癒しますから」

「いらん」

案の定拒絶され、「せっかくのお嬢様のお申し出を！」と言わんばかりにメリッサが目を吊り上げる。しかしフェリシアは、キアランからは今までありとあらゆる罵詈雑言を聞かされてきたのだ。この程度でめげる彼女ではない。

「私に怒るのはわかるけど、自分の体まで粗末にすることないですよ。いいから見せてください」

すると向かいに座ってそっぽを向いていたキアランが虚を突かれたような顔をしてフェリシアに向き直った。

「お前に怒る？何故？」

「だ、だって、私はお国のために戦うしか価値のない救世主なんですよ？それなのに魔狼一匹倒して、あとは追っただけで精一杯だなんて、役立たずもいいところ」

「ああ、そうかもな」

肯定しながらも、キアランの表情や言葉にはいつもの刺々しさが無い。なんとなくやりづらい思いをしながら、フェリシアは言葉を続けた。

「役立たずに治療されるのは嫌だろうけど、お師匠様は御者台ですし、私の治癒を受けてください。貴方に何かあったらオズワルド陛下が悲しみます」

「……そうだろうか。俺は、兄上の期待に応えられなかったのに」「どういうことですか？」

キアランの働きは、少なくともフェリシアよりは上だったはずだ。それにもかかわらず何だか気弱げな彼に、フェリシアは思わず治療のことも忘れて聞き返す。

「魔狼は獰猛な魔物だ。襲われた旅人や商人はひとたまりも無い。それを逃がしたとあっては、騎士の名折れだ」

そう呟いたきり、また窓の外を向いて後方を睨むキアランは、何より自分の不甲斐なさに腹を立てていた。その様子を見たフェリシアは、深くため息をつく。

「思い上がらないで下さい、馬鹿殿下。予言の救世主でも逃げるしかなかった魔物を一人で殲滅する気だったなんて聞いたら、そこそ陛下はひっくり返りますよ。もう、勝手に治癒しますからね」

「……」

キアランは黙ったままだったが、フェリシアが自分の左側に移動して傷口に手を翳しても、されるがままにしていた。

魔狼の群れから逃げるように走り去る一台の馬車。それを見下ろす街道脇の大木の頂に、小さな人影があった。

「あーあ、逃げられちゃった」

逃げられちゃった、という言葉とは裏腹にどこか楽しげなその声は、まだ十歳前後の少年のものだ。

「倒すべき敵に追われて逃げるのは怖いかな？悔しいかな？僕を楽しませてくれるのならどっちでもいいけどね」

上空を吹き抜ける風に煽られ、綺麗に短く切りそろえられた漆黒の髪が靡く。汚れない白いシャツにきつちりとした型のベストとそろいの生地の手パンツを身に着けた少年は、風体だけなら下級貴族の子息に見える。しかしその双眸は黒い目隠しで覆われていた。それにもかかわらず、顔はしっかりと逃げ去る馬車の方を向いている。

「とはいえ、まだ僕が直接動くときじゃないか。あまり脆弱なお人形さんじゃあつまらない。面倒だけど、後始末はしてあげないとね」少年は口角を吊り上げて、トンと軽く枝を蹴った。その小さな体から異様な魔力があふれ出し、大気が渦を巻いて彼の体を地上に下ろす。すると、先程まで馬車を追っていた魔狼たちが一匹残らず少年の周りに集まり、頭を垂れた。少年は彼らをねぎらうように頭を撫でてやり、優しいな笑みを浮かべて呟いた。

「失せろ、役立たず」

次の瞬間、魔狼たちの体が紙くずのように引き裂かれて宙を舞った。血や臓物の散らばる空間に、血の一滴もその身に受けることなく少年は嗤う。

「ねえ、君たちに何が守れるのかな？世界はとても脆くて、僕はとても強いのに、ね？」

囀るような声と共に、少年の姿は掻き消える。概ね平穏なはずの平原には、人間業では為しえない殺戮のあとだけが残されていた。

12・戦闘訓練（後書き）

本当に主人公最強なのかと突っ込みが入りそうな初戦闘でした。つい最近まで普通の女子大生だった娘さんが、魔物相手とはいえないかなり大量虐殺して平気な顔してるのも不自然なので、こんなことに。そしていいところは珍しくキアランが持っていく。きつとメリッサはハンカチ噛み締めてると思います。ご主人様を庇って負傷して看病していただくのは私の役目よ！と。……あれ、この小説そんな話だっけ。

最後に出てきた中二病臭い坊やについては、また後日。

13・初陣

フェリシアの戦闘訓練翌日。今日も朝からダリルの授業の予定だったが、フェリシアはオズワルドに呼ばれ彼の執務室に来ていた。

彼女の両脇には、キアランとダリルが直立している。行政棟にある王の執務室は大広間とはまた違った煌びやかさで、厳粛な空気に溢れていた。

「三人とも、急に呼びたててすまなかったね。昨日のことは聞いている、ご苦労だった」

まずは三人を労ったオズワルドは、麗しい顔に憂いを浮かべて目を伏せた。

「本来なら休んでいてくれと言いたい所だが、そんなことは言っていられなくなった」

「魔狼の討伐ですね？ならば俺が今すぐにでも」

「いいや。それはおそらく、必要ない」

キアランの申し出を断ったオズワルドに、一同訝しげな視線を向ける。するとオズワルドは一枚の報告書を取り出した。

「昨日の夕刻、北から王都に入った行商人が、酷く脅えた様子で門兵に訴えたそうだ。城門から目と鼻の先にある街道沿いの大木の辺りに、魔狼の惨殺された骸がいくつも転がっていたと」

「！」

「確認したところ、確かに十七体の魔狼が全身を引き裂かれて死んでいた。これが昨日君達を襲った魔狼たちの成れの果てではないかと思う。勿論他に魔狼がいらないか搜索は必要だが、君達が目撃した数から見てもほぼ間違いないだろう。問題はそれを、何者が為したのか、だ」

討ち漏らした魔物が王都周辺をうろつくより、事態は深刻だった。

魔法の使い方を覚えたてとはいえそこらの魔法使いよりはずっと強いフェリシアに、騎士のキアランと魔道師団長のダリルがそろって

逃走するしかなかった魔狼の群れを、逃げる隙も与えず屠るような何者かがいる。それが人の形をしている場合、最悪城下町に侵入していることすら有り得るのだ。

「キアラン、お前には第一騎士団を率いて魔狼を殺した者の正体を調査して欲しい。この上ない戦力だ、味方に引き込めるようなら交渉を。決裂の際にはすぐに逃げる」

「お言葉ですが、陛下。決裂の際には相手を仕留めるべきでは？」

「確かに、こちらの誘いを断るだけではなく敵対するようなら、それが一番望ましい。しかし魔狼十七体を惨殺して見せるような者相手に、お前が敵うはずもないだろう？」

その言葉に、一瞬下を向いて唇を噛み締めたキアランは、御意、と呟いて一礼した。

「それからダリルとフェリシアには、戦地に向かって欲しい」

「戦場に……？」

戸惑いの声を上げるフェリシアに、ダリルも同調した。

「陛下、この娘は昨日実戦を経験したばかりです。この段階で戦場に出すのは……」

「ああ、わかっている。ダリルはともかく、フェリシアに戦えと言っているわけではないよ」

安心させるようにフェリシアへ微笑みかけるオズワルド。

「この魔狼事件は、すぐに各国へ伝わることだろう。血気盛んなボニファーツ帝国あたりが、好機と見て攻め入ってこないとも限らない。そこで我らの救世主軍が、敵を叩き伏せたという事実が欲しいのだよ」

実質はどうあれ、噂だけでも国を守護する力にはなる。考えもしなかった着眼点に、フェリシアは目を瞬いた。

「フェリシア、君は極力危ない目には合わせないと誓おう。行ってくれるかい？」

「……その前に、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？戦う相手は、何処の国ですか？それとも魔物軍ですか？」

「魔物軍だよ。一応、君が生まれてからは各国の間では小競り合い程度しかないからね。……人を殺すことにはやはり抵抗があるのかい？」

『斉藤優花』が、ただの殺人は勿論、戦争も悪と教えられて育ってきたことは既に伝えてある。オズワルドの問いに、フェリシアはこくりと頷いた。

「それもあります。魔物なら害獣退治と割り切ることもできるけど、人間は嫌だなんて。でもそれ以上に……禍根を、残したくないんです」

フェリシア　優花の祖母はアメリカ人だ。幼い頃、国際新聞の記者だった父親と共に第二次大戦直後の日本へ来日したという彼女は、はじめ酷く嫌がったという。

私はあのころ、残虐非道なナチスと手を組んだ二ホンを悪魔の国だと思っていたのさ。

悪魔の国になんか行きたくない、散々ダディに駄々を捏ねて困らせたよ。

祖母は苦い顔して、そう言っていたものだ。ところがいざ日本へやってきた彼女が見た物は、アメリカ軍の空爆に焼かれた東京の焼け野原と、家や家族を失いながらもそこに生きるしかない人々だった。

あれを見て私は思ったね。一体、悪魔はどちらだったのだろうか。って。

「例え魔物を打ち破って世界が平和になっても、人間同士の争いが続いたのでは、何の意味もないじゃないですか。だから、できれば人の国とは仲良くしていただきたいと、思うのです」

フェリシア自身は戦争を経験していないが、憎しみを残したことに

より何百年も争いが続いた例を、彼女はいくつも知っていた。綺麗事だと一笑に付されることも、最悪反逆の意思すら疑われかねないことも覚悟して告げた言葉に、オズワールドは笑みを深める。

「素晴らしい」

「え……？」

「それこそ、私が理想とする世界だよ、フェリシア。人は初代王の時代のようにひとつにまとまるべき、それはどの国も考えていることだ。しかし相手を倒して得た平和にどれだけの価値があるだろうか？国内の力は衰え、敗れた人々は故郷を奪われて生きなければならぬ。魔物を殲滅できたとしても、それは紛れもない悲劇じゃないか」

耳に心地よい声音で滔々とオズワールドは語る。

「だから私は、各国に対しては武力ではなく話し合いで交渉を持ち、人類を一つにして魔物軍へ立ち向かいたいと思う」

「あ……ありがとうございます、陛下」

考えを受け入れてもらえたことにフェリシアが頭を下げると、オズワールドは首を振った。

「礼を言いたいのは私の方さ。十一年前の即位の折にも同じ事を言じたのだが、やれオズワールド陛下は弱気だの意気地がないだの、散々陰口を叩かれたからね。予言の救世主殿が同意見だと心強い」

「十六歳の王様がそんなに立派なことを考えていたのに、皆ひどい……！陛下、私、陛下のために頑張りますから！」

「ありがとうございます」

張りきるフェリシアと微笑むオズワールドの間に、渋面のキアランの声割って入った。

「しかし、陛下。チェンバレン家の娘ばかりが戦場で名を上げれば、アーデン家が黙っていないと思われませんが」

現將軍家の名前を出したキアランに、オズワールドは笑顔のまま顔を上げた。

「ああ、それなら問題ない。釣り合いを取るために、この行軍の指

揮者はアーデン家の者に任せようと思っっている。丁度今呼んだころだ」

それを聞いて、キアランの顔から血の気が引いた。隣にいたフェリシアは、げつという言葉まで聞いてしまう。そんな弟の様子に気づいていないのか無視しているのか、オズワルドは軽やかに呼び鈴を鳴らす。すると、フェリシアたちの背後でゆっくりと執務室の扉が開いた。

「失礼いたします」

先導のメイドの後に続いて入ってきたのは、二十代半ばの女性だった。凜とした佇まいの、金髪碧眼の美女。高貴の生まれだということとは一目瞭然だったが、妙なことに貴婦人の証であるドレスではなく軍の制服を纏い、渦巻く金髪を頂でくくっていた。豊かな胸元さえなければ、美貌の貴公子にすら見える。男装の麗人はまずはオズワルドの前で深々と最敬礼を取ると、ゆったりとフェリシアたちの方を向いた。

「彼女はマルグリット・アーデン少佐。ハロルド將軍の長女にしてこの度の戦闘の総指揮官だ」

オズワルドの紹介を聞いて、フェリシアは身構えた。どこかで見ただ顔だと思えば、マルグリットはヴェロニカの実姉なのだ。対してマルグリットは優雅に一礼し、嫣然と微笑んで見せる。

「はじめまして、フェリシア嬢。ただ今紹介いただいたアーデン少佐だ。予言の救世主殿と共に戦えるだなんて光栄だよ、よろしく」「こちらこそ、よろしく願います」

オズワルドたちの前だからかもしれないが、マルグリットの態度はごく普通だった。妹があだだったからといって、姉まで警戒しすぎるのは失礼だ。フェリシアは差し出された手を躊躇いなく、しかし何かされればすぐにやり返してやるという心持ちで握り返す。すると、その手をするりと持ち上げられた。

「ふえっ!?!」

何をされるのだろうかと目を白黒させるフェリシアの前で、マルグリ

ツトはにこりと微笑み、宝物のように戴いた手にそつと唇を落とす。

「え！？ええっ！！？」

何故か真つ赤になってうろたえるフェリシアを見下ろし、マルグリットはくすくすと笑う。

「ふふっ、あの我が妹をやりこめたお嬢さんはどんなにかついい娘なのかと思いきや、可愛らしいじゃないか。なるほど、オズワルド陛下が放っておかないはずだね。私が男だったらすぐに跪いて求婚しているところだ」

(……冗談、ですよね?)

あっけに取られるフェリシアの横から、キアランが進み出た。

「きつ、貴様何を破廉恥なことをしている！国王陛下の御前だぞ！！」

するとマルグリットは鬱陶しそうな顔でキアランのほうを向き、花の顔を思いつきり顰めた。

「五月蠅いね、お前に言われなくともそのくらい承知しているよ、キアラン」

「呼び捨てにするな！ここは訓練場ではないんだぞ！」

「はいはい、キアラン殿下。むさい顔を近づけないでくれたまえ、私はフェリシア嬢のような可愛らしいお嬢さんしか視界に入れたくないんだ」

「黙れ変態男女！！！」

絶叫したキアランは、次の瞬間はつと口を噤み青ざめた。フェリシアの幻覚なのか、ちょっとガタガタ震えているようにも見える。

「ふふっ、国王陛下の御前で、人を愚弄したね、キアラン？当然、自分にも同じことをされる覚悟はあるということだろう？」

マルグリットは美しい顔に笑みを浮かべていた。しかしその目は笑っていない。それどころか凄まじい怒りのオーラを背負っていた。

「例えばそう、お前が五歳の頃だったか、雷に驚いてべそをかきながら母君の部屋に駆け込んだ時の顔といったら、今思い出しても笑

える」

「止める、そんな昔の話は！！！」

「ああ、それとも七歳まで寝小便を垂れていたのを秘密裏に処理しようとしてシーツを軍事棟の洗い場まで持ってきて騎士団長にどやされたときの話の方がいいか」

「それは兄上には黙っておく約束だっただろう！！頼むから！！！」
高笑いするマルグリットと懇願するキアラン。

「あの、私たちはどうしたらいいんでしょうか、お師匠様」

「……」

フェリシアに尋ねられたダリルは、黙って首を振った。お手上げと
いうことらしい。

「いい加減にしないか、二人とも」

結局、オズワルドの一声で王弟殿下と公爵令嬢の言い合いは終わった。勿論マルグリットの圧勝だった。何事もなかったようにしゃんと背筋を伸ばして立つ彼女の横で、幼い頃の恥ずかしい話を続けざまに暴露されたキアランは哀愁を漂わせている。

「さて、フェリシア。君にはアーデン少佐指揮の下、コナリー大森林手前の駐屯地にて魔物の殲滅作戦に参加して欲しい。万一戦うことになっても、魔狼を倒せるの実力があれば問題ないはずだ」

コナリー大森林は同名の山脈の手前に広がる森だ。山脈に近いため魔物との大規模な戦闘が起こりやすい場所だが、大きな砦もあり守りやすい場所でもある。

「現地でのフェリシアの指導は引き続きスマイサー団長に頼む。今回はアーデン少佐の指揮に入る形になるが、構わないだろうか？」

「陛下の決定に、私が否を唱えようはずもございません」

少佐という地位は低くはないが、魔道師団の団長ほどではない。しかしマルグリットは貴族の出身、ダリルは平民だ。この二人が同じ戦場で戦う場合、どちらが指揮に入るかは微妙な問題なのだが、オズワルドの采配により今回はダリルが指揮官を譲る形になった。

「では諸君、健闘を祈る」

そしてオズワルドが解散を告げると、四人は退出の礼をとり執務室を後にしたのだった。

ダリルの授業は、出撃の準備もあるだろうということで当分の間休講となった。

（いよいよ初陣か。まずはメリッサに話して、チエンバレンのお父様に連絡して、それからシャロン先生にも応急手当の方法とか教えてもらった方がいいかな）

授業がなくなっただとはいえ、フェリシアにはやるべきことが山ほどある。王族棟に向かいながら頭の中でそれらを一つ一つ列挙していく彼女の背を、親しげにぽんと叩く手があった。

「やあ、フェリシア嬢」

振り返ると、そこには執務室の前で別れたばかりの金髪美女が立っていた。

「マルグリットさん」

「マルグリットでいいよ、堅苦しいのは嫌いなんだ。私もフェリシアと呼んで構わないかな」

「あ……はい。どうぞ」

顔こそヴェロニカそっくりだが、妹とは違って気さくな様子のアーデン家長女にどきまぎしながら頷くフェリシア。

（なんか、女の人なのに格好いいなあ）

ぼんやりと見とれていると、不意にマルグリットの表情が曇った。

「……すまなかつたね」

「え？ど、どうしてマルグリットさん……マルグリットが謝るんですか？」

「披露会だよ。妹のヴェロニカが、失礼なことをしたそうじゃないか」

沈痛な面持ちのマルグリットに、フェリシアはぶんぶんと首を振った。

「大丈夫です、慣れていきますから。それにマルグリットが悪いわけ

じゃないのに」

実際、ヴェロニカの行為は中学時代のいじめっ子や『あのひとたち』に比べれば可愛らしいものだった。しかしフェリシアの魂が最近まで何処で過ごしていたのか知らないマルグリットは、慣れているという言葉から別の人物を連想したらしい。

「そういえば、キアランにも随分苛められているらしいね。あれも仕方ない男だな、気になる子ほど苛めたくなるタチらしい」

「いえ、キアラン殿下の嫌味は純粹に私が嫌いだからだと思いますけど。お二人は幼馴染なんですか？」

「まあね。とはいえ私とキアランの接点はほとんど訓練場だけだったから、君とはこれが初対面か」

それを聞いてきよとんとした顔で首をかしげるフェリシアに、覚えていないのかい、とマルグリットが苦笑する。

「フェリシア、君とオズワルド陛下とキアラン。君たち三人こそ、城で共に育った幼馴染のはずだよ。特に子供のころのキアランは、それは嬉しそうに甲斐甲斐しく君の世話を焼いていたという話だけ」

「ええ！？オズワルド陛下の間違いじゃなくてですか！？」

信じられない言葉を聞いて素っ頓狂な声を上げるフェリシアに、マルグリットは頷いてみせる。

「私も幼少の頃の君に会ったことはないから、伝聞だが。あのころ、君を疎んじていたのはどちらかというとオズワルド陛下の方じゃなかったかな」

「あのお優しい陛下が！？」

「いや、今のキアランのように直接君に嫌がらせをしていたわけではないようだけど。キアランがフェリシアの世話を焼いてばかりで一緒にいてくれないと、何度か愚痴を零されたことがあるよ」

どこか遠くを見るような顔をして、マルグリットは仄かな笑みを浮かべた。

「君に対するあの兄弟の態度が逆転したのはいつからだったか……」

ああ、あの時かもしれない」

「あの時？」

「キアランの母君が城を出たときだ。確かあいつは、十歳くらいだったかな。今思えばあの二、三年は、何か城の空気がおかしかった気がする」

フェリシアは必死に当時の様子を思い出そうとしたが、わかったのはキアランの母親が城から消えた年の前後にオズワルドの母親である正妃と前王が相次いで急逝したという事実だけだった。城の空気などという曖昧な物は、人形姫フェリシアには理解もできていなかったのだ。

「まあ、あの馬鹿の事はおいておくとしてだ」

さらりとキアランを馬鹿呼ばわりしたマルグリットは、改めてフェリシアに向き直った。

「どうかヴェロニカのこと、許してやってはくれないか？私からも、きつく叱っておいたから」

「そんな、マルグリットがどうしてそこまで？」

尋ねると、マルグリットは気まずそうに俯いた。

「姉馬鹿と笑われるだろうが、私にとってヴェロニカは可愛い妹だ。私たち姉妹には兄もいるんだが、兄上は魔術師団に入って日夜大好きな魔術の研究に没頭している魔法馬鹿でね。私も見ての通りの剣術狂。ヴェロニカは不甲斐ない兄と姉の変わりに、あれでも家を守るうと必死なんだよ。その方法の良し悪しはともかくとして」

「……」

なんとやってよいかわからず沈黙するフェリシアに、マルグリットは眉根を寄せた。

「いや、すまない。こんな話をしても、君を困らせるだけだったな。フェリシアははっと顔を上げ、慌てて首を振る。

「そ、そんなことないですよ！じゃあ、また妹さんが何かしてきたら、お姉さんに心配かけないでって、説得してみます！！」

するとマルグリットは大輪の花が綻ぶように笑い、礼を告げたのだ

つ
た。

13・初陣（後書き）

マルグリットお姉様登場です。主役が霞むほど濃いです。イメージとしてはベルら。本当に女の子が好きな女の人なのかただの冗談なのかは今のところ内緒だ！

そして前回若干株の上がった（はずの）キアラン君ですが、恥ずかしい子供のころの話暴露によりまた急激に扱いが下がりました。これぞ上げて落とす！

そこは美しい春の庭だった。可憐な花々が咲き乱れる美しい庭には、上等な衣装を着た二人の子供がいた。一人は少年、もう一人は彼よりも少し年下の少女。少女は焦点の定まらない目で、無表情に虚空を見つめて突っ立っていた。その小さな手を、少年が軽く握る。「行こう、フェリシア。母上が蜂蜜水を作ってくれるって」

「……」

語りかけられる言葉にも、少女は無反応だった。しかし少年がめげることなく手を引くと、少女はその後をついてくる。ぼてぼてとおぼつかない足取りの少女に、少年はにこりと笑い歩調を合わせる。しばらく行くと、二人の背丈よりも高い花々の向こうから、丸い顔の愛らしい女が顔を出した。

「あら、早かったわねえ。でも良かったわ、丁度蜂蜜水が冷えたところよ」

女は朗らかに笑いながら、子供たちを抱きしめた。少年はくすぐったそうに笑うが、少女はやはり無表情だ。しかし女は気にした様子もなく二人を花壇の淵に座らせて、琥珀色の液体が入ったグラスを渡す。

「落とさないように気をつけるのよ」

「はい、母上」

少年ははきはきと答えて、自分の瞳と同じ色の飲み物を一気に飲み干した。対して、少女はグラスを持ったままぼんやりとしている。それに気づいた少年は、自分のグラスを地べたに置いて、少女のグラスに手を添えた。二人の手が重なり、ほんのりと少年の頬が上気する。

「フェリシア、美味しいよ。グラスの淵に口をつけて、こう。飲んでみなよ」

少年に補助されて、少女の口にグラスがあてがわれる。すると、少

女はこくりこくりと少しずつ蜂蜜水を飲みはじめた。満足そうにその姿を眺める少年に、女が笑う。

「まるでフェリシア姫の騎士様みたいね」

すると少年は照れることもせず、大真面目な顔で母親に向かって頷いた。

「そうだよ。僕、騎士になる。フェリシアは、予言のきゅーせいしゅで、この国を守るんだって。兄上と一緒に。だから、僕はフェリシアと兄上を守る騎士になるんだ」

「そう。それは立派な夢ね」

息子の黒髪を撫でる女の顔に、一瞬深い悲しみがよぎる。しかし少年はそんな母親の様子には気づかずに、ただ誇らしげな笑顔のまま頷いた。

「……はへ？」

間抜けな自分の声で目が覚めたフェリシアは、ベッドの中でまだ薄暗い部屋をぼんやりと見渡した。時計を見れば、まだ三の刻に入っただばかりの早朝だ。

（マルグリットからあんな話を聞いたせいかしら。何か、ものすごく奇怪な夢を見た気がするんだけど……あの純粹そうな可愛らしい男の子、まさかとは思いつけどキアラン殿下……よね？）

今とは違って恐ろしく好意的な態度にキアランだと信じきれない反面、何故だか覚えのある光景だった。十年以上前、本当にあったことなのだろうか、フェリシアは首をかしげる。

（そういえばキアラン殿下といえば、まだお礼言ってなかったっけ）
一昨日、魔狼から庇い助けてもらった礼を、なんだかんだで言いそびれていた。気に食わない相手とはいえ、怪我を負ってまで守られておきながら、何もしないというのも心苦しい。かといって、今更面と向かって礼を言いに行くのも気が引けた。礼を言いに行つて素直に聞いてくれる相手とも思えない。最悪、いつもの口喧嘩で終わる恐れすらあった。

「そうだ、春告げ花」

そこでフェリシアは、メリッサから教わった感謝の花のことを思い出した。簡単な手紙でもつけて贈っておけば、捨てられるにせよ感謝の気持ちを送ったことは伝わるはずだ。

（そうと決まったら早く行こう）

今は春真つ盛り、春先に咲く春告げ花の時期は過ぎつつある。フェリシアは手早く着替えると、使用人部屋のメリッサを起さないように部屋を抜け出した。見張りの不寝番には早朝散歩に出る旨を伝え、中庭へ出る。花壇をかきわけ目的の花を探すと、思ったとおり、どの春告げ花も既に散り始めていた。少ししおれたその花を摘んで、眉間に皺を刻む。

「どうして私、あんな人のために朝からこんなことしてるのかしら」
そうは言うものの、ここまで来て部屋に引き返すところそ本当に馬鹿らしい。フェリシアは袖を朝露に濡らしながら、庭の奥へ奥へと入っていった。そして、見覚えのある一角へと出る。

「ここ……」

春の花が咲き乱れる美しい庭園。花の配置や視線の高さは違うものの、そこは先程夢に見た庭だった。同時に、フェリシアは思う。

（あの夢で、キアラン殿下のお母さんが出てきた部屋…… 『影王妃の間』だ……）

既に王族棟の造りを把握しているフェリシアは、夢で見たキアランの母親が出てきた方角にある部屋が、先日迷い込みそうになった影王妃の間であることに気がついた。そして、その時の一件がなんとなく腑に落ちる。

（あの人、子供のころ離れ離れになったお母さんの部屋にいたって事？それを私に知られたくなくて、あんなに怒った……？）

大真面目な顔で、フェリシアは呟いた。

「キアラン殿下ってブラコンなだけじゃなくてマザコンなの？」

「まざこんとは何だ？」

すると思いがけず独り言にツッコミを入れられた。振り返ると、花

壇の向こうに仏頂面のキアランが立っている。

「うわっ、よく会いますね王弟殿下、実は私のストーカーですか？」
「すとーかー？」

この世界に存在しない言葉の意味がわからないらしく、怪訝そうな顔のキアランを見て、ため息をつくフェリシア。

「気にしないで下さい、ただの冗談です。そんなことより、何故貴方がここに？」

「それはこちらの台詞だ。俺は自分の仕事をしているだけだぞ、兄上を守るのが仕事だからな。早朝の城内をうろつく不審者を尋問している」

その言葉に、フェリシアは力チンと来た。せつかくお礼の気持ちを伝えようとしているのに、不審者扱いとは何事だ。

「私は春告げ花を摘みに来ただけです！貴方にお礼の手紙を出そうと思つて！」

言い返しながらしおれかけの花を鼻先に突き出してやると、キアランは鳩が豆鉄砲を食らったような顔で問い返した。

「礼？俺に？」

「一昨日、魔狼から庇つてくださったでしょう！？そのお礼です、ありがとうございます！」

喧嘩腰で礼を言い、無理矢理花を押し付ける。

「……なんというか、今更だな」

渡された花を見下ろして、キアランが呟いた。その顔は呆れてはいても、嫌悪は浮かんでいないことに、フェリシアの方が驚く。

（人のこと殺そうとしたり、庇ったり、何考えてるんだろっ、この人）

キアランの考えていることがわからなくて、眉根を寄せる。否、わかつていることは一つだけあった。

「別に、王弟殿下が私の身を案じたわけじゃなくて、私が予言の救世主だから助けてくださったのは重々承知していますけど。感謝しているのは本当ですから」

「おい」

言うべき事を言い終えて部屋に戻ろうとしたフェリシアを、キアランが呼び止めた。

「お前、自分が予言の救世主だから助けられたと思っているのか？」

「違うんですか？」

「いいや、それもある。騎士の努めは弱きを守ることでもあるしな。お前が弱いかどうかは甚だ疑問だが」

そこでキアランは唇の端を吊り上げた。酷薄そうな笑みを貼り付けて、フェリシアを見下ろす。

「助けたのは、お前を俺の手で殺してやりたいからだ、と言ったらどうする？」

その言葉に、フェリシアの肌がぞくりと粟立った。脅えて身を引く彼女を愉快そうに眺めながら、キアランは残酷な笑みを浮かべる。

「安心しろ、俺は自我を持った救世主殿に手を出すほど考えなしではないからな。兄上の役に立つうちは生かしておいてやる」

「な、何よ偉そうに、昔はあんなに可愛らしかったのに！」

「俺が可愛いだと？」

心外そうなキアランに、フェリシアは震える拳を握り締めて言い返した。

「今朝、昔の実体験らしき夢を見たんです。オズワルド陛下とフェリシアさんを守る騎士になるって言ったくせに！」

その言葉に、キアランが眉を顰めた。それはお前の妄想だと言われるかと思っただが、彼はフェリシアの言葉を否定しなかった。

「昔の話だ」

ぽつりと、呟くように言い捨てる。

「大体、お前の方が先に俺を見限ったんだらう？」

「え……？」

苛立たしげに言ったキアランは失言に気づいたようにはつと口を噤み、フェリシアへ背を向けた。

「とにかく、下らん夢なんざ早く忘れろ。お前も俺も、あの頃に戻

れるはずもないのだから」
そして、すたすたと歩いて行ってしまふ。フェリシアは呆然とその背中を見送るしかなかった。

それから数日間、フェリシアのはまた忙しい日々を送っていた。

初陣の準備だ。図書館に通って魔物について調べ、シャロンに応急処置や戦地での衛生管理について学び、ダリルやマルグリットと打ち合わせ、その合間にしばらくの別れを惜しむオズワルドやベネデイクトの来訪を相手する。そんな中、キアランとだけは顔を合わせることがなかった。聞くところによるとキアランの方でも魔狼惨殺事件の犯人探しであり城には戻っていないらしいが、それでも今までの遭遇頻度を思うと不自然だ。

(避けられてるのかしら……)

図書館でぼんやり考えていると、ひょいと金髪の美女に顔を覗き込まれた。

「やあ、調べ物ははかどっているかい、フェリシア嬢？」

「わわっ、マルグリット！」

目の前に突然現れた端正な顔に驚いたフェリシアが後ろにひっくり返りそうになるのを、マルグリットのしなやかな腕が抱きとめる。

「どうしたの、上の空だったようだけれど。誰のことを考えていたのかな？ 妬けるね」

「わ、私は別に……ご覧の通り、コナリー大森林の魔物について調べていただけです」

そう言つて椅子に座りなおしたフェリシアは、読んでいた魔物図鑑を見せた。恐ろしげな挿絵と共に、大森林に多く生息しているという小鬼の魔物について書かれたページだ。

「コナリー大森林の魔物、ね……魔狼を倒したという君の敵ではないとは思つけど」

「でも、相手は一応『軍隊』なんですよね？」

フェリシアの言葉に、マルグリットは頷いた。『魔物軍』と呼ばれ

るように、知能のある魔物たちは徒党を組み、時には大軍を編成して人の地に攻め入ってくる。小鬼は辛うじて上官の命令に従う程度の知能しか持ち合わせておらず、一頭辺りの戦闘能力も先日 of 魔狼とは比較にならない弱さだ。しかし個体数が多く、率いる魔物の知能によっては苦戦を強いられることもある。

「大陸の北や牢獄島って、どんなところなんでしょうね」

魔物図鑑をぺらぺら捲ると、さあねとマルグリットが肩を竦める。

「山脈より北は魔王が治める魔物の国だとか、上位の魔物や竜の巢が広がっているとか、古の邪神が眠っているのだとか、色々な噂はあるけれど真相は定かではないよ。まして牢獄島なんて、初代王陛下でもお目に掛かったことがあるのかどうか。いずれにしても碌な場所ではないだろうけどね」

フェリシアは「確かに」と頷いて、読んでいた図鑑を閉じた。

「何しろ、戦場なんて行く前からあれこれ頭を悩ませて、なるようにしかならないさ。安心して、君は私がしっかり守るからさ」

「ありがとうございます、マルグリット。私も頑張りますね」

頼もしい言葉に、フェリシアもまた頷いたのだった。

そして出立の朝がやってきた。使用人棟と軍事棟に挟まれた訓練場には、五つの部隊から為る千人の兵士が整然と並んでいた。その正面に設けられた指令台では、きっちりとした軍服姿のマルグリットが兵士達を鼓舞している。その背後、指令台の下ではフェリシアとダリルが並んで立っていた。

「壮観ですねえ、お師匠様」

空はからりと晴渡り、歓声とも雄たけびともつかない声を上げる兵士達が手にした剣に、日の光がきらりと反射する。

「恐ろしくはないのか？」

今回は万単位の本格的な部隊と比べれば些細な軍勢であるとはいえ、フェリシアにとっては縁もなかつた世界の光景である。弟子を案じたダリルが尋ねると、フェリシアは頷いた。

「そりゃあ怖いですよ。きつと、魔物の軍勢なんか目の前にしたらもつと怖い。でも、怖がってばかりは前に進めない、でしょう？」

以前自分の言った言葉をそのまま返されて、ダリルは苦笑した。

「そうだな。……そろそろ行くか」

マルグリットの演説が終わり、軍馬に跨ったマルグリットや部隊長たちが颯爽と城門の方へと向かう。フェリシアは頷いて、自分達に用意された馬車へ向かった。

「お嬢様ー！」

馬車からは、危険だといくら言い聞かせても頑固についてきたメリッサが手を振っている。その荷台には、フェリシアの着替えや日用品、果ては本や娯楽の品にお菓子まで入ったトランクがいくつも積みまれている。勿論メリッサが用意したものだ。

（遠足に行くんじゃないんだからって、他の兵士さんたちに怒られなきゃいいけど）

そう思いながらも、フェリシアはダリルと共に馬車へ乗り込んだ。御者台の侍従が馬に鞭を当て、馬車が走り出す。マルグリット率いる小部隊は人々が歓声を上げる城下町の中をパレードした後、北の街道へと出陣していった。

14・出陣（後書き）

フェリシア出陣するの巻。しばらくオズワルド陛下やキアラン殿下は出番なしです。そのかわりメリッサやマルグリットが出てきます。お城よりも戦場の方が女性比率が高いとはこれいかに。

15・コナリー大砦

マルグリット率いる千人の部隊は王都北の街道を進み、途中野営や近隣の町村での宿泊を挟み、城を出て五日後にコナリー大森林を臨む大砦に到着した。

「やっとなつきましたね。これがコナリーの大砦ですか。大きい……」
部隊最後尾の馬車から降りたメリッサが、灰色の防壁を見上げて呟いた。その隣に降り立ったフェリシアも、その威容を目の当たりにして目を見張った。頑丈な山脈の岩を削り出して積み上げたという塁壁は高く聳え、大きさだけならば王城の全棟を合わせたよりも広いという砦は、左右の端が辛うじて視認できる幅だ。しかしその砦よりも更に高いのがコナリー山脈だった。王都からも眺めることのできる峻嶮な山々は、見上げると上の方に雲が掛かり、頂上すら見ることができない。

「お嬢さんたち、こっちだよ」

二人で呆けていると、苦笑交じりにマルグリットがやってきた。その背後にはダリルが付き従っている。

「マルグリットにお師匠様。お二人とも指揮官とその補佐なのに、こんな最後尾にいらっしやって大丈夫ですか？」

「大丈夫、兵士たちは砦に入って各自戦闘準備を始めるだけだからね」

その言葉通り、兵士達の列は続々と砦の門へと入っていく。

「さあ、私たちも行こう」

「は、はい」

マルグリットに先導されて、無骨な石造りの砦へ入った四人を出迎えたのは、この砦の最高責任者だという大佐だった。

「これはこれは、アーデン少佐に救世主様。コナリー大砦へようこそいらっしやいました。強くお美しい貴女がたの助力を得て、我らは更なる躍進を遂げることができましょう」

大仰な言葉と共に揉み手する中年男に、マルグリットは内心の嫌悪を綺麗に押し隠して微笑した。

「大佐、ここでの貴方は私の上官でいらっしゃるのですから、そのようなお言葉は不要です。早速ですが、軍議を開きましょう。戦場での状況を窺いたい」

すると大佐は一瞬顔を顰めた。將軍である父に取り入るうと、マルグリットが若い女性だろうと下階級だろうと上辺だけ媚び諂う者は多いのだ。しかし大佐は相手に腹の中を読まれているなど思っても見ないという笑顔で、四人を上階へと案内した。

フェリシアとメリッサは用意された個室に案内され、軍議に参加するマルグリットとダリルは更に上階の会議室へと通された。二人と別れた階段をちらりと見上げ、フェリシアはため息をつく。

「どうなさいましたか、お嬢様？」

「ううん、私じゃなくて、マルグリット。気苦労が多そうだなと思つて」

「アーデン少佐も微妙なお立場ですから。でも、格好いいですよね」
そう言つてからメリッサははつと息を呑み、

「も、もちろん私はお嬢様一筋ですけど！」

と、何故か頬を染めながらフォローを入れる。

「う、うん、ありがとう……？」

疑問系で礼を返しながら、フェリシアは砦の女兵士に案内された扉を開いた。国軍での階級を持たないフェリシアはお客様扱いで、用意されたのは客室だ。それでも岩のむき出しになった壁に小さな窓、薄暗い室内と、王族棟の私室とは比べようもない。

「まあ、お嬢様にこんなお部屋をあてがうだなんて」

ぷりぷりと怒りながらも手早く荷物を運び、カーテンを開けて光を入れ、てきぱきと動くメリッサに、フェリシアは苦笑した。

「この部屋だつて十分雰囲気があるいい部屋だよ。ええと………使用人部屋もあるね。荷解きが終わったら、少し休憩しよう」

「はい！」

隣の小部屋を覗き込んで振り返ったフェリシアに、メリッサが答える。慣れない長時間の移動で、二人とも既に疲れが溜まっていたのだ。しかし、大変なのはこれからだった。

一刻ほど部屋で休んだ二人は、夕飯を告げる鐘の音に部屋を出て、あらかじめ教えられていた食堂へと向かった。砦の食堂は大人数が一斉に食事を取れる広大な部屋だ。防犯上、砦に詰めている兵士全員が集まっているわけではないが、屈強な戦士たちが数百人、ずらりと並んでいる様はなんとも猛々しい。フェリシアたちが食堂に入った途端、その視線が一斉に二人へ注がれた。その目は明らかに敵意や猜疑心に溢れている。

(うつ……なんか、注目されてる?)

そして気圧されたフェリシアの耳に、ぼそぼそと声が届いた。

「おい、あれが城から来た救世主様かよ」

「最近まで抜け殻状態だったっていう？」

「だいたい戦場にメイド同伴なんて非常識だね」

「これだからお嬢様って奴は」

聞こえよがしに囁かれる言葉に、フェリシアは唇を噛み締めた。背後では、メリッサが脅えている気配がする。彼女を守ろうと顔だけは上げて、それでも食堂の中に一歩踏み出す勇気が持てないでいると、既に上座についていたマルグリットが立ち上がった。

「おおい、フェリシア、こっちにおいで！」

大きく手を振るマルグリットの横には、ダリルもいた。のそりと立ち上がったダリルは、マルグリットから一つ席を離れる。フェリシアはほっとして二人の間の席に着いた。背後ではメリッサが慌しく配膳の準備をしている。

「あまり気にしないことだよ。私も国軍に入りたての頃や、地方に配属されたばかりの頃はこうだった」

マルグリットは少し肩をすくめて見せ、悠然と前を向いた。その凛とした横顔に、フェリシアは恥じ入る。自分はこうして守ってもら

うために、戦場へやってきたのではないのだ。上座は一段高い場所に設けられており、見下ろせば兵士達が時折無遠慮な悪意に満ちた視線をよこす。

（私に悪感情を持っているのは、王弟殿下だけじゃなかったんだなあ……）

思えば皆に来る途中も、マルグリットの部下達とはあまり会話をしたことがなかった。上司の教育がいいのだろう、あからさまな敵意をぶつけられたことはないが、時折見かける彼らの顔は妙に胡散臭そうだった気もする。平穏な城の暮らしを思うと、改めて守られていたのだと実感した。

「メリッサ、せっかく運んでくれたのにごめん。これあげる」

メリッサが運んできた豪華な食事を彼女に押し返すと、フェリシアはおもむろに立ち上がった。

「お、お嬢様？」

食事の載った盆を持って右往左往するメリッサとは反対に、ダリルとマルグリットは落ち着いていた。

「行かせてやりなさい」

一言ダリルが告げて、メリッサに座るよう促す。マルグリットは、上座の段から降りたフェリシアを興味深そうに目で追っていた。一般兵の食事は給仕が用意するのではない。大鍋に用意された食事の前へ階級順に並び、自分で食事を盛り付ける方式だ。

「お邪魔します」

フェリシアはそういいながらぺこりと頭を下げ、順番を待つ下級兵たちの最後尾に並んだ。

「……どういっつもりだよ」

前に並んでいた、フェリシアよりも若い少年兵がじろりと彼女を睨む。その類には傷跡があり、若いといっても強面だ。

「私は戦いに関して、まだ何の実績も持たないから。今まで頑張っ
て戦ってきた貴方達より、いいものを食べるわけにはいきません」
すると、その言葉を聞いた数人の兵士の空気が少しだけ変わった。

意外そうに目を瞬く者、まだ不審そうな者、反応は色々だが、向けられる敵意が僅かに和らぐ。フェリシアの順番が回ってくる頃には食事は冷め切り、パンも固いものばかりが残されていたが、席を空けてもらえないかと頼むと兵士たちは少しづつ詰めてくれた。

「ありがとうございます」

礼を言ってもそっぽを向かれるばかりで返事はない。しかし、フェリシアは気にすることなく席に着いた。本日のメニューは芋と肉を角切りにして煮詰めた塩のスープと、硬い黒パンだ。所詮お嬢様、一口目で匙を放り出すだろうという周囲の考えとは裏腹に、フェリシアはぱくぱくとそれを口に運んだ。

（美味しいかって聞かれると正直微妙だけど、食べられないほどじゃないね。寧ろ懐かしい味かも）

貧しい食事には、フェリシアではなく優花が慣れている。優花が中学に上がる前後までは貧乏生活だった斉藤家では、茶碗一杯の米に大量の水を入れた薄い粥を、家族で分け合つのも日常茶飯事だった。あの頃の食生活に比べれば、肉が入っている分豪華な食事ですらある。

「ごちそうさまでした」

そして、特に無理をするわけでもなく一食を平らげたフェリシアは、礼儀正しく手を合わせて夕食を終えたのだった。

翌日から、フェリシアの食事は三食下級兵士達と共にすることに なった。メリツサには、本来フェリシアに出される分の食事を食べていいとってあるのだが、彼女も主人より豪華な食事を口にするわけにはいかないと、一緒に下級兵の食事を食べている。中身が庶民のフェリシアとは違い、生まれながら一応は男爵家のお嬢様であるメリツサが耐えられるものかはじめは危惧したが、メリツサも貧しい食生活には慣れていくらしく杞憂に終わった。

「私の家なんて、本当に名前だけの貴族で、裕福な商人の方のほう がよほど立派な暮らしをしていると思いますよ。お嬢様のメイドに

なる前は、私が市場で日雇いの仕事をして糊口を凌いでいたくらいですから」

メリッサがそう言うと、彼女の隣に座る大柄な兵士が顔を覆った。

「お嬢ちゃん、まだ若けえのに立派だなあ。泣かせるじゃねえか」

ここ数日で一番打ち解けたひょうきんな兵士が泣きまねをすると、向かいに座る女兵士がバシツとその頭をはたく。

「湿っぱい真似はやめな。これ以上スープが塩辛くなっちまったら、お嬢さんたちが困るじゃないか」

そして、周囲に笑い声をはじめた。フェリシアとメリッサも遠慮なく笑う姿を上座から見下ろしながら、マルグリットが息をつく。

「やれやれ、アーデン家の者としては、チェンバレンの娘さんと軍人が仲良くなるのは、あまり好ましくないんだけどね」

フェリシアたちがほんの一週間足らずで兵士達と軽口まで叩ける仲間になったのは、何も食事を共にしているためだけではない。フェリシアはダリルやマルグリットとの打ち合わせの合間にも、皆の細々とした雑用を引き受けていた。貴族の娘といえど、中身は現代日本の庶民、優花には接客アルバイトの経験だつてある。消耗品の補充や武器の手入れ道具の中継ぎまで、どんな些事でも笑顔で引き受け、慣れないながらも一生懸命に取り組む彼女は、徐々に下級の兵士達と打ち解けつつあった。

「本当に？」

マルグリットの独り言に、ダリルが尋ねる。その真意を問うように視線を返すと、

「お顔が笑っていますが」と指摘された。

「……さすが兄上の上司殿だな、鋭い洞察力でいらっしやる」

今度はマルグリットの方が揶揄するように笑うと、ダリルが渋い顔で俯いた。魔道師団の副団長はマルグリットの兄である。師団きつての天才にして問題児のことを思い浮かべ、ダリルは無言で米神に指を当てた。その様子に、マルグリットは神妙な顔を作って告げる。

「いや、からかったことはお詫びしよう。アレに師団を任せてきたスマイサー殿の心労を思うと、妹としても申し訳ないからな。しかし兄は、あれでも自称国王陛下の親友だ。国を裏切る真似はしないさ」

「寧ろ悪気がないから困るんだが……」

珍しく弱音らしく言葉を吐いて、ダリルは酒の杯を呷ったのだった。

15・コナリ―大砦（後書き）

砦で色々編。次回は多分戦闘描写入ります。

フェリシアは自室の壁にかけられた暦を眺めていた。この世界の一日は、フェリシアの体感では元いた世界と大差ない。そして、一年の長さも三百六十五日だ。時間が一の刻から十の刻までの十進法であるのと同様、一年は十ヶ月である。一ヶ月は六日間の週が六週の三十六日間。十ヶ月で三百六十日、年末にあまった五日間が何にも属さない、いわば祝日的な扱いになっている。閏年という概念はない。この暦でフェリシアが砦に来て、一週間が経とうとしていた。「もう六日目なのに、何にも起きないねえ」

「よろしいことではありませんか、平和が一番ですよ」

物干し台から持ち帰った洗濯物をたたみながら、メリッサが応じる。フェリシアがオズワルドに命じられた砦の滞在期間は最長で一ヶ月。その間、何もなければ城に帰還することになっている。そうなる可能性があることはダリルやマルグリットとの打ち合わせで十分聞かされていた。魔物は人間と違い、宣戦布告もなく突然集団で襲ってくる。その頻度から襲撃を予測することはできても、フェリシアの滞在中に戦闘が起こるか否かは誰にもわからないのだ。

「私だつて戦いたいわけじゃないけど、雑用以外にすることがないつていうのもね……」

六の刻が終わった午後、一通りの雑用も終わらせて暇をもてあましている、俄かに階下が慌しくなった。人々の駆け抜ける音に、緊張した声が飛び交う。

「何かあったのかしら？行ってみよう！」

「あ、お嬢様！」

すぐさま部屋を出て階段を駆け下りるフェリシアと、その後が続くメリッサ。そして二人は、砦のエントランスを見て立ちすくんだ。

「フェリシア、メリッサ嬢！見るな！」

気づいたダリルが二人の下に駆け寄り、大柄な体で視界を塞ぐが、

もう遅い。半分気を失いかけたメリツサの体を支えて、自身も青ざめながら、フェリシアは師匠を見上げた。

「お師匠様、一体……何があったんですか!？」

広いエントランスには、マルグリットをはじめとする上級兵たちの人だかりができていた。その中央部に、血塗れになつた兵士が仰向けに倒れている。フェリシアも顔なじみの、若い下級兵士だ。今朝、大森林へ偵察に行くのと言って張り切っていた彼と朝食を共にしたばかりである。

「大森林の方に、魔物軍が出たと。偵察班は十人組のはずだが、おそらくあの様子では彼以外に生き残りは」

「出撃だ!」

痛ましそうに告げるダリルの声を遮るように、男の濁声が響いた。視線を向けると、初日にフェリシアたちを出迎えた大佐が兵士達に檄を飛ばしている。

「大森林の魔物軍など、所詮小鬼の寄せ集め! 剣を取れ! 出撃! 出撃!」

威勢のいい上官の命令に、兵士達も唸り声を上げて答えながら、剣を掲げて大森林側の出入り口に殺到する。その様子を見たマルグリットが慌てて大佐を止めた。

「大佐、十人からなる偵察班がほぼ全滅したのですよ! ? 出撃は、生き残りから詳しい情報を聞いてからになさつた方が」

「おや、アーデン將軍の令嬢ともあるう方が弱気な。恐ろしいのなら、ドレスを着て社交場で男の狩りでも楽しまれるがいい。そのほうがお似合いですよ」

にやついた笑みを浮かべてマルグリットの胸元を眺め回す大佐。

「……!」

あまりの侮辱にマルグリットが言葉を失っていると、大佐は満足そうに笑って肩を揺らしながら出て行った。その後姿を射殺さんばかりにしばらく睨みつけたマルグリットは、昂然と顔を上げて周囲の部下達に命じた。

「私たちも出撃するぞ！」

大佐の暴走を食い止めると言葉にせずとも理解した兵士たちは、一斉に礼をとって駆け出した。

「私も行かなければ。お前たちは部屋に戻っていなさい」

ダリルもそう言って、砦の外へと向かっていく。

「そ、そんなこと……」

人々の怒号の中取り残されたフェリシアたちは、恐る恐るエントランスへ目を向けた。そこでは伝令の役目を終えた若い兵士が、後は死を待つばかりという様子で倒れており、誰も見向きもしない。

「このまま部屋に閉じこもるだなんて、できるわけないじゃない！」
見下ろせば、意識を取り戻したメリツサも、青ざめて震えながらも頷いてくれる。フェリシアはエントランスを駆け回る兵士達の間を縫って、血塗れの兵士の傍らに膝をついた。

「酷い傷……メリツサ、清潔な布と包帯、それから傷薬をありつたけお願い！あとは……そうだ、この人医務室に運ばなきゃ！担架と人手！それから医術士の人呼んできて！！」

「は、はい！」

主人の命令に、メリツサが飛んでいく。一方、勢いよく命じたものの、フェリシアは兵士の傷を直視するだけで精一杯だった。

(どうしよう、こんな傷……)

背中と腹を何か大きな鉤爪のようなもので鎧ごと引き裂かれた兵士は、呻くことすらせずに横たわっている。フェリシアがシャロンから習ったのは人工呼吸の方法や添え木の当て方といった基本的な応急処置で、これほどの大怪我の前では無力だ。治癒の魔法も使えるが、日常や攻撃に使う魔法のバリエーションの多さに比べ、治癒術は被術者の自然回復力を高めるだけのもの。いくらフェリシアの魔力が質・量共に優れていても劇的な効果は望めない。

(ううん、それでもやらなくちゃ)

迷いを振り払うように頷いて手を翳し、治癒の魔法を発動させる。ふんわりと優しく光る燐光が兵士の体を覆い、出血が止まった。し

かし、傷口が塞がるには至らない。

「お願い、もう少しでちゃんとした手当てができるから、頑張つて！」

更に治癒の術で傷口を覆いながらフェリシアが声をかけると、兵士は微かに呻いて薄目を開けた。

「お、お嬢、ちゃ……？」

かすれた声でフェリシアを呼ぶ声に、首を振る。

「今は喋らないで下さい、余計な体力を使わないで。魔物軍なら、もう討伐隊が出たから安心してください」

すると兵士は目を見開いて咳き込んだ。

「や、やめろ……！」

「だから喋っちゃ駄目だって」

話す傍から血を吐いて咳き込む彼をたしなめつつも、フェリシアは眉根を寄せた。

（止めるって、魔物軍と戦うなって事？）

すると兵士は苦しい息でフェリシアの疑問に答えた。

「魔物、軍……こ、小鬼だけじゃ、ない……戦闘、熊、と混合、ぶたい……」

「ええっ!？」

戦闘熊、という単語にフェリシアは仰天した。戦闘熊も小鬼と同じくコナリー大森林に生息する魔物ではあるが、その強さは小鬼の比ではない。人の倍ほどの体躯に、強靱な筋肉を持つ、熊というより異形の巨人のような魔物だ。破壊力だけなら魔狼をも凌ぐ。大佐が出撃に伴った歩兵達では苦戦を強いられると、戦に関しては素人のフェリシアでさえもすぐにわかった。

「あんなの、砦、の、城壁、盾にして……籠城戦、しないと、勝ち目はないって、おやっさんが……」

おやっさんとは、あのひょうきんな中年兵士だ。偵察班の班長を務めていたはずの彼がどうなったのか、今は考えないようにして、フェリシアは立ち上がった。丁度、メリッサが担架と応急セット一式

を担いだ衛生兵を連れて戻ってきたところだ。

「籠城戦に持ち込まないと勝てないほどの戦闘熊の軍団が、こつちへ向かっているんだね？」

兵士を見下ろして確認すると、彼は力なく頷いた。

「ありがとう。その情報、絶対無駄にしないから、死なないで。メリッサごめん！後はお願い！！」

「ええっ！？お嬢様、どちらへ！！？」

慌てるメリッサを置いて、フェリシアは砦を飛び出した。目の前には荒野、そしてそのすぐ先に大森林への入り口が広がっている。目を凝らすと、兵士達の軍団は荒野の中ほどまで進んでいる。

（お願い、間に合って！）

フェリシアはその方角めがけて走り出した。しかしいくらも行かないうちに、岩場に足を取られて転倒する。

「痛っ……そういえば、フェリシアってまともな運動したことなかったんだっけ……」

齊藤優花は空手をはじめ様々な武術をかじった活発な娘だったが、今の彼女は運動とは無縁な深窓のお嬢様である。上手く動かない体に苛立ちながら、フェリシアは立ち上がった。

（落ち着け、こんな距離、ちゃんと鍛えた足で走っても間に合うかどうかかわからないんだから……そうだ）

ふと思いついて突風の魔法を発動し、砦の城壁ほどの高さまで上って滞空する。更に鉄の強度を誇る魔法の防壁を周囲に巡らせ、最後に背後で爆風の魔法を発動させた。

「いつけー、即席人間大砲！！！」

ドン、という爆発と共に、フェリシアの体が吹き飛ばされる。防壁のおかげで衝撃は無いが、風のように飛び去っていく風景に今更青くなるフェリシア。

（いやああああああ、怖いー！！でも気を失ったら駄目だ、防壁張ってない状態で地面に叩きつけられたらぺちゃんこだよ！）
移動手段を後悔しながら、フェリシアは兵士達の軍勢を飛び越え、

ちょうど指揮官の一団の前に墜落した。場所は大森林に入るギリギリ、間一髪である。

「フェリシア!!!?」

乗馬服姿の救世主様が目の前に落下、という登場方法は一同の度肝を抜いたらしい。女性としては豪胆なマルグリットすら青くなつて駆け寄り、目を回して倒れているフェリシアを助け起した。

「いったいどうしてここへ!？」

その声にはつと意識を取り戻したフェリシアは、マルグリットの腕を掴み返して訴えた。

「マルグリット!今すぐ兵を退いてください、戦闘熊が来ます!」

「何だつて……!?!」

驚くマルグリットたちに先程の兵士とのやりとりを聞かせると、マルグリットもダリルも真剣な表情で頷いた。

「なるほど確かに、皆にこもつて城壁から飛び道具を使うのが最も被害の少ない方法だ。今すぐ撤退しよう」

しかしそれに待ったをかけたのがあの大佐である。

「ここまで来て撤退!?!ふざけるな、私は尉官の頃からこの砦に居るが、戦闘熊が大規模軍団に加わったことなど一度も無い!さてはお前達、戦闘熊が来るなど偽りを述べて手柄を横取りする気だな!」

みつともなく喚く大佐に、マルグリットとダリルがそろって冷たい視線を向けた。周囲の兵士も上官たちの意見が割れたことに、戸惑い顔で歩みを止める。

(ひょつとして砦に来たとき、兵士さんたちがマルグリットの部下さんたちより態度が冷たかったのって、この人のせい……?)

もはや隠すそぶりもなくぶつけられる敵意に、フェリシアも眉を顰めた。

「大佐殿、瀕死の伝令兵の意思を無駄にするまいと駆けつけた私の愛弟子が、偽りを申し上げていると仰せか?」

いつに鳴く怒気を孕んだ声でダリルが問い質す。すると大佐はやけ

くそ気味に答えた。

「ああそうだ、信じられるものか！魂の抜けた人形姫の言うことなど！！そんなものに私の築き上げた地位を、名声を奪われてなるものか！！！」

すると、大森林から野太い咆哮が響き渡った。せいぜい子供の背丈ほどの小鬼が発するはずも無い、大型獣の叫び声だ。

「ま、まさか本当に戦闘熊……！」

その声に一瞬怯んだ大佐だったが、すぐに剣を抜いて構えた。

「は、ハハ……、それが何だ、戦闘熊だろうと北の魔王だろうとこの私が討ち取ってくれる！！皆の者、私の後に続け！突撃！！！」
鼓舞する声に、戸惑いつつも兵士達が武器を手にする。

「やめないか！」

しかしマルグリットの凜とした声に、すぐに彼らの動きは止まった。

「大佐。貴方の官位は私より上、皆の中では貴方の命に従うが、ここは私がオズワルド陛下より直接指揮を任された戦場だ。この場は私に従っていたたく。総員、撤退！！！」

マルグリットの号令に、兵士たちは武器をしまい後退を始めた。

「こ、この小娘が……！！！」

怒りに顔を真っ赤にした大佐が、なおも大森林へ突撃の構えを取る。フェリシアは思わず、その前に飛び出していた。

「邪魔だ、どけ！！！」

大佐が目の中の娘を突き飛ばそうと手を伸ばす。フェリシアはその手を突風の魔法で叩き落とし、大柄な軍人を睨み上げた。

「邪魔なのは貴方です。死にたくなければ皆に帰ってください！」

「なっ、なんだと！？」

フェリシアはそれきり、絶句する大佐には目もくれず大森林の方へと向き直った。その瞬間、深い森の奥から灰色の毛に覆われた巨体が飛び出してくる。

「戦闘熊……！！！」

兵士の誰かが息を呑んだ。荒々しい唸り声をあげ、大木をも一撃で

なぎ倒す太い腕を振り回す魔物に、フェリシアは手を翳した。

「森の熊さんはお呼びじゃないですよ！」

叫びながら暴風の魔法を発動し、戦闘熊の体を吹き飛ばす。吹き飛ばされた巨体は回転しながら後方へ叩きつけられ、次々に出てきた仲間の体や武装した小鬼を巻き込んで転がった。

「お師匠様、ちよつと暴れてもいいですか？偵察兵の皆さんのルートとは方向違いだから、生き残りがいても大丈夫だと思うんですけど」

「好きにしなさい」

ダリルの了解を得て、フェリシアは森へ風の大鎌を放った。ザシュツ、ザシュと音を立て、フェリシアの視界一面、木も森に隠れていた魔物の軍勢も見境無く切り刻まれる。

（うわー、自分でやっててなんだけどグロい）

舞い散る血と肉片、輪切りになって吹っ飛ぶ大木に、慌てて作戦変更する。

（これでどうだ！）

フェリシアが腕を振り下ろすと同時、仲間の死体を踏み越えてやってきた魔物たちの足元が盛り上がり、地震のような揺れと轟音を立てて大きな土の腕が更地になった森に乱立した。そして、一気に魔物を地中へと引きずり込む。魔物の軍勢は後から後から湧いて来るものの、フェリシアは機械的にそれを地中に飲み込み、最後に魔物たちを飲み込んだ大地に最大級の爆風の魔法を放って止めを刺した。（倒しても倒してもきりがないなあ）

本人の心境は暢気だが、それは紛れも無い一方的な虐殺だった。人々は半ば青ざめて、一人の娘が引き起こすそれを眺めている。やがて、魔物の軍勢で殺気立ち咆哮をあげていた大森林はしんと静まり返った。

「ええと………すみません、撤退するまでもなく討伐完了？みたいで
す」

くるりと振り返って報告するフェリシア自身は何の変哲もない娘で

ある。それが一層の恐怖を煽った。

「ば、化け物……」

青ざめた大佐が、ポツリと呟く。

「え……？」

よくも手柄を横取りしたなと怒鳴られることは覚悟していても、まさかそんな言葉を浴びせられると思っていなかったフェリシアが、目を見開く。大佐の言葉が波紋のように兵士達の間には響き渡る前に、マルグリットが声を上げた。

「我らが救世主に幸あれ！敵は殲滅された！！」

すると兵士たちは呪縛から解き放たれたように、歓声を上げた。

「犠牲者なしの戦だぞ！」

「救世主様の奇跡だ！！」

褒め称える声をどこか遠くに聞きながら、フェリシアは背後を振り返った。魔物は血のにおいに敏感だと本に書いてあったので、死体は全て地中に飲み込んだ。全て飲み込んで、地面の中で切り刻んだ。

(あ……私)

呆然と、フェリシアは思う。

(私が、たくさん、殺したんだ)

立ち尽くすフェリシアの背中に、ダリルが歩み寄った。マルグリットは騒ぎ立てる兵士達をまとめるのに手一杯で、フェリシアを気遣う余裕は無い。そもそもフェリシアがつい最近まで争いとは無縁の世界にいたことを知るのには、この場でダリルだけなのだ。口下手な自分が何処まで彼女を支えられるのか、ダリルは迷いながらも弟子の背中に声をかけた。

「フェリシア」

命を奪うことも奪われることもない平和な世界で生きてきたフェリシアが、魔物とはいえ大量の命を殺めて、化け物呼ばわりをされて、傷ついていないか、泣いてはいないかと恐れにも似た気持ちで返事を待つ。するとフェリシアは、ゆっくりと振り返ってぎこちなく微笑んだ。傍目にも、無理をしているとわかる顔で。

「お師匠様。ええと、やりすぎだったら、すみません。でも勝ちましたよ」

褒めてください、と空元気を出しておどけるフェリシアの肩に、ダリルは手をかけた。細い感触に眉根を寄せる。

「お師匠様……？」

ダリルは知っている。この娘は、本当に嬉しいときはもつときらきらと笑うのだ。同時に、ちらりと大森林の入り口の惨状に目をやった。フェリシアの力は強大で、冗談ではなく彼女を手に入れた勢力が世界の覇権を握りかねない。今後より一層、彼女は各勢力から狙われることになるだろう。ならば、とダリルはフェリシアを抱き寄せた。

（ならば、私は世界からこの子を守る盾となろう）

彼の小さな誓いを聞く者はいない。ただ、抱きしめるといには緩く大きな腕に包まれたフェリシアが、くすくすと笑った。

「お師匠様、やっぱりお父さんに似てる」

ダリルがベネディクトではなく、斉藤優花の父親に似ていると笑う彼女は、もういつものフェリシアだ。ダリルはほっとして、腕を解き促した。フェリシアが本来の顔で笑っているだけで、彼は満足だった。

「帰ろう」

「はい」

そして師弟は、並んで砦へと後進する軍の後を追ったのだった。

16・魔物（後書き）

おまぢかねの（？）主人公無双。しかし何か爽快感に欠ける終わり方だなあ。女の子主人公ではなかなか少年漫画のようにはいかないやね。

あと最後のダリル師匠は……なんか深読みしようによっては年甲斐もなく主人公に惚れているようにも見えますが、まだ辛うじてそこまではいってないと思います。父性愛です。多分。今のところ。

フェリシアが戦闘熊の軍団を打ち破ったニュースは、その日の内に早馬が出され、国内外へと広がっていった。頑強な砦と万の軍勢をそろえ、多くの犠牲者を出してようやく勝利できる規模の軍勢を救世主が殲滅してみせたというその話は、受け取る人間の立場によつて朗報とも凶報とも取られていく。しかし当のフェリシアはそんな事を知る由もなく、王都帰還の日を迎えていた。

「色々あつたけど、この砦ともお別れか」

感慨深く灰色の墨壁を見上げると、見送りに来た中年兵士にバンバンと背中を叩かれた。

「そうシケた顔するなよ、お嬢ちゃん。ここは戦の最前線なんだ、いつでもお待ちしていますぜ、救世主殿。……元気でな」

偵察班の班長を務めたあの兵士である。満身創痍ながらも生命力の高さで一命を取り留めた彼だったが、結局、班長と伝令にきた青年兵士以外は帰らぬ人となった。しかし兵士は恨み言一つ零さず、幾重にもガーゼの張られた顔でニカツと笑う。フェリシアもそれに微笑み返し、力強く頷いた。

「はい、皆さんもお元気で。お世話になりました」

ぺこりと頭を下げるフェリシアの背後から、マルグリットたちの呼ぶ声がする。フェリシアは慌てて脇のカバンを持ち上げると、時折後ろを振り返りながら走り去ったのだった。

帰還の行程は行きと同じく五日間である。しかし、その様相は行きと大きく異なつた。今回の戦闘にて死傷者ゼロという偉業を達成したフェリシアは、貴族の令嬢としては格別に気さくな人柄もあつて兵士達の支持を得ていた。野営キャンプを歩けばフェリシア様、救世主様と声をかけられ、どうやって手に入れたのか差し入れの菓子まで貰う始末だ。

「兵士の人たちって、今回私にお手柄を奪われちゃった形なのに、何でこんなに良くしてくれるんだろう？」

差し入れの中から、微弱な魔力反応で淡く光る飴をつまみ上げて咳くと、おすそ分けを貰ったマルグリットが苦笑した。

「手柄を奪われた悔しさがないとは言わないけれど、皆フェリシアの強さに心酔しているんだよ。素直に誇っておきたまえ、君はそれだけの偉業を成し遂げたんだ」

そう言われても、フェリシアとしては一般人が火起しや水呼びを使う感覚の魔法を使っただけである。照れくさいやら畏れ多いやら複雑だった。

「まあ、中にはその強さを妬む者もいるようだが」

マルグリットは嫌悪を込めて呟き、最後尾の黒馬車を見遣った。罪を犯した貴人を運ぶための馬車の中には、コナリー大砦の責任者だった大佐が乗っている。危うく戦闘熊の軍勢に突っ込み甚大な被害を出すところだった責任を問われ、王都へと護送されるころだった。

「オズワルド陛下はあの人をクビにしちゃうんでしょうか、やっぱ」

「十中八九そうなるだろうね。やれやれ、後釜争いが厄介なことになりそうだな。父上は国防の要所にあんな無能を陣取らせる必要はないと常々嘆いておられたから、お喜びになるかも知れないが」

中管理職の身にもなってもらいたいものだね、とマルグリットは肩をすくめた。

そして、フェリシアを持って離すのは兵士だけではなかった。先行している伝令兵が伝えたのだろう、王都へ帰還する途中に立ち寄った全ての町村で人々の歓声を受け、フェリシアは戸惑った。

（魔力に物を言わせて敵を叩き潰したただけなんだけどなあ……）

皆が皆、フェリシアを予言の救世主と褒め称え喝采を浴びせる。居心地の悪さは帰還の最終日、王都についてピークに達した。堀にか

けられた跳ね上げ橋を渡った先に、城下町をぐるりと囲む城壁と見上げるほどに大きな門がある。その門を一步くぐると、そこはお祭り騒ぎだった。

「救世主様のご帰還だ！」

高らかなラツパの音と朗々とした声に、フェリシアは目を見張った。王城に続く大通りの脇にはずらりと人々が並び、道には後から後から花が振ってくる。マルグリット率いる兵士たちは何処からともなく現れた楽隊に先導されて行進した。乗っていた馬車の窓からその光景を見たフェリシアは、隣に座るダリルを見上げる。

「お、お師匠様、何だか大変なことになってますけど」

「そうか？勝利祝いのパレードだ、きっとこれからもよくあることだぞ」

「ば、パレード！？」

ダリルはあわてるフェリシアの頭をよしよしと撫でてやり、馬車の窓を開けた。途端に、人々の歓声がわつと雪崩れ込んでくる。

「顔を見せて、手を振るといい。皆喜ぶ」

「で、でも、私、恥ずかしいし、そんな大した事したわけでもないのに……」

頬を染めて恥らうフェリシアの様子に一瞬何かぐらつきそうになりながらも、ダリルは心を鬼にして促した。

「これも救世主のお役目だ。慣れておきなさい」

そこまで言われてはフェリシアとしても逆らえない。思い切って窓から顔をのぞかせると、目ざとい町人が叫んだ。

「フェリシア様だ！」

その声に、人々の視線が一齐にフェリシアのほうを向く。その顔はどれも、歓喜に満ち溢れていた。日本にいた頃テレビで見た皇族の方々を参考にしつつ、淑やかに手を振って見せると、歓声は一際大きくなった。

「お嬢様、大人気ですね」

フェリシアの向かいに座るメリッサは得意げだ。しかしフェリシア

本人は、顔では笑顔を浮かべつつも心は晴れなかった。周囲に親しい人たちがいるときは忘れていられる、大佐の「化け物」という言葉と、死体も残さず地面に飲み込まれた魔物の姿がふつと脳裏に浮かぶ。そして、そんな自分が果たして人々の尊崇を集めていいものなのかという疑問。

(……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：)

それらを無理矢理頭の隅に追いやって、機械的に手を振り続けた。

主役だけが気まずいパレードを終え、久々に王城へ帰ってきた一行は、訓練場に整列しマルグリットの労をねぎらう言葉の後に解散となった。続々と兵士達が軍事棟へ入っていく中から、マルグリットとダリルが人波に逆らってフェリシアの方へやってくる。

「やあ、お疲れ様、フェリシア」

「お疲れ様です、マルグリットにお師匠様。これから陛下に報告ですか？」

「ああ。侍女殿と部屋に戻っても構わないが、君も来るかい？」

問われ、フェリシアは数秒躊躇った。きっとオズワルドのことだ、大げさに労ってくれることだろうが、今は何だかそれも厭わしかった。

「せつかくのお誘いなのにごめんなさい、報告はお任せしていいですか？」

するとマルグリットは嫌な顔一つせず、笑顔で請け負った。

「大丈夫だよ、君は初陣の後だもの。ゆっくり休むといい」

その言葉に、ダリルもこくりと頷いた。

「ありがとうございます。行こう、メリッサ」

「はい、お嬢様」

二人に頭を下げ、メリッサを伴って、フェリシアは王族棟へ向かった。午後を回った時間では、人々は仕事の最中で、人影は少ない。今までの行程とは違って変わり、救世主様などと持て囃されないことにはほっとする。途中、顔見知りの巡回兵や庭師とは帰還の挨拶を

交わしながら、久々に自室へ帰ってきた。

「はあ」

そのままソファに倒れこむと、メリッサが慌てて駆け寄ってきた。

「お嬢様！？どこか、体のお加減でもよろしくないですか！？シャロン先生をお呼びしましょうか！？」

「ううん、少し、疲れちゃっただけ。先生には明日挨拶に行くから、荷解きとか、任せちゃっていい？」

「それは勿論。ですが、本当に大丈夫ですか、お嬢様？」

「うん。メリッサも疲れているだろうに、ごめんね。一通り片付いたら、夕飯まで休んでいいから」

それだけ言うと、フェリシアは風呂場に引っ込んだ。さっと湯を浴びて汗を流し、長い髪をさっと魔法で乾かし、夜着に着替えて寝室の寝台の上に身を投げる。メリッサが小物を整理する物音を聞きながら目を閉じると、うとうととまどろみ始めた。

（なんだか、すごく疲れたな……ちよつとだけ、休んでもいいよね）
フェリシアは眠気に逆らわず、瞳を閉じて長い眠りに落ちたのだった。

17・帰還（後書き）

何だか主人公死んだみたいな終わり方ですみません。単純に朝まで爆睡したというだけの話です。

それと勝手にランキングに登録してみました。もし面白いと思っていただけたら、投票いただけると幸いです。

メリッサは自分の力不足を嘆いていた。勿論、敬愛する主人であるフェリシアのことである。コナリー大砦から帰ってから、大切なお嬢様の様子がおかしいのだ。メリッサはその場にはいなかったが、戦闘熊の軍勢との戦いは圧勝だったという。人々も救世主を褒め称え、何の憂いなど無さそうなものだが、フェリシアはどこか憂鬱そうな表情をしていた。

（お嬢様……戦ったときに、何かあったのかしら）
聞いても、フェリシアは心配ないよと笑うばかりだ。実際、オズワルドやベネディクトへの面会や、シャロンの定期健診、ダリルの授業や偶に訪れるマルグリットとおしゃべりなどしている間はいつも通りのお嬢様なのだ。しかしメリッサは、時折一人ではんやり考え込んでいるフェリシアを目撃している。メリッサのほかにはダリルだけが何かを感じている様子で、気を配ってくれてはいるのだが、彼はずっとフェリシアのそばにいるわけにもいかない。

（ならやっぱり、私がかお嬢様の気晴らしになるようなことを計画しないと！）
メリッサは自分だったら気が晴れないとき何をしたいだろうと考え、すぐに一つ思い当たった。一介の侍女が申し出るには不相応なことだが、ベネディクトにも話を持ちかければ協力してくれるだろう。休憩時間に入ったメリッサは、すぐに便箋へペンを走らせた。

そして、メリッサの行動が実を結んだのは一週間後の午後だった。
「外出許可？」

専属メイドの差し出す書状に、フェリシアは目を丸くした。

「はい。私、一度お嬢様と城下にお出かけしたかったです。旦那様に手紙で相談してみたら、陛下にお願いしてくださって。一緒に行ってみませんか？」

するとたちまちフェリシアは笑顔になった。

「いいね、行こう行こう。一応変装した方がいいかな？」

「それは、はい」

戦闘熊の一件で活躍したフェリシアは、今や城下の人々にも顔を知られている。メリツサが頷くのを見ると、フェリシアは顔を輝かせた。

「よし、じゃあ早速衣裳部屋へ行こう」

「え？え？お嬢様!？」

フェリシアは戸惑うメリツサを引きずって部屋を出ると、二階に駆け上がった。

「こつちこつち。この小部屋、衣装室になってるの」

城内探検の際に見つけた部屋の扉を開けると、そこにはずらりと洋服が並んでいた。王族棟を使う者の少ない現在では物置に近い有様になっており、少し古い型のドレスから使用人服の予備まで、ありとあらゆる服がそろっている。

「どれにしようかな。せっかくだからいつもは着られないようなの着たいね」

「な、何もそこまでなさらなくても……ぱつと見お嬢様だとわからなければいいのですから」

「何言ってるの、やるなら徹底的にやらないと。あ、このチュニツク可愛い」

フェリシアはごそごそと部屋を物色しながら、ぽいぽいと服を脱ぎ捨てては身に付けていく。そうしてできあがったのは一昔前の騎士のような、冒険者のような男装の娘だった。最後に金髪の鬘と大きな羽根飾りのついた帽子を被り、鏡を覗き込んだフェリシアは顔を顰めた。

「うーん、金髪に黒い目って合わない。これでどうかな」

「お嬢様？何をなさったんですか？」

鬘も帽子も取った様子がないのに満足げなフェリシアは、くるりと振り返った。その黒目は鮮やかなエメラルドグリーンに変わってお

り、顔つきも何だか微妙に違う。

「幻覚の魔法を使って見たの。即席にしてはうまくできてるでしょ？」

「上手くできているどころか、もうお嬢様とは別人ですよ……巡回兵の方々になんていったらいいか」

「あ、そうか」

そこで一旦顔を自前のものに戻したフェリシアは、こちらも外出着に着替えたメリッサを伴って城を出ると、再度幻影の仮面を被った城下町へと続く道を二人で並んで歩きながら、思いつくままに変装のコンセプトを語る。

「目標は、コナリー大砦に行くとき見かけた冒険者のお姉さんだよ。今日の私は町から町へ渡り歩く旅人で、メリッサは久々に会った友達。で、二人で一緒にお出かけするっていう設定ね」

「楽しそうですね、お嬢様」

「うん。コスプレなんて興味なかったんだけど、やってみると楽しいね」

「こすぶれ？」

「あ、こつちの話。ねえ、最初はどこへ行く？」

「そうですよね……私のおススメで良いでしょうか？」

「勿論。まかせる」

二人の目の前には大通り、その両脇には様々な店が立ち並んでいる。道行く人々にも活気があり、どの店からも威勢のいい呼び声が響いてきた。その声に誘われるようにして、歩き出す。見たこともないような野菜や魚、肉を売る店が軒を連ねる道をフェリシアは興味深そうに一軒一軒回っていた。

「この辺りは市民の台所ですね。夕方近くなるとご近所の主婦がお買い物に来るんですよ」

「今より人が多くなるの？」

「ええ。お店の方でもそれに合わせて、夕方の売り尽くし特売をはじめたりしますから」

「本当？私のところでもそういうお店は多かったよ。世界が変わっても商売の方法は案外変わらないものだねえ」

そんな事を話しながら、メリッサの示す角を曲がると、華やかな一角に出た。先程の通りが庶民の町なら、こちらは上中流階級の若い娘が好みそうな、メルヘンチックな雑貨店や洋服店が並んでいる。

「わあ、可愛い」

白とピンクのリボンやレースで飾られたショーウィンドウを覗き込み、声を上げるフェリシア。

「ここに並んでいるアクセサリーには手が届かないけど、偶にレース系やリボンの端切れを買いに来るんです。見るだけでも目の保養になりますよ」

二人は一軒の雑貨店に足を踏み入れた。発条仕掛けのオルゴールに飾り石のついた女性用の懐中時計、アクセサリーといった値の張るものから、庶民の娘でも奮発すれば買えるような可愛らしい食器、小物入れ、手芸道具まで眺めているだけでも飽きない。

（本当に、異世界なんだなあ……）

品物を眺めながら、フェリシアは感慨深い息をついた。一見現代日本にもありそうな品物でも、時計は魔法仕掛けだったり、向うでは簡単に手に入る品物が高額だったりする。例えば、ガラスケースに入ったオルゴール。日本では安いものなら百円ショップでも売っているが、こちらでは職人が一つ一つ手作りしているため金三枚という値札がつけられている。この世界で流通する貨幣は世界共通で青銅貨、赤銅貨、銀貨、金貨の四種類だ。十枚ごとに一つ上がる方式で、フェリシアの感覚だと青銅貨一枚がだいたい十円ほどの価値のようである。円やドルなどの単位はなく、例えば一万五千円相当の品物は金一枚銀五枚という形で表される。貴族や裕福な商人の間では紙幣や小切手も使われるが、一般的ではない。

（金三枚、ということは三万円か。一ヶ月分のバイト代だ……）

「お嬢様、どうなさいました？」

値札とにらめっこをしていると、メリッサがやってきた。

「何かお気に召した品でもございましたか？」

「ううん、なんでもないよ。それよりお嬢様はまずいつて」

「す、すみません。でも、どうやってお呼びしたらいいでしょう？」
尋ねられ、フェリシアはうーんと腕組みした。

「フェリシアの愛称ってフェリー？フェリア？シア？どれもしくりこないなあ……」

ひとしきり考えたフェリシアは、最後にあっと思いついた。

「優花、は駄目かな？」

予言の救世主フェリシアの魂が、現代日本の女子大生斉藤優花のものであることを知る者はほとんどいない。偽名としてなら使えるのではないかと提案してみると、メリッサが小首を傾げた。

「ユウカ様？」

「友達って設定なのに、様付けはおかしいよ」

「……ユウカ、さん」

「できればさんも取ってもらえるといいかな」

「うう、これ以上は無理ですよ」

「わかったわかった」

涙目のメリッサを前に譲歩したフェリシアは、それでも笑顔を浮かべていた。フェリシアと呼ばれることにも慣れたが、やはり優花と呼ばれる方が自分の名前らしい。

「買うものがなければ次のお店に行きましょうか」

「うん」

そして二人はショッピングを再開した。隣の洋服店、その隣の化粧品店と、時間も忘れ見て回る。気がつけば、日が傾き始めていた。

「名残惜しいけど、そろそろ帰ろうか」

食品店へと急ぐ主婦が多くなってきた道を見て、フェリシアが呟く
「そうですね。でも、最後に少しだけ一休みしませんか？美味しい焼き菓子のお店を知っているんです」

「本当？」

「はい。すぐそこですから、買ってきますね。ユウカさんはあちら

で待っていてください」

メリッサは傍の噴水を指差すと、断る隙も与えずに菓子を売る露天へ駆けていった。

（さすが専属メイド。見抜かれてるなあ……）

フェリシアは苦笑しながらその後姿を見送り、大人しく噴水の淵に腰掛けた。半日歩き続けた足はパンパンで、足の裏が鈍い痛みを発していた。ろくに運動もしたことのないお嬢様の体では、そろそろ限界だったのだ。それをメリッサはきちんと見抜いていた。

（マルグリットに頼んで、私も基礎訓練に参加させてもらった方がいいかな。でも軍隊式って厳しそうだしなー）

フェリシアが悩みながらメリッサの帰りを待っていたときだった。

「シスター！」

小さな子供の緊迫した声に、何かがドサリと倒れる音がした。フェリシアが振り返ると、噴水前の広場に質素な聖衣を纏った老女が倒れている。その横に、膝をついて彼女へ必死に呼びかける小さな男の子。そして二人を、チンピラ風の男が見下ろしている。

「オイ、どこ見てんだババア！！！」

「申し訳ありません、お許してください……」

男にぶつかって倒れたらしいシスターは、短く呻きながらも男の子を庇うように下からせて、男に懇願した。決して人通りの少なくない広場の出来事である。しかし周囲の人々は、チラチラと横目にしながら通り過ぎていった。

（これだけ人がいて、どうして助けないのよ！）

足の痛みも忘れて瞬時に動いたフェリシアは、騒動に気づきながらも自分の横を通り過ぎようとした中年の男に向かって叫んだ。

「ちょっとそこの緑の帽子のおじさん、兵士の人呼んできて！」

「あ、ああ」

皆、「誰かが助けるだろう」という心理が働いて何もしないのだと何かのテレビで見た覚えがある。そこで個人が特定できる呼びかけ方をすると、中年の男はぎこちなく頷いて市中警備兵の詰め所へ走

つていった。更にフェリシアがシスター達を助けようと駆け出すと、チンピラは舌打ちして傍に落ちていた財布を拾い上げ、逃げ出した。「あ、待て！」

すぐさまフェリシアは方向転換して、男の後を追う。人々が呪縛の解けたように兵士を呼べと騒ぎ立てるが、男の逃げ足は速く、その声もどんどん遠くなる。

「これでも食らえ！」

一通りの少ない路地裏に入ったところで、フェリシアは威力を落とした雷撃の魔法を男の足元に落とした。男は痺れた足を引きずりつんのめって転倒するが、魔法の当たった石畳は黒焦げになっていた。「大人しく捕まりなさい！」

「何だ、女一人かよ。へへっ、やる気かあ？」

男は敵がフェリシア一人であることを見て急に余裕を取り戻したらしい。立ち上がってニヤニヤと笑い始めた。

「女だからって馬鹿にしないで！私は強いわよ！」

フェリシアは勇ましく宣言するが、内心では困窮していた。威力を落とした雷撃だけで石畳が黒焦げになってしまうのだ、町の中で滅多な魔法は使えない。

（こ、こうなったら殴り倒すしかない！）

そんな結論に達したフェリシアは身構えた。きちんと習ったのは空手だけだが、柔道や合気道、果てはプロレスまで、色々な武術をかじった彼女の接近戦スタイルは、どちらかというところ総合格闘技に近いものがある。

「覚悟！！！」

先手必勝とばかりに拳に回転をつけて殴りかかった。隙を突けば王弟殿下も倒れる一撃だ。しかし、それはあくまでも隙があればの話である。殴りかかった手を逆に掴まれた。

「口ほどにもねえな」

「痛っ、放してよ！！！」

そのまま腕を捻られそうになるのを、火起しの炎を相手の手の甲に

押し付けることで逃れ、距離をとる。

「熱いつ!!! 何しやがる小娘え!!!」

手の火傷に激昂して殴りかかってくる男の手から逃れながら、フェリシアは隙を窺っていた。しかし、元々疲れていた上に男を追い回し、今は追い回されているのだ。体力の限界は時間の問題だった。

(そうだ、生身の私では勝てなくても、こうすれば!)

フェリシアの思いついた方法は失敗すれば大怪我をする危険な賭けだ。しかし他に手立ても見つからず、彼女は突風の魔法を自分の手に纏わせると、チンピラの懐に飛び込んだ。魔法の補助で、その速さは目にも止まらぬ勢いだ。その勢いのまま、男の顎へ下から拳を叩きつける。

「ぎえっ!!!」

男は何が起きたかわからないという顔をしたまま吹き飛んでいった。それでも油断せず、フェリシアは突風の魔法で滞空すると、とどめに鳩尾へ飛び蹴りを見舞った。チンピラは泡を噴いて、その場に倒れる。

「や、やった、とりあえず勝った!」

ガッツポーズをとるフェリシアの背後から、ようやく盗人を捕まえろという人々の声が追いついてきた。

「騎士様、こつちだこつちだ!」

兵士を先導する町の男達の声に、フェリシアは首をかしげた。騎士は国や国民を守る兵士と違って、王を守る職業のほずである。それが何故こんなところにいるのだろう、という疑問と共に振り返ると、数人の騎士が駆けつけてくるところだった。

(げっ)

その先頭は、最近顔を見なかったキアランだ。

(そういえばあの人、まだ魔狼殺しの犯人探しをしてるってマルグリットが言ってたっけ……?)

市中を回っていたキアランとその部下達の方が、先に騒ぎに気づいたのだろう。キアランはまず部下達に男の捕縛を命じ、フェリシア

の向かいに立った。

「娘、あの男はお前が倒したのか？」

「はい」

「そうか。勇敢な助力に感謝する」

どうやら念を入れた変装が功を奏して、フェリシアとは気づいていない様子である。偉そうな口ぶりではあるものの、いつもの敵意はない。むしろ本当に感謝している様子に、フェリシアは戸惑った。するとキアランはそれをどう受け取ったのか、少し心配そうな顔でフェリシアを見下す。

「どうした、怪我でもしたのか？ 応急処置の薬草でよければ提供できるが」

「い、いいえ。大丈夫です」

できるだけ声音を変えて短く返事をするフェリシアに、キアランは訝しげな顔をすした。

「お前……どこかで会ったことがあるか？」

「そんなことは」

内心冷や汗を流しながら首を振るフェリシアへ助け舟を出したのは、キアランの言葉を聞いていた部下の騎士だった。

「先輩、仕事中に女の子口説いたりしないで下さいよ」

「何を言っている、俺はそんなつもりなどない」

「はいはい、そういうことにして差し上げますよ。あ、連絡先聞いたら俺にも教えてくださいね」

「だから違つと言っているだろう！ お前こそ仕事しろよ、団長に減俸されても知らんぞ」

「うわーひでえ」

怒りながらも、キアランの表情にはどこことなく気安さがあった。目の前で後輩と軽口を叩く意外な姿にフェリシアは目を丸くするが、本当に驚愕したのはその後だ。

「キアラン兄ちゃん！」

先程、被害者のシスターの横で半べそをかいていた男の子が、広場

の方から駆けて来て、キアランの腰元に抱きついたので。フェリシアは青くなつたが、キアランは男の子の頭をぐりぐりと撫で回し、軽々と抱き上げた。

「久しぶりだな、元気にしてたか？」

「うん！助けてくれてありがとう。やっぱり兄ちゃんは強いや！」
格好いい、と尊敬の眼差しで見上げる男の子に、キアランは照れたような笑みを浮かべたが、彼は人の手柄を奪つたりはしなかった。

「礼なら彼女に言いなさい。あの男を倒したのはこの娘さんだ」
すると男の子はフェリシアの方を向いて、キアランに抱えられたまま丁寧に頭を下げた。

「そうなんだ。お姉ちゃん、シスターを助けてくれてありがとう」
「いいえ、どういたしまして」

可愛らしい姿にフェリシアが顔を綻ばせると、件のシスターもやっしてきた。

「シスター、お怪我は？」

ゆつたりとした動きではあるがしつかり背を伸ばして歩くシスターにキアランが気遣わしげな顔で歩み寄ると、彼女は皺の深い顔で微笑んだ。

「私は大丈夫。それから娘さん、貴女が助けてくださったのですってね。ありがとう」

「どういたしました。聖職にある方を突き飛ばして財布を奪うなんて、とんでもない男でしたね。お怪我がなくて何よりです。でも、こんなに離れた場所まで歩かれて、大丈夫ですか？」

シスターの無事にほっとしたフェリシアはうっかり長い言葉を発してしまつたが、キアランが気づいた様子はない。

「大丈夫ですよ、これでも教会で引き取つた孤児達相手に鍛えていきますからね」

男の子もシスターが引き取つた孤児だという。二人で夕飯の買出しに出かけたところ、あのチンピラ男にぶつかったというわけだ。

「それに孫に任せきりというのも気が引けるでしょう」

「お孫さん？」

シスターの孫の誰かが騎士をしているのだろうかと思いを返すと、品のいい老女はこころと笑った。

「この子、キアランのことよ。血のつながりはないけれど、キアランの母親は私の教会で育った孤児でね。時々様子を見に来てくれるの」

「そうなんですか」

平静を装って相槌を打ちながら、フェリシアは驚いていた。教会で孤児の世話をする王弟殿下。似合わないさ過ぎる。しかし男の子を抱き上げるキアランの手つきは自然で、その子も彼に懐いているようだ。

（そういえば、お城で妻も育ててたっけ、この人）

城内で見かけるキアランの顔は、いつも何かに怒ったような顔で、ピリピリとした空気を纏っていた。しかし、シスターや男の子と話す彼は多少ぶつきらぼうではあるものの、オズワルドの前でも見たことがないような穏やかな様子だ。時折見せる笑顔には、いつか夢に見た素直そうな少年の面影が確かにあった。

（どっちが本当の顔なんだろう）

「お嬢さん？」

ぼんやりと考えていたフェリシアは、シスターに話しかけられて我に帰った。

「は、はい？」

「どうかしら、お礼に夕飯をご馳走したいのだけれど」

シスターの誘いに、キアランも賛同した。

「そうだな、お前はシスター達の恩人だ。俺からも改めて礼がしたい」

フェリシアは神妙な表情で首を振る。

「いいえ、せつかくのお申し出はありがたいのですが、連れを待たせているので、そろそろ失礼させていただきます」

「そう……残念ね」

本当に残念そうなシスターに謝り、男の子にはばいばいと手を振って、フェリシアは踵を返した。早足に広場の方へ戻りながら、つい先程のキアランの態度を思い浮かべる。

（私がフェリシアだってわからないだけで、何なのよ、あの態度の差は）

思い出しながら腹が立ってきた。それから、ふと思いついた。

（そうか……いつものあの人と今日の態度と、どちらかが本当の顔ってわけじゃなくて、どっちも王弟殿下なのか。単に、あの人は、「フェリシア」のことが大嫌いなだけなんだ）

そう思った瞬間、ほんの少し胸が軋んだ。痛みというほどではない違和感に、フェリシアは首をかしげる。

「おじよ……ユウカさん」

しかしその違和感も、メリツサの声を聞いてすぐに思考の外へ追いやられた。顔を上げると、噴水広場からメリツサが駆けてくるところだ。

「メリツサ！ごめんね、一人にして」

「それはいいんです。でも、物取りがあつたつてすごい騒ぎで。まさかとは思いますが、首を突っ込んだりしていらっしやいませんかよね？」

「ま、まさかあ。ちょっと野次馬しに行っただけだよ」

「それだけでも十分危険ですよ！お嬢様に何かあつたら、私はもうどうしていいか」

フェリシアの事をユウカさんと呼ぶのも忘れて小言を繰り返すメリツサを何とか宥めるころには、日が暮れかけていた。

「大丈夫、もう危なそうなものには一人で近づいたりしないって。ね、帰ろう」

「……そうですね」

まだ言い足り無さそうにしながらも、メリツサはこくりと頷いた。そして二人は夕暮れの道を並んで城への帰路に着いたのだった。

18・城下町（後書き）

城下町を変装して見物していたら気に食わないあいつの意外な一面を見てしまった編でした。長い。

大抵の方は第一印象最悪であるうキアラン殿下ですが、彼とて人の子です。親しい人は大事にするし、気心の知れた仲間とは冗談も言う。じゃあ何故主人公に対してはああなのかといえば、単に本気で嫌われているだけだと気づいてしまったフェリシアの心境はいかに……別にどうでもいいと思っただけでそんな気もしますが。

日に日に強くなる初夏の日差しが、アーデン公爵家のテラスを明るく照らしていた。日の光に眩しい白いテーブルセットの置かれたテラスでは、着飾った娘達が集まっている。その中央で女王のように君臨するのは、アーデン家の末娘ヴェロニカだ。その周囲を、ヴェロニカ主催のお茶会に参加している令嬢達を取り囲んでいる。披露会后、一旦は様子を見たものの、社交に積極的ではないフェリシアからは何も得るものが無いと判断し、ヴェロニカの取り巻きに返り咲いた娘達だ。

「ねえ、聞きました？フェリシア様の参加された軍勢、また勝ち戦だったのですって」

何某伯爵令嬢が嘯けば、

「まあ、怖い。私たちと同じ貴族令嬢とも思えないわ」

震え上がってみせる侯爵令嬢に、娘達の笑い声が弾ける。

「あら、怖いだなんて失礼よ。魔物を殺す道具としては、この上なく優秀な方ですもの」

ヴェロニカは、表面上は美しい笑みを浮かべ、内心は腸の煮えくり返る思いで厭味を吐いた。コナリー砦の防衛戦から一月あまり、フェリシアは何度も魔物との戦闘に参加し、その全てに勝利していた。流石に初陣の戦闘熊の時ほど出ずっぱりになる機会はないようだが、お飾りに甘んじるつもりもないらしい彼女は自ら前線に出て、その魔法を振るっているという。今やフェリシアは、グランデールの勝利の女神であるかのように嘯かれ始めていた。

（お姉様はあの女の味方をするばかりでまったく頼りにならないし……）

姉のマルグリットとフェリシアが仲のいい友人であることも、ヴェロニカにとっては苛立ちの一因だ。そんな彼女の様子に慄いた令嬢の一人が、話題を変えようとヴェロニカへ話しかけた。

「と、ところでヴェロニカ様。近々魔道師団本隊が王都へ凱旋されると聞いたのですが、本当ですか？」

「まあ、それならエドモンド様もご帰還されるのですね」

兄の名前を聞き、ヴェロニカは別の意味で憂鬱になった。

「ええ、本当よ」

一生戦地に引きこもってればいいのに、と割合本気で思いながら、ヴェロニカは溜息をつく。魔道師団一の天才にして、問題児。彼女の兄はそう呼ばれており、その奇行は王城内で恐れと共に知れ渡っていた。

「では、久しぶりに兄妹水入らずの時間を過ごせるのですね」

「羨ましいですわ、エドモンド様は本当に素敵な方ですもの」

しかし王城に行く機会など夜会程度の令嬢たちは、うっとりとした表情でそう囁きあった。確かに、エドモンドは見てくれだけならば女性と見紛う美麗な貴公子なのだ。男装のマルグリットと並んだ様はどこか倒錯的な美しさで、二人の妹であるヴェロニカすら目を見張ることがある。その上、公爵家の長子で魔道師団副団長を勤める彼は、令嬢達からはさぞ魅力的な結婚相手に見えるのだろう。そこでヴェロニカはふと気がついた。

（あの女、フェリシア・チェンバレンの師匠は魔道師団の団長だったわね。平民の分際で随分と人望があるようだけれど、お兄様の制御に苦労しているとも聞くわ。……これは、使える）

氷の矢で狙われた時の恐怖から、披露会以来積極的に動いていなかったが、ヴェロニカ自身が手を下す必要はないのだ。厄介者の兄が勝手に引っ掻き回してくれることだろう。そう思うと、急に兄の帰還が待ち遠しくなってきた。

「ヴェロニカ様も、お兄様にお会いするのが楽しみでしょう？」

「ええ、とても」

取り巻きの一人に尋ねられ、ヴェロニカは大輪の花のような笑顔で答えたのだった。

一方その頃、フェリシアはダリルとの授業が終わったところで、ヴェロニカたちと同じ話題を口に行っているところだった。

「魔道師団の副団長さんが帰ってくるんですか？」

先程まで戦闘訓練をしていた中庭のベンチに並んで腰かけ、シャロンの差し入れたハーブティーを口に含むフェリシア。冷却の魔法がかけられたポットに入れられていたハーブティーは、陽気の中動いて僅かに汗ばんだ体に心地よい。

「うむ。魔道師団は団長以下全員が、遠征に出ている」

本来ならそこにダリルもいたはずなのだが、フェリシアの体に優花の魂が宿ったその翌日に、オズワルドの王命で单身引き返して来たのだ。

「そつえば私、お師匠様以外の魔道師団の方に会ったことありませんね」

今更ながらその事に気づいたフェリシアに苦笑を返し、ダリルは続ける。

「彼らはウルリークとの長期戦に臨んでいたのだが、勝利を収めて凱旋するそうだ」

「ウルリーク魔法共和国……人間の国、ですよ」

複雑そうな顔をする愛弟子に、ダリルは自分のうかつさを呪った。

フェリシアが人を殺めることに強い拒否感を持っていることは事前を知っていたというのに、嫌な思いをさせてしまった。

「いや、何、長期といえど小競り合いを繰り返していただけだ、戦闘の規模自体はそこまででもない。それに今回は両陣営とも無血の勝利なのだと聞いている」

「ええっ、それってすごい快挙じゃないですか！」

フェリシアが戦闘態を殲滅したときは、直接彼女が守れる位置にはいなかった伝令兵とはいえ死人が出た。その後何度か経験した戦場でも、死者こそ出していないものの、怪我をする人は大勢いた。敵味方共に死者負傷者なしで勝利をもぎ取ったという副団長に、フェリシアは強い尊敬の念を抱く。

「副団長さんってすごい方なんですわ、早くお会いしたいなあ」

「……あまり期待すると、外れたときのショックが大きいぞ」

「え？何ですか？」

笑顔で振り返る弟子の愛らしい笑顔に、ダリルは色々と諦めた。

（実物を見た方が早いだろう）

唯一の心配といえは、問題児の副団長に幻想を抱いているフェリシアが現実を知ったときの反応だ。口下手な自分がどうやって励まそうかと、ダリルは頭を悩ませたのだった。

そして、噂の人工ドモンド・アーデン魔道副団長と団員達が帰還する当日。フェリシアは魔道師団の研究室へと向かっていた。ダリルと共に副団長たちを迎えるため、研究室の師匠を迎えに行くのだ。（副団長さんってどんな人なんだろうなあ。マルグリットのお兄さんなんだから良い人だと思いたいけど、あのヴェロニカって子のお兄さんでもあるわけだし、皆に聞いても微妙に話を逸らされちゃうんだよねえ。魔道師団の皆さんとも仲良くしたいけど、コナリー砦の兵士さんたちの例もあるしなあ……）
だんだん不安になってきたフェリシアだったが、ふるふると首を振る。

（うつん、会ってもいないうちから苦手意識を持ってちゃ駄目だよな。まずはとにかく、会ってみよう）

そう決意したときだった。考え事をしていた彼女は何か足を取られ、躓いた。

「ぐげっ！」

「きゃっ!?!」

勢いよく前に倒れたフェリシアの悲鳴の前に、男の呻き声があった。恐る恐る振り返ると、背後で男が倒れている。フェリシアはそれに気づかず踏みつけたらしい。

「わわっ、すみません、大丈夫ですか!?!」

立ち上がったフェリシアは慌てて男の傍らに膝をついた。男はボロ

ボロの衣服を纏い、投げ出された手足には力なく、埃を被った髪も髭もぼざぼざで、まるで浮浪者だ。

(お城に浮浪者……?)

曲がりなりにも国政の中枢部にこんな怪しい風体の人物が入り込めたことを怪訝に思いつつも、フェリシアは男を助け起す。伸び放題の前髪と髭に顔が埋もれ、辛うじて小さな丸眼鏡をかけていることだけがわかった。

「もしもし、おじさん、大丈夫ですか？どうしてこんなところで倒れていらつしやるんです？」

多少警戒しながら尋ねると、男はくぐもった声で答えた。

「お……追われて、いるんだ……」

「追われている!？」

物騒な男の台詞を肯定するように、複数の足音がバタバタと階下を駆け回る音が響いてきた。

「わかりました、とにかく今はここから離れましょう」

素性の知らない人間ではあったが、このまま放っておくのも気が引けて、フェリシアは立ち上がるうとする彼に手を差し伸べた。

「いやいや、ありがとう」

男が礼を言つて、フェリシアの手を取る。

「何をしている」

そのまま一歩踏み出したところで、背後から鋭い声がかげられた。ふりかえると、険しい表情のオズワルドが立っており、その斜め後ろに渋面のダルルが付き従っている。

「陛下、お師匠様！えっと、この人は……」

まさかまずい相手に手を貸してしまったのだらうかと慌てるフェリシアにずかずかと歩み寄ったオズワルドは、彼女の手を引いて男から引き離した。

「フェリシアから離れる」

そして、フェリシアを抱きしめて男を睨みつける。しかし男は怯んだ様子もなく、両手を広げた。

「やあ、我が心の友よ！会いたかったよ、元気にしていたかい？」

「誰がお前の心の友だ！！私は出来るものなら貴様の顔なんぞ生涯見たくない、失せる！！！」

「またまた、本当は出迎えに来るほど嬉しかったくせに。照れ屋だね」

「これは出迎えじゃない！私のフェリシアに害虫がつかないようにしているだけだ！！！」

頭上で交わされるやり取りに、フェリシアは目を丸くした。主にオズワルドの態度にびっくりした。いつも穏やかで目下の者にも優しく接するオズワルドが、まるでキアランでも乗り移ったかのような暴言を吐きまくっている。こうして見ると似ている兄弟だ、などとどうでもいい事を考えながらダリルを窺うと、魔道師団長はしきりに米神を揉んでいた。頭痛がするらしい。

「ああっ、いたぞ！！」

「陛下と団長が抑えている！急げ！！！」

そこへ、男を追い回していたらしい集団もやってきて標的を囲んだ。黒を基調とした魔術師のローブに身を包んだ彼らは、更に大きなマントを羽織っていたり室内だというのに帽子を被っていたり、妙な風体だ。

「とうとう追い詰めましたよ、副団長！！！」

その中の一人が進み出て、男に詰め寄った。追っ手に囲まれ、国王から睨まれているというのに、男はその様子をのんびりと眺め回している。

(……………ん？副団長???)

追っ手の一人が放った呼びかけに、フェリシアが首をかしげる。すると、彼女の疑問を察したかのようにダリルがやってきて、教えてくれた。

「こんなときになんだが紹介しよう、フェリシア。彼が魔道師団副団長、エドモンド・アーデンだ」

「へ……………」

てつきりマルグリットのような高潔な青年か、もしくはヴェロニカのように嫌味な貴族を想像していたフェリシアは、斜め上に行く実物を前にしてぽかんと口を開けた。思考停止した弟子を置いて、ダリルは溜息をつきつつ男 エドモンドへと向き直る。

「この度の遠征、ご苦労だった。それで、エドモンド。今度は一体何をやらかした？」

上官の問いに、エドモンドは髭の下で満面の笑みを浮かべて胸を張った。

「新しい魔法を開発しました！早速実験を開始しようと思」

「止めて下さい副団長！」

するとエドモンドに縋りついたのは、彼を追っていた魔術師達、魔道師団の面々だ。

「犠牲は俺たちだけで十分です！」

「城がなくなります！！」

「むしろ王都を壊滅させる気ですか！？」

「城下町には彼女がいるんです！俺、この戦いが終わったら彼女と」

「しっ！その先は言うな死ぬぞ！！！！」

「別れ話をする予定で」

「結婚じゃねえのかよ！！！！」

魔術師達の嘆願で騒然となったどさくさに紛れてオズワルドの腕から脱出したフェリシアは、騒ぎが収まるまでその様子を呆然と眺めていたのだった。

19・副団長（後書き）

アーデン家の三兄妹、最後の一人登場。たぶん兄ちゃんが一番濃いです。ヴェロニカは今でこそああですが、小さいころは好奇心の旺盛すぎる研究馬鹿の兄とやたら男前な姉に振り回されて苦労しています。だからこそ兄妹に対抗するためあの性格になったのか。作者はヴェロニカ含めこの兄妹書くのは楽しいのですが。

ひとまず魔法師団の研究室へやってきたフェリシアは、周囲を見回して居心地悪そうに身じろいだ。今その場にいるのは帰還したばかりの魔道師団の団員達に、ダリルとオズワルド。エドモンドは王の御前に出るにはあまりにも相応しくないという理由で浴室に放り込まれており、その場にはいない。

（なんだか団員さんたちもオズワルド陛下もピリピリしてる……そんなにかっこいい人なのかなあ）

不安になり、比較的いつもと同じ顔をしているダリルの横へ移動して待っていると、ノックもなく研究室の扉が開いた。

「やあ、待たせたね」

入ってきたのは、金髪碧眼の美青年だった。華やかだが上品な仕立てのローブを纏い、波打つ金の巻き毛は頂でくくられ、長い睫に縁取られた青い瞳に、小さな丸眼鏡をかけている。

（誰だろ、この綺麗なお兄さん。……あの丸眼鏡、ついさっき見た覚えがあるけど）

フェリシアが悩んでいると、オズワルドが心底嫌そうに青年の名前を呼んだ。

「遅かったな、エドモンド・アーデン」

「ええっ！？あのおじさん！！？」

フェリシアは驚愕を込めて叫んだ。髪も髭もぼさぼさだったエドモンドは、四十台も半ばの浮浪者に見えたのだ。叫んでははっと口を手で覆うが、今更である。しかしエドモンドは気を悪くした様子もなく、無邪気に笑った。

「僕はええと、確か二十五か六か七だよ。まだ、おじさんと呼ばれる年ではないかな？」

「はいっ、すみません！」

勢いよく頭を下げるフェリシアに、仏頂面のオズワルドが声をかけ

た。

「フェリシアは悪くないよ、自分の年も把握していない上に最低限の身だしなみもなっていない相手など、汚物で十分だ」

「ははは、酷いなオズワルド」

「うむ、確かにお前を汚物呼ばわりしては、汚物に失礼だったな」
嫌味で返すオズワルドだったが、

「気にすることはないさ、誰にでも間違いはある」

生憎嫌味の通じる相手ではなかった。国王陛下は一瞬遠い目をし、周囲の戸惑いと同情の籠った生暖かい眼差しに気づいて、コホンと咳払いする。

「そんなことより、エドモンド。何故お前達がここにいる？帰還報告は上がっていないが」

魔道師団は国の重要な戦力だ。城へ帰還すれば真つ先にオズワルドへ報告が上がる。それ以前に、華々しく勝利を収めた彼らは城下町で凱旋パレードを行うはずだが、その知らせも届いていなかった。

「それは皆が追ってくるから逃げていたのさ！」

清々しいほど胸を張って答えるエドモンドを無視し、オズワルドは魔道師団の面々に顔を向けた。

「どういうことか、詳しい説明を」

すると目の合った一人の魔道師が、緊張した面持ちで進み出た。

「恐れながら、申し上げます。我らはウルリーク軍との戦闘において、副団長の開発した魔法に巻き込まれ、副団長に解除を要求していました」

（魔法に巻き込まれた……？エドモンドさんは、敵味方無血で勝利したんじゃないの……？味方を巻き込んだって）

どういうことだとフェリシアが固唾を呑むと、魔道師は青ざめて震えながら、かぶっていた大きな帽子に手をかけた。彼が帽子を取り払うと、現れたのはふさふさのそれはそれは愛らしい　ネコミミだった。

「……………」

オズワルドとダリルは驚愕で、フェリシアは笑いを堪えるために息を呑む。そんな彼らに、ネコミミなどまったく似合わない痩せぎすの魔道師は切々と語りかけた。

「我々は何度も何度も何度も副団長に抗議をしましたが、新魔法の効果を実験したいというアホ　失礼、副団長の前には、ウルリークの精鋭部隊すらも無力でした。あの悪魔の魔法により敵味方問わず、戦場にいた全ての人員がこのような姿に」

涙ながらに語る彼の声とともに、魔道師団員たちは身につけていた帽子やマントを取り払った。すると、まるで仮装行列のような光景が現れる。肌にシヨツキングピンクの水玉模様が浮かんでいる者、背中から子供の作った粘土細工のような前衛的なオブジェを生やしている者、頭に巨大な花が生えている者などなど、傍から見れば間抜け極まりない光景だ。しかし彼らの表情は一樣に悲壮だった。

「あまりにも滑稽な姿に変えられたウルリーク軍はすぐさま撤退し、我らも元に戻してもらうため逃げる副団長を追っていたらいつの間にか王城まで戻っていたという次第でございます」

「そうか。……諸君らの心痛、想像に有り余る。長いことダリルを借りてすまなかつたね」

オズワルドは「どうやったならそれと気づかず王城まで戻れるんだ」とツツコミもいれず、いつもの穏やかな調子で魔道師たちを労った。そして氷のような冷たい眼差しでエドモンドを睨みつける。

「それで、貴様は何故彼らを元に戻してやることもせず、あるところか王城まで逃げてきた？　そもそも正規の手続きを経ずに、どうやって城まで入った？」

「せっかく成功した魔法を消してしまうのは勿体無いじゃないか！　それに追いかけられたら逃げるのは生物としての本能さっ！」

オズワルドの静かな怒気の前に胸を張って答えるエドモンド。ある意味大物である。

「城には、僕が発明したこの『カベ登れる君』を使って城壁をよじ登ってみただ」

エドモンドが取り出したのは花柄のミトンだった。突風の魔法を応用して空気を圧縮させる装置を組み込んだ魔法道具であるそれは、強力な吸盤になる。それを城壁に貼り付け貼り付けして登ってきたのだ、と説明した彼は、誰も頼んでいないのに実践までして見せた。「魔力の流れで自動制御も出来るから、腕力がなくてもこの通りさ
」
そう言つて、研究室の壁を高速で上り下りし、カサカサと這い回るエドモンド。その姿は、ゴから始まる名前と呼ばれる害虫の動きにとってもよく似ていた。

(すごいけど……気持ち悪い……)

一同のげんなりとした視線に臆することなく、エドモンドは褒められるのを待つ子供のように無邪気に笑っている。その笑顔は老若男女が見惚れる美貌であるのに、中身はあまりにも無残だった。オズワルドは頭を抱えて溜息をつく。

「色々と言いたいことはあるが、ウルリーク軍を撤退させた功績に免じて、この騒動は不問に付す。とっとと彼らを戻してやれ」

「えー」

「王命だ」

「仕方ないねえ」

さしものエドモンドも王命には逆らえないらしい。

「もとにもどーれ」

気の抜けた掛け声とともに軽く腕を一振りすると、魔道師団の団員達から激しい閃光と紫色の煙が発生する。それが収まった後、現れた人々の姿はアフロだった。全員、虹色の派手なアフロヘアへと変貌を遂げていた。互いにしばらく無言で見つめあい、己の頭を触り、髪を目元に持つてきて事態を理解した彼らは、幽鬼のような表情でエドモンドを振り返る。

「副団長……なんですか、これは……？」

「うーん？おつかしいなあ、これで元に戻るはずだったんだけど」

「はず！……？」

「そうだ、この際もう一つ新しい魔法を試して」

そこで不意にエドモンドの言葉が途切れた。ドン、と鈍い音を立てて倒れた彼の前には、拳を突き出したフェリシアが仁王立ちしていた。

「いい加減にしてください」

今までダリルやオズワルドの顔を立てて黙っていたフェリシアだったが、そろそろ限界だった。

「血を流さずに戦闘を終わらせたって言うから、どんなすごい人なんだろうって期待してたのに、人に迷惑ばかりかけて！拳句の果てに新しい魔法を試してみよう、じゃないでしょう！？まずはちゃんと皆にごめんなさいして、元に戻さない！！」

まるつきり子供のようなエドモンドの態度に、フェリシアは腹を立てていた。自然と幼い弟を叱るときの口調になりながら、尻餅をついているエドモンドを見下ろす。

「でも、僕の開発した変身魔法に有効な解除の魔法を研究するには時間が」

「ただ魔法を解くだけなら、消去の魔法を使えばいいでしょう。貴方ができないなら、私がやります」

フェリシアは憤然とした態度で踵を返した。彼女は抜け殻だった頃から、ダリルに「魔法は世のため人のため使うべき力だ」と教わってきたのだ。それを面白半分に、他人の迷惑も顧みず振るうエドモンドに、強い失望を感じていた。怒りのままに魔道師団員たちに向けて消去の魔法を放つてから、ふと気がつく。

（そういえば、他人の魔法を消去したら、消去した人とされた人双方に結構なダメージが来るんだっけ）

と、思った瞬間、足元がぐらりと揺れた。ふらふらと倒れかけ、この事態を予期していたらしいダリルに抱きとめられる。丁寧にソファの上に座らされ、フェリシアははにかんだ笑みを浮かべた。

「あ、ありがとうございます、お師匠様」

「いや。あのようにならぬに複雑に組み上げられた魔法を解いて、よくふら

つくだけで済んだものだ。だが、感情に任せて後先考えずに力を使うのはよくない」

「はい。以後気をつけます」

師弟の会話の横では、魔法を解かれて撃沈しているエドモンドと、彼をげしげしと踏みつけるオズワルドがいた。踏みつけられるたび呻くエドモンドは、どうやら死んではいないようだ。それだけ確認した魔道師団の魔術師たちは、王と副団長の姿を見なかったことにして、互いの無事を喜びあった。

「良かった、戻った！」

「ありがとう、お嬢さん、ありがとう！！」

「まさかダリル団長以外に副団長の暴走を止められる者がいようとは」

「俺たちで副団長の魔法を消去したら、死ぬところだったよ！お嬢さんの魔力は強いんだねえ」

「あれ？そういえばお嬢さん、誰なの？」

今更の質問に、フェリシアはソファから身を起した。

「紹介が遅れてすみません。私は、フェリシア・チェンバレンです」
受け入れられるかどうか不安に思いながらもぺこりと頭を下げると、案の定ざわついた。エドモンドの暴走を唯一止められるダリルが任地から離れる羽目になったのは、フェリシアのためなのだから無理もない。そんなざわめきの中、エドモンドがむくりと起き上がった。

「君が人形姫？」

まだ少し顔色の悪い様子ながらもふらふらと立ち上がった彼は、おもむろにフェリシアの肩を掴んだ。オズワルドの顔が般若のようになるが、エドモンドは気づくそぶりもなく、ぺたぺたとフェリシアの頬や額を触り、顔を覗き込んだ。

「なるほど、前に見たときより自然放出される魔力が随分抑えられているけど、なんて素晴らしい量の力だ！本当に人間なのかい？」

「え、あの、離してください」

悪気皆無の笑顔で失礼なことをのたまうエドモンドから距離をとる

うと身じろぐフェリシアだが、相手の力は思いのほか強い。

「ねえ君、僕の実験台になってくれ」

さらにはそんな事を言い出したエドモンドをとフェリシアの間に割って入ったのはダリルだった。

「離しなさい、フェリシアが嫌がっている。この子はお前の玩具ではないのだぞ」

「団長？」

静かな睨みを利かせるダリルに一瞬気をとられたエドモンドの背中に、更に魔術師達が飛びついて引っ張る。

「そうだそうだアホ副団長！」

「俺たちの恩人に何てことするんだ！」

すぐさま後ろに引き倒されて尻餅をついたエドモンドは、きよとんとしていた。

「せつかくこんなに大量の魔力の持ち主がいるのに」

なぜ引き離されるのかまるでわかっていないらしい彼に、フェリシアは溜息をつく。

（子供みたい、じゃなくて本当に子供なんだ、この人……）

呆れ返りはしたものの、対処法はなんとなく見えきた。要は幼稚園児の弟と同じように扱えばいいのだ。

（耕太はもつと物分りが良くていい子だけどねー）

姉馬鹿丸出しでそんな事を思いつつ、フェリシアはエドモンドの前にかがんで視線を合わせた。

「エドモンドさん、私も皆さんも無理矢理魔法をかけられたり実験台にされたりするのは嫌です。貴方だって、私に殴られたり魔法を消去されたりしたら、痛くて苦しいでしょう？」

「うん、痛いのもや苦しいのは嫌だな」

「だから、人の嫌がることはしちやいけないんですよ」

するとエドモンドは小首を傾げ、大きく頷いた。

「わかった。僕が悪かったよ！」

本当にわかっているのかと言いたげな空気が流れたが、フェリシア

はひとまずこれでよしとして立ち上がった。

「じゃあ仲直りですね。実験も、危なくないもので私に出来ることがあれば協力しますから、これからよろしくお願いします」

「本当かい！？ありがとう、よろしく頼むよ！」

このやり取りにたちまち、周囲がどよめいた。

「あの子、副団長を諭した上に実験台まで引き受けてくれたわよ！？」

「フェリシア嬢って天使の化身か何かなのか！？」

「正直、ストッパーの団長を取り上げやがって、なんて思って悪かつたなあ……」

魔術師達の囁き声に、フェリシアの顔が引きつる。

「え、あの、皆さん？」

「フェリシア……ダリルが今まで君につきっ切りだったからといって、責任を感じることはないんだよ？」

「いや、実験に付き合うのはあくまでも安全な魔法だけで……」

「やはり君はわかってないな、エドモンドの開発した魔法が安全はずないだろう」

オズワルドの脅しじみた言葉にフェリシアが恐る恐るエドモンドを振り返ると、彼は満面の笑みで請け負った。

「あはは、危険なんてないさ。安心したまえ、痛いのは最初だけだよ！多分ね！」

「安心できません！！！」

フェリシアが副団長へ全力ツッコミを入れる横で、ダリルがなんとも複雑そうな表情をした。色々と弟子の身が心配ではあるが、懸念していた魔道師団の面々との摩擦は生じていない。部下達に受け入れられ生き生きとエドモンドへの説教を再開するフェリシアを見て、ダリルは思わず苦笑を零したのだった。

20・魔道師団（後書き）

フェリシアは魔道師団員たちの尊敬を手に入れた！という話でした。そのためにも払った犠牲は未知数ですが。エドモンドは悪気がない分、ヴェロニカよりも厄介かもしれません。

21・武器

エドモンドと魔道師団の魔術師達が帰還して数日経ったある夕暮れのことである。王の警護を同僚へ引き継ぎ、一足先に王族棟へ向かっていたキアランは、ふと妙な気配を感じて背後を窺った。立ち止まって振り返ることはせず、さりげなく歩調を変ると、その気配は同じ調子でついてくる。

（城の中枢部に不審者……？）

キアランは顔を顰め、尾行に気づかないふりをして中庭のはずれへと足を向ける。すると、隠れる気があるのかも疑わしいせわしない足音がパタパタとついてきた。尾行に慣れない一般人か、あるいは尾行に気づかれても構わないと思っっているのか。嚴重な城の警護を破ってここまで来たからには後者だろうと、キアランはうんざりした気分で中庭の奥へ踏み入っていく。そして、人の気配から離れたところでおもむろに短刀を抜き、振り返った。

「何者だ」

すぐ背後まで忍び寄っていた相手の喉元に切っ先を突きつけ、誰何する。不審者は使用人の服を着た、人畜無害そうな中年の男だ。これといって特徴のない、二、三言葉を交わしてもすぐに忘れてしまうであろう平凡な男。しかし彼は、刃物を突きつけられているにもかかわらず、不気味な笑みを浮かべていた。

「おやおや、私が何者かなど、聞かれずともお分かりなのでしょう？不審者でございますよ」

「ふざけるな。貴様、何処の間者だ？何が目的でこの城に来た？」
国王陛下のお命を頂戴しに来ましたなどと言おうものなら口を割る隙も与えず刺し殺してやると物騒なことを考えながら男を睨みつけると、男は相変わらずへらへらと笑いながら口を開いた。

「ご心配なく、王様にも人形姫にも手を出すつもりはございませんよ。邪魔ですけどね」

キアランは黙って短刀を押し込んだ。男の喉が切れ、血が滴り落ちる。男は少し眉を顰めて、降参と言うように両手を挙げた。

「止めてください、恐ろしい。私の目的は取引、標的は貴方ですよ、キアラン殿下」

「取引、だと？」

聞いてはならない、相手の目的を聞いた以上はこの場で殺してしまえばいい。そう思うのに、キアランはうっかり聞き返していた。してやったりと言わんばかりに、男の唇が弧を描く。

「先程私は人形姫が邪魔だと申し上げましたが、貴方もそうでしょうか？」

「……だからどうした？」

「馬鹿のフリなら今くらいおやめください。聡明な貴方なら齒がゆく思っているはずだ。城に匿われ最高の教育を受けながら、齡二十を超えるまで何の貢献もしなかった娘が、今や英雄扱い。比べて自分は城内で王の警護に、頼まれるのはお使いばかり。腹立たしいことこの上ないでしょう？」

「……」

「しかも人形姫の魔力は強大で、彼女の身柄が万一敵勢力に渡れば、戦況はあっという間にひっくり返る諸刃の剣だ。そんな者を抱えるくらいなら、いっそ殺してしまった方がお互いフェアな戦いができると言うものじゃないですか、ねえ？我らと手を組み人形姫を」

「断る」

よどみなく話す男の言葉を断ち切るように、キアランは短く告げた。男は驚いたように目を見開き、一瞬後にはまたへつらうような笑みを浮かべる。

「ひよっとして、排除を試した後でしたかな？しかし貴方ともあるうお方が、一度の失敗で諦め」

そこで男は言葉を切り、後ろへ飛んだ。間髪入れず、その場所をキアランの剣が薙ぎ払う。腹を浅く裂かれた男は、飛んだ勢いを殺さず背後に立つ木の低い幹に足をかけた。

「交渉決裂。この場は引かせていただきますよ、王弟殿下」

「待て！」

叫びながら短刀を投げつけると、小さな刃物は正確に男のいた場所を刺し貫いたが、そこにもう侵入者の姿はなかった。

「幻惑の魔法か……小賢しい」

キアランは苛立ち紛れに短刀を回収し、城の警備強化を指示するため城内へ戻ろうとして、足を止めた。きよろきよろと辺りを見回しながら、フェリシアが中庭をうろついている。こちらには気づいていないのか、特に警戒することもなく無防備そのものだ。その姿を見て更に苛立ちを募らせたキアランは、すたすたと背後から彼女に近づいた。

「今度は何をする気だ、フェリシア・チェンバレン。こんなところをほっつきまわる時間があるなら、部屋に戻って次の戦闘に備えている。魔物を葬るしか能がないのだから」

幻惑の魔法を使って逃げたあの男は、まだこの近くにいるかもしれない。そして彼はフェリシアの命を狙っていた。それを思うとフェリシアが無防備な姿を晒していることに何故か怒りを覚えて、いつもの通りに嫌味をぶつける。するとむっとした表情のフェリシアが振り返った。

「言われなくても、この辺りを調べたらすぐに戻ります」

「調べる？」

「王弟殿下は何か知りませんか？さつき、この辺りで変な魔力が動く気配がしたの」

先程の男が使った幻惑の魔法に気づいたのかと思い当たり、キアランは顔を引きつらせた。

「エドモンドさんがまた、隠れて変な魔法でも使ってたら大変だし。まったく、あの人はどうしてああ自由人なのかしら。好奇心旺盛なのは結構だけど、尻拭いをする私やお師匠様の身にもなって欲しいわ」

キアランの様子に気づかず一人で喋り続けていたフェリシアは、ふ

と気がついたように王弟を見上げた。

「それともさっきのは、貴方が使った魔法ですか？」

「何……？」

キアランは火起しや水呼びなど、日常で使う魔法以外は人前で使うことはない。彼が本格的な魔法を使えることを知る者は少ないが、フェリシアは妙に確信に満ちた顔をしていた。

「だって貴方、結構魔力があるでしょう。ええと、お師匠様やエドモンドさんほどではないけど、鍛錬すれば魔道師団に入れるくらいかな。前々から、使わずにいるなんて勿体無いと思ってたんですけど」

「……知ったような口を。いいから部屋に戻れ」

しゅしゅと追い払うように手を振ると、フェリシアは頬を膨らませた。

「なんで隠すんですか。貴方こそせっかくの魔力を腐らせてないで、大事な陛下の役に立てたらどうなんですかー」

フェリシアとしては先程の嫌味に対しての軽い意趣返しだったのだろう。しかしキアランは、その言葉に奥歯を噛み締めた。

「お前が、それを言うのか？」

「？」

「長年、民を騙し、俺のことも欺いていたお前が、それを言うのか！？」

最近なりを潜めていた憎悪の炎が、燦りはじめていた。憎しみのままフェリシアを見下ろすと、彼女は脅えた様子で後ずさる。その様子に暗い満足を覚えながら、キアランは彼女へ詰め寄った。

「お前こそ、ずっと隠していただろう」

「何のことですか？」

「惚けるな、お前が自意識のない人形姫だったと言うことだ。話も出来れば笑うことも出来るくせに、ずっとそれを隠していたんだろっ？」

「そんなこと、していませんー！」

震えながらも心外そうな様子で言い返すフェリシアを、白々しいと見下ろして、気づけば言うつもりもなかったことまで口走っていた。「俺は、知っている。十二年前、この中庭で、お前と兄上が楽しそうに話しているのを確かにこの目で見た」

あのときから、あるいはそれよりずっと前から、騙されていた。それを思うと泉のように憎しみが湧き出してくる。

「そ、そんなの、私、知らない……フェリシアさんがどうだったのか知らないけど、私が、『斉藤優花』がこの世界に来たのは本当に二ヶ月前からです」

フェリシアはそれだけ言って、キアランから逃げるように後ろを向いて駆け出した。それでいい、とキアランは思う。今やフェリシアは名実ともに救国の英雄で、それを害する方が兄に迷惑をかけてしまう。フェリシアとの嫌味のやり取りが、最近はそこまで不愉快ではなかったとしても、こうしてふとした瞬間に憎しみが蘇る。係わり合いにならない方が互いのためなのだ。

「何なのよもう、あの馬鹿王弟ー！！」

翌日、フェリシアは怒りのままキアランを罵倒していた。昨日の夜からメリッサ相手に愚痴り続けていたのだが、まだ言い足りないのである。場所は魔道師団の研究室、向かいにはダリルが、斜向かいにはエドモンドが座っており、各々の作業に没頭していた。ちなみにそのほかの魔道師団の魔術師たちは副団長の魔法を恐れて軍事棟や第二研究室の方へ回っている。

「聞いてくださいよお師匠様、エドモンドさん。あの馬鹿ときたらようやく私を嫌ってる理由らしきことを口走ったくせに、詳しい説明もせず怒鳴るだけですよ？人としてどうかと思いますよね！！」
口ではキアランへの不満不平を吐き出し続けながら、手では正確に錠を操るフェリシア。彼女の前には、一抱えほどもある大きな植木鉢が置かれていた。植えられているのはエドモンドが育てた薬草だ。元々風邪薬の原料となる植物だが、エドモンド曰く最高の万能薬の

材料に変化したと言うそれは、育て主の様々な投薬により人面花と化し、ぐひゃぐひゃと花にあるまじき不気味な笑い声を立てていた。

「五月蠅い」

「ぐひゃ、ぐひゃん……」

しかしフェリシアが鬼の形相で睨みつけると、大人しくなった。力の差には聡い植物である。あろう事かこの植物に興味を抱いているシャロンに仕方なくサンプルを届けるため、フェリシアは人面花の実や葉をてきぱきと切り落としていた。書き物をしていたエドモンドが、その様子を見て口を出してくる。

「フェリシア君、僕の可愛いハニーに八つ当たりはよしてくれたまえよ」

「だって頭にくるんですもの！」

バチンバチンと音を立ててフェリシアが鋏を握り開きする度、脅えたように茎をすくませる人面花。荒れているなあとぼやいて、エドモンドはペンを置いた。

「キアラン君が君を嫌う理由は知らないけれど、魔法が使えることを隠している理由は知っているよ」

意外なことを聞いて、フェリシアは目を瞬いた。

「知りたいかい？」

「ええと、私が知ってもいいことなら」

「うーん、まあ、大丈夫じゃないかな」

エドモンドの言葉はまったく当てにならないが、ダリルが止める様子がないことを見て、フェリシアは先を促した。

「僕らが子供のころの話になる。先王陛下がご存命の頃、次の王座に誰がつくか、実は結構もめていてね。通常であれば次の国王は正室を母に持つ第一王子、だけどオズワルドは子供のころは体が弱く、魔力は一般人程度。対して第二王子のキアラン君は、母君こそ平民だが幼い頃からよく武術の鍛錬を積み、人形姫に近づいても平然としているほどの強い魔力を持っていた。外見も、キアラン君のほうが伝説の初代国王陛下や先王陛下に似ているようだね。オズワルド

は母親似だから」

普段の奇天烈な物言いが嘘のように淡々と語るエドモンドは至極真面目な顔つきで、その様子だけ見れば大貴族の跡取り息子というのも頷けた。フェリシアが場近いな感心をしている間にも、話は続く。「そんな調子だから、先の王妃陛下の実家と対立する勢力が、キアラン君を次期国王にと推していた。だけど彼は知つての通り、オズワルドを心から慕っている。それで兄より突出することがないように、身辺警護の腕だけ磨いて、帝王学は遠ざけ、そこそこ強い魔法が使えることも隠して、ついには王位継承権まで放棄したのさ」

「本当に、オズワルド陛下が大事なんだねえ……」

感心半分、呆れ半分でフェリシアが呟くと、ダリルが視線を上げた。「……そこまでしても、まだキアラン殿下に王位篡奪を持ちかける愚か者はいる。殿下にとってこの城は、さほど居心地はよくないだろうな」

「なんとなく、わかる気がします」

フェリシアは以前城下町で見たキアランの様子を思い出した。親しい人と軽口を叩いていた様子は、フェリシアの変装に気づいていなかったことを差し引いても自然体で、生き生きとしていた。

「お城の環境自体が殿下にとって生きづらいつて事はわかりました。同情する気持ちもあります。……でも、やっぱりそれとこれと話は別！」

怒りが再燃してきたフェリシアに苦笑を返し、エドモンドは珍しく空気を讀んだ。

「まあまあ、いいものもあげるから落ち着きたまえ」

「いいもの、ですか？」

「フェリシア君には最近、団長の次に世話になつていいるからね」

「ええ、大変でしたよエドモンドさんが蛙に変えた兵士さんを元に戻したり、金ぴかに塗りたいくった城壁を元に戻したり、一夜にして訓練場が巨大アスレチックへ変貌していたときは魔道師団の皆さんの副団長閣下計画に参加しようかと……」

不満がキアランからエドモンドへ移りかけたフェリシアの前に、細長い布の包みが差し出された。

「？これは……受け取った瞬間、爆発とかしないですよね？」

「あはははは、何処まで信用がないんだい、僕。大丈夫だよ、軽快に開けたまえ！」

フェリシアは警戒しながら包みを受け取り、中を開けた。すると出てきたのは、白銀色に輝く杖だった。美しい曲線を描く、杖以外の何かを想起させる意匠を幾重にも施された杖はフェリシアの身長のお半分ほどで、握りやすい太さになっている。そして、金属で出来ているとは思えないほど軽かった。

「わあ、どうしたんですか、これ」

美しい杖に怒りも忘れて顔をほころばせると、エドモンドは得意げに胸を張った。

「三日前、魔術師用の武器がないかと言っていたらどう？」

「あ、そういう言いましたね、そんな事」

それは今日のように、魔道師団の研究室に三人で集まった雑談中の出来事だった。この世界では、魔法を使うときは基本的に素手である。魔法使いといえば杖、魔女と言えば箒と想っていたフェリシアは、当初密かにかっかりしていたのだ。それを雑談中エドモンドに告げると、彼は「魔術師用の武器か、面白い発想だ」などといった早々に自宅へ帰ってしまったのだ。

「僕のコレクションの中に、フェリシア君の御眼鏡にかないような物があつてね。改造して持ってきたよ！」

「エドモンドさんの改造……」

その点に一抹の不安を感じないでもなかったが、フェリシアはそれよりも杖に惹かれて持ち上げてみた。そして、杖以外の何を思い起こしたのか納得する。軽いのは杖が筒状になっているため、そして杖の上部には引き金のようなものがついており、銃に似ているのだ。（そういえば、会話の弾みで銃のことも話したんだっけ）

勿論フェリシアの中身が現代日本人であることや、現代兵器の詳細

まで語ったわけではないが、「こんな感じの武器があつたらな」という話はしていた。

「いつだったかウルリクとの小競り合いに勝ったときの戦利品でね。元々、魔術師の集中力を高めるアイテムで、ただの魔法金属の棒だったんだけど、使い道がなくて埋もれていたんだ」

ただの棒呼ばわりするエドモンドだが、魔力を帯びる性質のある魔法金属自体が高価なものである。フェリシアは思わず勿体無いと呟いた。

「だから君にあげるのさ。引き金を引いてエネルギーを打ち出す道具、というフェリシア君の意見が非常に参考になった。そのお礼にね」

「え、でも、いいんですか？」

「うん。というより、その杖は多分君にしか使えない」

「？」

「やっぱり、フェリシア君には何が問題なのかわからないか。団長ならわかるでしょう？」

首を傾げるフェリシアに、エドモンドがダリルへと水を向けると、彼は実験器具から視線を上げて困ったような顔をした。

「まったく、物騒なものを作ったものだ。出来ればお前にはあまり持っていて欲しくないが。少し貸してもらえるか？」

フェリシアは請われるまま、銃杖をダリルの手へ渡した。

「魔法金属の回路に魔力を流し、引き金を引いて魔力のエネルギー弾を撃つ仕組みだな。ふむ。……私ならば、もってせいぜい三発か」

「流石ですね、団長。僕は一発試し撃ちして倒れましたよ」

「それで昨日欠勤だったのか……」

頭を抱えるダリルと、彼から銃杖を受け取ったエドモンドを交互に見遣り、フェリシアが首をかしげる。

「あの……？」

「ああ、すまない。フェリシア君、この杖は一発打つだけで凄まじく魔力を消耗するんだ。並みの魔術師なら、一発打つだけで命を落

としかねない」

「ええっ！？なんて危ないもの作るんですか！！」

「だからこれは、無尽蔵の魔力を持つ君専用なのさ。そうでなければこんな面白い武器、絶対手放さな」

「ありがとうございますエドモンドさん、大事にしますね！！」

すぐさまエドモンドから銃杖をひったくったフェリシアは、笑顔を浮かべて礼を告げた。

「しかしフェリシア、いくらお前の魔力が無尽蔵と言っても、使つて本当に影響がないか試した方がいいぞ」

「勿論です、エドモンドさんの作った武器なんて怖くていきなり実戦では使えませんよー」

笑顔で断言するフェリシアに、

「何だか失礼じゃないかい……？」

エドモンドはぽつんと呟いたのだった。

銃杖を肩に担ぎ、ダリルとエドモンドを伴ったフェリシアは、騎士団と国軍、そして魔道師団が共同で使う訓練場に来ていた。マルグリットの協力の下、フェリシアも偶に体力づくりで走らせて貰ったり、軽い筋トレをさせてもらったりしている。そこへ今日は弓用の的をたて、更に念を入れて周囲にダリルたちが魔法障壁を張る。

「試し撃ち一発目、いつきまーす！」

フェリシアは元気に片手を上げて宣言し、銃杖を構えた。エドモンドが「動力部」と呼ぶ魔法金属の部品に魔力を流し、引き金を引く。すると銃身の中で成型された魔力の弾丸が勢いよく発射された。銃声もなければ反動もなく、エネルギーの弾は真っ直ぐに飛ぶ。フェリシアがその気になればミリ単位で軌道修正も可能だったが、ただ撃つだけでどの程度狙えるか見るために、あえて打ちっぱなしにする。すると弾は的を掠り、ダリルの障壁に当たって派手な火花を散らした。

「ぐっ……！」

障壁を崩されたダリルが、額に汗を浮かべて呻く。

「お師匠様！すみません、大丈夫ですか！？」

すぐさま駆け寄ると、ダリルは心配そうな顔の弟子の頭をぼんぼんと撫でた。

「大事無い。お前こそ体に異変はないか？」

「はい、何発打つても倒れる気がしません」

フェリシアはそう請け負うと、再び銃杖を構えなおし、先程撃ち損ねた的を狙ってエネルギー弾を立て続けに発射した。まずは的を支える棒を打ち抜き、次にくるくると回転しながら落ちていく的の上下左右を十字に、最後にど真ん中を打ち抜いて、ボロボロになった的が地面に落ちる。その様子を、エドモンドが顔を輝かせて見入っていた。

「すごい、すごいよフェリシア君！体調に変化はないのかい！？」

「ええと、まったく平気です」

「すごいなあ、あんなに正確に大量の弾を撃ち込んで、ピンピンしているだなんて！フェリシア君、次は是非君の魔力を使った実験を」
「遠慮します」

「えー」

巧みな魔術を見て純粹に感嘆するエドモンドは微笑ましいと言えなくもないが、実害が出るとなると別だ。すげなく断るフェリシアと食い下がるエドモンドにダリルが溜息混じりで仲裁に入った。

「やめないか、二人とも。フェリシア、お前の腕は見事だが、その武器は燃費が悪すぎる。普通の魔術の鍛錬も忘れず積むように」

「はい、お師匠様。これだと本当に攻撃だけですものね。早く発動したいときは便利だけど」

「……そうだな。その武器を扱う練習も、しておくといい。いずれ、大きな戦になるかもしれない」

妙に確信めいた言葉に、フェリシアとエドモンドは顔を見合わせた。

「お師匠様……？何か、戦の心当たりでも？」

「さて。私の杞憂であればいいのだが……」

フェリシアの問いかけをはぐらかして、ダリルは軽く瞑目したのだ。
った。

21・武器（後書き）

フェリシアはマイ武器を手に入れた！という話でした。魔法使いと言えば杖や箒！でも実際の機能としては銃に近い感じ。接近戦では格闘技、遠距離からは銃攻撃って、ファンタジーの主人公、しかも魔法使いとも思えない戦法ですね……。

22・戦いの国

ダリルの危惧が現実となったのは、僅か一週間後のことだった。

謁見の間へ召集を受けたフェリシアは、準正装のドレスを綺麗に捌いて部屋に入り、優雅に腰を折る。すると、部屋に集まった顔ぶれに目を丸くした。玉座についたオズワルドの背後には護衛のキアラが控え、両脇には宰相ベネディクトと將軍ハロルド。その前には主だった武将や重臣たちが整列していた。中にはダリルやマルグリット、エドモンドもいる。城中の偉い人をかき集めたのではないかという光景に驚いていると、ベネディクトが微笑んで手招きしてきた。自分が玉座近くに寄っていいものか訝しみながらも、フェリシアは父に促されるまま、その隣に立つ。

「お父様、急ぎで開く軍議に参加するよう言われてきたんですけど、これは……？」

「すまないね、フェリシア。じきにわかるから、大人しくしておいで」

小声でベネディクトに囁くと、優しく窘められた。フェリシアは素直に謝罪して、前を向く。その後もちらほら重臣たちが入室していた。

（何だか大事みたい……）

その様子を見て、フェリシアは一人考え込む。謁見の間に集まった中には文官の姿も見えるが、軍議の場に呼ばれることは稀だと聞いている。そもそもフェリシア自身、戦場に行くときはいつもオズワルドから個人的に通達を受けるのだ。軍議らしい軍議に参加するのはこれが初めてだった。そして、彼女が考えているうちに召集された人員が全て集まったらしい。オズワルドが立ち上がり、口を開いた。

「これで全員だな。皆、忙しいところよく召集に応じてくれた」
「労いの言葉にかしこまる一同を見渡し、面を上げよと静かに命じる

オズワルド。若いながら威厳を滲ませる国王の姿を、臣下たちは一心に見上げた。

「今日、皆に集まってもらったのは他でもない。国を揺るがす一大事が起こった。昨夜、長らく停戦状態にあったボニファーツ帝国より宣戦布告が届いた」

その言葉に、人々はざわついた。オズワルドの即位以来、国境での小競り合いはあったものの、大きな戦はなかったのだ。宣戦布告の言葉に、不安げな言葉が飛び交う。

「静粛に」

しかし、ベネディクトの鋭い声が飛ぶと、謁見の間は再び静まり返った。

「奴らの目的は我らが戦女神、フェリシア嬢だ。最近目覚ましい戦果を挙げる彼女を危険視した皇帝が、自ら大軍を率いてこの国に攻め入ってくる」

予想外のところで自分の名前を出されて、フェリシアは弾かれたように顔を上げた。

「知つての通りボニファーツは強大な軍事国家。国土も兵力もわが国が上とはいえ、全力で迎え撃たなければ防衛は難しい。無論、私も戦場に出るつもりだ」

その言葉に、人々は更に驚きの声を上げた。再び場を沈めようとするベネディクトを制して、オズワルドは声を張り上げる。

「恥ずかしながら即位十一年目にして、これが私の初陣となる。この場を戦い抜くためには、諸君らの力添えが不可欠だ。どうか、私とともに戦ってはくれまいか！」

王の求めに、臣下たちは歓声で答えた。

その後、軍議は細かな配置の話へと移り、多少の反駁はあったものの比較的スムーズに進んだ。オズワルド率いる主力部隊と、王の護衛である近衛騎士団がボニファーツの進軍してくる西部へ。他の部隊が残る東南北の守備に入り、先日ウルリークとの小競り合いが

続いていた魔道師団は中央にて休養を取りつつ、睨みを利かせる。それぞれの部隊の統率者も決まり、軍議は終盤に差し掛かった頃だった。

「恐れながら申し上げます。フェリシア嬢はこの度、どちらの戦地へ赴かれるのでしょうか」

意見を求められた重臣の一人が、オズワルドに尋ねる。皆密かに気にしていた話題に、注目が集まった。

「フェリシア嬢は王城にて魔道師団と共に待機だ。彼女は魔物専門だからな。魔物軍に動きがあれば、北へ行ってもらうことになるかと思うが、その采配は魔道師団の総責任者であるダリル・スマイサーに一任する」

畏まり、頭を垂れるダリル。この言葉に、人々はざわめいた。

「この戦、フェリシア嬢のために始まったようなものなのに、本人は安全な中央で待機だと？」

「救世主様の癖に、魔物としか戦わないなんておかしいじゃないか」
「しかし下手に戦場に出して、あの戦力が奪われでもしたら大損害だぞ」

ざわめく声にフェリシアはちらりとオズワルドを振り返った。人の国に対しては武力ではなく話し合いで交渉を持ちたいと理想を語った彼が、戦場に出るのはどんなに不本意なことだろうか。そして、きっかけとなったのは他ならぬフェリシアなのだ。

（やっぱり、私だけが安全なところにいるなんて、できない）

彼女は覚悟を決めて、発言を求めた。

「どうしたんだい、フェリシア？」

意外そうな顔で尋ねるオズワルドを真っ直ぐに見返して、フェリシアは告げた。

「お許しただけなのであれば、私も陛下にお供したいと存じます！」

その言葉に、周囲のざわめきが一層大きくなる。その中で、オズワルドの隣に控えていたハオルドが立ち上がり、王に発言の許しを求

めた。オズワールドが頷くと、將軍の鋭い眼光がフェリシアを射抜いた。

「フェリシア嬢、貴女に人間を殺めることができるのですか？」

特に声を荒げているわけでもない、ただの質問。しかし氣迫のこもった声に、フェリシアは氣圧されないよう背筋を伸ばして答えた。

「残念ながら、今回私が戦闘でお役に立てることはないでしょう。

ですが事態はどうであれ『グランデールの救世主』が敵軍の中にいるという事実だけでも、無用な争いを食い止められるかもしれない」

実を言うとフェリシアは、ボニファーツ軍と戦う気などなかった。

人殺しに抵抗があるというのもその理由だが、何より自分が帝国との交渉のきっかけになればいいと思っただけだ。ハロルドはその意思を見透かしているかのように、甘いですなと切り捨てた。

「ボニファーツは何より武を重んじる戦いの国。奴らは人の姿をした野獣です。人一人殺したこともない小娘など恐れるものか」

「アーデン將軍」

娘を虚仮にされたベネディクトが怒りを込めてハロルドを呼ぶが、將軍の弁舌は止まない。

「それに万一、貴女の身柄が帝国に渡ればどうします、フェリシア嬢？」

「將軍は、私が祖国に刃を向けると仰るのですか？」

フェリシアがむっとして言い返すと、ハロルドはあっさり頷いた。

「我が国に仇為すことを貴女が望まなくても、仕向ける方法はいくらでもありますよ。例えば、皇帝に従わなければお父上を殺すと脅されて、拒否することは出来ますか？」

はっとベネディクトの方を振り返り、フェリシアは言葉を詰まらせた。

「自分がどれだけ無謀なことを口走っているのかお分かりになったのなら、大人しく中央や北部で魔物退治でもされることですか？」

そう結論付けたハロルドに、オズワールドが険しい視線を向けた。

「ハロルド・アーデン。それを決定するのは貴公ではない」
その言葉に、ハロルドは頭を垂れた。

「フェリシア、君の申し出はまさに天からの贈り物にも等しい。救世主殿の手を野蛮な帝国人の血で汚すわけには行くまいと中央に残そうと思っただが、君がそう言ってくれるのなら、私と共に来てはくれまいか？」

ハロルドの言葉で多少ぐらついたものの、元は自分から申し出たことだ。フェリシアは真っ直ぐにオズワールドを見つめ返し、頷いた。

「喜んで、お供いたします」

フェリシアの返答によって、王の決定は為された。

「皆、今度こそ異議はあるまい。だがアーデン將軍の危惧も、もっともなことだ。フェリシア、君には私の身辺警護を任せよう」

その言葉を聞いて、フェリシアは力強く頷いた。飛んでくる矢からオズワールドを魔法の障壁で守ったり、いざとなれば突風の魔法で逃がしたりという程度なら容易いことだ。

「これで私とフェリシアは四六時中行動を共にすることとなる。生半可な間者は近づけまいよ。万一フェリシアが攫われることがあれば、そのときは私も死体だ」

「……そのようなことにならぬよう、努めさせて頂きます」

ハロルドの返事を聞いて、オズワールドは満足げに頷いた。心中はとうあれ、王の決定を覆そうと試みる者などいない。ただ、キアランだけが不満を隠そうとすることなくフェリシアを睨みつけていた。

(陛下の身辺警護って事は、今回は王弟殿下も一緒か……)

キアランの視線に気づいて辟易としながらも、やれるだけのことはやろうとフェリシアは一人気合を入れなおしたのだった。

長い軍議がようやく終わり、フェリシアはオズワールドの執務室へと呼び出しを受けた。

「やあ、フェリシア。すまないね」

執務室へやってきたフェリシアを見て、オズワールドは微かに疲労の

滲んだ笑みを浮かべた。その横には、仏頂面のキアランが控えている。

「そんな、オズワルド陛下の方こそお疲れでしょう？お休みにならなくて大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、それより君に謝りたかったんだ。こんなことになって、本当にすまない」

「こんなこと？」

「ボニファーツの宣戦布告だよ」

オズワルドはそう言って、端正な顔を忌々しそうに歪めた。

「君を積極的に魔物との戦闘に出したのは、グランディールの救世主の強さを広めて各国を牽制する目的だったのに。逆に君を危険に晒す事態にしてしまった」

「そんな顔、なさらないで下さい。陛下は武力解決をよしとしないのに、私のせいで、こんな……」

「謝らないで。君を戦場で力を振るえば、いつかは起きたことだ。それに気づかなかった私の浅慮だよ」

フェリシアの両手を取り、諭すオズワルド。キアランの眉間の皺が一層濃くなった。

「でも……今更ですけど、本当に陛下自らが戦場に出る必要はあったんでしょうか？」

相手は皇帝とはいえ、ボニファーツ皇帝には男女合わせて十人以上の子供がいる。対して、オズワルドに世継はいない。オズワルドに何かあれば、国が王位争いに陥るのは目に見えていた。

「ああ、側近達には早く結婚して世継を作るべきだと迫られたよ。あわよくば自分の娘を王妃に、と考えているのだらうね」

どこか冷たい調子でオズワルドは言って、フェリシアの手を離れた。「だが、私は行くよ。この国でもボニファーツ帝国ではないにせよ、王には強さが求められているからね。そろそろ、軟弱な国王陛下の汚名を返上しなければ」

茶目っぽく笑ったオズワルドは、すぐまた真面目な顔に戻り、壁に

かけられた世界地図を見上げた。

「何より私は、これを絶好の機会と考えているんだ。城で催しを開けば各国の使者を招くことは出来るが、統治者と直接話せるわけではない。この戦、皇帝の人となりをもこの目で見て、できることなら交渉に持ち込みたいと思っている」

オズワルドは話し合いで戦いを終わらせることを、諦めたわけではなかった。それを知ったフェリシアは、顔を輝かせる。

「とてもいいお考えです、陛下！私も、お助けできるように頑張りますね！」

「……ありがとう、フェリシア。君に応援してもらえるだけで、力がわいてくるようだ」

さりげなく、しかし先程よりも強い力でフェリシアの手を握ったオズワルドは、目を細めて彼女の顔を覗き込んだ。

「ねえ、フェリシア。私たちは、とてもいいパートナーになれると思わないかい？」

「オズワルド陛下？」

美貌の王に見つめられて頬を染めながらも、後退りをするフェリシアを、逃がさないとも言おうようにオズワルドの片手が肩をつかんだ。

「家臣たちが結婚を決めると、最近特に五月蠅くてね。私には、君しか見えないと言うのに。君さえ良ければ、私の妃になってはくれまいか？」

「ご、ご冗談を」

辛うじてそれだけ答えるフェリシアに、オズワルドは更に詰め寄った。

「酷いな、私は真剣だよ。私達の間には何の障害もない。国王と救世主の婚姻ならばきっと、万民に祝福されることだろう」

「そこまですなさいませ、陛下」

するとオズワルドの言葉を遮るようにして、キアランが割って入った。フェリシアと握り合った手を取り上げて、強制的に二人の間に

空間を作る。強引な方法だったが、フェリシアは寧ろオズワールドから離れることが出来てほつとした。

「何だい、キアラン。こんな時にヤキモチだなんて、お前は可愛いね」

「お戯れはおやめください。この女と兄上が婚姻を結ぶなど、冗談でもぞつとします」

「まったくお前もフェリシアも、私は本気だと言っているのに」

「尚更とんでもないことです」

オズワールドのぼやきを切り捨てたキアランは、フェリシアにも厳しい視線を向けた。

「お前も、これ以上兄上を誑かしていないで、とつとと部屋に戻れ」

「なっ、だ、誰がいつ陛下を誑かしたのよ！言われなくても、失礼します！」

フェリシアは苛立ち紛れに部屋を出て行った。ボタン、と執務室の扉がありえない大きさの音を立て、外に控えていた護衛兵がびくりと直立する。そんな姿を見送った国王兄弟は、どちらからともなく長い溜息をついた。

「ふう。ところでキアラン、お前が嫉妬しているのは私とフェリシア、どちらなのかな？」

「兄上、何を言い出すのです？俺は別に、嫉妬など」

「そう？なら、フェリシアが結婚するのは、私でなければ誰でもいいのかい？」

「それは」

一瞬言葉を詰まらせたキアランは、ぼそぼそと答えた。

「俺には、関係のないことです」

返答を聞いたオズワールドは、ただ静かに微笑んでいた。

部屋に戻り、事の次第をメリッサに打ち明けたフェリシアは、専属メイドの第一声に度肝を抜かれた。

「もったいない！」

「な、何が……？」

「オズワルド陛下のプロポーズを冗談で済ませたことですよ！」

基本的に大人しい性質のメリッサが、拳を握って力説する姿に、フェリシアは思わず身を引いた。

「私がボニファーツとの戦争に行くって言つのは……？」

「その事なら、お嬢様なら大丈夫ってわかっていますから。私もお供いたしますし。そんなことより、私のお嬢様が国王陛下に求婚されたなんて、なんて素晴らしいでしょう！」

「は、はあ……」

「お嬢様は絶対に王妃様になるべきです。優しくて可愛らしいのに、お強くて、考えてみればお嬢様以外の誰がこの国の王妃に相応しいと言つのでしょうか」

「でも、別に正式な婚姻の申し込みってわけじゃないし、そもそも冗談だと思っし」

するとメリッサはきつとフェリシアを振り返った。

「お嬢様、謙遜は婦人の美德といいますが、こんなときまで弱腰でどうなさるんですか！ ああ、嫁入り道具に、婚礼衣装はどうしましよー！」

メリッサの秘められた肉食女子ぶりに暫くぼかんとしたフェリシアは、ポリポリと頬をかいた。

（オズワルド陛下のあのノリは、先輩を思い出すから苦手なんだけどなあ）

大学時代、数ヶ月だけ付き合っていた先輩を思い出して、苦い顔をするフェリシア。容姿も性格もまるで違うのに、何故彼を彷彿とさせるのだろうかと首を傾げた。

（まあいいや。陛下のこと、そういう目では見れないなんて言ったらメリッサが発狂しかねないし、放っておこうっと）

じきに収まるだろうと、一人で盛り上がっているメイドを放置したフェリシアは、慣れた手際で出立の準備を始めたのだった。

22・戦いの国（後書き）

女の子主人公の醍醐味、プロポーズ。を、歯牙にもかけない主人公。この辺は過去の恋愛経験が影響しているようですが、詳しいことはまだ先の話です。

とうとう人間の国との戦争になりました。この先、ちょっとシリアスめな展開が続くかもしれません。

出立の朝は、生憎の雨模様だった。今にも泣き出しそうな曇天を見上げ、フェリシアは幸先悪いなあと零す。更に、ボニファーツとの国境へ向かう馬車へ同乗した面々も憂鬱な気分には拍車をかけた。隣にはメリッサが座っており、彼女の正面に座るキアランと静かににらみ合っている。フェリシアの前にはオズワルドが座っており、ニコニコと満面の笑みを浮かべているが、これはこれで居心地が悪い。ダリルとエドモンドは中央、マルグリットは南部の防衛軍に参加しており、この場に呼べる知り合いもないフェリシアとしては肩身が狭かった。

「あの、私たち、馬車を降りた方がいいんじゃないでしょうか」

居たたまれなくなったフェリシアがオズワルドに申し出ると、キアランがにやりと笑い、オズワルドが残念そうな顔をした。

「珍しく気が効くじゃないか。降りろ降りろ」

「キアラン、なんて事を言うんだ。ごめんね、フェリシア。弟のことは気にせず、私だけを見てくれればいいからね」

犬でも追い払うような態度のキアランと、相変わらず甘い言葉を吐くオズワルド。余計に空気を悪化させてしまったフェリシアは、溜息をついて馬車の窓から外を眺めた。前方には、長い兵士の列が続いている。国王オズワルドの乗るこの馬車は、最後尾に近い場所に付いているのだが、フェリシアが見た事もない数の兵士だ。しかも途中に寄る皆で兵力を補給するので、その数は更に膨れ上がると言う。

「本当に、大きな戦いが始まるんですね」

「後悔しているのかい？」

「どちらかと言えばこの空気に……」

フェリシアはどんよりとした目で、にらみ合うキアランたちと笑顔のオズワルドを見比べた。戦場に着くのはあと十日ほどかかると言

うが、これにあと二週間近く耐えろというのが。

(ちよつとした拷問だよ……)

フェリシアがげんなりしていると、急に馬車の外が騒がしくなった。止まれという濁声に、馬の嘶き、御者の制止の声。

「まさか襲撃者!？」

「でも、まだ城下町を出たばかりだよ?」

「いや、彼はおそらく……」

騒ぎの元凶に心当たりのあるらしいキアランが言い出す間もなく、ガタンという大きな音を立てて馬車の扉が開いた。続いて、大きな影が姿を現す。

「ぎゃああああつ、戦闘熊!?!？」

扉から覗く巨体に、フェリシアが飛び上がった。

「落ち着け、フェリシア・チェンバレン。あれは人間だ。一応」

そのフェリシアをガシツと捕まえ座席に座らせたキアランが、呆れ顔でそう言った。

「人間……?」

フェリシアは恐る恐る、目の前の影を見上げる。すると、目の前にいたのは戦闘熊ではなく大柄な男だった。栗色の髪を刈り込んだ巨軀の男は、フェリシアと目が合うと、悪人と思えない凶悪な顔でニカツと笑った。すると、意外に人好きのする顔になる。

「ガハハ、戦闘熊とはひでえや、お嬢さん。キアラン、テメエも上司を一応人間だとはどういう言い草だ、ああ?」

「戦闘熊は言い過ぎにしても、団長が人間離れた巨体だと言うのは事実です」

しれつと答えるキアランに男はやれやれと溜息をつき、オズワルドの方を見た。

「ご機嫌麗しく、国王陛下。遅ればせながら、参上いたしました」

「やあ、ヘイグ団長。相変わらず元気そうで何よりだ。いつも弟が世話になっているね」

男の無礼をとがめる様子もなく、にこやかに挨拶を返すオズワルド。

ヘイグと呼ばれた男は次にフェリシアの方へ向き直ると、見かけとは裏腹にしなやかな動きで一礼した。

「そつちのお嬢さんが噂に聞く救世主殿か？俺はグランディール王国騎士団の団長、デイラン・ヘイグ。よろしくな」

「騎士団の団長さん……？せ、戦闘熊だなんて、失礼しました。お察しの通り、私がフェリシア・チェンバレンです。こちらは私の世話をしてもらっているメリッサ・ラングトン男爵令嬢」

主の紹介にぺこりと頭を下げるメリッサにも気さくに返事を返したデイランは、失礼と言って馬車に乗り込んできた。国王の使う広々とした馬車とはいえ、巨体の彼が入ってくると少し窮屈だ。

「団長、ここは陛下の専用馬車です」

キアランの指摘に、デイランは悪びれることなく答えた。

「いいじゃねえか。俺の仕事は陛下の護衛だ、近いところにいればいるほど守りやすい。だいたいお前やフェリシアお嬢さんが同乗しているのも同じ理由だろ」

「それはそうですが、せめてその陛下の許可くらい取ってください」それもそうだなと素直に頷いたデイランは、オズワルドに問いかけた。

「オズワルド陛下、同席してもよろしいですか？」

「構わないよ」

「はっはっはっ。さすが陛下」

頭を抱えるキアランの背中をバンバンと叩いて一人笑っているデイランを、フェリシアは微笑ましいような気持ちで眺めた。屈託なく人懐っこいデイランの物言いは、馴れ馴れしい態度でも不快感を与えない。

「そういうわけだ、気にせず出いな」

このまま進んだものか、馬車の中を窺って迷っている御者にデイランが声をかけると、馬車はゆっくりと動き始めた。

思いがけない闖入者は、どことなく重苦しかった馬車の空気をが

らりと明るいものに変えてしまった。軍門名家の貴族出身であるにもかかわらず、少年の頃一般兵として軍へ入隊し、左官まで上り詰めた後に騎士団へ転向した異色の経歴を持つデイランは、軍属時代に国内を転々としていた。面白おかしく語られる各地の様子に、フェリシアは笑い声を上げ、オズワルドやメリッサもつい馬車に持ち込んだ仕事の手を止め、キアランすらどこことなく楽しげに話を聞いていた。

しかし楽しい時間も長くは続かないものである。出発から一週間が経ち、初日から降ったり止んだりを繰り返していた雨が、愈々本降りになってきた。出発時と比べて倍近い数に膨れ上がった兵士たちは、雨に打たれて黙々と進んでいる。勿論、オズワルドの乗る上等な馬車には湿気も寒さも入り込む余地などないものの、兵士達の声にならない疲労感や車上の人々にも伝わってきた。

「皆、大丈夫かな」

土砂降りの雨に打たれる兵士たちの列を窓から眺め、フェリシアは呟いた。

「グランデールの兵は皆、頑強だ。お前に心配されるいわれはないだろう」

「そんな言い方ないじゃないですか」

いつものように嫌味を言うキアランに言い返したフェリシアは、再び窓の方を見た。心配なのは、兵士だけではない。日に日に緑が少なくなっていく窓の外は、ひたすら険しい荒野が広がっており、見かける植物と言えば雑草が茂みくらしいものだ。付近には、サナデイス大河に繋がる川も多く流れている。地盤のゆるみや河川の氾濫も気がかりだった。フェリシアがそれを指摘すると、デイランがおやという顔をする。

「フェリシアお嬢さんは博識だな。そうとも、森には土砂崩れを抑える力がある。山に雨が降っても崩れないのはそのおかげだな」

この世界で、普通のお嬢様なら知らないことなのだろう。必要以上に感心されて恐縮しつつ、フェリシアは考えてもわからないことを

尋ねた。

「どうしてこの辺りは荒れた土地ばかりなんでしょう？近くに川もあるし、こうして雨も降るんだから、水には不足しないはずなのに」
「この辺りは雑草ぐらいしか育たないほど、痩せているのさ」
肩をすくめ、なんでもないことのようにディランは言う。しかし、その目には珍しく深い憂いがあった。

「初代王陛下のもと、人の国が一つだったところは肥沃な穀倉地帯だったという話だがね。豊かな土地に物を言わせて作物を作りすぎ、初代王陛下亡き後は奪い合い、幾度も焼き払われては血が流れ、サナデイス大河がグランディールとボニファーツの国境になった頃にはすっかりこの有様だ」

「酷い話ですね……」

眉を顰めたフェリシアはふと、中庭に広がる麦畑を思い出した。

「でも、こういう土地で育つ麦なんかも、いずれ品種改良されるかもしれませんね」

するとキアランの麦畑のことはディランも知っていたのか、にやりと笑って調子を合わせてきた。

「そうだな、荒野で育つ麦を作ろうなんて奇特な馬鹿もいるかもな」
「いやいや馬鹿なんていつちゃいけませんよ、ディランさん。立派なことじゃないですか」

「成功すればな」

そんな話をしながら、二人でニヤニヤ笑ってキアランの方を眺めてみる。視線を感じたキアランは、数の不利を悟ったかそっぽを向いてしまった。その頬がなんとなく赤いように見えるのは、ひよっとして照れているのか。

（ちよっと面白いかも）

久々にキアランにかかわって愉快的気分を味わったフェリシアは、そっとほくそ笑んだのだった。

こうして概ね無事に戦場への行程を終えた一行だったが、最終日

になつて試練が待ち構えていた。

「ここ、渡るの……?」

呆然と立ちすくむフェリシアの前には蛇行する溪谷が続いていた。戦の拠点となるサナデイス大砦へ続く道である。道はその崖際、大人が三人並んでやっと歩けるほどの幅だった。今は止んでいるものの、先日から降り続いた雨で滑りやすい道は、足を滑らせれば谷底へ真つ逆さまだ。当然馬車など使えるはずもない。それでも谷底には川が流れており、高さはフェリシア自身の身長ほどで、通常なら落下してすぐ即死が危ぶまれるほどではなかったが、今の川は増水で激流と化していた。

(何だか水にはろくな思い出がないわ……)

初めて水呼びを使ったときのことや、子供のころプールで溺れかけたときのことを思い出し、重苦しい溜息をつくフェリシア。

「大丈夫ですよ、お嬢様。私でも通れますー」

震え上がると思いきやひよひよいと先に行くメリツサの声に励まされ、フェリシアは恐る恐る足を踏み出した。その瞬間、脆くなっていた足場が崩れて体が傾ぐ。

「うぎゃああやあつ!」

「フェリシア!」

乙女にあるまじき悲鳴を上げて落ちかけたフェリシアを、すぐ横にいたオズワルドが引つ張り上げた。

「あ、ありがとうございます陛下」

念のため用意しておいた銃杖を、本来の杖の用途に使って体を支えながら、頭を下げるフェリシア。

「あの、私、足手まといだったらあそこで待つてましようか……?」

「護衛がそんな事でどうする」

馬車の預け所を指差すフェリシアの弱音を、ぱつさり切り捨てるキアラン。今回ばかりは彼の方が正論である。フェリシアは不承不承頷いた。

「わかってますよー」

いつそ突風の魔法で飛んでいこうかと考えていると、フェリシアの手を隣のオズワールドが優しく掴みあげた。

「私が手を引こう。安心して、フェリシア」

「え……？」

にこりと笑うオズワールドに、フェリシアはきよんとした。こういう場合、普通の女の子ならときめくものなのだろうとわかっているのだが、何故かオズワールドには大事にされればされるほど戸惑いしか生まれない。先程の絶叫といい、自分には乙女としての何かが欠けているのだろうかと真剣に悩んでいるうちに、つないだ手はキアランの手で強制的に引き離された。

「おや、キアラン。何をするんだい？」

「兄上がこの女に引つ張り落とされでもしたら一大事です。俺が連れて行きますよ」

そう言つて、キアランの節くれだった大きな手がフェリシアの手を握りこむ。その瞬間、フェリシアの中で何かが跳ね上がった。

(な、何今の、どきって何)

混乱を鎮めようと、とりあえずキアランをからかってみる。

「王弟殿下なら引きずり落としてもいいってことですか？」

「何故引きずり落とす前提だ、お前は！兄上よりはマシと言っただけだ！！」

すると、落ち着けと言つるようにディランが二人の肩をぼんぼんと叩いた。

「いいから行こうぜ、本隊から随分離されちまった」

言われて前を見れば、兵士の最後尾は遠くのカープに消えようとしていた。五人はフェリシアの歩調に合わせてゆっくりと進み始める。「どうして主要な砦に行くのに、こんな道通らなきゃならないの……」

「対人戦を想定した砦へ簡単に行けたら攻め放題だろ？コナリー大砦は魔物侵攻からの防壁を想定した造りだから、そうでもないが」
ディランの蘊蓄を聞きつつ、キアランに手を引かれて、何とか行程

の半分を終えたときだった。

ビュオオオオツ!!!!

強い風の吹きつけるような音と共に、谷の上からばらばらと人が振ってきた。タン、と軽やかな足取りで着地した彼らは、フェリシアたちの前に五人、後ろに十人。皆一様に黒装束を纏い、手には鈍く光る刃物が握られており、その顔はうかがい知れない。すぐさま反応して剣を抜いたデイランとキアランが、それぞれ前後に散って不届き者と切り結んだ。

「ボニファーツの暗殺者か!?!」

「わからん! 奴ら、魔法を使わなかったか!?!?!」

ボニファーツの民は神への信仰を捨てると共に、魔法の力も捨てた。故に、突風の魔法で降りてきたと思しき彼らが帝国人である可能性は低い。暗殺者という輩は身元の割れないようにするために工作するものだ。魔法を使うからといって断定はできまいと冷静に考えながら、フェリシアは銃杖を空へ向かって撃ち放った。のろし代わりの一発を見た兵士達が、これで戻ってきてくれるはずだ。

「陛下、メリッサ、私の傍へ!」

次に守るべき二人に声をかけて、すぐさま攻撃を跳ね返す障壁の魔法を張る。すると次の瞬間、飛んできた矢が障壁に当たった。カツンという硬質な音を立て、矢が谷底へ落ちる。

「ふう。危機一髪」

「ふふ、やはり頼りになるね、救世主殿は」

曲者に襲われている最中だと言うのに余裕の笑みを見せるオズワルドとは反対に、メリッサは脅えてフェリシアに擦り寄ってきた。

「お嬢様……」

「大丈夫だよ、陛下もメリッサも私が守るから」

フェリシアはそう請け負ったが、実際のところ彼女も焦っていた。障壁の中のことではない。曲者と直に戦うキアランたちを心配して

いた。特に一人で十人を相手しているキアランが、徐々に押され気味になってくる。それでも三人ほどを切り殺した彼は、大きく体勢を崩して顔を顰めた。

「王弟殿下！」

フェリシアはとっさに障壁を拡大しようとし、踏みとどまる。激しく動き回るキアランやディランを障壁の中に入れれば、一緒に戦う曲者まで中に入れてしまう危険性があった。

(どうしたら……！)

するとフェリシアの心の声を聞いたかのように、キアランが振り返った。

「おい、お前、援護しろ！」

いかにも不本意といわんばかりの悔しげな顔で、キアランはフェリシアに助けを求めた。

「得意の魔法で、こいつらを皆殺せ！」

「え……」

しかしそれは残酷な要求だった。そんな事できない、と無意識に頭を振ったフェリシアを冷たい目で一瞥し、キアランは呟いた。

「ならいい。俺がやる」

同時に、キアランの周囲で魔力の密度が上がっていく。赤く熱気の籠ったその魔力に、発動する魔法の種類を悟ったフェリシアは目を見開いた。

「や、やめて……お願い、それはやめて……！」

彼女の懇願を聞いて、キアランの口元が嗜虐的な笑みに歪んだ。そして彼は、大規模な火焰の魔法　この世界で最もポピュラーな、攻撃魔法を発動させる。

ゴオオオオオツ！！！！

すぐさま炎の塊が曲者達を焼き尽くし、真っ赤な炎が燃え上がった。蛋白質の焼ける悪臭があたりを漂い、真っ黒に焼けた死体が、同じ

く焦げ付いた岩肌の上にゴロゴロと転がった。

「ひっ……！」

凄惨な光景に息を呑んだのはメリッサだった。オズワルドはまっすぐに弟を見つめ、戦闘中のデイランも背後を窺っている。その中で、フェリシアが唐突に膝をついた。

「嫌っ……！」

脳裏に浮かぶのは真っ赤な炎の幻覚と燻る煙。そして何よりも鮮明な、真っ黒に焼け焦げた家と、大小五つの焼死体。

「いやああああああああっ……！」

それをはつきりと思い出した瞬間、彼女は絶叫した。見開かれた目にはもはや、現実の光景は見えていない。

「嫌だああっ、おいて、か、なで、おじいちゃん、おばあちゃん！
おとうさん、おかあさん、こうちゃん……！！！」

「お、お嬢様……！？」

尋常ではない様子で泣き叫ぶフェリシアにメリッサが近づこうとするものの、フェリシアはその手を避けてふらふらと前に出た。

「嘘、こんなの嘘だっ……！」

錯乱状態に陥ったフェリシアは自分の張った障壁から飛び出し、足をもつれさせて転倒した。そのまま、崖から足を踏み外して川の中へ転がり落ちる。

「フェリシア！」

オズワルドの叫び声とメリッサの悲鳴が谷間に木霊するよりも早く、キアランが川に身を投げた。

「団長！ 兄上を」

頼みます、まで言い切らないうちに、彼もまた激流の中に消えた。デイランは部下の言葉に無言で頷き、鋭い目で残りの一人を睨みつける。

「てめえらのせいでもねえことになったぞ。どう落とし前つけてくれる……！」

ビリビリと空気を震わせる怒号に怯んだ曲者を、デイランは握った

剣ごと殴り飛ばした。ぐえっと呻いて倒れる不届き者を手早く拘束し、ようやく駆けつけた兵士達に大声で指示を飛ばす。

「おいお前ら、こいつを皆へ運んで口を割らせる。奇襲をかけてきた暗殺者だ、何処の差し金かわかるまでくれぐれも殺すんじゃないぞ！」

兵士達が緊張した面持ちで了承し、拘束した黒装束を引つ立てていく。デイランは崖の淵から身を乗り出し、苦い顔で唸った。もう、フェリシアの姿もキアランの姿も視認できない。何も出来ない自分に悔しさを募らせるデイランだったが、彼は王を守る騎士の長である。部下の頼み通り、立ち尽くすオズワルドと泣きじゃくるメリッサを宥めて、皆への道に誘ったのだった。

23・襲撃（後書き）

そろそろ急展開も必要になってことで次回へ続く！です。ようやく主人公の過去とかトラウマが明らかに！長かったなあ。でもこの先はもっと長いんですが。

エドモンド兄さん以来の新キャラはヘイグ団長。気のいいおっちゃんです。でもそのがさつさが仇となって、お城での護衛はほぼキアランが担当していました。

そしてメリッサの苗字初登場回でもあったりする。今まで必要ないので決めていなかったんですが、フェリシアなら腹心のメイドを「ただのメリッサ」とは紹介しないかな、と。

あとキアランが初めて魔法を使いますね。もともとのポテンシャル+隠れて独学で勉強していたので、それなりに強い魔法が使えます。結果は別の意味で残念なことになりましたが。

24・人形姫の昔語り

激しく流れる水の中、娘は朦朧とした意識で、口からこぼれて上る泡を見上げていた。水の入り込んだ肺が悲鳴を上げ、徐々に視界が黒く塗りつぶされていく。覚えのある感覚だ。幼い頃、足のつかないプールに飛び込んで溺れかけた時と、同じ感覚。少し前まではあちらこちら岩にぶつけて、激流に揉まれた体が痛かったが、今はその痛みも遠のきつつあった。

（私、死ぬのかな）

目を閉じると、懐かしくて愛おしい顔が浮かんだ。大好きな父方の祖父母に優しい両親、可愛らしい弟。

（なんだ、みんな、そこにいたんだ）

もう会えないと思っていた大事な家族に向かい、娘はうつすら微笑んで手を伸ばす。するとその手首を、大きな手が掴んだ。

「お父さん？」

喋ろうとして、大量の水が口の中に入ってむせ返った。腕は構わず娘の腹に回され、体を引き上げていく。娘に向かって手を伸ばしていた家族の姿が、ぐんぐんと小さくなった。

（嫌だ嫌だ、私は皆のところに行くの！）

抵抗しようと試みるが、体は鉛のように重く、指一本自由に動かせない。やがて娘の意識は完全に暗転した。

パチパチと火の爆ぜる音に、フェリシアはふっと目を覚ました。何だか幸せな夢を見ていた気がするが、もう少しでそれは彼女の手から零れ落ちてしまった。

「わ、たし……？」

起き上がるうとして全身に鈍い痛みが走り、すぐに後悔する。かわりに横たわったまま視線をめぐらせて、辺りの様子を窺った。彼女がいるのは薄暗い洞窟のようで、激しく川の流れる音も遠く聞こえ

る。すぐ傍には焚き火が燃えていて暖かかった。火を恐れてもがいていると、暗がりからゆつくりと人の気配が近づいてきた。

「焚き火も駄目なのか、お前は」

呆れた調子のキアランの声に、フェリシアは首を動かして上を見上げた。上半身裸のキアランが、なんともいえない顔でこちらを見下ろしている。その顔を眺めているうちに、フェリシアは段々と自分の身に何が起こったのか理解していった。キアランが使った火焰の魔法の焼け跡にパニックを起して川に落ち、拳句この男に助けられたのだ。

「知ってて、使ったでしょう」

目の前の男を睨みつけて尋ねると、キアランは決まり悪そうに目を逸らした。

「ああ。嫌がらせのつもりだった。まさか、ここまで過剰反応をされるとは思わなくてな」

「……どうして助けたんですか。私のことなんか大嫌いで、出来れば死んで欲しかったんでしょう？ 絶好の機会だったじゃないですか」

「五月蠅い。考える前にお前の後を追っていたんだ、仕方ないだろう」

ふてくされながら答えたキアランは、それからふと思いついた様子で再びフェリシアのほうを向いた。

「お前、死にたかったのか？」

その問いに、今度はフェリシアのほうが視線を逸らした。

「あの後だって、死にたいなんて思ったことはありません。……でも、死んでもいいとは、思ってた。会えるかもしれないから」

ぼそぼそと細い声で話す声は、ともすれば炎の音にかき消されるほどに弱々しい。キアランは少し距離をとって、焚き火の前に座った。

「あの後？ 会えるとは、お前の家族に、か？……お前の魂は本当に、異世界から来たものなのか？」

心持ち、聞きにくそうな、聞いてもいいものか戸惑いの含まれた声音に、フェリシアは苛立って身を起す。打ちつけた体が痛かったが、

構わずキアランに掴みかかった。

「最低！そこから信じてなかったの！？全部『フェリシア』の演技だと思つてたの！！？」

グランディールに来るまでの全ての人生を、大切な家族の存在までもを否定されたようで、怒りに任せてキアランの頬を張り倒す。

「いいわよ、それなら教えてあげる。私が何処の誰で、今まで何をしていたのか。何で火が怖いのか、貴方がどれだけ酷いことをしたのか、教えてやる！」

呪いの言葉でも吐くような剣幕で、フェリシアは捲くし立てた。もう、体の痛みも水を飲んだ苦しさも感じない。ただ怒りのままに、彼女は話し続けた。

齊藤優花の父親は、嘗ては貧しい青年だった。高校も出ておらず、母親がアメリカ人でその容貌が日本人とは異なるために、就職が困難だったのである。それでも彼は捻くれることなく、日雇いの仕事を続けながら両親と慎ましく暮らしていた。そんな彼に心惹かれた優花の母親は、あるう事が皇族の流れを汲む財閥のお嬢様だった。

「結婚するときは、私の親兄弟、親族一同に大反対をされたわ」
幼い優花を膝に乗せて、母は深刻な話を笑って聞かせたものだった。反対されればされるほど、若い二人の恋心は燃え上がるものだ。優花の両親は駆け落ち同然で結婚し、父親の両親と四人、貧しい暮らしを始めた。若かりし頃の祖父も母も働きに出かけ、家事全般は祖母が担当していた。働かざるもの食うべからず、が齊藤家の家訓になったのもこの頃である。

「すまない。苦勞を知らない君に、こんなことをさせてしまった」
父は、荒れ果てた母の手を見て、申し訳無さそうによくそう言った。それに、母は笑って返すのだ。

「そうね、じゃあ、家にお金が溜まったら、楽させてもらいましょ

うか」

彼女の言葉に、優花の父親は一念発起した。雇ってもらえないなら自分で会社を興せばいい、と発想の転換を行ったのだ。家族の協力のもと仕事を減らして勉強に打ち込み、大学に合格した。丁度その頃優花が生まれ、母が数年働けなかったために家計は火の車だったのだが、斉藤家の人々は仲がよく、小さな家に暮らす人々は皆幸せだった。貧しさは優花が小学生のころまで続いたが、大好きな家族がいれば、平気だった。

貧しさに耐え抜いて十年程が過ぎたころ、優花の父親が大学卒業後立ち上げた会社が徐々に業績を伸ばし、一家は人並みの生活を送ることができるようになった。

「優花、今年は誕生日もクリスマスも、プレゼントを買ってやれるぞ。何がいい？」

普段は寡黙な父親が珍しく弾んだ声で言うのに、優花は答えた。

「お父さんと一緒にいい！お父さん、いつもお仕事で遊んでくれないもん」

すると、遊園地や動物園に連れて行ってもらったりもした。

優花の父は仕事が軌道に乗っても疎かにはせず、会社は急成長を遂げる。やがて人並みの生活は、どんどん豊かになっていき、優花が中学に入る頃には大きな家で何不自由ない暮らしが出来るようになった。祖父は仕事をやめて趣味に打ち込み、優花ともよく遊んでくれるようになった。母も専業主婦になり、よく祖母と並んで台所に立つ姿が見られるようになった。俄か金持ちの娘となった優花は、誘拐などの危険から自衛できるようにと空手を習い始め、父が休みの日にはプロレス技から柔道の型まで様々な武道を習った。元々運動神経は良かったので、めきめきと上達していくのも嬉しかった。

こうして生活スタイルは大きく変わったものの、斉藤家の人々の絆にはなんら問題はなかった。寧ろ問題だったのは、優花の学校生

活の方だ。優花が中学に上がると同時、新しく買った家に引っ越した。そこで今までの友達と離れ離れになり、新しい環境に放り込まれた優花は、アメリカ人と日本人のクォーターであることをネタにいじめを受けるようになったのだ。

「優花、また喧嘩してきたのか」

泣きつ面で帰ってきた優花に、真つ先に声をかけるのは、いつも庭で盆栽の手入れをしていた祖父の役目だった。

「喧嘩じゃないもん。あいつら、おばあちゃんのこと馬鹿にするから悔しくて」

「泣いて帰ってきたのか？」

「うん。一発ずつ殴ってやった」

「ははは、それでこそじいちゃんの孫だ、よくやった」

「でも先生には怒られたよ。悪いのはあいつらなのに」

それが悔しいと泣く孫娘の頭を撫でて、祖父は寂しげな笑みを浮かべた。

「そうだな、先に暴力に出ちまったのは、優花が悪い。でも、酷いことを言われて抗議できるのは、立派なことだぞ。今度は口で言い返してみるといい」

「うん」

しかし、優花に対する苛めはどんどん深刻になっていった。最初は物を隠すだけだった悪戯も、学校へ来るなど脅迫めいた手紙から、持ち物を汚されたり壊されたりとエスカレートしていく。先生に相談しても取り合ってくれないと家族に相談すると、ズタズタに引き裂かれた優花の体操服を持った祖母が「米国人の血に文句があるなら自分に言え」と直談判に学校へ乗り込んだこともあった。それ以来、面と向かって悪口を言われることはなくなった代わりに、無視や陰口が横行した。優花はすっかり学校生活を楽しむことを諦めて、中学では機械的な日々を過ごしていた。それでも彼女が心根までも歪めてしまわなかったのは、家族のおかげだ。とくに、年の離れた弟が生まれたことが大きい。耕太と名づけられた小さな弟は、優花

の最大の癒しだった。

「耕ちゃんがおおきくなったら、苛めなんかする奴、いなくなる
いいねえ。いたら、お姉ちゃんがぶん殴ってあげるからね！」
姉の物騒な台詞にもきやつきゃとはしゃぐ赤子に、優花は相好を崩
したのだった。

高校と大学は中学時代の同級生がない私立校を選び、中学時代
の経験を生かして上手く立ち回った優花は、再び穏やかな日々を取
り戻していた。学校での友人も出来たが、彼女にとっての一番は、
変わらず家族だった。

「優ちゃん、耕ちゃん、おやつクッキーが焼けたわよ」
若い時分に苦勞をしているにもかかわらず、いつも穏やかでにこや
かな母親が焼く、甘い菓子のおい。お姉ちゃんと呼びながら、自
分の後をついてくる小さな弟。おやつをつまみ食いして祖母に怒ら
れている祖父。忙しい営業の合間に家へ立ち寄り、コーヒーを飲み
ながら家族の様子を眺める、父親の大きな姿。その全てが、優花に
とって宝物だった。

そして、幸せが一瞬で壊される悪夢の日がやってきたのは、突然
のことだった。

その日は優花が二十歳を迎える誕生日で、珍しく優花以外の家族
全員が自宅にそろっていた。忙しい父親は愛娘のために休みを取っ
て誕生日を用意し、母と祖母は料理の準備。祖父は孫息子と共に、
息子夫婦が育てた花で部屋を飾っていた。夕方の講義を終えて大学
から帰って来る優花のために、家族総出で準備をしていた矢先に、
悲劇は起こった。放火と見られる不審火で、家が全焼したのだ。誕
生祝いを楽しみに家に帰ってきた優花を迎えたのは、焼け落ちた家
と物言わぬ五つの焼死体だった。

突然家族と家を失い茫然自失となった優花を、周囲はそつとしておいてはくれなかった。まずは母の親族だという人々がどこからともなく現れ、葬式の最中に父の残した財産を自分たちが管理するべきだと言いつ出したのだ。幸か不幸か、成人していた優花はそれを突っぱねることが出来た。しかし、そうすると新たな疑いが生まれる。今度は警察が、優花を財産目的の一家殺害犯のように扱いはじめたのだ。取調べの結果、証拠不十分で優花は釈放されたが、一度疑いの目で見られた優花に世間の目は冷たかった。

それでも優花は、自ら死を選ぶことはしなかった。そんな事をしても皆は喜ばないとわかっていたから、大学卒業までの学費と生活費を除いて遺産は全て寄付に回し、アパートを借りて細々と暮らしていた。せつかく作った友人達も離れていき、何より一人きりの生活は酷く味気ない。無気力な毎日を過ごしていた優花がトラックに撥ね殺されたのは、家族の死から三ヶ月ほど経ったころのことだった。

話を終えたフェリシアは、じつとキアランを睨みつけた。その頬に一筋、涙が伝う。

「その、話は」

「本当なのか、なんて聞いたら締めますよ」

首に絡み付いてきたフェリシアの指を引き離して、キアランは頭を振った。

「……お前は、フェリシアなのだと思っていた。兄上を誑かして、民には人形だと思わせていたのだと。異世界から突然迷い込んだに
しては、あまりにも平然としていたから」

「平気なはずないでしょう!!」

ついに耐え切れずボロボロと涙を零しながら、フェリシアはキアランに詰め寄った。

「戻れるものなら戻りたいわよ！返してよ、お金なんかいくらでもあげるから！！私が殺すわけじゃないじゃない！！皆が死んだなんて嘘だって言つてよ！！！耕太なんて、まだ六歳なのよ！！？何である子が、あんなに可愛い子が死ななきゃならないのよ！！！」

それは、血を吐くような悲痛な嘆きだった。泣きじゃくりながら、段々と意味の為さない単語を並べるようになったフェリシアを、キアランはそつと膝の上から下ろして、フェリシアの顔が焚き火の反対方向を向くように横たえた。

「お前があつさりグランディールの救世主を了承したのは、そのせいか。もとの世界に戻つても、家族はいないから」

問いかけに、しばらくフェリシアは答えなかった。くすくすんと鼻を吸る音が数回続き、やがて頷く気配がする。

「私、多分、自棄になってました。わけのわからない世界で戦いに巻き込まれて死んでも、それもまあいいか、なんて思っちゃうくらいには」

「お前の家族は、それを望まないと思うが」

「貴方に言われたくないわ」

「……悪かった」

素直に非を認めるキアランに、フェリシアは一瞬驚き、それから自虐的な笑みを浮かべた。

「さっきまで私のことを国ごと騙した悪女だと疑っていたくせに、妙な同情しないで下さい。わかつたでしょう、私は別に、この国を救いたいとか平和に導きたいとか、ご大層な志を持っているわけじゃないんです。むしろ、人間相手の局面ではただの役立たず。殺したいならさつさとやればいいじゃないですか」

「お前こそ、死に急ぐような物言いはらしくないだろう。不本意だが、この世界はお前の世界からみた死後の世界なのかもしれないぞ」

「へ………？」

「記憶がないだけで、お前の家族の魂も、こちらで転生しているかもしれない」

思いがけない言葉にフェリシアはきよとんとした。根拠も何もない言葉だが、それが事実なら彼女は救われる。家族がこの世界のどこかで別の人として生きているなら、フェリシアがグランディールを守ったことは、決して無駄ではないのだから。

「って、一瞬思ったけど、皆がグランディール以外の国の人とか、ましてや魔物なんかになつてたら最悪ですよね」

「あ……」

「言う前に気づかなかったんですか……？」

「う、五月蠅い」

「まあ、いいです。別の世界に転生なんてほとんどありえない話だつてことも、貴方が私を励ますためにない知恵搾っただけなのもなんとなくわかってますから」

「……そうか」

キアランは、がしがしと頭をかいて、フェリシアの方を見た。

「お前が泣いているところ、はじめて見た」

「そりゃ、貴方の前では初めて泣きましたから」

「……だからというわけではないが、お前の話を聞いて疑いが晴れた。最近はお前が二十年も国を騙せるような、狡猾な人間ではないんじゃないかと思つてはいたが」

「し、失礼な」

「すまなかつた」

万感の思いが籠つた謝罪の言葉に、フェリシアは目を丸くしてキアランを仰ぎ見た。琥珀色の瞳には、憎悪も悪意も、気まずささえも浮かんでいない。

「サイトー・ユウカ殿。国のために尽力いただいた貴女に対する数々の暴言と暴挙、許してもらえらるだろうか」

真剣な眼差しで許しを請われ、フェリシアの心臓が早鐘を打ち始めた。なぜか火照る自分の頬に戸惑いながら、フェリシアはぎこちなく頷く。

「た、助けしてくれたし、仕方ないから、チャラにしてあげます」

するとキアランは穏やかに微笑んだ。それから、ふと首をかしげる。「だが、どうにもまだ腑に落ちないことが一つあるんだが……」

「な、何よ、まだ何か因縁つける気ですか？」

「いや、あれはユウカ、お前ではなくて、フェリシアだったんだろ。十二年前、兄上と会話していた話のことだ」

キアランの言葉に、フェリシアはびくりと肩を震わせた。

「あ……そ、それは、そのことなんですけど……」

先程川に流されているうちになんとなく思い出してしまった事実を、おっかなびつくり打ち明ける。

「それ、多分私です」

「何……？」

「さつき流されているときに、何だか覚えのある感覚だなあって思い出したんだけど、私、八歳の頃、深いプール……ええと、足のつかない遊泳所で溺れかけたことがあるんです」

唐突な話にもかかわらず、キアランは黙って続きを促してくる。

「引き上げられたときには意識もなくて、お父さんたちには滅茶苦茶心配かけました。でも私本人は暢気なもので、夢を見てたんです。綺麗なお城で、金髪の王子様とお話した夢。あれ多分、うっかり死に掛けた私がフェリシアさんの中に入っちゃって、当時のオズワルド陛下と話してたんじゃないかなあと」

「……遊泳所というからには、浅いものもあるんじゃないのか？何故わざわざそんな深いところへ」

なんと返したものがわからず、とりあえず気になった点をつっ込んだキアランに、フェリシアは首をすくめた。

「勿論浅いプールもたくさんありましたよ。でも私、運動は得意なのに泳ぎだけがどうしても駄目で、それが悔しくて。深いところに入ったら生存本能が刺激されて泳げるようになるんじゃないかなあって」

「馬鹿だろっ、お前」

「うっ、馬鹿言う方が馬鹿なんですよ、馬鹿殿下ー！」

憤然と言い返すフェリシアに、キアランは頭を抱えた。

「俺はそんな間抜けな顛末に、十二年間もあらぬ疑いを抱き続けていたのか？」

「やーい、馬鹿殿下」

「五月蠅い、馬鹿言うな愚か者め。……名前で呼べばいい」

不意に出された許可に、フェリシアは目を瞬いた。

「キアラン？」

「……なんだ？」

自分で許可を出しておきながら、照れているのかぎこちなく振り返るキアランに、フェリシアは今更ながら頼んだ。

「あの、上、何か着て。目のやりどころに困ります」

「そういうお前は、自分が下着姿なのに気づいていないのか？」

言われて、フェリシアははっと自身の体を見下ろした。着ていたはずの乗馬服は全て剥がされて、彼女は下着姿を晒していた。

「きゃあああああつ！！！何これ！！」

「濡れたままでは風邪を引くだろう。そこに干しておいた」

フェリシアはすぐさま起き上がると、キアランが指差す先に引っかかっていたシャツを掴んで被り、蹲った。

（何、私この格好で上半身裸のキアランの上乗っかって殴ったり詰ったりしてたの！？ありえない、超恥ずかしいんだけど！！！！）

頭から火を噴く勢いで羞恥に悶えるフェリシアを眺めながら、キアランも彼女の求めに応じて干していた自分のシャツに袖を通した。ぐっしょりと濡れていたシャツは、まだ湿っていて冷たい。

「安心しろ、この状況で流石に欲情はできん」

「よ、よくっ……？きつ、キアランの馬鹿！助平！！」

「……何故俺が怒鳴られなきゃならんのだ」

溜息をついたキアランは、外の様子を窺い、勢いの弱まった焚き火に流木を放り込んだ。

「フェリシア。服が乾いたら、外に出るぞ」

「うえええ、もうお嫁にいけない」

「嫁に行く気も予定もないくせに何を言う。……乾くまで時間が掛かりそうだな。お前の話を聞いたからには、俺も何か話した方がいいか？」

キアランの問いかけに、フェリシアは被っていたシャツから頭だけ出して、こくと頷いた。キアランの方から自分のことを話すなど、貴重な機会である。恥ずかしさを忘れるためにも、ぜひともお願いしたかった。キアランは一つ頷くと、燃える焚き火を眺めながら、ぼつりぼつりと話を始めた。

24・人形姫の昔語り（後書き）

主人公の過去編でした。ちなみに今話、一つだけ作者の実体験があります。……泳げないのが悔しくて、生存本能に期待して足のつかないプールに入った拳句おぼれることってよくあるよね……。ない？ 過去話打ち明けてツンデレ王弟殿下とちょっと仲良くなりました。この後キアラン君には大型デレ期が到来する予感。今までが今までだったので、反動がすごいことになるんじゃないでしょうか。

25・憎しみの理由

溪谷沿いの洞窟の中で、キアランは思いつくままに子供のころの思い出話を語っていた。父王が生きていた頃のこと、母が城にいた頃のこと、仲睦まじかった両親の様子、そしてフェリシアとの思い出話。フェリシアは相変わらず湿ったシャツを被ったままだったが、時折共感や驚きを含んだ相槌が返ってきた。やがて話のネタも尽き始めたところで、キアランは一度立ち上がって洞窟の外を窺った。

「川の流れが緩くなってきた。崖の上に登る道もしっかりしている。今夜はここで夜を明かして、明日皆に向かうぞ」

「野宿、か」

「非常事態だ、我慢しろ。誓って手は出さん」

「……わかりました」

あっさり了承され、キアランは眉根を寄せた。救世主役を引き受けたときといい、妙に物分りがいいのが、逆に不安になってくる。というより、もう少し警戒心を持った方がいいのではなからうか。そう言っと、フェリシアはシャツから顔を出して答えた。

「だって、キアランが襲い掛かってきたら返り討ちにすればいいだけだもの。閃光の魔法で」

「……」

別に信頼されているわけではないことにキアランがなんとなく気落ちしている、フェリシアは続けて躊躇いがちに聞いてきた。

「それで、話は戻るけど……あの、言いたくなかったら答えてもらわなくてもいいけど、キアランのお母さんって、どうして離宮にいらっしやるんですか？」

挨拶ぐらいはしたいのに、と表情を曇らせるフェリシアに、裏表があるようには思えなかった。泣きながら家族を返せと迫ってきた必死な様子を見た後で、疑うつもりはない。おそらく人生で一番重大な事柄を話してくれたのである。彼女に報いるため、キアランは今

まで直視を避けていた現実を告げた。

「表向きは、体調を崩して療養のためということになっている。だが、母上が離宮に移されたのは罪を犯したためだ。俺の母は、先の王妃陛下を殺害した」

「オズワルド陛下のお母様を？」

重い告白に、フェリシアが驚きの声を上げた。

「俺とて信じ難かった。しかし状況も動機も本人の証言も、全てそろっている」

キアランはつかの間目を閉じて思い返した。彼の母親と正妃は仲がいいわけではなかったが、対立しているわけでもなかった。オズワルドの母親である正妃は慎ましい、淑女の鏡のような人で、庶民出の側室を目の仇にするようなみつももない真似はしなかった。一方キアランの母親は朗らかな気質で、側室を苛め抜く妃も多い中、王の寵愛を奪った自分を黙認している正妃を立派な女性と認めていた。しかしそれは、表面上のことだったのだ。

「母は、口では王妃陛下を褒めながら、腹の中では邪魔者を憎み殺す卑劣な人間だったということだ。何故か父上が庇い立てして、この話は一般に知られていない上、極刑も免れたが」

淡々と母親を貶めて話していた顔を歪め、キアランは吐き出すように呟いた。城では絶対に口に出来ない本音を。

「だが、それでも、俺はどこかで母上を信じている」
すると、フェリシアがはっと顔を上げた。

「あ……ひよつとして、前に影王妃の間にいたのって」

「そうだ。母の使っていた部屋で、無実の証拠を探していた。あれから十年以上経つというのに、我ながら未練がましいことだ」

「だから、私が何しているのか聞いたらあんなに怒ったんですか。

貴方がお母さんの無実を信じているって、オズワルド陛下に告げ口でもすると思っただから？」

「すまん」

謝罪することで肯定され、フェリシアが心外そうに頬を膨らませた。

「あの時私はあの部屋が何の部屋かも知らなかったし、知っていたとしても告げ口なんかしません。子供がお母さんを信じたいって思うのは当然でしょう」

思いがけないことを言われて、キアランは目を瞬いた。彼の母は王妃を殺した重罪人で、それ庇うような発言は許されるものではないところがフェリシアは、キアランが母を信じたいと言う気持ちを当然のものだと断言する。それは意外なほど暖かな言葉だった。

「というか、オズワルド陛下もそのくらいで怒ったりしないと思いますけど」

もそもそとそんな事を言いながら亀のようにシャツの下に引っ込んでいくフェリシアを見て、キアランの口元に笑みが浮かんだ。そして、昔のように穏やかな気持ちでフェリシアと接していることに、自分で驚く。

(俺も現金だな。昔のようにには戻れないと自分で言っておきながら)そして、遠い昔のことに思いを馳せた。

子供のころは、それほどフェリシアが嫌いではなかった。不気味な人形姫だと陰口を叩かれる彼女を、別に可愛いじゃないか、と思うくらいには。そう思うのは、彼女が抜け殻だったからこそだろう。

「オズワルド様は、正妃様の御子であられますから」

「第一王子殿下に、おゆずりしなくてはなりませんよ」

幼い頃から、いつもいつも、優先されるのは兄だった。それを不満に思ったことはない。妾腹の第二王子が正妃の産んだ第一王子より優先されるなどあってはならないことだと納得していたし、自分なとに優しく接してくれる兄のことも尊敬していた。ただ、母親を除く誰もがオズワルドを重要視し、その母すらも遠ざけられたことが、少し、寂しかっただけで。

「フェリシア、遊ぼう」

「……」

「ほら、花蜜の焼き菓子だよ」

「……」

キアランが話しかけても、何を差し出しても、フェリシアは何も言わず笑わない。けれどもそれは、オズワルドに対しても同じだった。誰もが兄を優先する広い城の中で、彼女だけが兄弟に対して平等だった。それがとても心地よくて、キアランはフェリシアが好きだった。いつかオズワルドとフェリシアがこの国を守り、自分が二人を守れたらいいと、本気で思っていたのに。

「ねえ、お兄さんは、王子様なの？」

十二年前のあの日。初めて聞くフェリシアの抑揚ある声に、氷の手で心臓を鷲掴みにされたようだった。

「王子様は、格好いいねえ」

覗き見たのは、今まで見た事のないような笑顔で、オズワルドと話すフェリシアの姿。年相応に笑う彼女はやはり愛らしく、そして

（フェリシアだけは、僕と兄上を区別しないと、思っていたのに）どこまでも絶望的だった。それでもキアランは、めげずにフェリシアに話しかけたのだ。

「君が僕と兄上を区別するわけがないよね。たまたま喋れるようになったのが、兄上の前だったというだけで。ねえ、僕ともお話ししよう？」

再び魂の抜けた人形となったフェリシアの前で、キアランは何日も懇願した。しかしいくら話しかけようと、フェリシアに声は届かず、その瞳にキアランの姿は映らず、言葉を返すなどもつてのほかだった。

（結局、フェリシアも他のやつらと同じだったのか）

そして、いつしか絶望は深い憎しみへと姿を変えたのだった。

「……兄上を誑かしたのだの、お飾りの救世主だの、お前を嫌う理由は散々言ったが。俺がお前を憎んだ一番の理由は、多分それだ」

懺悔でもするような気持ちでそっと告げたキアランは、違和感を覚えてフェリシアを見下ろした。シャツを被ったフェリシアのほうか

ら、いつの間にかすうすと規則正しい寝息が聞こえてくる、

「おい、そこで寝るか普通！？俺は今、一世代の告白をしたようなものなんだぞ！！？」

「ぐー……」

寝息か腹の音かわからない声で返事をされ、キアランはがくりと肩を落とした。

「貴族の娘が、こんな場所でよく寝られるな……」

呆れながらシャツを捲ってみると、穏やかな寝顔があった。キアランは一瞬その顔に見入って、無言でシャツを戻し再び洞窟の外に気を配る。相変わらず川の流れる音と焚き火の爆ぜる音、フェリシアの寝息以外は何も聞こえなかった。どうやらあの暗殺者たちの生き残りや仲間が追ってくる様子はないようだ。狙いがフェリシアではなくオズワルドだったのか、デイランや兵士達が不屈者を全て捕縛できたのか、あるいは主の元へ逃げ帰ったのかまではわからないが、キアランは僅かに緊張を解いて壁にもたれかかった。すると、疲労の溜まった体に眠気が訪れる。少しだけ、と目を閉じて、彼もまた浅い眠りに落ちていった。

翌朝、洞窟の中に差し込む朝日で目が覚めたフェリシアは、むくりと起き上がった。川の中で散々ぶつけた上、硬い地面の上で寝た体は凝り固まって鈍い痛みを発している。しかし差し込んでくる光と風は徐々に気持ちのいいもので、誘われるように何とか起き上がった。振り返ると燦る焚き火の跡に、すっかり乾いた二人分の洋服、そして少し離れたところで壁にもたれて眠るキアランの姿が目に入る。

（まだ、寝かせておいた方がいいかな）

嫌な記憶を思い出させる黒い焼け跡をなるべく視界に入れないように服を着て、キアランの服は畳んで本人の横に置いてから、洞窟からひよいと顔を出した。見上げれば谷はなだらかな斜面になっていて、すっかり乾けば歩くのに問題は無さそうだ。下方に流れる川の

流れも、昨日に比べると穏やかになってきている。

(体は痛いけど、登れないことはないか。あとは腹ごしらえができると言うことないんだけど……)

何しろ昨日から何も食べていないのだ。先程からぐうぐうと腹が切ない音を立てていた。溜息をついて洞窟に引き返すと、目を覚ましたキアランと目が合う。

「あ……おはよう、ごさいます」

「ああ」

なんとなく気まずい空気が流れ、二人は沈黙した。僅かの間をおいた後、キアランが口を開く。

「……腹の音で目が覚めた」

「し、失礼な、私のお腹の音はそんなに大きくありません！」

「いや、自分の腹の音だが」

「うー……」

フェリシアは唸り、すくと腰を下ろした。

「お腹、すきましたね」

「ああ。川で魚でも獲って食うか」

「獲れるの？」

「魚影を見つければ、突風の魔法で引き上げられるだろう」

「あ、そうか。よし、とっ捕まえて焼き魚にしてやる！」

腕まくりをして洞窟の外へ向かうフェリシアに、キアランが呆れた眼差しを向けた。

「お前、火が苦手なんじゃなかったのか？」

するとフェリシアは思案しながら振り返り、苦笑した。

「まあ苦手ですけど、厳密には、焼け跡が駄目みたいです。家が燃えている現場を見たわけじゃないから」

彼女が家に帰ったころには、家も家族も全てが焼け落ちていた。うかつなことを聞いてしまったかと焦るキアランに、フェリシアは続ける。

「それに、こんな非常事態で気にしている場合じゃないでしょう。」

せつかく拾った命だもの。私は、ここで生きていくって決めたんだから」
そして魚を獲りに出るフェリシアの背中を、キアランは眩しそうに目を細めて見送った。

しかし、二人が魚を取る必要はすぐになくなった。オズワルドの派遣した捜索隊に程なく見つかったのである。

「フェリシア様、王弟殿下、よくぞご無事で！」

「そんなことよりご飯下さい」

捜索隊の若い兵士へ、二人はそろって朝食を要求した。食事の間、オズワルド一行はつつがなく砦に入ったものの、線状では膠着状態が続いているという報告を聞く。そして兵士達に先導され、サナデイスの大砦へと向かったのだった。

25・憎しみの理由(後書き)

今回は少し短め、キアランサイドの過去話を少し。
次回はVSポニファーツ戦、かな？

26・荒野の砦

先導の兵士の後を追い、砦へと向かう道中。フェリシアは揺れる視界にくったりとしながら、本日三度目となる訴えを起した。

「あの、そろそろ下ろしてもらえませんか？」

するとキアランは、少し不機嫌そうに言葉を返す。

「俺に運ばれるのがそんなに不満か？」

「いや、不満というか……」

言葉を濁すフェリシアは、キアランの手で運ばれていた。それも背中と膝裏に腕を回された、いわゆるお姫様抱っこと言う形で。

「子供じゃないんだから恥ずかしいし、もう歩けますから」

ちらりちらりとこちらを窺いながらも、妙な気遣いをしているのか一定の距離を置いて歩く兵士達の姿に、フェリシアは居たたまれない思いだった。

「そう言っつてすっ転んだ挙句、這って進むしかなかった奴が何を言う。俺は早く砦に行つて状況を確認したいんだ。運んでいるのはお前のためじゃない」

「……ごめんなさい」

体が痛いのと足場が悪いのとで動けなくなり、迷惑をかけたのは確かなので、フェリシアはしゅんとして謝った。するとキアランは若干慌てて言いつくろつ。

「いや、その、何だ。俺がいつているのは効率の問題で、お前がどうと言うわけではなく……俺に運ばれるのは嫌だろうが耐えてくれ」とするとフェリシアは、きょとんと小首を傾げた。

「いい年して抱っこして運んでもらうしかない自分が情けなくて恥ずかしいだけで、別にキアランに運ばれるのが嫌なわけじゃないよ？」

「……そうか」

するとキアランは機嫌を直し、改めて正面を向いた。ちなみにその

やり取りの間、先導の兵士達が今にも痴話喧嘩勃発かとハラハラし、結局丸く収まったことに独り者の苛立ちを募らせたりしていたのだが、二人は知る由もない。そんな光景を繰り広げながら一刻ほど歩くと、蛇行する谷間の奥にようやく砦の姿が見えてきた。

「うわあ、絶景だ……」

絶壁の上に建つサナデイス大砦は赤土色の煉瓦を積み上げられた防壁に何重にも囲まれた荘厳な建物だった。岩を削って地下まで作られているらしく、絶壁の所々に小さな窓が並んでいるのが見える。

崖の上に登れば、どこまでも続く赤い荒野と時折地割れのように刻まれた渓谷、そして東には長く尾を引くサナデイス大河が見渡せた。

「あの向こうはもう敵国なんだね」

「ああ。歩けるか？」

「?うん」

フェリシアの呟きに答えたキアランは、彼女の返答に頷くと、そつと地面の上におろす。下ろしてくれるよう頼んでも頑として譲らなかつたキアランを怪訝そうに見上げると、砦の方から微かに人の声が聞こえた。

「お嬢様ー!!!」

風に乗ってまず聞こえてきたのは、メリツサの声だ。目を凝らせば、門から赤毛の少女が走ってくるのが見えた。

「メリツサ!」

離れていたのはたった一日だと言うのに、懐かしく感じる姿を見たフェリシアも、痛む体を庇いながら早足で道を進む。そして二人は、出会い頭にしっかりと抱きあつた。

「お嬢様、ご無事でよかった、本当によかった……!!!」

涙声で何度も主の無事を喜ぶメリツサの姿に、フェリシアは申し訳ない気持ちで赤毛の頭を撫でた。

「うん、私は大丈夫だから、泣かないで。心配かけてごめんね」

「いいんです、無事で戻ってきてくだされば、それで。本当によかつた」

まだくすくすんと鼻をすすっているメリッサを宥めるように彼女の背中を叩きながら、フェリシアは視線を上げた。防壁の門の外にはずらりと並んだ見張りの兵士、その中には苦笑しながらこちらへ歩いてくるオズワルドやデイランの姿もある。

「陛下にデイランさんも、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

メリッサを抱えたまま謝罪すれば、オズワルドは無事でよかったと微笑み、デイランが気にすんなと手を振った。

「兄上、団長、どうしてここに？」

フェリシアが背後の気配に振り返ると、どこか緊張した面持ちのキアランもやってきたところだった。

「お前たちが帰ってくるかと先触れから知らせがあつてな。陛下とメイドのお嬢ちゃんがどうしても迎えに行きたいと言い出して、俺はその護衛だ」

デイランの言葉に頷いたキアランは、オズワルドに向かって堅苦しい一礼をした後、淡々と挨拶した。

「ただ今戻りました。勝手に不在にいたしましたして、申し訳ございません」

「いいや。よくやった、キアラン。フェリシアが川に落ちたときは肝が冷えたからね。彼女を助けてくれて、ありがとう」

「勿体無いお言葉です」

オズワルドの労いに畏まるキアラン。その姿になんとなく違和感を覚えたフェリシアは、長身の彼を仰ぎ見て手を伸ばした。

「キアラン……？」

しかし伸ばした手がキアランの袖口をつかむ前に、横合いから出されたオズワルドの手が強引に割って入ってフェリシアの手首を掴んだ。

「フェリシア、本当に怪我はないかい？ 疲れただろう、ゆっくり休んで、食事もしっかりとるといい」

「え、あ、あの……」

我に返るといつの間にかメリッサは離れた場所で「どうぞあとはお二人でごゆっくり」と言わんばかりの笑顔で手を振っていた。オズワルドは優しく、しかし有無を言わせずフェリシアをの手を引いて皆へと歩き出す。

（顔色が悪いような気がしたんだけど、大丈夫かしら……？）

オズワルドに手を引かれながら、キアランの方をちらりと窺うと、彼はどこか硬い表情でこちらを見ていた。それに気づいたか、オズワルドがフェリシアの顔を覗き込んでくる。

「どうしたんだい、フェリシア？」

「えっ」

「キアランを気にしているみたいだけど、何かあった？今まで呼び捨てなんてしていなかったのに」

オズワルドの柔らかな笑みを浮かべた瞳が、一瞬探るような気配を帯びた気がしたが、フェリシアが瞬くとそれはいつもの穏やかな笑みだった。

「い、いいえ。強いて言えば、長年の誤解が解けた、というか」

「ふうん。長年の誤解、ね。それならキアランの君に対する態度も、少しは軟化するかな」

「だといいんですけど」

フェリシアは答えながら、ふとオズワルドがキアランの誤解の内容を知っていたのか、知っていたのなら何故指摘してやらなかったのか気になったが、話しているうちに門の傍まで来てしまった。

「さあ、皆君を待っているよ。早く入ろう」

「は、はい」

結局聞きそびれたまま、フェリシアたちは皆の門をくぐったのだった。

サナデイス大砦は荒野に建つ砦で、内部や近隣では食糧を賄えないため、補給は最重要事項の一つである。ただ、周囲に何本もの川が流れ、何より「水呼び」という魔法が存在する以上、水に関して

はその限りではない。限度はあれど比較的自由に大量の水を使うことが出来るのだ。フェリシアもその恩恵を受けて、客室の浴槽で体を清めていた。濁流に流され泥だらけだった体を綺麗に洗うと、打撲や打ち身にシャロン特製湿布を張って手当する。そして、メリッサの用意してくれた遅い昼食を食べ始めた。

「コナリー大砦では食堂で食べてたのに、今回はいいのかなあ？」
冷めた料理を口に運びながらフェリシアが呟くと、給仕をしていたメリッサが頷いた。

「今日のお昼にはもう遅いですから。お夕飯は、食堂でお召し上がりになるかと思えますよ」

「と、いうことは軍の偉い人たちと一緒に……」

フェリシアはげんなりとした気分で呟いた。自分がボニファーツ進軍の歯止めになれると大見得を切っておきながら、戦地にいく前に川へ転落して流された拳銃、助けに入った王の護衛共々、一日行方知らずという大失態をしかしたのだ。無理からぬ話ではある。

「アーデン將軍とか滅茶苦茶怒ってそうよね。なまじヴェロニカさんみたいな敵意垂れ流しじゃなくて、理路整然と人の弱みを突いてくるから性質が悪いわ……」

「だ、大丈夫ですよ、お嬢様。將軍閣下は確かにお厳しいですが、公平な方だとも聞いています。お嬢様の有能さを持つてすれば、昨日の事なんてすぐに忘れてくださいますよ」

「う、うーん」

「それに、いざとなればきっと陛下が庇ってくださいます！あんなにも深くお嬢様のことを想って下さっているのですから」

「オズワルド陛下が？」
フェリシアが怪訝そうな顔を見ると、メリッサは御伽話の恋物語に憧れるような顔で力強く頷いた。

「はい！実は陛下が本気でお嬢様を王妃様に望んでおられると、陛下の側近の方が仰っていたんです。内々に、お嬢さまのお耳に入れるように、って。きっと正式な婚約の申し込みもすぐですよ！」

「そう……」

浮かない顔で俯くフェリシアに、メリッサは首をかしげた。

「お嬢様……？何だかあまり気乗りされないようですが、まさか他に想う方がいらっしやるのですか？それなら話は別です、メリッサはお嬢様の味方ですよ！」

「あ、ありがとうございます。でも、好きな人なんて別に」

言いかけて、フェリシアの脳裏に黒髪の青年の顔が一瞬浮かんで消えた。水の中から引き上げて、今朝も抱えて運んでくれた大きな手を思い出し、ぶんぶん頭を振る。

（な、なんでキアランの顔が出てくるのよ！ちよつと態度が軟化したとはいえ……あ、そうか、今まで最低な態度だった人が普通に接してくれるようになったから、すごくいい人みたいに感じただけだよ、うん）

なんだかんだと心の中で言い訳を重ねて平静さを取り戻したフェリシアは、改めて言い直した。

「別に、好きな人なんていないわ」

「そうですか。では陛下とお嬢様の愛にはやはり何の障害もありませんね！」

「いや、陛下のことだって、人としては尊敬してるけど男の人として好きでは……」

フェリシアは言いかけて、口をつぐんだ。十中八九戯れにしろ、オズワルドが何故自分を王妃に、などという冗談を言うのかわからないが、この調子で話が広がっては厄介である。近いうちに妙な話を広めないよう頼んでおこうと心に誓った。

26・荒野の砦（後書き）

前回に続き短めでお送りします。

フェリシアの中でキアランは、映画版ジャ アンみたいな位置づけになってきているようです。普段横暴な奴が真人間になると実際よりよく見える不思議。

あの態度が実は好意からだっ たらかなり切ないですが、まあ王弟殿下の自業自得です。

恐れていた通り、その日の夕食の席はフェリシアにとって針の筵だった。救世主という肩書きと、それに恥じない今までの実績から、直接嫌味をぶつけられることはなかったが、食堂中の兵士達がチラチラと非難がましい視線を送ってくるのが痛い。せめてコナリー大砦の時のように下級兵に混じって末席で食事を取りたかったのだが、今はそれを良しとしない人物がいた。オズワルドだ。

「どうだい、フェリシア？この食事は、君の口に合うかな？」

自分の横にフェリシアを座らせたオズワルドは、満面の笑みでそう聞いてくる。フェリシアの前に広がるのはオズワルドとまったく同じメニューで、辺境の砦ながら贅を尽くした食事の数々が並んでいた。しかしこの情況では、何を食べても味などわからない。

「と、とても美味しいです、陛下」

ぎこちない笑顔で答えると、オズワルドは満足げに頷いた。

「それはよかった。私のおススメは平目のソテーなのだけど、君はどれが好きかな」

「ええつと……どれも素敵なお料理ですから、一つ選ぶのは難しいですね」

無難な答えを返しながらも、フェリシアは居心地の悪さに視線だけさまよわせた。ダリルもアーデン家の上の兄妹もいない今、頼れる知り合いといえればデイルランぐらいのものだが、彼は早々に食事を終えてしまったのか食堂にはいなかった。キアランは近くの席で黙々と食事を続けているが、多少打ち解けたからといって彼を呼びつけるのも気が引ける。後ろで給仕をしているメリッサを、まさか国王と同じ席に着かせるわけにも行かない。

（陛下つて、こんな空気の読めない人だっけ……？）

唯一救いなのは、斜向かいに座るハロルド・アーデン将軍がさほどフェリシアに興味を抱いていない点だろうか。戦う前から失態を犯

した救世主が国王に侍っている図など、四六時中睨みつけられてもおかしくないとフェリシアは思っていたのに、ハロルドと視線がち合うことはなかった。そんな事をつらつらと考えていると、オズワルドの端正な顔がぐいっつと覗き込んできた。

「大丈夫かい？あまり食が進んでいないようだけど」

傍から見れば親密な王と救世主の様子に、周囲の空気が一層刺々しくなった。特に、娘を王の妃にしたがっている貴族階級の将校達からの視線は突き刺さるようだった。フェリシアは「陛下のせいで居心地が悪いです」とも言えず、あいまいに微笑んだ。

「心配をおかけして、申し訳ありません。戦いを前に、少し緊張しているみたいです」

すると、さりげなくオズワルドの手がフェリシアの背中に回された。びくりと震える肩を宥めるように撫で抱き寄せて、オズワルドは囁く。

「心配しないで、大丈夫だ。この戦いは、上手くいけば一滴の血も流さずに終わる。駄目だったとしても、決して君を傷つけさせはしないよ。君は、私の大事なお姫様だからね」

甘い言葉に優しい愛撫。幾度となく贈られてきたそれに、フェリシアは困惑して眉根を寄せた。

「へ、陛下……？」

「そうそう、例の話は聞いてくれたかな？色よい返事を待っているよ」

耳と唇がくつつきそうな至近距離で囁かれ、思考停止しかけていたフェリシアだが、その言葉にはつと我に帰った。

「例の話って、あの、私を王妃様にとって、冗談ですよね……」
周囲に聞こえないようなるべく声を落とすと、落胆したような溜息が振ってきた。ぎよっつとして見上げれば、オズワルドが責めるような目でフェリシアを睨みつけている。

「何度も言わせないでくれるかい？私は、本気だよ」

初めてフェリシアに向けられる、苛立ち紛れの声にぞくりと背中が

粟立った。もつとも、怒りを露にされたのは一瞬の出来事で、フェリシアが瞬きをする間に、あれは幻だったのかと思うほど完璧な笑みをオズワルドは浮かべていた。

「そ、そんな……私が、王妃様なんて、畏れ多いことですから……」
「おや。君ほどの大貴族の令嬢が身分違いなどと言い出したら、私は国の女性の誰とも結婚できないよ？」

「でも、私、救世主のお役目をこなすだけで精一杯で、とても結婚なんて」

「だから、正式な式はいつだっていいんだ。君が望むなら一年後でも五年後でも、十年後だっていい。だから、婚約だけでも、ね？」
ぐいぐい押ししてくるオズワルドに、フェリシアは戸惑いを通り越してドン引きしていた。

（新聞の押し売りよりもしつこいんですけど……なんで陛下、私なんかとそんなに結婚したいかなあ）

その理由はすぐにくつか思いついた。フェリシアに流れる大貴族の血統も、救世主と呼ぶに不足ない魔力も、当代の王が妃に望むには十分な素質だろう。しかしその中に、フェリシア自身が含まれているか聞かれると、どうにも違うような気がした。

（容姿はせいぜい中の上、中身は胡散臭い異世界からやってきた丸っきりの庶民。陛下が私に恋しちゃったってわけでは無さそうなのが、気乗りしない一番の理由なんだけど）

勿論フェリシアとて、王国貴族の世界では恋愛結婚より政略結婚の方が圧倒的多数派で、国王ともなると自由な恋愛など許されないのはわかっていた。しかしだからこそ、尊敬するオズワルドには政治的思惑だけで人を口説いて欲しくないのだ。つまりところフェリシアの我がままなのだが、オズワルドの口上に付き合うのもそろそろ疲れて来た。

「申し訳ありません、オズワルド陛下」

フェリシアの髪に絡んできた指をさりげなく避けて、彼女はなるべく無礼に当たらぬよう丁寧な謝罪と礼と共に立ち上がった。

「用意してくださったお料理があまりにも素晴らしすぎて、今日はこれ以上頂くのももつたいないと存じます。失礼させていただいてもよろしいですか？」

脱走する気満々のフェリシアに、オズワルドはうつすらと笑みを浮かべた。彼が本気になればフェリシアに立ち去る隙などないのだが、オズワルドは見逃すことにしたようだった。

「すまなかった、フェリシア嬢。女性はやはり小食だね。もう下がるといい」

「恐れ入ります」

フェリシアは再度深々とお辞儀をして、居たたまれない食事の席から逃げ出したのだった。

フェリシアは背後にバスケットを下げたメリッサをつれて、よろよると自室へ向かっていた。メリッサの運ぶバスケットの中身は、フェリシアが残した夕飯だ。食事の席から逃げたとはいえ、食べ物を捨てるなどという選択肢は端から存在しない。メリッサに頼んで持ってきてもらった夕飯の残りは、氷結の魔法できちんと冷凍保存されていた。明日の朝、暖め直して食べる予定だ。本来なら無作法とされることだが、国王から直接賜った食事を粗末に出来ない、と理由付けすれば体裁はついた。

「お嬢様、何だかお元気がありませんが、大丈夫ですか？」

気遣わしげなメリッサに、フェリシアは力ない笑顔を返した。

「う、うん、ちょっと精神的に疲れて……」

「そいつはいけねえな、フェリシア嬢。ちゃんとメシ食ってるか？」

そう横合いから声をかけたのは、メリッサではなくディランだった。

「ディランさん、こんばんは。どうしたんですか、そのお酒」

ディランは太い腕に抱えられるだけの酒瓶を抱えていた。フェリシアが尋ねると、ディランは悪びれることもなく答える。

「厨房からかっぱらってきた。これからうちの部下たちと飲み会だ」

「いつ戦闘が始まってもおかしくないっていうときに、いいんです

か？」

「何言つてんだ、明日戦死するかもしれない身だからこそ、今日呑んでおくんじゃねえか」

そう言つて豪快に笑うディランに、フェリシアはうつかり納得しかけ、慌てて頭を振った。

「いやいやいや、おかしいでしょう、酔っ払ったまま戦う気ですか！？」

「おう、俺の酔剣は戦闘態だつて一撃だぜ」

「そんな馬鹿な」

と、思いつつも、昨日の曲者との戦いぶりを見ているフェリシアとしてはあながち冗談ではない気もしてきた。真剣に悩むフェリシアを見下ろし、ディランは苦笑を浮かべる。

「なあ、フェリシアお嬢さん。そんなに暗い顔しているぐらいなら俺たちと一緒に飲まねえか？酒はいいぞ、陽気になつて明日への活力が生まれる」

これ以上ディランが陽気になつても仕方ないのではないかという気はしたが、思いがけない誘いにフェリシアはぐらついた。

「何もとつて食おうつてわけじゃねえ、女騎士だつているからよ。楽しいぞ？」

確かにサークル仲間との飲み会は、酒が入らなくても十分楽しかった。現代日本家庭としては厳格な部類に入る斉藤家の規則を守つて二十歳までは酒を飲まず、二十歳になつてからは酒どころではなかつた優花は、実は料理酒以外のアルコールを摂取したことがない。

一度お酒を飲んでみたい、という気持ちも確かにあつた。

「ええと、正直興味はありますけど。どうしよう、メリッサ？ついでくる？」

メリッサを振り返つて尋ねると、彼女は小さく首を横に振った。

「いいえ、私はお酒、弱いので。先にお部屋に戻っていますので、もしお嬢さまがお望みなら楽しんできてください」

「そっか。じゃあ、あとは任せていい？」

「勿論です。ヘイグ団長様、お嬢様をよろしくお願ひします」
メリッサがデイランに向かって丁寧にお辞儀すると、デイランは鷹揚に頷いた。

「ああ。日付が変わる前にはウチの部下に送らせよう」

「え、何もそこまでしていたただかなくても」

恐縮するフェリシアに、デイランはにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「甘いなお嬢さん、俺が酒を飲ませた奴が素面でいられると思うなよ？」

「え？ええっ!？」

混乱するフェリシアを、デイランは酒瓶を抱えた手で器用に引つ張っていく。メリッサはお嬢さまを引き止めなかったことを若干後悔しながら、その後姿を見送ったのだった。

フェリシアが連行されたのは十人ほどが机を囲める小会議室だった。ただし、その部屋に漂う空気は厳肅さとは程遠い世界である。そこでは既に数人の騎士たちが出来上がっており、空の酒瓶がきちんと整列していた。デイランはそこへずかずか踏み込むと、戦利品である酒を掲げた。

「おおい、てめえら帰ったぞ！」

「お帰り、団長!!！」

「いやっほい!!酒だ酒だ!!！」

「よし、これで飲み比べの続きが出来るな！」

「あんたたち一体どれだけ飲む気!？」

「私の分も残しておいてよね！」

台詞だけ聞いているとこの盗賊団アジトかという騒々しさだが、不思議と下品さを感じない。真っ赤になって陽気に騒ぐ騎士たちの目には、きちんと理性が残っているからだ。フェリシアは気づいた。「それから今日の酒宴は話題の救世主フェリシア嬢が飛び入り参加だ!大事な客だ、くれぐれも酔い潰したりするなよ？」

デイランに軽く背中を押されたフェリシアが進み出ると、騎士たちは歓声を上げた。

「おおーっ、女の子だ！！！」

「私らだつて女だけど？」

「お前らが女の子の範疇に入るかよ」

「あら、どういう意味？」

「お前らは女の『子』なんかじゃもつたいねえ、頗るいい女ってことさ」

「まったく、調子いいんだから」

気の強そうな女騎士と話している軽薄そうな青年は、以前町で捕物をした際キアランと軽口を叩いていた騎士だ。他にもどこかで見かけた顔がちらほらある。

「フェリシア・チエンバレンです。よろしく願います」

思い切つてぺこりと頭を下げれば、騎士たちは陽気に迎えてくれた。一通り名乗り終わった後、机の中央に陣取っていた二人の女性騎士が間に入れてくれる。

「突然お邪魔してしまつてすみません」

「いいのよー。噂の救世主様と一緒に飲めるなんて光栄だわ」

ほんのり酒で頬を染めた女騎士は、あでやかに笑った。

「こちらこそ、むさい男達ばかりのところでごめんなさいね。フェリシアさんとお呼びしても？」

「はい、もちろん」

反対側に座る穏やかそうな女性騎士に頷くと、彼女は可憐な笑顔を浮かべてフェリシアの前にずらりと酒瓶を並べた。

「フェリシアさんは、どのお酒がお好み？」

「え、ええっと……私、お酒は初めてなので、まずは甘口の弱いお酒から試してみようかと……」

「そう！弱いの中から順番に己の限界に挑戦するのね！待ってて、今並べ替えるから、端から順に飲んでいくといいわ！」

「あ、あの」

「ギブアップしても大丈夫よ、残りは私たちが全部飲むから！」
良い笑顔で言い切られ、フェリシアは沈黙した。

(酒飲みが飲ませたがるって本当だったんだ……)

とはいえ、別に飲酒を強要されているわけでもない。渡された果実酒は冷却の魔法で程よく冷えており、飲みやすく美味だった。

「美味しいです」

「でしょう?」

正直な感想を言うと、女騎士は嬉しそうに笑う。こちらもつられて笑顔になると、周囲の男性騎士たちが羨ましげな目で三人を見てきた。

「おいお前ら、女だからってフェリシアちゃんを独占するとはどう
いうことだー」

「そうだそうだ、俺たちにも救世主様とお話させろー」

「こつちにはつまみもあるぜ、フェリシアお嬢さん」

中年に差し掛かった遅い体躯の騎士が、つまみの乗った皿を差し出してくる。フェリシアは礼を言って、塩の効いたチーズにハム、骨までカリカリに揚げた小魚など、少しずつ分けてもらった。夕食が少なかつたせいも、酒もつまみもどんどん進む。幸いフェリシアは酒に弱いということもないらしく、ほんのりいい気分でだんだんと騎士団にも打ち解けてきた。

「そういえば、こちらには騎士の方全員が集まっているわけじゃないんですよね」

その最中、不意に気になったことを聞いてみると、軽薄な青年騎士が頷いた。

「ああ、籤に負けた奴らは皆待機部屋だよ。流石に近衛騎士全員が酔ってちゃ格好がつかねえしさ」

「じゃあ、副団長さんも待機中なんですね。お会いしたことないし、一度ご挨拶しておきたかったんですけど」
すると、部屋の中がしんと静まり返った。

(あれ?私、何かまずい事言った?)

しかし部屋の空気はフェリシアを責めているというよりは、答えに窮しているような雰囲気だ。フェリシアがおろおろしていると、デイルンが話を切り出した。

「別にお嬢さんがへマしたわけじゃねえさ。ごめんな、妙な空気にしちゃって。近衛騎士団の副団長は、現在空席なんだよ」

空席というからには副団長という役職が存在しないわけではなく、適任者がいないということなのだろうか。フェリシアが考えていると、団長が答えたことで話してもいいと判断した団員達が教えてくれた。

「まあ、実質キアランが副団長みたいなものだけだな」

「王弟殿下が？」

「そうそう、俺たちの中で団長と互角にやりあえるのは、あいつだけだし」

フェリシアが目を瞬くと、騎士たちは次々に頷いた。

「団長じゃあ気の回らない事務仕事も率先してやってくれるし」

「助かるわよね」

「本人の前では絶対言わないけどな」

「うんうん」

頷きあつ団員たちに、フェリシアはますます首をかしげた。能力があつて、仲間達の信頼も得ているようなのに、キアランは何故平の騎士を続けているのだらう、と不思議に思っていると、これもデイルンが答えてくれる。

「俺としては、団長の座をキアランに譲って隠居してもいいと思っ
ているぐらいなんだが。あいつは頑として偉くなりたがらねえから
なあ」

その根本的な理由はキアランが王位継承権を放棄したものと同じだと、なんとなくフェリシアにもわかった。敬愛する兄の陰に隠れるために、なるべく下っ端でいたのだらう。

（本当に陛下が大事なら、さっさと偉くなって助けてあげた方がいいと思うけど）

それはこの場にいる騎士達全員の思いでもあるらしく、出来の悪い兄弟を思つように、みんな仕方無さそうな苦笑を浮かべている。すると真面目な空気を打ち払うように、ディランが膝を打った。

「まあ、マジな話よりは馬鹿騒ぎしようじゃねえか。おい誰か、酒の追加持つて来い！」

その言葉を皮切りに、酒宴はまた元の騒がしさを取り戻した。ディランが話す面白おかしい話に団員達の一発芸、女騎士たちが歌う流行歌を肴に、部屋には空の酒瓶が増えていく。初めはどこか遠慮のあつたフェリシアも、酒が入るにつれて皆に混じって陽気に笑い、歌を披露し、ついには騎士たちと飲み比べをすることになった。

「いやあ、酒も強えな救世主殿！吐き気とか頭痛とかしないのかい？」

「んー、何だか幸せな気分がするだけで、大丈夫ですよー」

ニコニコと上機嫌で高アルコールの酒を飲み干すフェリシアを、団員たちは畏怖と尊敬と対抗心の目で見つめた。やがて一人、また一人と酔いつぶれ、いつの間にか全ての騎士たちが撃沈した頃だ。コンコン、というノックの音と共に会議室の扉が開いた。

「団長、お楽しみのところ申し訳ありませんが、報告……って入ってきたのはキアランだった。この部屋で酒盛りが行われていることは知っていたらしく、部屋に入った瞬間は平然とした顔をしていたが、フェリシアと目が合うと驚きも露に目を見開く。

「フェリシア、何でお前がここに！？」

「んー、なんか、団長さんについてきちゃった！」

フェリシアが非常にいい気持ちでにつこり笑って答えると、キアランは一瞬固まり、次にぎこちない動きでディランを振り返った。

「団長、コイツに何杯飲ませたんですか……？」

「俺が付きつ切りでいたわけじゃねえんだ、本人に聞いてみればいいだろう」

すると、フェリシアは直接聞かれてもいないのに杯を掲げ、胸を張って答えた。

「お酒、たくさんのだのー」

精神年齢が逆行しているとか思えない言動のフェリシアにキアランは顔を引きつらせ、彼女の周りに無造作に転がる酒瓶と、酔い潰れて撃沈している団員達を見回した。

「まさかこれ、全部お前が潰したのか……？」

すると、部屋の隅で死体のように転がっていた団員達の中から、辛うじて意識のあった一人が立ち上がった。

「いいや……まだだ、まだ俺は戦れる……勝負だ、救世主……！」
近衛騎士団の中ではデイランの次に酒に強い中年騎士である。彼が酔い潰れているところなどキアランは見た事がなかったが、このまま勝負を続ければ勝敗は明らかだった。

「馬鹿者、限度を考えないか！」

思わずキアランがその騎士の頭を殴り倒すと、彼はがくりと倒れて動かなくなった。

「それで、キアラン。報告とやらを聞こうか」

しかしデイランは何事もなかったように促してくる。意識を失った騎士たちの中で、フェリシアは幸せそうな笑顔を浮かべて酒を煽っていた。キアランは深い溜息と共に色々なことをあきらめ、上司に報告を開始した。

「昨日俺たちを襲った暗殺者が死にました。拷問官が目を放した隙に自害したと」

一応フェリシアには聞こえないように声を落とすと、デイランは眉間に皺を刻んで舌打ちした。

「まったく、死なせるなど言っただるうに。わかった、一度状況を聞いてくる」

「アーデン将軍も先に拷問部屋へ行っています。目をつけられないようお気をつけて」

「けっ、誰に物言つてやがる。こいつらじゃねえんだ、勤務時間外に酒を嗜んだ程度で潰される俺様じゃねえ」

デイアランは素面のようにしなやかに立ち上がり、会議室を出たと

ここでちよつと考え、後からついてくるキアランを振り返った。

「ああ、そうだ。お前、フェリシア嬢を部屋まで送ってやれ」

「俺がですか!？」

「お前が最後の一人を申しちまったんだ、しょうがねえだろう」

指摘されて返答に詰まるキアランを置いて、ディランはさっさと廊下を歩いて行ってしまった。キアランは仕方なく会議室に戻り、ご機嫌で酒を飲むフェリシアに近づく。

「あー、キアランだ。飲むー？」

その姿を認識すると、フェリシアは満面の笑みで並々と酒の注がれた杯を差し出してきた。

「いや、俺はいい」

可憐な笑顔に思わず高鳴る胸を押さえて頭を振ると、フェリシアの目が釣り上がった。

「なんだとー、きゅーせいしゅさまのお酒がのめないのかー!」

「城ならともかく、戦地で酒が飲めるか。ほら、くだを巻いてないで部屋に帰るぞ」

「やだー、もつと飲むのー」

酒瓶に抱きついて駄々を捏ねるフェリシアは、まるで聞き分けのない子供だった。それでも引き剥がそうとすると、フェリシアはきつとこちらを睨み上げる。

「おーてーでんかであろうものが、人のものをとるとは何ごとですか!そこにすわりなさい!いいですか、そもそもおさけというのはげんせんされたそざいにしょくにんさんのたましいがこめられうんたらかんたら」

基本笑い上戸のようだが、相手の反応が気に入らないと説教モードに切り替わるらしい。面倒な、と呟いたキアランは、ついに降参と両手を挙げた。

「わかったわかった、あと一杯だけなら付き合っから、それ飲んだら部屋に帰るんだぞ。約束できるか?」

「うん」

孤児院の子供たち相手の感覚で言い聞かせると、フェリシアは素直にこっくりと頷いた。そして、酒の入った杯をぐいぐいキアランに押し付けてくる。

「まったく、これが昨夜、あんなに真剣な顔で話していた娘か……」
呆れ半分で杯に口をつけ、キアランは思わずむせ返った。

「な、何だこのきつい酒。火酒か!？」

「おいしーよ?」

どちらかといえば酒に弱いキアランにとって一口飲むだけでも苦痛に感じる酒を、フェリシアは実に美味そうに飲み続けている。キアランはそれでも半分ほどを何とか飲み、体面は保ったとばかりに中身をこっそり捨てた。にもかかわらず、体が火照って頭がくらくなる。やや覚束ない足元で立ち上がり、丁度一杯飲み終わったフェリシアに手を差し出した。

「ほら、もういいだろう。部屋に戻るぞ」

「んー」

酔っついても約束は守るつもりらしく、フェリシアは素直に手を重ねてきた。そして椅子から立ち上がり、そのままくらくらと後ろに倒れる。

「おい、フェリシア!？」

なんとか抱きとめたものの、キアランとて酒の入っている身だ。足をもつれさせて無様に転び、二人は床の上に転がった。絨毯のおかげで二人とも怪我はないが、泥酔しているフェリシアとふらついているキアランでは、起き上がるのも一苦労だ。

「?????」

何が起こったのかわかっていないのか、フェリシアはほんのり赤らんだ顔と潤んだ瞳で、自分に覆いかぶさるような体勢のキアランをきよとんと見上げている。

「っ……こんなところ、兄上に見られたら……」

思わずキアランは呟いて青ざめた。そして夕飯の後、オズワルドに呼び出されて言われた言葉を反芻する。

「ねえ、キアラン。お前は反対するだろうけれど、私はやはりフェリシアを王妃にしたいな」

「……彼女は、あまり乗り気ではなかったようですが」

夕食の席で、明らかに困惑していたフェリシアの様子を思い出しながらキアランが答えると、オズワルドはおやと呟いて微笑んだ。

「フェリシアが王妃に相応しくないとはい、もう言わないのだね。けれど、ねえ、わかるだろう？ 私は王だ。婚約もしていない貴族の娘が、王の求婚を断ることが出来るとでも思っているのかい？」

噛んで言い含めるような言葉が、脅しめいて耳に響く。

「私はこの戦いが終わったら、正式に彼女へ婚姻を申し込むよ」

その言葉が、最後通告のように聞こえるのは何故だろう。理由はなんとなくわかつていのに、キアランはただ頷くしかできなかった。

(フェリシアが兄上の求婚を断る術などない。だが、王といえど、既に相手のいる娘に横恋慕は出来ない)

少し手を動かせばすぐ傍に、若い娘特有の柔らかで張りのある体の感触があった。昨日下着姿を見て知った、意外に豊かな胸元や、荒い息遣い、ほんの少しだけ高い互いの体温に、ぐらぐらと理性が揺れるのは、はたして酒のためだけか。

「キアラン……？」

名前を呼ばれ、幼い頃から見てきた顔や、今朝からようやく自分にも向けられるようになってきた笑顔がちらついた。それに背中を押されて、ほとんど無意識にフェリシアを組み敷き太股から腰を撫で上げる。

「ひぁ!？」

衣擦れの音に混じり思いがけず甘い声を上げられて、誘われるように胸元をまさぐり首筋へ唇を近づけた。このまま自分の物にしてしまえば、いくら兄王といえど手は出せない。

「っー」

その瞬間、キアランは弾かれるように体を起した。

（俺は今、何を考えた！？）

多少酔っつていようと、オズワルドが王妃に望む娘を手籠めにしようなど、キアランが考えるはずなかった。相手がフェリシアでさえなければ、だ。本当はずっと昔からわかっていた。そうでなければ、そもそもフェリシアがオズワルドとだけ話したくらいで、あんなにも憎めるわけがないのだ。

「フェリシア、俺は、お前を」

その先は言えるはずもない。口をつぐんだキアランを不思議そうに見上げるフェリシアの目は、とろんと半分閉じられている。襲われかけたにもかかわらず、フェリシアはそのまま気持ち良さそうな声を上げて、眠りに落ちた。

「……だからお前は警戒心が足りないというんだ」

キアランは疲れた声で呟き、何とか立ち上がるとフェリシアを抱き上げた。

「愛しているだなんて、今更言えるか」

彼女を散々傷つけたことを後悔しながら囁かれた言葉を、聞くものはいなかった。

27・酒宴（後書き）

王弟殿下自覚するの巻。次は戦闘シーンだなんて嘘をつきました、ごめんなさい。そのかわりについにR15相当エロ？入れたので許してください。

本来、酒宴は戦闘が終わった後の予定だったんですが、陛下にかの有名な死亡フラグを言わせたくて先に回しました。いや、別に陛下死にませんが。おそらく。

あと、お酒は勿論二十歳から、二十歳過ぎていても初めて飲む人は少量から始めましょう。決してフェリシアさんの真似をしてはいけません。真似をしてアル中になっても作者は責任とりません。

翌朝は昨日に引き続き快晴だった。先日まで続いた雨が嘘のようにさわやかな空の下、フェリシアは思い切り伸びをした。

「うーん、やっぱり天気の良い日は気持ちいいね。これでここが戦場じゃなければ最高なんだけど」

昨晚高濃度のアルコールを大量に摂取したにもかかわらず、彼女は二日酔いとは無縁のさわやかな笑みを浮かべていた。

「……それはよかつたな……」

その隣では、キアランが青い顔をして力なく呟いた。二日酔いと、昨夜の愚行と、自責の念、寝不足、その他諸々の理由により、戦う前から落ち武者のような表情になっている。

「大丈夫、キアラン？ シャロン先生の薬いる？」

無言で手を出してくるキアランの手のひらにシャロンの胃薬を載せてやりながら、フェリシアは申し訳無さそうに息をついた。

「ええと、まったく記憶がないんだけど、私がお酒飲ませた挙句、ぶっ倒れた私を部屋まで運んでくれたとか。ご、ごめんなさい、ありがとうがとね？」

「……いいや、気にするな」

苦い薬を噛み砕いて嚥下しながら、キアランは唸るように答えた。彼としては出来ればこのまま、フェリシアには昨夜のことを忘れたままでもいいのだ。ただでさえ、部屋に運んだときにフェリシアの侍女から「ウチのお嬢様に何しやがった」と言わんばかりの鬼の形相で睨まれ、不覚にも足が震えるほどの恐怖を味わったばかりなのだ。本人に知られようものなら生きた心地がしない。本来ならこうして話をしているだけでも気まずいのだが、律儀に謝罪と感謝を告げるフェリシアを無視するなど、それこそんでもないことだ。

（俺の阿呆……）

キアランは深い溜息と共に自分を罵倒した。

「あ、あの、やっぱり何か怒ってる？」

「そんなことはない」

多少脅えながら小首を傾げて覗き込んでくるフェリシアは、どんな美女も霞むほどに可憐だというのに、まともに目も合わせられないとは情けないやら勿体無いやら、ひたすら自己嫌悪で悶々としているキアラン。

「じゃあ、何でこっち見ようとしてもしないんですか」

少し頬を膨らませて丁寧語口調になる彼女も、それはそれで可愛いキアランは何を考えても「フェリシア可愛い」にしか行き着かない思考を無理矢理正常に働かせようとし、

「寝違えてこちらにしか首が向かないんだ」
無様に失敗した。

「な、何もそんな見え透いた誤魔化し方しなくても！さっきまで普通に前向いてましたよね！？」

案の定、フェリシアが全力でツツコミを入れる。やがて彼女は溜息と共にそっぽを向いた。

「はあ、もういいです。砦に来たとき何か顔色が悪かったから、ちよつと心配したのに」

最後の方はぼそぼそと話すフェリシアの言葉に、キアランは思わず振り返った。俯き加減で落ち込んでいる様子のフェリシアに、嬉しさや申し訳なさと同時に焦りを覚える。

（見られていたのか）

昨日キアランたちを出迎えたオズワルドと目が合った瞬間、兄に睨まれた気がして、思わず戦慄した一瞬の表情をフェリシアに見られていたらしい。

「だから昨日、俺を元気付けようと酒を飲まそうとしてきたのか？」

「そうだ！覚えてないけど、きつとそう！」

すると、二人の後ろからさりげなくオズワルドが近づいてきて会話に混じった。

「ふうん……フェリシア、夕飯は早めに切り上げたわりに、騎士団

の酒宴には参加したのだった?」

オズワルドはあくまでも優しい笑顔と口調にもかかわらず、フェリシアとキアランはそろって青ざめながら王の方を向いた。そんな二人を救ったのは、傍で話を聞いていたディランだった。

「国王陛下、フェリシア嬢を酒盛りに誘ったのは俺ですよ。何か問題ございましたかね?」

「……いいや。戦場に慣れない彼女を気遣ってくれて助かったよ、ヘイグ団長」

「寛大なお言葉、ありがとうございます」

ディランは畏まった後、まだ固まっているフェリシアたちにも顔を向けた。

「お前達、楽しくおしゃべりもいいが、ここは敵地の目前だぞ。もう少し気を引き締めていけ」

その言葉に、フェリシアは息を呑みキアランが背筋を伸ばす。四人は近衛騎士団の総員に囲まれ、背後にはハロルド將軍率いる大軍を従えて、サナデイス大河の中州の西側にいた。裂け目だらけの荒野を両断する大河は対岸が見えないほど幅広で、過去何度も戦場になったという中州は小さな島ほどの面積がある。平らな中州の東陣営には、軍隊がそろっているのが遠目に見えた。あの先頭集団の中に、皇帝ゼルギウス・ボニファーツがいるはずだ。

「正直、あの皇帝陛下がこちらの提案を呑んでくれるとは思っていなかったのだけどね」

東に広がる軍勢を眺めながら、呟くようにオズワルドが言った。今日ここで行われるのは戦闘ではなく、話し合いである。オズワルドとゼルギウスによる会談の申し入れが、昨日先方から承諾されたのだ。

「そんなに直情的な人なんですか?ボニファーツの皇帝陛下って」
フェリシアが尋ねると、オズワルドは東の軍勢を見据えたまま頷いた。

「私は直接お会いしたことはないけれど、とにかく何でも武力で解

決したがる御仁らしい。この話に乗ったのも、自分は影武者を立てて、私を暗殺するのが狙いだというのがアーデン将軍の見立てだ。私もその危険は十分あると思う。いざとなったら君の障壁の魔法を頼りにしているよ、救世主殿」

「はい」

昨夜の空気を読まず口説いてくるオズワールドとは違い、今の理知的な彼はフェリシアが役に立ちたいと思った国王の姿そのものだった。フェリシアはぺちぺちと頬を叩いて気合を入れる。

（私の出番はたぶんここだけなんだから、しつかりしなきゃ）

一応銃杖は持ってきたものの、オズワールドならば乱暴な皇帝などすぐに言いくるめられる。そして自分たちも相手の方も血を流さずに帰れるのだと、このときのフェリシアは無邪気に信じていた。

会談の会場は中州の中央に設置された巨大な天幕だ。外は両軍の兵士が囲み、中にはオズワールドとゼルギウスの精鋭近衛が十数名、にらみ合うように左右に分かれてずらりと並ぶ。そして中央に設えられた即席の玉座に、それぞれの元首が向かい合って座っていた。玉座の右後ろに、キアランとデイランに挟まれて立つフェリシアは、目深に被ったフードの奥からちらりと皇帝を盗み見た。

（デイランさんが戦闘熊みたいな人なら、この人は火獅子みたいな人だな……）

火獅子は燃える炎の鬣を持つ猛獣の魔物だ。皇帝ゼルギウスは六十代という年齢もあり、体格はデイランにやや劣るものの、筋骨隆々とした体躯をぎらつく鉄の甲冑に包み、眼光は猛禽類のように鋭い。いかにも歴戦の猛者といった風格の皇帝に対して、オズワールドは準正装の華やかな衣装を纏っていた。見るからに正反対の二人の統治者は一時無言で向かい合っていたが、会談を申し出た側であるオズワールドが口火を切った。

「お初にお目にかかる、私がグランデール国王オズワールドだ。本日
の会談を快諾していただいたこと、感謝する」

「ゼルギウス・ボニファーツだ。敵の感謝などいらん」

皇帝だと言う必要もないと言いたげに刺々しい言葉に、キアランの眉間の皺が濃くなった。フェリシアが内心ハラハラしている、ゼルギウスはちらりとこちらを見遣った後、立ち上がって威圧的な目でオズワルドを見下ろした。

「グランディールの国王陛下は人形遊びがお好きとの噂は本当のよ
うだな。人形の小娘に身を守らせる腰抜けの王よ、戦わずして降伏
するという話なら聞いてやらんこともないが？」

「……！」

あからさまな侮辱に、キアランが息を呑み、剣の柄に手を伸ばした。

「キアラン！」

フェリシアが止める前に、オズワルドの鋭い声が飛ぶ。

「これしきのことです手を出すな。この会談を用意するために動いて
くれた者達の努力を無に帰すつもりか？」

「申し訳、ございません」

ゼルギウスは悔しそうに顔をゆがめて謝罪するキアランへ目を向け、
せせら笑った。

「お前が王弟だな。腰抜け王陛下は弟のしつけも満足にできんらし
い」

「失礼した、ゼルギウス殿。私は貴殿と違って弟が唯一の家族なの
で、どうしても甘くなってしまう。子宝に恵まれた貴殿が羨ましい
ことだ」

オズワルドの切り返しは一見無難な言葉だが、そこには痛烈な皮肉
が込められていた。ゼルギウスの子供たちは彼が認知しているだけ
で十人を軽く越えている。しかしその多くが覇権を争って内部でい
がみ合っており、決して後継者に恵まれているわけではないのだ。

「フン……」

ゼルギウスは流石に怒りのまま喚き散らすことはしなかったものの、
明らかに気分を害した様子で席に着いた。対するオズワルドは余裕
の笑みだ。

(これから会談だつていうのに、神経逆撫でしていいのかなあ……)
フェリシアがそんな事を考えながらキアランの方を窺うと、彼は「
兄上格好いい」といわんばかりの表情で顔を輝かせている。会談の
席で弟のために嫌味を言い返すオズワルドといい、キアランといい、
この兄弟は根本的にブラコンであった。

(まあ、私だつて耕ちゃん馬鹿にされたら黙っちゃいけないけどさ)
自身もブラコンの自覚はあるフェリシアは胸のうちで呟いて、再び
視線を前へと戻した。

「残念ながら、私たちは降伏するために会談にお招きしたわけでは
ない」

「ならば、交渉は決裂だ。帰らせてもらおう」

早々に立ち上がるうとするゼルギウスに、オズワルドはあくまでも
ゆつたりと話を続けた。

「そこまで急ぎ戻らなくてもよろしいだろう、ゼルギウス殿。も
っと視野の広い、先の話をしようではないか」

「先の話だと？」

ここで話を蹴ればさも狭量だといわんばかりの言い回しに、ゼルギ
ウスはしぶしぶ聞き返す。

「そう、人の四国いずれかが人同士の戦いに打ち勝ち、国家統一を
成し遂げたところで、その国に北の魔物と戦う力が果たして残って
いるものか。今こそ人は団結し、グランディール初代国王の時代の
ように魔物を滅するとき」

「何を言い出すかと思えば、馬鹿馬鹿しい。四国が手を組むだと？
互いに流された血の歴史を、知らぬわけでもあるまい。今更手を取
り合うことなど出来るものか」

「いいや、不可能ではないと私は考えている。そもそも近年、人の
国同士では死人が出るような規模の戦闘は少ないだろう。禍根の少
ない今なら同盟の実現も」

「禍根は無くなったわけではない。家族を、友を、愛するものを殺
されて、殺し返せとこの血が叫ぶ限り、我らは殺し続ける。それが

ボニファーツの正しい姿だ」

物騒な宣言ではあったが、それは紛れもなく一つの国の総意を伝える統治者の言葉だった。ゼルギウスは鋭い眼光をオズワルドへと向け、冷たく問いかける。

「そもそも、背中に大軍をちらつかせて平和の使者面とは恐れ入る。本当に和平を望むなら、身一つで来るべきではないか、オズワルド殿？」

そして、オズワルドに反論の隙を与えず天幕を出た。こうして一方的に会談が終わりを告げると、ボニファーツ側の騎士たちが小声でざわめき始める。

(なんだか統一感のない人たちだなあ……)

ゼルギウスの態度は嘗てのキアラン並みに鼻についたが、皇帝と呼ぶに相応しい威厳と風格も備えてもいた。それに比べて、皇帝を護衛する騎士たちは精鋭というには疑わしい。会談の間中フェリシアや女性騎士をにやついた顔で眺めていた下品な騎士や、背中に負った剣につぶされてしまいそうな少年まで混じっている。どういふことかという疑問は、皆に戻る道程であきらかになった。

「ああ、彼らはボニファーツの皇子たちだろう」

会談が終わり、天幕が片付けられるのを横目にしながら、ディランが教えてくれた言葉にフェリシアは驚いた。

「皇子様!？」

「こつちだつて王弟のキアランが騎士として参加してたんだ、別に不思議なことじゃねえだろ」

「それは、そうですね……あのいやらしそうな人や、十歳になつてるかどうかつて子も、みんな皇子様なんですか？」

「おそろくな」

頷くディラン。

「帝国には、十……あー、何人だったか、殺されたり追放されたり新しく生まれたりでしょつちゆう数が変わるが、とりあえず正統な帝位継承権を持つ皇子皇女は十人以上いる。一応長子が第一帝位継

承者ってことになってはいるけどよ、ボニファーツは軍事主義だからな。主要な戦で功績を挙げれば、第二子以降でも帝位を狙えるってことらしい」

「だから玉石混合だったんですね……」

逞しい武人からなよなよした変態に子供までそろっていた相手方の騎士たちを思い出し、フェリシアは呆れたように呟いたのだった。

一方その頃、ボニファーツの陣営では、ゼルギウスが軍師と話し合い、というより一方的な命令を下していた。

「グランディール軍に奇襲をかけよ」

冷徹な声を響かせる主君に、軍師は一応諫言を試みた。

「陛下、我が軍は既に皆への帰還を始めています。ここで命令変更となると、現場が混乱し味方にも大きな被害が出る可能性がございます」

「だからなんだというのだ。その程度で死ぬ弱小兵などいらぬ、寧ろ進んで殺してしまえ」

過激な皇帝に軍師はもはや口を挟む余地もない。

「それに最近、息子たちの中で余の命を狙う者も出てきたようだ。

ついでにそれらも始末せよ。上手くすればグランディールの王と救

世主、国内の反逆者を纏めて掃除できる」

「……御意に」

愉快そうに笑いながら、部下を、息子を殺せと命じる皇帝に、軍師は深々と頭を下げた。

そして、場所は再びグランディールの陣営に戻る。天幕を片付け終わったところに、撤退したと思われるボニファーツ軍から矢を射掛けられ、兵士達の悲鳴が響いた。

「て、敵襲……!」

「相手は全軍……!ボニファーツの全軍がこちらに向かってくるぞ!

……!」

グランディール側とてまったくの無防備ではなく、奇襲の警戒もしていたが、それは少数部隊相手の想定だった。

「落ち着け！動揺しては敵の思う壺だとわからんか！！」

想定外の敵影に浮き足立つ兵士達をいち早く諫めたのは、ハロルドだった。

「全軍、迎撃の構え！！国王陛下と近衛騎士団の逃走経路を確保せよ！！！！第一部隊正面、盾を持って！！第二部隊、左翼より敵の刺客に入り、槍を見舞うのだ！！」

的確な將軍の指示に、恐慌状態に陥りかけていた兵士達もすぐさま立ち直り、指示通りに動き出した。しかしボニファーツ軍はもはや、その姿がすっかり視認できる位置まで接近している。雨のように降り注ぐ矢の中、一人、また一人と兵士が倒れ始めた。

「国王陛下、フェリシア嬢、こちらへ！」

混乱の中、フェリシアは防壁を展開しながらディランの誘導に従い走っていた。真後ろに迫った怒号に振り返ると、目の前で兵士が矢で貫かれて倒れる。

「ひっ……！！」

「止まるな！」

息を呑み、思わず立ち止まりかけるフェリシアの肩を、人ごみの中から現れたキアランが抱きかかえるようにして引っ張る。

「キアラン、人が……！助けなきゃ」

「こんな数、例えお前でも何ができる！今は自分の身と兄上を守ることだけ考える！」

正論に唇を噛み締めたフェリシアは、キアランに腕を引かれてオズワルドたちのあとを追った。時折飛んできた矢を魔法で叩き落しながら、後ろで聞こえる悲鳴には耳を塞ぐ。四人はどうか川岸へ渡る船着場まで逃げ延びて、戦場を振り返った。

「ちっ、通りで方向転換が早いと思ったら、味方を巻き込んでもお構いなしだよ」

ディランが後ろを窺い、忌々しそうに舌打ちする。フェリシアは使

うと思っていなかった銃杖を強く握り締めた。

「心苦しいが、戦場は將軍に任せて私たちは皆へ戻ろう。残りの兵力ですぐに助けに向かわなくては」

オズワルドが静かな怒りを燃やししながら、デイランの手を借りて小船に乗り込んだときだった。

「させるか!!」

刺客の木立から、剣を構えた少年が飛び出してきた。狙うのはオズワルドだ。

「だ、駄目え!!!」

障壁を展開したのでは間に合わない。とつさに判断したフェリシアは、銃杖の引き金を立て続けに引いていた。閃光弾が飛び交い、少年騎士の手足を正確に打ち抜く。

「ぎゃあああつ!!」

悲鳴を上げて倒れこんだ少年は、十代の半ばほど。会談の場にいた騎士の一人だった。

(まさか、この子も皇子様……?)

フェリシアが倒した相手を呆然と見下ろしていると、同じ木立から更に小さな影が飛び出してきた。

「兄上え!」

まだ幼い少年の声が、泣きそうになりながらそう呼んだかと思うと、血を流して倒れる騎士の横に膝をつく。会談の場で背負った剣につぶされそうになっていた、一番小さな騎士だった。今はその剣も背負ってはおらず、兄と呼んだ少年の傍らでぼろぼろと涙を流している。

「兄上、兄上、死んじやいやだ……!!」

「クルト……出てくるなって言っただろ、逃げる!」

クルトと呼ばれた少年は、兄の言葉にふるふるとう首を振ると、ガタガタと震えながら兄の前に立ちはだかり、彼を庇うように腕を広げてフェリシアを見上げた。

「おねがい……あにうえをころさないで……」

もとより、命までは奪うつもりはなかったフェリシアだ。おまけに、どこか死んだ弟を髣髴させる可憐な少年に、上目遣いでお願いなどされたらこちらが謝りたくなってくる。キアランを窺うと、彼もこの兄弟を見逃すつもりらしく、好きにしろと頷いた。

「二人とも殺すつもりなんかないよ。ええと、やった私がいうのもなんだけど、お兄さんの怪我、早く手当てしてあげてね」

その言葉に兄の方はフェリシアを睨み、弟の方はきよんとした後満面の笑みを浮かべて頷いた。

（何この子、反応がすごく耕ちゃんに似てる！可愛い！！）

できるものならクルトをぎゅうぎゅう抱きしめたい衝動に駆られたフェリシアだったが、流石に敵国の皇子と思しき彼にそれをするのはまずいだらう。そう考えた矢先に、新手が現れた。

「どけガキども、手柄は俺のものだあ！！！！」

今度こそ真正正銘の殺意を漲らせたボニファーツの兵士だった。

「！！」

兄弟に気をとられていたフェリシアは、気づけば目前に迫っていた剣の切っ先に、声もなく目を見開く。それでも、手にしていた銃杖の引き金を引いて相手の心臓を打ち抜けば助かる、という判断はできた。出来たものの、人を殺す覚悟だけが追いつかず立ち尽くす。

「フェリシア！！」

すると横合いから名前を呼ばれ、杖をひったくられて銃口から魔法弾が飛び出した。

「グアアアアアアアアアアッ！！！！」

胸から大量の血を浴びて崩れ落ちる兵士。その返り血を浴びながら、フェリシアは横を見た。フェリシアの銃杖を構えたキアランが、次の瞬間崩れ落ち、地面の上に倒れる。「並みの魔術師なら一発撃つだけで命を落としかねない」とエドモンドが言っていた言葉が蘇り、体が震える。

「キアラン！！！！」

呼ぶ声は、オズワルドのものか、ディランのものか、それとも自分

の叫びだったのか。わからないまま、フェリシアは震える手で銃杖ごとキアランを抱き起こす。

「フェリシア嬢、時間がねえんだ、手荒で悪いが逃げるぞ！」

四人のところまで、ボニファーツ軍が迫っていた。船から下りて駆けつけてきたデイランが、二人を纏めて船に放り込み、小船を漕ぎ出す。こうして、和平の会談は戦闘の幕開けという最悪の結末を迎えたのだった。

28・開戦（後書き）

再びシリアス展開になってまいりました。死亡フラグ的な台詞吐いてたオズワルドが無事でキアランが死に掛けるという急展開。この人も酒飲まされたり素直にデレたと思つたら死に掛けたり、愛しのフェリシアとラブラブ生活はいつになることやら、不憫ですね。自業自得ですが。

しかし予想外に長いサナデイス攻防編。ようやく、26話になるはずだった戦闘に入ることが出来ました。

サナデイス砦は騒然としていた。和平の会談に出かけた国王と救世主が、数名の護衛騎士だけを共に帰還したのだ、無理からぬ話ではある。ボニファーツ軍奇襲の知らせは波紋のように兵士達の間を広がり、自然とオズワルドのいる大広場に人が集まってきた。

「和平の会場で卑怯にも奇襲を仕掛けてきたボニファーツ軍に、正義の鉄槌を！」

高らかに、意外にも勇ましい声で、オズワルドが兵士たちを鼓舞する。

「武器を取れ！今も戦場で戦う同胞たちを救うのだ！」

自らも軽鎧を纏って細身の剣を天に翳す、若く美しい王の姿に、兵士達が賛同の声を上げ、熱気と興奮が辺りを包む。フェリシアは小部屋の窓からその様子を遠目に眺め、嘆息した。

（本当なら話し合いで終わるはずの戦だったのに。陛下、悔しいだらうな）

そして、何も出来ないどころか足を引つ張っただけの自分がひたすら情けない。しかし何より彼女の心を占めているのは、目の前で力なく横たわる人物だった。

「ごめんなさい……」

憔悴しきった表情で、十数回目となる謝罪の言葉を繰り返す。フェリシアの視線の先には、ベッドの中で真っ青な顔をしたキアランが滾々と眠り続けていた。

魔力の少ない一般人が水呼びなどを使う際、一時的に魔力が尽きることで魔法が止まるように、魔力がなくなること自体が死に直結するわけではない。しかし、本人の許容量を超える大量の魔力が失われるとなれば、話は別である。銃杖を使い、限界以上の力を失ったキアランは死んだように眠ったままだった。フェリシアはその力を補うために、人形だった頃のように周囲に魔力を放出し、キアラ

ンに魔力を分け与えることで彼の命を繋ぎ止めていた。とはいえ、迂闊に他人の魔力を流し込んではおかえって危険である。スポンジに少ずつ水を含ませるように、周囲に循環させた魔力をキアランの体へ浸透させていく。恐ろしく神経をすり減らす作業だった。

「……はあ」

体を動かしているわけでもないのに額にかいた汗を腕で拭い、フェリシアは再び魔力の調整に入る。今、小部屋にいるのは彼女とキアランだけだ。キアランは外傷を負ったわけではないから、通常の医術士に出来ることはない。それに常人はフェリシアが放出する魔力に当てられて体調を崩す恐れもあった。そんな理由から、砦の中心から外れた小部屋に押し込められていた二人だったが、訪れる者はあった。

「失礼いたします」

主の集中を乱さないよう、小声で入ってきたメリッサだった。フェリシアの放つ濃密な魔力に影響を受けることのないメリッサは、軽食を持ったまましばらくオロオロとしていたが、大切な主のやつれた姿に意を決して話し掛けた。

「お嬢様、お食事をお持ちしました。どうか少しでもお休みください」

「……」

「お嬢様！」

「メリッサ……？」

大きな声にフェリシアはようやく傍らに立つ侍女に気づいて、メリッサの方を仰ぎ見た。

「ありがとう。後で食べるから、置いておいてくれる？」

「ですが、お嬢様も少しはお休みにならないと」

ふるふると首を振ってまたキアランの方を向くフェリシアを、メリッサは不満げに見つめた。

「どうして、お嬢様が王弟殿下のためにそこまでする必要があるんですか。あんなにひどいこと、言われたりされたりしてきたのに」

「そうだね。でも、それとこれとは話が別。私のせいで、キアランが倒れる羽目になったの。私が責任をとるのは当たり前」

キアランは二日酔いで本調子ではなかった上に、フェリシアを守るために銃杖を使って倒れた。自分を責め、まるで償いのように魔力を流す作業に没頭する主人に、何を言っても無駄だと悟ったメリッサは、溜息混じりに答えた。

「では、せめてお休みのときだけでもお部屋へお戻りください」

「うん、そうするよ。心配かけてごめんね。ありがとう」

疲れた笑顔を浮かべるフェリシアにとんでもないと首を振って、メリッサは小部屋を後にした。

小部屋から動けないフェリシアとキアランに変わり、オズワルドとデイランは砦に残っていた兵士たちを編成し、サナデイス大河の中州へと向かった。オズワルドは戦嫌いではあったが、軍略を疎かにするほど視野の狭い王ではない。的確な采配を振るって戦地のアーデン将軍に加勢し、はじめは劣勢だったグランデール軍は徐々に盛り返しを見せた。グランデールとボニファーツの兵力は互角、中洲での戦いは一進一退の攻防を繰り返し、戦線は徐々に膠着状態が続くようになった。

「あれから、今日で三日目か」

その日もフェリシアはキアランの眠るベッドの傍らで、メリッサの運んできた戦況に目を通していた。オズワルドは初陣の指揮官としては善戦し、デイランやアーデン将軍も獅子奮迅の活躍を見せているというが、相手も肉弾戦に長けた軍事国家だ。形勢逆転に持ち込めるほどの決定打には欠け、長期戦に入る気配が濃厚に漂っていた。つい無力感から気落ちしそうになったフェリシアだが、いけないと気を引き締めて作業に取り掛かる。

この三日間で、いいこともあった。キアランの様子が、目に見えて回復してきているのだ。意識ははっきりしないが、時折目を覚まし

て水や流動食を取っている。顔色も随分よくなっていた。

（お師匠様もシャロン先生もいなくて、こんな治療法で大丈夫かって正直不安だったけど、効果があつてよかった）

その点だけは安心して、しかしフェリシアは再び表情を曇らせる。（でも、こんな失態続きで、また嫌われちゃったかな。せつかく、普通に話してくれるようになったのに）

それを思うと、何故だか少し胸が痛かった。

「う……」

悪い考えを追い払うように頭を振っていると、キアランが呻いて目を開けた。琥珀色の瞳が薄く開かれ、ぼんやりと辺りを見回している。

「フェリシア……？」

目が合うと、かすれた低い声がフェリシアの名前を呼んだ。どこか不安そうなのその姿が、寝込んだときの弟の姿と重なって、フェリシアは無意識にキアランの手をとる。

「キアラン、大丈夫？どこか、痛いところとか苦しいところはない？」

すると、重ねた手を握り返したキアランが、こくりと頷いて上体を起こした。

「あ、まだ寝てなきゃ駄目……」

「ここは……サナデイス大砦か？俺は、どうして、中州の会談は……？兄上は！？」

徐々に意識が鮮明になってきたらしいキアランは、フェリシアに尋ねた。フェリシアはまずキアランに水分と栄養の補給をさせると、彼の質問に一つずつ答えていった。

「オズワルド陛下なら大丈夫。戦場に行ったり、砦に戻ったり、お忙しいみたいだけど、ディランさんがちゃんと守ってる。戦場でも、前線の方には出ていないという話だし」

戦況の簡単な報告書を交えてこの三日間のことを説明すると、キアランは深い安堵の溜息をついた。

「……そうか」

キアランのことだ、目を覚ませばすぐさまオズワルドの護衛に戻る
と言い出しかねないと警戒していたフェリシアは、その反応に肩透
かしを食らった。素直にそう告げると、キアランは苦笑を返す。

「勿論兄上の警護には戻りたいが、今の俺が戻っても役に立たん
だろうからな。団長が傍にいるなら安心だ。……お前こそ、大丈夫か
？」

「え？」

きよとんと目を瞬くフェリシアに、キアランは気遣わしそうな顔で
言った。

「まさか三日間俺に付きっ切りだったわけでもないだろうが、顔
色が悪い」

「え、ええっと……多分、魔力を流しっぱなしだったから、かな」
しどろもどろにキアランの治療法を教えると、彼は目を見張った。

「就寝時意外、俺について魔力を分けていた？戦場の兄上を放つて
？」

「う……う、ごめんなさい」

怒られるだろうかと上目遣いにキアランの方を窺っていると、彼は
はっと息を呑んだ。

「いや、すまん、お前を責めているわけじゃない。しかし、そうか。
兄上ではなく俺に。そうか」

最後の方はぼそぼそと、どことなく嬉しそうに頷くキアラン。それ
から彼は気を取り直して、フェリシアに微笑みかけた。

「俺はお前の治療がなければ、多分死んでいた。ありがとう」
素直に礼を述べられて、フェリシアは内心飛び上がった。何故か火
照る頬に自分で動揺しながら、ぶんぶんと首を横に振る。

「も、元はといえば、あんな助けられ方した私の責任だし、ええっ
と、そう、そもそも私、あの銃杖は素人が使ったら最悪死にますよ
って教えておきましたよね！？何で使っちゃったんですか！」

逆切れに近い勢いの質問にも、キアランは真面目に答えた。

「剣を抜くより早かったからだ。お前があの兵士に刺し殺されるよ
り、ずつといい」

「え……」

真剣な眼差しに射抜かれて、フェリシアは思わず絶句した。何だか
自分の心臓の音が五月蠅い。

（オズワルド陛下にはベタ甘い台詞吐かれても平気なのに！なんで
！？）

密かに大混乱中のフェリシアを置いて、キアランは再び寝台の上へ
寝転がった。

「しかし、確かにあの武器は危ないな。ダリル辺りに改造は頼めな
いのか？」

「そうですね……検討しておきます。でも、その間杖を封印すると
なると、ますます私の接近戦スタイルが格闘寄りになってくるなあ」
すると、キアランが徐々に意地の悪い表情を浮かべた。

「だからといって、初対面の男の股座を蹴り上げる女が何処にいる」
最初の夜を思い出したフェリシアは決まり悪そうに視線を逸らした。
「あ、あれは本当にごめんなさい。でも、命の危機だった上に寝ほ
けてたんだから仕方ないでしょう」

それから、ふと思いついてキアランの方を振り返る。

「でも心配しないで、キアランが不能になったら責任取って養子縁
組の手伝いくらいはしてあげる」

「ふっ！？」

「どうしたの、驚いて。フェリシアが養子って言葉を知ってるんだ
から、この世界にも他人と親子関係を結ぶ制度はあるんでしょう？」

「問題はそこじゃない……」

全力でツツコミを入れたキアランは、急激に疲労感を覚えて布団の
中に潜り込んだ。

「……俺はいいんだ、子供を作る予定はない」

その言葉に、フェリシアは首をかしげた。以前城下町で見かけたキ
アランの様子では、子供が嫌いということでも無さそうだ。

「男の人が好きなの？」

「そんなわけがあつてたまるか！無用な王位継承争いを避けるためだ」

「じゃあ、結婚もしない？」

尋ねてから、フェリシアは流石にこれ以上根掘り葉掘り聞くのは失礼だろうと思ひ当たつた。

「あ、ごめんなさい、疲れてるときに、色々聞いちゃって」

「……いや。少し前まで、結婚はしないつもりだった。今は少し、迷っている」

独り言のように呟いて、キアランは目を閉じた。フェリシアはそんな彼を、驚いて見つめる。

（迷っているって、好きな人が出来たかも知れないってこと？）

流石にそれを聞く勇氣はなくて、フェリシアが沈黙している間に、ベッドの方からは規則正しい寢息が聞こえてきた。もう、フェリシアが今のキアランにしてやれることは何もない。彼女はほんの少し残念な気分です、看病を切り上げて自室へと向かつたのだつた。

29・戦況（後書き）

お気に入り登録者数100人突破、ありがとうございます！

やっぱり王弟殿下デレ期到来の威力でしょうか、それともエロの威力でしょうか、今後のキアラン君は基本デレ全開ですのでご期待ください。作者悶絶しながら恥ずかしい台詞書くよ！！頑張る！！！頑張る方向間違っているとかなつちや駄目！！！！

えー、それはさておき今回は魔法の説明がちよろちよろ出てきてくれてないか心配です。一応、作中の魔力の強い順は、アバウトに

一般人<一般魔術師<キアラン 魔道師団員<エドモンド<ダリル
<<（越えられない壁）<<フェリシア

といったところ。これに技量が変わるとまた変動がありますが。キアランは銃杖使って息があったところを見るに、鍛え方次第ではエドモンドに肉薄できる感じですよ。

開戦から一週間が経過した。グランデール軍とボニファーツ軍は毎日のように戦闘を繰り返して、戦死者も出始めている。決着のつかない戦況に、隔日設けられるサナデイス大砦の定例軍議は紛糾を極めていた。

「この戦、勝つにはもはや総攻撃も止むを得ません！本国より増援を呼び、一気にボニファーツを討つべきです！」

勇ましい尉官が主張すれば、

「増援と一言に言うが、兵は無限ではない。手薄になった北や西に攻め込まれればどうする」

慎重派の左官が重々しく述べ、別の左官が立ち上がった。

「だからといってこのまま消耗戦を続けるというのか！兵は疲弊し、削り取られるばかりだぞ！」

「待ちたまえ、それはボニファーツとて同じこと」

「それに我が軍では未だ尉官以上の指揮官は誰一人討ち取られていないではありませんか。私の本隊は昨日、帝国側の指揮官を三人討ち取りましたぞ」

「何を偉そうに、こちらが討ち取ったのは五人、それも一人は継承権を持つ皇子だ！」

「ならば何も焦ることなどありませんまい。このまま行けば我が軍の勝利は確実だ」

「しかしだな、私はそのための犠牲は決して小さくないと言っている」

「おやおや、気弱なことだ。ボニファーツ皇帝の首を取れるなら、多少の犠牲もいたし方あるまい」

「貴様！」

どんどん険悪になっていく会議場を、フェリシアはしかめっ面で眺めていた。この場に集まっているのは中隊以上の指揮を任される、

それなりに名と実力のある武将たちのはずだ。しかしただ闇雲に突撃を主張する者、部下の犠牲に心を痛めている者、逆に雑兵の命などなんとも思っていないような者まで、意見はちつともまとまる気配がない。

（いい大人が三十人近くも集まって、何やってるんだか。……ううん、数が多いからこそまとまらないのか）

この場をどう治めるのだらうと、ちらりと横に座るオズワルドの様子を見れば、彼はフェリシア以上に険しい顔で武将たちの言い争いを眺めていた。

「貴公らの言い分はわかった」

あわや掴みあい勃発かというタイミングで、オズワルドの静かな、しかし僅かに苛立ちを含んだ声が響いた。その瞬間、武人たちは一様に口をつぐんで即席の王座を見上げる。

「先程、ボニファーツの皇子を討ったという話が出たな」

オズワルドの言葉に、その隊を指揮していた左官の男が立ち上がり、自慢げに話し始めた。

「その通りでございます、陛下。野蛮な帝国の皇子が躍り出たところを、我らは怯むことなく迎え撃ち、見事討ち取って見せました」するとオズワルドは、普段の様子からはかけ離れた酷薄な笑みを浮かべて彼を見下ろした。

「愚かな。ゼルギウス帝の掃除に利用されたとわからぬか」

「は……？」

きよとんとするその男に、オズワルドは笑みを深めて説明してやった。

「討ち取ったのは、五の月八日の時点で第四皇子だった男だ。他にも帝国の指揮官や、継承権を持たない庶子の皇子たちを何人か倒している。なるほど、それだけ見れば、指揮官クラスには未だ犠牲を出していない我が軍が圧倒的優位のように見えるな。しかし間諜の報告によると、それらは皆皇帝に対して反抗的であったり、金や肉欲に溺れた無能者ばかりだったそうだ」

「それは」

「戦上手の皇帝陛下は、身内の膿を取り出すにも他人の手を上手く使うらしい。腹立たしいが参考にもなるな。疚しいところのある者は用心するといい」

オズワルドの邪魔をする者は、戦場に捨てて始末されるということか、などと聞けるはずもない武將たち、特に腹に後る暗いものを抱える者たちは密かに身震いした。

(当代の国王陛下は気の優しい、頼りない方だとばかり思っていたが)

(いやはや、とんでもないことだ)

(この物言い、武神のごとくあられた先代陛下に似ておられる)

そんな風に囁き合う彼らの様子を見て、オズワルドは一瞬纏う空気を穏やかにした。

「冗談だ。私は卑劣な手段は好まないよ」

それからまた表情を引き締め、真剣な眼差しに憂いを浮かべて溜息をつく。

「グランデール軍の兵士は指揮官クラスから一般兵に至るまで、私の大事な民だ。無論、このまま消耗戦を続けて血塗れの勝利を手に入れば、それでいいと思っているわけでもない。そのために策を弄しているわけだが……アーデン将軍、その効果はいかほどか？」すると、水を向けられたハロルドはしばらくの思考の後、重々しく口を開いた。

「陛下の采配は的確です。三十年以上戦場にいた私でも、万策尽くしたと言えます。それを持ってしても五分にしか持ち込めないほどに、敵が強大ということでございます。帝国の実力を見誤りませんでしたな」

歯に衣着せぬ物言いに指揮官たちは青ざめたが、オズワルドは苦笑して頷いただけだった。

「では、将軍にもお手上げか」

「いいえ。一つだけ、この状況を打破する秘策がございます」

「ほう？他方の守りを弱めるでもなく、ここにいる人員で可能な策は尽きたというのに、どんな秘策があるのかな？」

すると、ハロルドは鋭い視線でフェリシアの方を仰ぎ見た。

「フェリシア嬢にご助力いただくのです」

「え……？」

思わず声を漏らすフェリシアを、ハロルドは睨むわけでもなく、ただ真っ直ぐ見つめて淡々と言葉を紡いだ。

「我が娘、マルグリット・アーデン少佐とその部下たちから聞いた話では、フェリシア嬢、貴女は戦闘熊の大群すら一人で全て殺戮して見せたとか？」

「は、はい」

単刀直入な質問に、フェリシアは頷くほかない。

「それが事実なら、簡単なことだ。魔法を振るう対象を、帝国軍の軍人どもに変えるだけでいい。いかに屈強な軍人といえど、人の身は戦闘熊よりも脆いのがから、貴女なら容易く敵を全滅せしめることができるだろう」

それは武将達の誰もが考え、口を閉ざしてきた提言だった。国王が目に見えて溺愛している娘に、戦場に行つて殺し合いをしるなどと誰も言えるわけがない。目測の甘さを指摘されても笑って受け流していたオズワルドが凍てつくような眼差しでハロルドを見つめ、フェリシアが言葉を失う中、かたりと音がした。まだ本調子ではないものの、ようやく軍議に出席できるようになったばかりのキアランが立ち上がった音だった。

「將軍、それは無理だ」

「おい、キアラン！」

隣のデイランが小声で咎める声も、キアランの耳には入っていない。ハロルドの提案は、それほど彼にとって恐ろしいものだった。

(フェリシアを戦場に出す？冗談じゃない)

彼の脳裏によぎるのは、つい一週間前、敵兵の刃に無防備に晒されていたフェリシアの姿。今にも彼女の命が奪われようとしていた、

あんな恐ろしい気分を味わうのはもうごめんだった。

「キアラン殿下。無理とは、何故です？」

しかし、馬鹿正直にフェリシアが心配だからなどと言う訳にも行かない。キアランはしどろもどろになりながら言い訳した。

「それは、そもそもチェンバレン公爵令嬢の使命は国王陛下下の護衛であつて、帝国軍人の掃討ではない。命令を違える事は陛下の汚名にもなる」

すると、ハロルドは少し意外そうに目を見開き、次いで失望したような目でキアランを見つめた。

「貴方は確実に目的を達する手段を手放すような愚か者ではないと思つていたが……確かに。殿下の言い分にも一理ございます。しかし今以上に戦況が逼迫すれば、フェリシア嬢を戦力として投入しようという動きは必ず出てくることでしょう。最悪、強硬派がフェリシア嬢に無理を頼まぬとも限りません」

フェリシアが人殺しを厭うのは、斉藤優花として生きてきた日本社会の教育によるものだ。能力的には何万の敵兵だろうと皆殺しに出来るフェリシアが、メリツサや王都のベネディクトを盾に取られれば、拒み続けるにも限度がある。その事に気づいたフェリシアは戦慄し、キアランは僅かに青ざめた。

「ならばいっそ、フェリシア嬢には王都へお帰りいただくのはいかがでしょうか。存在しない戦力なら、それに縋ろうという者も出ないでしょう」

「……そうだな」

ハロルドの言葉に、キアランは素直に頷いた。フェリシアの姿が見られなくなるのは残念だが、彼女の命には代えられない。彼女に人殺しを強要するような真似もしたくない。それならば安全な中央に戻るのが一番だ。しかし、これにフェリシア本人が異議を唱えた。

「私、こんな中途半端なところで、無責任に全部投げ出して帰るなんてできません！」

すると、ハロルドの冷たい視線がフェリシアを射抜いた。

「では、気安く我らの領域に踏み込んだ責任を取るのか？選ぶがい、救世主殿。大人しく王都へ逃げ帰るか、完膚なきまでに帝国軍を叩きのめすか」

「……」

唇を噛み締め俯いたフェリシアと、相変わらず敵しい眼差しのハ口ルドをとりなすように、オズワルドが立ち上がった。

「そんな風に脅すのはよさないか、アーデン將軍。フェリシアが帰還するか戦うか、どちらかにした方がいいのは私も認めるけれど、決めるのは本人だ。フェリシアも、数日なら時間をあげられるから、その間に身の振り方を決めてくれるかい？このまま私の警護を任せでは、君に人殺しをさせなくてはいけなくなる。心配しないで、君がどちらを選んでも、私は君を責めたりはしないから」

本気で戦に勝ちたいなら、それこそフェリシアを脅してでも救世主による殲滅戦を行わせればいい。帰るか戦うか、選択肢を与えられたのは慈悲だとフェリシアにもわかっていた。これ以上の反論は許されない。

「はい……ありがとうございます」

俯きがちに答えたフェリシアは、キアランがずっと気遣わしそうに自分を見ていた事に気づいていなかった。

軍議が終わり、とぼとぼと自室へ歩いていたフェリシアは、トンと肩を叩かれ飛び上がった。

「ひゃっ！？ディランさん!？」

立っていたのは王国騎士団長ディラン・ヘイグだ。その背後には気まずそうな表情のキアランも控えている。

「よお、フェリシアお嬢さん。お疲れ」

「お疲れ様です。どうなさったんですか？」

「お嬢さんがなんか元氣無さそうだったから、励ましてやろうと思つてさ。残念ながら、流石に酒が飲める情況じゃねえが」

おどけるディランにフェリシアは微笑を返し、礼を告げた。

「お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫です。陛下に言われたとおり、数日中にはちゃんと自分のやること見極めますから」「そうか？無理はすんなよ」

「あはは、こんな時に私の都合だけでよくよ悩んでなんかいられませんよ。まだ、初日に私達を襲ってきた人たちの事だつて片付いていないんでしょう？」

すると、ディランはふいと視線を逸らした。明らかに何か知っている顔だ。

「ディランさん……？ひょっとして、何か進展があつたんですか？」

「いや、進展といふかなんと言つか……そうだなあ、まあ別に話してもいいか」

ポリポリと頬をかくディランに、キアランが顔を上げた。

「団長！？」

「いいじゃねえか、別に緘口令が敷かれてるわけでもなし、当事者なんだ、何も知らないままではいるのは気持ち悪いだろう」

それでも流石に立ち話は憚られる内容である。三人は休憩用の小部屋へ移動し、まずはディランが口火を切った。

「さて。皆に向かう最中の襲撃者だが、ほぼ確実なのは、俺たちを殺すことが目的ではないということだ」

「そうなんですか？」

「ああ。確実に暗殺したいのなら得物に即効性の毒を塗っておけばいい。俺もキアランもかすり傷程度の負傷はしたから、もし殺すのが目的なら少なくとも俺とキアランは死んでいる」

縁起でもないたとえ話に、フェリシアは生唾を飲み込んで頷いた。

「おそらく、お前か兄上を攫おうとした勢力の手の者だろう」

フェリシアに生臭い話することに抵抗していたキアランも、観念したように呟いた。

「その勢力って……」

「曲者の生き残りが口を割る前に自害したから、そこまではわからねえ。どこの国の者なのか、それとも考えたくはないが国内の者が

ただ、ゼルギウスの手の者ではない可能性は強いな」

デイランの説明に、フェリシアは小首を傾げた。

「そうなんですか？魔法を使っていたから？」

「それもあるが、オズワルド陛下やお嬢さんの身柄が皇帝の目的なら、会談の直後に奇襲をかけたらしねえだろ。下手をすれば身柄を確保する前に殺しちまう」

「あ、そうか」

納得するフェリシアに、デイランは申し訳なさそうな視線を向けた。「すまねえな、まだわかつているのはこれだけなんだ。何もわかってないのも同然だ。とにかくお嬢さんは何者かに狙われているという自覚をきちんと持って、王都に戻るときも気をつけな」とすると、フェリシアは表情を曇らせた。

「デイランさんも、私が王都に戻った方がいいと思っていらっしゃるんですか？」

「いや、お嬢さんが本当に戦闘熊の群れを倒せる勇者なら、一緒に戦ってくれりゃあ心強いし、俺としては魔物が殺せて帝国人が殺せないっていう感覚もいまいちわからねえけどよ。人殺しは嫌なんだろう？」

フェリシアは力なく頷いた。自分の手は、魔物なら何度も殺めてきた手だ。同じ命であることには変わらないのに、言葉も通じない異形の怪物なら蚊でも叩き潰す感覚で殺せるなど、傲慢なことだとフェリシア自身も思う。理解が出来ないといいつつも自分の意思を尊重してくれるデイランの言葉が、嬉しいと同時に申し訳なかった。

（私、何しにここまで来たんだろう）

心の中で溜息をつき、しかし顔では笑って見せるフェリシア。とにかく、多忙であろうデイランに、いつまでも心配をかけるわけにもいかない。

「ええと、話してくださいありがとうございますとうございました。この件に関しては、もう少し考えてみますね」

「考えるまでもない。王都にもどれ」

突然言葉を挟んだキアランの方を、フェリシアははつと見上げた。

「そんな顔をするくらいなら、人を殺そうなんて考えるな」

指摘されて初めて、フェリシアは自分が笑顔に失敗していることに気づいた。そして、余計な心配をかけないように作り笑いをすることも出来ない自分に苛立ちを覚える。その苛立ちは、サナデイス砦へ来てからというものの常にフェリシアについて回っていた。積みもり積もったそれが爆発したのは、ほんの些細なきっかけである。

「なんで、そんな勝手なことばかり言うんですか」

これは八つ当たりだとわかっているのに、つい攻撃的な言葉を選んでキアランにぶつけた。

「私が役立たずで邪魔だからって、そんな追い払い方しなくたっていいじゃない！」

「フェリシア、俺は、そんなことは思ってたな」

「グランデールとオズワルド陛下のために戦えって、最初に言ったのは貴方でしょう!？」

叩きつけられた言葉に、キアランが言葉を失った。その様子を見てフェリシアも一気に頭が冷めたが、取り繕うのも白々しい。

「すみません、デイランさん。失礼します」

デイランに謝罪をして、その場を逃げ出すのがやっとだった。デイランは早足で部屋を出て行くフェリシアをあっけにとられて見送り、次にシヨックで真っ白になっているキアランの方を向く。

「おい、キアラン。お前本当にそんなこと言ったのか？」

「……言いました。その、彼女が自意識を取り戻した翌日に」

「なるほど、それはお前が悪いな」

「わかっています。あのときの俺は、本当に愚かでした」

本気で悔恨の念を滲ませる部下に、デイランはやれやれと呟いたのだった。

30・選択（後書き）

間に番外編など入れてみましたが、最近話がダレ気味ですみません。次回以降、大きな動きを持たせればいいのですが。

31・告白

フェリシアに与えられた時間は次の軍議までの二日間だった。その間にも現場で戦う兵士達が傷つき、命を落としていることを考えれば決して短い時間ではないが、かといって人を殺す決心をつけるにはあまりにも急速すぎた。その上、早く結論を出そうと焦るフェリシアにとって、砦の環境は最悪である。

「おい、人形姫だ」

「戦闘熊の群れも倒したって言う？」

「とつとボニファーツの糞野郎どもを始末してくれれば、あいつは死なずにすんだのに……！」

「国王陛下は、王都に帰ってもいいって言っているらしいぜ」

「だったらせめて俺たちの視界から消えてくれればいいのに、何でまだここににいるわけ？」

砦の中を歩けば、そんな声と不信感に満ちた視線が突き刺さった。それでいて、フェリシアに面と向かって避難の声を浴びせる者はいない。まるで斉藤優花の中学時代を再現したような情況に、フェリシアは徐々に自室に引きこもりがちになっていった。食事はメリッサに部屋まで運んでもらい、部屋を出るときも人のいない時間を選ぶ。そんな主の様子を見かねたメリッサは、差し出がましいことと知りつつも、自室のベッドに力なく横たわるフェリシアに向かっておずおずと口を開いた。

「あの、お嬢様……」

「なあに、どうしたの、メリッサ？」

答えるフェリシアは目に見えてやつれていているのに、自分に笑いかける笑顔だけがいつも通りのお嬢様で、メリッサは心を痛めた。

「本当に、戦場に出るおつもりはないんですか……？」

「え？」

メリッサに戦うことを勧められるとは思っていなかったのだろう、

フェリシアの目が驚きに見開かれた。メリッサとて、大事なお嬢様には戦場など行ってほしくない。しかし、何百という魔物を一斉に殲滅することだって出来るフェリシアが人同士の戦う戦場で負傷するとは考えにくかったし、何より敬愛するお嬢様を下級兵までもがこき下ろしているこの情況が、悔しくて仕方がなかったのだ。

「お嬢様はとてとても強く格好いんです。お嬢様ならこの戦争、あつという間に終わらせる事だってできるでしょう?」

「それは……」

メリッサは熱心に勧めるあまり、自分の言葉がフェリシアを追い詰めていると気づいていなかった。気づかないままに、励ましの言葉を贈る。

「お嬢様なら、きっと大活躍ですよ」

「うん……ありがとう」

浮かない顔でフェリシアが頷いたときだった。コンコン、と遠慮がちなのツクの音が響いた。

(こんな時に、来客?)

メリッサは怪訝な面持ちで、来客の応対に出た。扉を開けると、気まずそうな表情のキアランが立っていた。

「王弟殿下。どのようなご用件でしょうか」

ことあるごとにフェリシアを貶め嫌味を言っていた相手である。自然と冷たい事務的な声になるメリッサに、キアランはたじたとさりながらも用件を告げた。

「フェリシアと二人で話したい。少しでいいから、時間をもらえないだろうか。誓って、彼女に危害を加えたり暴言を吐いたりする気はない」

「お嬢様はお休み中です」

にべもなく断ろうとしたメリッサだったが、背後で主が起き上がる気配がした。

「王弟殿下がいらっしゃっているの?お通しして」

「ですが、お嬢様……!」

「お願い。私もそろそろ、キアランに謝らなくちゃと思ってたの」
そこまで言われては、メリッサに逆らえるわけもない。何かあったらお呼びくださいと念を押し、キアランを部屋に通すと、フェリシアには淹れたてのハーブティを、キアランにはぬるい出酒らしを出して控えの間に引っ込んだ。

明らかに歓迎されていない様子に、嫌われているなとキアランは苦笑した。すると、フェリシアが慌てて取り繕う。

「ごめんなさい、メリッサは、とても私のことを大事にしてくれるいい子なんです」

「わかつている。出酒らしを出されるような真似をしたのは俺のほうだ」

そう言っただけで出された茶を飲み込むと、苦い味が口の中に広がった。

「その、すまなかった。何度謝っても許されることではないが、本当に、俺はお前が邪魔で王都帰還を勧めているわけじゃないんだ。それだけはわかって欲しかった」

「いいえ。昨日は私も言い過ぎました。ごめんなさい」

素直に謝るフェリシアに、キアランがほっとしたのもつかの間だった。

「でも、私が邪魔なわけじゃないならどうして、王都に帰れなんて言うの？」

いきなり確信を突かれて、キアランは一瞬言葉に詰まった。

「それは、つまりだな、俺はお前に人殺しなんか強要したくないというか、戦場で万が一怪我でもされたら生きた心地もしいというか」

言おうと決めて部屋に押しかけたというのに、最後の踏ん切りがつかずに、遠まわしな言葉を連ねた後、キアランはおもむろに告げた。

「フェリシア！」

「は、はい？」

「俺は、お前が好きだ」

彼女を散々傷つけた後で言う言葉としては厚顔にもほどがある。そんな事はキアラン本人が一番よくわかっていたが、告白をすることでフェリシアを王都へ帰せるなら、いくらでも恥をさらそうと思っ

た。

「だから危険な戦場において欲しくないというわけだ」

「……………そうですか」

柄にもなく、初恋の熱に浮かされる少年のように顔を真っ赤に染めるキアランに対して、フェリシアの声は淡々としていた。ただ、その声にはどことなく納得したような響きがある。キアランが戦々恐々としてフェリシアの返事を待っていると、彼女は小さく首を振った。

「ごめんなさい」

それは、予測できた当然の返答だった。今までの自分の言動を振り返ってみれば振られるが当然で、それでもそれなりにシヨックを受けているキアランに、フェリシアは予想外の言葉を続けた。

「ごめんなさい、私はフェリシアさんじゃないんです」

「……………」

「私は、貴方が好きになった幼馴染の女の子じゃありません。ごめんなさい、救世主のフェリシアさんになれなくて」

今にも泣き出しそうな表情で、フェリシアは告げた。

「フェリシア？お前、何を言ってる」

「お願い、一人にさせてください」

問い質そうとするキアランを押し留めるフェリシアの目には、キアランの気持ちを拒否する以上に強い拒絶の色があった。もう、どんなに言葉を尽くしても無駄だと直感でわかる。キアランは彼女の求め通り、部屋を後にするより他になかった。

キアランが出て行き、メリッサにも控えの間にいるよう頼んで、ようやく一人になったフェリシアは、石の天井を見上げて深い溜息をついた。

（今まであまり、考えないようにしてきたけど……本当に私、異世界の救世主になっちゃったんだ……）

誰も彼も、求めているのは圧倒的な力で敵を屠る予言の救世主様で、人の命を奪うことに脅えている異世界の娘ではない。一番傍にいたメリッサですらそうだった。キアランだけは救世主の役割を求めては来なかったが、それは彼がフェリシアを好きだからだという。フェリシアが彼を騙していたわけではないと知り、再び昔の恋心を取り戻したのだと納得した。つまり結局、彼が求めているのも、小さな頃恋をした幼馴染のフェリシアであって、優花ではないのだ。余裕があれば、キアランの様子は微笑ましいと映ったかもしれないが、今の優花にとっては自分を否定される一因でしかない。

（私は馬鹿だ。「フェリシア」として生きる道を選べば、もう誰も優花なんて呼んでくれないって、ちゃんと教えてもらっていたのに）
いっそ、お役目など投げ捨てて逃げてしまおうかとも思った。突風の魔法を駆使して飛んでいけば、皆からこっそり逃げ出すなど容易なことだ。フェリシアの容姿はこの世界で特に珍しいものでもないし、本来の魔力を抑えればウルリーク魔法共和国あたりで普通の魔術師として生計を立てるのも、不可能ではない。

（いいや、駄目だ）

そこまで考えて、強く首を振った。彼女をグランディールに留めているのは単純な義務感ばかりではない。グランディールに来てからの数ヶ月、自分に親しく接してくれたメリッサやマルグリット、大事にしてくれるベネディクトにオズワルドや、優しく見守ってくれるダリルにシャロン、他にも大勢の人々と関わり合い、いつの間にかここは優花にとって大事な居場所になっていた。そして、最愛の家族を亡くした彼女は、何よりも大切な人や場所を失うことを恐れていた。彼らに嫌われたくないからこそ、何とかして救世主のお役目を果たせないかと悩んでいる。

「フェリシアはいいね。お役目が出来なくても、ちゃんと好きになつてくれる人がいて」

無意識に呟いていた言葉に、優花は自虐的な笑みを浮かべた。自分はどうやら、キアランに好きだといわれた、この体の本来の持ち主が羨ましかったらしい。オズワルドに口説かれても戸惑うだけなのに、キアランに優しくされると、何だか恥ずかしくて胸が苦しくなる。その意味に気づかないほど、優花は幼くない。

（私の馬鹿。キアランが好きなのはフェリシアで、斉藤優花じゃないのに、何で好きになっちゃうかなあ）

自分で自分の体に嫉妬するなど笑えない。再び大きく溜息をついて、彼女はごろりと寝転がった。考えがどんどん暗く泥濘に嵌っていることは自覚している。こんなときは一度寝て思考をリセットするに限ると、浅い眠りに落ちていった。

目を覚ますと、窓の外には夕闇が広がっていた。少し休むだけのつもりだったのに、いつの間にか本格的に寝入ってしまったらしい。鼻をくすぐるいい匂いに横を向くと、メリッサが用意してくれたと思われる食事がまだ仄かに湯気を立てていた。なるほど、この匂いで目が覚めたのかと、フェリシアは苦笑する。

「うん、大丈夫。ちゃんと目が覚めた。とにかく前向きに考えよう」
フェリシアは食事の席につき、頂きますと手を合わせてカトラリーを手に取った。今日のメニューはよく煮込まれたシチューとパンに、果物の砂糖漬けだ。近くに農作地がない大砦の立地上、食事には保存食が多用されている。これはこれでとても美味しい料理なのだが、戦闘にも余裕のあった頃はサナデイス大河で獲れた新鮮な魚なども食卓に上っていたことを考えるに、戦況は逼迫しているのかもしれない。

「やっぱり、王都に逃げ帰るのは気が引けるよね……かといって、大量虐殺もなあ……」

呟いたフェリシアは、ふと自分の一人ごとに違和感を覚えた。そもそも、何故この二択なのだろうか。要は、戦いを勝利で終わらせれば、それでいいのではないのか。そもそもサナデイス砦の攻防戦を

始めたのは、誰だったのか。

「皇帝、ゼルギウス……！」

ボニファーツ皇帝の名前を口にしたフェリシアは、天啓のようにひらめいた。逃げ帰ることも大量虐殺もしないですむ、第三の選択肢。命まで奪う必要はない、この戦いを始めた敵国のトップに負けを認めさせて、金輪際グランデールに手出しをさせないようにすればいい。帝国軍を全滅させて、本国にいる帝国の人々が報復をしに来るリスクを考えると、むしろそちらの方がいいように思えた。

（私なら、この砦、こっそり抜け出すことが出来る）

フェリシアはふらふらと窓辺に進み出て、外を窺った。砦の要所には魔法の明かりが灯され、見張りが何人も立っているが、フェリシアは彼らから見えないような上空に上って移動することも可能なのだ。

（よし、そうと決めたら実行あるのみ。ボニファーツ皇帝の部屋に忍び込んで縛り上げて魔法で脅せばお仕事完了。今夜のうちにカタをつけよう）

決心したフェリシアの行動は早かった。腹が減っては戦など出来ないと、まずは食事を全て平らげ、隣室のメリツサを呼ぶ。

「お呼びですか、お嬢様？」

「うん、お皿下げてもらおうと思って。その後はまた、一人にしてくれる？」

「はい……」

しゅんとした様子のメリツサに少し罪悪感を覚えるが、仕方ない。フェリシアは気持ちを切り替えて、砦に持ち込んだ自分の衣装ケースを開けた。主にメリツサの勧めで持ってきた、ひらひらとした衣装がまず目に入る。それらをかきわけ、下に埋もれていた乗馬服と会談のときに被っていたフードつきマント、なるべくシンプルな肩掛けカバンを選んで引っぱり出した。カバンの中にはシャロンから貰った応急セットが入っているが、まだ少し余裕がある。フェリシアはそこに町歩きのために崩した小銭入れと小ぶりのナイフを詰め

込んだ。最後に持ち物の中にグランディールとのかかわりがわかる徽章などついていないか確認すると、手早く乗馬服に着替えてカバンを掲げ、フードを羽織る。古典的な手法ではあるが、人の形に丸めた毛布をベッドに放り込めば準備完了だ。しくじったときもグランディール側に気づかれないうちに戻るつもりではあったが、万が一を考えて、ゼルギウスをとつちめてくる旨と、メリッサや見張りの兵士たちにはまったく非がないことを明記した置手紙を布団の中に隠し、フェリシアは窓辺に佇んだ。もう一度、計画に穴がないか考えをめぐらせ、部屋の外を窺う。メリッサが入ってくる様子も、来客の気配もない。フェリシアは大きく息を吐いて、窓から身を躍らせた。耳元を冷たい夜風が吹きぬけたのも一瞬のことで、彼女の体は呼び寄せられた大気の塊に押し上げられる。

（早く離れた方がいいか）

周囲に防壁を展開し、冷気や気圧差を遮断したフェリシアは、一気に空高く舞い上がった。魔法を使えば、高い魔力と鋭い感覚を持つた人には気づかれる恐れがあった。この砦に魔法師団のエリート魔術師はいないのだから大丈夫、とは思うものの、兵士や騎士の中には魔法を使う者だっている。念のため出来る限りの最速で砦から離れた。

（お師匠様がいたら、この作戦は使えなかったな）

そんな事を考えつつ、フェリシアは眼下を見下ろした。遙か下方には、サナデイス大河を挟んで二つの砦が、まるで積み木の玩具のように向かい合っている。フェリシアはそのうちの一つ、ボニアファーツ側の砦を睨み、東へと飛んだ。

31・告白（後書き）

キアラン殿下の告白を超他人事で済ませるフェリシアさん。本当は
両思いなのに根本的などころでズレがあっっておこった悲劇。いや喜
劇か？

32・潜入

上空からボニファーツ帝国内へ入ったフェリシアは、一旦ボニファーツの砦を飛び越えようと、荒野の茂みに降り立った。帝国内から来たように見せかけるためだ。西には帝国の大砦が聳え立っているので、進む方向には迷わなかった。しばらくそちらへ歩けば、だんだんと明かりが見えてくる。

（やつぱり、見間違いじゃなかったんだ）

明かりの正体は町だった。砦の前に、町が広がっているのだ。しかし、グランディールの城下町とは随分趣が異なる。グランディールの王都がローマやパリのようなヨーロッパの都市なら、こちらは西部劇に出てきそうな辺境、といった風情だ。道行く人々もいかにも荒事を生業にしているという雰囲気荒くれ者が多く、時折旅商人や、派手な衣服に身を包んだ女性が、足早に通り過ぎていく。

（サナデイス大砦の前にはこんな町ないのに。まあ、丁度いいや。少し情報収集していこう）

フェリシアはそう考えて、人の多そうな広場へ歩いていく。ボニファーツに魔法仕掛けで動くものを持ち込むのはまずいだろうと、時計は持つてこなかったのだが、出てくるときに確認した時刻は八の刻を半分ほど過ぎていた。移動時間は半刻もかからなかった筈だから、今は九の刻前と推測できる。この時刻のグランディール王都はそろそろ人出の少なくなってくる時間だとフェリシアは聞いていたが、今歩いている町は進めば進むほど賑わいを増していた。しかし、魔法での上下水道が完備されていないためだろう、仄かに饑えたような悪臭が漂ってくる。

（グランディールって魔法があるおかげでトイレとかお風呂とか、意外と現代日本に近い生活が出来てたんだね……帝国の人たちってどうやって暮らしてるんだろ）

そんな事を考えつつ、フェリシアは町の中心らしい大広場へ出た。

日はとつぷりと暮れているというのに燃え盛る松明がずらりと並ぶ
広場は活気があった。屋台で酔っ払って騒ぎ立てる傭兵らしき男た
ち、嬌声を上げて彼らにまわりつく女たち、地面にボ口布を敷い
て並べた売り物を前に、客を呼ぶ商人たち。猥雑な空気にそのまま
進むことを躊躇していると、下から声をかけられた。

「その若いの、見ていかんかね」

見下ろせば、好々爺然とした老爺が品物らしき物品の前に座って客
引きをしている。他の屋台や露天の店主よりは話し易そうだと、フ
エリシアはかがみこんだ。その顔を見て、老人がおやという顔をす
る。

「傭兵志望の坊主かと思つたら、女子かね」

「えっと、まあ、はい。この辺りで戦いがあるって聞いたから、職
を探しに来たんです」

「ああ、娼婦の働き口かい」

「しょう……!?!」

当たり前のような顔で言う老人に、フェリシアは言葉を詰まらせた。
「この辺りで娘の働き口といやあ、それぐらいしかないだろう。何
も知らずにここへ来たのかい？」

「すみません、田舎者だもので。家族と家を火事でなくして、戦争
をしている皆へ行けば働き口があるかもしれないってだけで来たん
です」

「そりゃあ、難儀なこつたなあ」

嘘ばかりではぼろが出るかもしれないと、真実といえなくもない話
を織り交ぜると、老人が同情を込めて呟いた。その反応に少しばか
り罪悪感を覚えながらも、フェリシアは用心深く尋ねる。

「正直、皆の前にこんな町があるって言うのも話半分にししか聞いた
ことなかったんですけど、ここってどういうところなんですかね？」

「どうもごうも、見ての通りの場所さね。戦を求めて集まった傭兵
の仮宿じゃよ。他にも皆の兵士達に夜の楽しみを提供したり、わし
らのような商人崩れが細々商いをしたり、そういう場所じゃ。真っ

当に生きたいなら郷に帰るんだな」

老人の忠告はもつともだったが、フェリシアは食い下がった。

「でも、皆まで行けばさすがに下働きの仕事くらい……」

すると、老人は哀れみに満ちた目でこちらを見つめてきた。

「嬢ちゃん、いったいどれだけ田舎から出てきたんだね。皆は基本的に女人禁制じゃ。多分、下働きも下男か下級兵の仕事じゃないのかね」

「え、ええっ！？そんな、どうして？女性の兵士とかはいないんですか？」

下働き志望として皆へ潜入するつもりだったフェリシアが尋ねると、老人はやれやれと首を振る。

「そんなもん居るかい。下女も女兵士も三日以内に犯しつくされて使いモンにならなくなるのがオチだわな。例外は、軍のお偉いさんが呼ぶ娼婦くらいじゃ」

「そ、そうですね……」

これは本当に、こっそり潜入するしかないかもしれない、とフェリシアは頂垂れた。

（出来れば穏便な形で潜入して、ゼルギウス帝の部屋とか皆の人から聞きだしたかったんだけどなあ）

考え込みながら、何気なく目の前に広がる品物を見つめる。店主がフェリシアを傭兵の少年と間違えて声をかけただけあって、その大半は武器や防具だ。しかしそのどれもが傷や汚れにまみれて、ほとんどガラクタ同然である。

「色々教えてもらった変わりに何か買いたいけど、これって売れるんですか？」

「売れんでも構わんよ。戦場で拾ったモンじゃから、元手はかかっておらんしの」

言われて見れば、刃こぼれした剣や薄汚れた盾の中にはグランディール兵の装備も混じっていた。これならグランディールの紋章が入った持ち物を持っていても、別に怪しまれなかったかもしれないと、

頭を使ったつもりだったフェリシアは落胆する。するとその落ち込み様をどう思ったか、老人は在庫品の入った木箱からなにやら袋を取り出した。中からは安物の飾り石がついたアクセサリーや、ひらひらした原色の布の塊が出てくる。

「そうがっかりせんでも、普通の商品もあるわい。娼婦向けの服やら装飾やら、一つどうだね」

「……わかりました。ください、それ一式」

「水商売に転向かね？」

「最悪それも考えなくちゃならないくらい、切羽詰ってるので」
フェリシアは神妙な顔で頷いて、老人から袋の中身を購入した。

町を出たフェリシアは、茂みに何重にも魔法の防壁を張り巡らせた中で手早く着替え、見る人が見れば上質とわかる乗馬服をその場に隠し、立ち上がった。身につけた真つ赤なドレスは胸元も背中も大胆に開いていて、下品ギリギリの色気に満ちたデザインだ。

(うう、夏だから寒くはないけど、恥ずかしい……)

フェリシアは慌ててカバンを身につけ、上からマントを羽織った。腕に連ねた腕輪がしやらりと鳴って、滑り落ちそうになる。

「さすが安物、金具も調整できないし、ざらざらして付け心地悪いし、頼むから潜入するまではもってよ……？」

溜息混じりに呟いて、フェリシアは砦の方へ歩みを進めた。グランデールのサナデイス大砦は絶壁を削ったような道を進まなければ到達できないが、ボニファーツ側の砦は何重にも堀に囲まれているだけだ。ただ、絶壁の上にあるため、やたらと坂道や階段が多い。息を切らせながらそれを登りきると、まずは荒々しい造りの砦の姿が目に入る。そしてさっそく、不審者を見咎めた門番が二人、こちらへやってきた。

「娘、何用だ？」

油断なく手にした剣や槍を光らせる門番に、フェリシアははったりをきかせた。

「あら、聞いてらっしやらない？軍の偉い方に呼ばれて下の町から来たのだけど」

「幹部のどなたかが呼んだ娼婦か。そんな話は聞いていないが、誰に呼ばれた？」

ボニファーツの軍幹部など、フェリシアが知るはずもない。笑って誤魔化すしかなかった。

「さあ、とつても偉い方としか」

こんなことならキャバ嬢のバイトでもしておくだったと後悔しながら引きつった笑みを浮かべると、兵士たちは半信半疑の表情を浮かべる。

「確かに今この皆には、下々の者には名前も言えないほど偉い方も滞在しているが……」

「おい、めつたなことを言うな！娘、お前一人で来たのか？店の者は？紹介状は持っているのだろうな？」

矢継ぎ早に繰り出される質問に、フェリシアは言葉に詰まった。

「それは、紹介状は多分、店の主人が。今日一緒に来てくれるはずだったのだけど、急に来られなくなって……そ、そう、依頼主なら思い出したわ！確か陛下と呼ばれてた」

何とか答えるものの、嘘臭さ満点の言い訳はかえって疑惑を深めるだけだ。疑わしそうな兵士達の眼差しに、冷や汗が流れ落ちた。

「陛下……？お前、本当に皇帝陛下の呼んだ娼婦か？」

兵士の一人がそう言って、フェリシアの顎を掴んで上を向かせた。

「つ、な、何すんのよ！」

「顔も体も悪かねえが、極上品ってわけでもねえし、着てる物も安っぽいな。高級娼婦というには無理がある」

すると、もう一人が彼を宥める。

「まあまあ、兄弟。別に売込みだっただけじゃねえか、俺らが可愛がってやればいいだけの話だ」

「それもそうだな。娘、こっちに来いよ」

二人の目は、はつきりと欲望の光にきらついていた。槍を持った兵

士に掴みかかれそうになり、フェリシアはとっさに身を引いて声を上げる。

「いや、来ないで馬鹿!!!」

「何の騒ぎだ」

すると、三人の背後から野太い声が響いた。見上げると、門番より豪華な鎧を纏った巨漢の兵士が三人を見押している。たちまち門番二人は青ざめて直立不動の姿勢をとった。

「中佐殿!こ、この娘が、あろうことか皇帝陛下の指名を受けた娼婦だと自称するものですから、自分たちは真偽を確かめようと……」
「ほう、陛下を差し置いて、自分たちで楽しもうというわけか。万
一その娘が陛下のお召しなら、どうなるかわかっているだろうな?」
その言葉に、門番たちは震え上がる。中佐はそんな二人から、フェリシアのほうへ視線を移した。

「娘、陛下に呼ばれてきたというのは本当だろうか?」

「ほ、本当よ」

こうなればどうにでもなれと肯定すると、中佐はすんなり頷いた。

「……よからう。ならばついてくるがいい、陛下のお部屋に案内してやる」

その言葉に、フェリシアは仰天した。驚きのあまり絶句している彼女にかわって、門衛の一人が聞いてくれる。

「その娘、ろくに身元もわかっておりませんが、よろしいので?」
すると中佐は、獰猛な笑みを浮かべて頷いた。

「もしもこの娘の虚言ならば、陛下直々に捌きを下されるだろうさ。我らが皇帝陛下は、若い娘の悲鳴が大層好きだからな。別の意味で楽しんでいただけだろうよ」

身の毛も弥立つようなその言葉に、フェリシアの肝が冷えた。それでも何とか冷静を保っていられたのは、彼女にとって魔法を使えば皆から逃げることなど容易いためだ。

(失敗したって、最悪逃げればいいんだから。目的まで案内してくれるって言うんだから、これは逆にチャンスよ)

腹を決めたフェリシアは、先導の兵士の後に従って歩き始めた。

魔法の技術を捨てたボニファーツでは、他国で当たり前のように使われている魔法道具が存在しない。存在したとしても、使うことを禁じられている上に使い方を知る人間もいない。よって、砦の中を照らすのは松明に灯された天然の炎だ。グランデイルの砦と比べて格段に暗い石造りの通路や階段を、何度も足をとられそうになりながら、フェリシアは必死で前を行く兵士の後についていった。できれば敵情視察などしたいところだったが、とてもそんな余裕はない。ただ、逃げ出すための窓の位置だけはそれとなく把握しながら、ようやく目的の部屋の前にたどり着いた頃には、息が上がっていた。

「ここで待て」

案内の兵士は偉そうにそう告げて、先に部屋の中へと入る。しばらく待つて出てきた彼は、自身も意外そうな顔で、短く言った。

「入れ。陛下がお待ちだ」

彼女は爆発するかと思うほどに早鐘を打つ心臓を押さえて、重厚な扉を押し開けた。

「失礼いたします」

入った部屋は意外なほどに殺風景な場所だった。少ない家具である机に触れてみると滑らかな手触りで、品質は上物だ。しかし、皇帝の使う部屋としては驚くほど装飾が少ない。そんな事を考えながら視線をめぐらせると、フェリシアに背を向ける形で、部屋の奥の窓辺に巨大な人影が佇んでいた。夜着を纏った皇帝ゼルギウスその人である。

（武器も持ってない……いける！）

フェリシアは密かに、魔法を発動させた。佇むゼルギウスはそれに気づかず、フェリシアに背を向けたままだ。目的が達成したも同然の情況に、フェリシアは大きく胸を撫で下ろし、ゼルギウスの元へ歩み寄った。

「こんばんは、皇帝陛下。今夜は、貴方をお願いがあつて参りました」

声をかけると、胡乱げな表情の皇帝が振り返る。フェリシアは皇帝から数歩離れた場所で、足を止めた。簡単な持ち物検査の結果、カバンに入れていたナイフだけはさすがに没収されている。しかし、フェリシアはそもそも武術の達人だというゼルギウスを、剣や格闘でどうにかしようなどとは考えていなかった。

「……む」

ゼルギウスは無言でフェリシアの方へ歩み寄ろうとし、二歩も行かないうちにその行く手を阻まれた。

「貴方の周囲に魔法の防壁を展開しました」

フェリシアの言葉通り、ゼルギウスの周囲は両手を伸ばせる程度の空間を残して遮断されていた。

「兵士を呼んだって駄目ですよ、こちらには貴方という人質がいるんですから。そこから出して欲しければ、金輪際グランディールに手は出さないと約束してください。そうですね、まずはこの砦から全軍撤退していただいて……」

要求を告げながら、フェリシアは段々不安になっていった。ゼルギウスは状況を理解しているようなのに、何も言わずに立っている。その精悍な顔には、薄く獰猛な笑みが浮かび始めていた。

「何が、おかしいんですか？」

微かな怯えを苛立ちに隠して問いかけると、ゼルギウスはにやりと唇を歪めた。

「浅はかな娘だ、グランディールの人形姫よ。一人でここまでやってきた、その気概だけは認めてやろう」

（うっ、私が誰だかばれてる……いやでも、皇帝の身柄は押さえたんだから、今更私の正体がわかったって問題ないわ）

気を取り直したフェリシアをどう思ったか、ゼルギウスは自分の周りに張り巡らされた障壁に触れてこつこつと弾いた。

「しかし詰めが甘いな、娘。本気で余に要求を呑ませたいのなら、

この中にいる限り苦痛を与える仕掛けでも作って置けばよかったのだ。そのようなものに屈する余ではないが」

「言ったでしょう、貴方は大事な人質なんです、傷つけるわけにはいきません」

「命を奪わず苦しめる方法など、いくらでもあるっ？」

せせら笑う皇帝に、フェリシアは寒気を覚えた。檻に入れられているのはゼルギウスのはずなのに、まるで自分の方こそが捕食者だといわんばかりの余裕。

「そもそも、本当に兵士を呼んでも無駄なのか？窓は余が塞いでおるぞ。入り口を固められれば、逃げ道がないのはそちらも同じではないか？」

問われ、フェリシアはまったく動じないゼルギウスを少し脅すことにした。

「逃げ道なんて、作ればいいわ」

ここが砦の最上階であることは確認済みだ。フェリシアは天井に掌を向けると、閃光の魔法を放った。夜闇に凄まじい光が走り、轟音を立てて天井が崩れる。

「皇帝陛下！？何事でございますか！！？」

部屋の外で兵士達が騒ぐのを聞きながら、フェリシアは舞い上がる粉塵を風の魔法で大人しくさせ、大穴の開いた天井を見上げた。星々の輝く夜空が、場違いなほどに美しい。

「私なら、ここから飛んで逃げられます。この際、砦を全部壊しちゃうのもいいかもしれませんね。さあ、どうするんですか、皇帝陛下？」

「なるほど、逃走経路も用意しないで突撃するほど愚かでもないらしい。しかしお前は一つ大きな思い違いをしている、人形姫」

ゼルギウスはもはや嬉しそうな笑顔を隠そうともせず、フェリシアに歩み寄った。

「え……っ？」

一瞬、こちらにやってくるゼルギウスを呆然と見つめるフェリシア。

ゼルギウスにとって、小娘一人捕らえるにはその一瞬で事足りた。瞬く間にフェリシアへと肉薄した彼は、白く細い娘の首を掴みあげる。

「う、あ……！」

突然首を絞められてもがくフェリシアの耳に、ぱちんという留め金が嵌るような音が響いた。次の瞬間、乱暴に床の上へ投げ飛ばされる。けほこほと咳き込みながら喉に手を当てると、身につけた覚えのない装飾品の感触があった。

（何、これ、なんで？何で！）

障壁の魔法は完璧だった。フェリシアが生きている限り、停止か過去の魔法以外では決して崩れない壁を越えたゼルギウスを、恐る恐る見上げる。強靱な肉体の帝王は確かに強そうだったが、魔力は間違いなく一般人程度のもだった。フェリシアが渾身の力を込めて築き上げた魔法壁を消去するなど、ダリルでも難しいはずだ。ゼルギウスに消去が出来る要素など、ひとつも見当たらない。

「得意の魔法を捻り潰されて驚いたか、人形姫？」

「こ、来ないで！」

フェリシアは後ろにずり下がりながら、先程開けた大穴を見上げた。とにかくここは、逃げるに限る。

「きゃあっ！」

そして飛び立つため風を呼ぼうとし、悲鳴をあげて倒れ伏した。魔法を使おうとした瞬間、首元に激痛が走り、魔力の流れを無理矢理遮断されたのだ。そして、魔法を消去されたときのような倦怠感が体を襲う。

（まさか、魔法が使えなくなってる……！？）

慌てて原因らしい首の装飾に手をかけるものの、継ぎ目も止め具も見当たらない。

「それを外そうとしても無駄だぞ、人形姫」

彼女を嘲笑うかのように、ゼルギウスの声が降って来た。

「浅はかな娘よ。なぜ魔法を捨てた我らが、魔法を使う貴様らと対

等に戦つて来られたと思う？我らは魔力を封じる方策を手に入れた。勿論、万能の力ではない。使うには手間も時間も金もかかる代物ではあるが、あらかじめやってくるとわかっている魔法使い一人捕らえるためなら、なかなか便利なものだ」

「さ、最初から私のこと、わかつて……？」

「そうとも。先程の中佐が、会談でお前の着ていたマントを覚えていてな。そうでなければ、身元のわからない娼婦をあつさり通すはずがあるまい」

皇帝の言葉を、フェリシアは呆然と聞いていた。

「哀れな娘よ。お前は本当に、一人でここまで来たのだな。戦場に出たことがなくとも、将校クラスの誰か一人にでも相談していれば、帝国が魔封じの方を持つてしていると教えられただろうに」

一人で突つ走らなければ避けられた事態だと、いつそ優しいぐらいの口調で教えられて、フェリシアは絶望に目を見開いた。

「今宵は良い夜だ。グランディール王の溺愛する至宝とやらが、自ら飛び込んできたのだからな。使わせてもらうぞ、人形姫」

ゼルギウスは短刀を抜き放ち、フェリシアの長い髪を掴みあげた。頭皮を引つ張りあげられる痛みに、フェリシアは抵抗を試みる。

「い、いやだ、やめて、放して……！」

「安心するといい、グランディールとの取引材料になつてもらつただけだ。腰抜け王には真似できなかった無謀な快拳と、余に直接は攻撃しなかつた点に免じて、取引の間だけは無事を保障してやる」
「とても安心など出来ない言葉と共に、ざくりという音がして、フェリシアは尻餅をついた。見上げれば、ゼルギウスの手には切られた髪束が握られている。ゼルギウスが兵士を呼ぶと、側近と思しき上級兵が数名、部屋に入ってきた。

「この髪をグランディールの腑抜け王に送りつける。この娘は……
そうだな、クルトにでも世話をさせるといい」
今や人質は完全にフェリシアのほうだった。

(どうしよう、どうしよう、どうしよう……！)

後悔しても、時既に遅い。予言の救世主は皇帝の手に落ち、捕らわれるより他になかった。

32・潜入（後書き）

V Sゼルギウス編でした。この話が始まって以来最大のピンチ。捕らわれのお姫様ってロマンだけど、冷静に考えるとかなりグラウンディング側で、イル側に迷惑かけてます。

皆最近フェリシアのことを人形姫と呼ばなくなってきたので、人形姫と連呼してくれるゼルちゃんは貴重な人材。

33・囚われの姫君（前編）

ボニファーツ兵に引っ立てられ、フェリシアが放り込まれた部屋は、皆でメリッサが使っていた使用人部屋のような小部屋だった。

思いのほか小奇麗な場所ではあるものの、唯一の窓にはしっかりと鉄格子がはめ込まれ、扉には鍵が掛かっている。牢獄であることは間違いなかった。おまけに首につけられた魔力を遮蔽する首輪は鎖で鉄格子につながれている。鎖が長いので部屋の隅々まで動くことは出来るが、まるで犬のような扱いだ。

「この、出せー！首輪、せめて鎖だけでも外しなさいよー！」

ドンドンと扉を蹴り、殴り、鉄格子を引っ張り、首に引っかき傷が出来るまで首輪と格闘すること一刻ほど。ついに精根尽き果てて、フェリシアはベッドの上に倒れた。

（私の髪をグランデイルに送りつけるって言ってたけど、早馬ならもう届いた頃かな。みんな、心配してるかな、怒ってるだろうな……）

少しでも役に立ちたいと願ってはじめてしたことなのに、結果はもはや裏目に出るところの話ではない。

（私のせいで皆がゼルギウス帝の言いなりにならないうちに逃げない。それとも、私、ここで見捨てられるかも……要求は呑めません、こんな役立たずの救世主、どうぞ始末してくださいって言われたら、どうなるんだろう）

焦燥と自責の念が重過ぎて、まともに働かない思考はぐるぐると同じところを回り続ける。部屋に入り込んだ羽虫が耳元を飛ぶ音に眉を顰め、フェリシアはまどろみと覚醒を繰り返しながら夜を過ごした。

その頃、オズワルドは緊急会議を招集していた。真夜中だということに、オズワルドが指定した会議室にはキアランやハロルド、デイ

ラン、その他グランディール軍の主だった武将たちが勢ぞろいしている。会議室の外からは、メリツサのすすり泣く声がした。

「私が、私が悪いんです……！お嬢さまの気持ちも考えずに、ひつ、戦いを勧めるような事言っただから、えぐっ、お嬢様、お嬢さまがぁ……！」

時折、そんなメリツサの声と、彼女を宥める女性騎士の声が漏れ聞こえる。会議室に集まった人々は一様に険しい表情で、目の前の机の上に置かれた三つの物品を見下ろした。一つはフェリシアが書き残した置手紙、もう一つは今しがたボニファーツから届けられたこげ茶色の髪の毛の束、そして最後の一つは髪束に添えられていたゼルギウスの要求書だ。

「さて、この要求、どうしたものか……」

誰かが重々しく口を開くと、激しい気性の軍人が立ち上がった。

「そんなもの、考えるまでもない！陛下、このような見え透いた要求、呑む必要はございませんぞ！！」

彼がバシツと音を立てて叩いた要求書には、たった一つの条件のみが書かれていた。フェリシアの身柄と引き換えにされるのは、ボニファーツ軍の勝利でも、オズワルドの首でも、グランディールの領土でもない。フェリシア・チェンバレンと親交のある者、親類縁者、その全てである。その意図することは、フェリシアに対する人質だ。グランディールに戻された彼女に、「人質の家族や友人を殺されたくなければボニファーツの思惑通りに動け」と脅すつもりだということとは明らかだ。フェリシアが情に厚い娘だということまで調査した上での要求である。

「相変わらず、やることが卑劣だな」

嫌悪を込めてディランが吐き捨てる横で、キアランは蒼白になっていた。今にもフェリシアの滑らかな髪をかき抱いて叫び出したいのを必死に堪えて、強く拳を握り締める。

「いやそもそも、その髪が本当にフェリシア嬢のものかもわからないうちに、帝国の要求を呑む必要があるのか？」

「しかし、情況から見て彼女が帝国にいるのはほぼ間違いないぞ」「では、かわりに領土の一部でも譲渡するのか？」

「いや、それはやめた方がいい。しっかり領地を受け取った上で、本来の要求とは異なるからとシラを切られるだけだ」

不安げに話し合う武將たちを見回して、ハロルドがオズワルドに呼びかけた。

「陛下」

「何かな、アーデン將軍」

「私が帝国の砦に潜入し、姫君を救出いたしましたでしょうか？」

思いがけない申し出に人々は驚いた。そんな周囲の反応をまったく気にすることなく、ハロルドは淡々と続ける。

「フェリシア嬢はただの捕らわれの姫君ではございません。大方、帝国が魔封じの方法を持っていることを知らずに突撃して捕まったのでしよう。彼女の魔力を封じる道具さえ壊せば、後は自力で逃走できるはず」

「おお、それは頼もしい」

ハロルドの言葉に武將たちはようやくほっとした表情を見せたが、デイランや国王兄弟は騙されなかった。一番に抗議の声を上げたのはキアランだ。

「將軍、ならばその役目は俺が引き受ける。貴殿を行かせるわけにはいかない」

「取引の間、戦闘は行われなないのですよ？療養と陛下の警護で忙しい殿下よりも、やることのない私の方が適任だと思われませんか？」

「いいや、駄目だ。將軍は、もしもフェリシアの救出が適わなかったとき、彼女を殺すつもりだろうか？」

問いかげに周囲は騒然となるが、ハロルドは涼しい顔だ。

「……いかにも。私はグランデールを守護する者だ。たとえ陛下に恨まれようと、王国に害を及ぼす者を生かしては置けない」

肯定して見せたハロルドを、キアランは射殺さんばかりに睨みつけた。

「そんなこと、させるものか。フェリシアは俺が助けに行く。陛下、どうか束の間お傍を離れることをお許してください」

後半は兄に向かって訴えかけると、オズワルドは首を横に振った。

「それは許可できないよ、キアラン」

「何故です！？俺が療養中の身だからですか、俺の力が信用なりませんか！？」

「いいや、お前は私にはもつたいないほどよく出来た、自慢の弟だよ、キアラン」

その言葉にいつものキアランなら有頂天になっていたことだろうが、生憎今の彼にそんな余裕はない。じつと兄を見つめると、オズワルドは薄ら寒い笑みを浮かべた。

「ただね、私はフェリシアには無事でいて欲しいのだ。お前は彼女が嫌いだろう？助けるといいながら、フェリシアを確実に殺すために立候補したのではないのかい？」

「そ、そんな、俺は……！」

「何しろ君達のいがみ合う様ときたら、この場の誰もが知るところだ」

すると、周囲からも「確かに」「王弟殿下ならやりかねん」と次々に声が上がり、キアランは頭を抱えた。すると、彼の上司が助け舟を出す。

「では、こういうのはいかがでしょうかね、国王陛下」

デイランの申し出に、オズワルドは内心舌打ちし、キアランはその案に飛びついた。

翌日、朝日の光と共にフェリシアは目が覚めた。自分がどこにいるのかわからなかったのは一瞬のことで、すぐに捕らわれの身になったことを思い出す。そして昨夜、蹴つても殴つてもびくともしなかつた扉が開いているのを見て起き上がった。

「扉、開いてる……！」

「おい、逃げるなよ」

そのまま部屋から飛び出そうとした彼女は、すぐさまベッドの上に引き戻された。

「うぐっ！」

首輪の鎖を引っ張られて、一瞬息が詰まる。フェリシアが涙目で見上げれば、にやけた表情の男が鎖を弄りながらこちらを見下ろしていた。

（この人、確か、会談に出席してた皇子の一人……！）

厭らしい目つきで自分を眺め回す男の視線に鳥肌が立つ。男はフェリシアの怯えを感じ取ったか、満足そうに唇をゆがめて彼女の上に押し掛かった。

「まあ、目が覚めてよかったぜ。反応のない女をやるんざ、楽しみ半減だからなあ」

「ひっ、いやあっ、触らないでよ……！」

これから何かおぞましいことが始まる予感に、じたばたと暴れるフェリシア。腐っても軍事大国の皇子らしく、男は軽々とそれを押さえ込んだ。

「顔も色気も中途半端だが、なかなかそそる反応してくれるじゃねえの。親父殿は取引なんざまどろっこしいことをするつもりらしいが、救世主様はせっかくのメスなんだ、孕ませちまえば簡単に服従させられるだろうに」

ビリビリと音を立てて、ただでさえ布地の少ないドレスが引き裂かれていく。そして、襷褌切れと化したドレスを引き剥がされる寸前。狭い部屋に、ゴン、という鈍い音が響いた。

「え？」

驚くフェリシアの横に、白目を向いた男が倒れる。倒れた男の背後には、フライパンを片手にした少年が立っていた。

「き、君はあのとときの……！」

左肩と右足に白い包帯を巻いた、見覚えのある少年の顔にフェリシアはぱくぱくと口を開閉する。目の前にいるのは、会談直後の襲撃でフェリシアが撃った少年騎士だった。彼は苛立たしそうにフェリ

シアを見、倒れている男を見ると、舌打ちをした。

「あんた、何いきなり襲われてんだよ。めんどくせえ」

「ひ、人の貞操の危機を面倒臭い!？」

「コレの後片付けが面倒だって言っただよ」

少年は生意気そうな顔に侮蔑の表情を滲ませ、左足で倒れている男を蹴飛ばした。男は呻きながら部屋の外に向かって転がる。

「あ、私も手伝ってあげる」

その様子を見たフェリシアは、破れた服の上からシートを被ると、恨みを込めて男の背中を蹴倒した。丸太のようにゴロゴロと部屋の外に蹴り出される男を、少年はちよつとだけ哀れみの目で見てから、フェリシアに向き直る。

「おい、人形」

「うわあ。人形姫とか救世主とか色々な呼び方されてきたけど、人形だけで呼びかけられたの、私初めて」

「朝メシだ」

遠まわしな抗議の声を完全無視して、少年は男を殴り飛ばしたときにも使ったと思しきフライパンを差し出してきた。中には目玉焼きとパンが入っている。パンは卵の中に半分埋まってこんがりと狐色に焼けており、どちらかというフレンチトーストに近い料理になっていた。

「わあ、おいしそう。コレ、君が作ったの？」

こくりと頷く少年からフライパンを受け取って、フェリシアはたちまち笑顔になった。

「ありがとう！」

「現金な女だな。こんな時なのに」

「こんな時だからこそ、ご飯くらい美味しく食べたいの。それに私には、フェリシア・チェンバレンって名前があるんだから。君の名前は？」

「……ジーク。ジークハルト。家名はない」

「そう。助けてくれてありがとう、ジーク。この朝御飯もとても美

味しいよ」

ニコニコと笑いながら目玉焼きパンを頬張るフェリシアに、ジークハルトは気が抜けた。自分の手足を撃って戦闘不能にしたフェリシアが憎いはずなのに、話しているとどうにも調子が狂う。居心地悪そうに視線をめぐらせた彼は、入り口からちよこんとこちらを覗く姿を見つけて声を上げた。

「おい、クルト！？お前、なんで来た！」

「ご、ごめんなさい、兄上……。救世主さんのお世話を命じられたのは僕だから、兄上だけにやらせるのは、やっぱり嫌で」

「駄目だ、ボケていてもこの女は敵国の人間だぞ、お前に何かあったらどうするんだ！」

言い合いをはじめる兄弟の間に、フェリシアはまあまあと割って入った。

「君達喧嘩はよくないよ。どうしたのか、お姉さんに話してごらん？」

「年上ぶるんじゃないよ」

ジークハルトは悪態をつきつつも、このままでは埒が明かないことにも気づいていた。不承不承といった様子で、クルトと共に話を始めた。

33・囚われの姫君（前編）（後書き）

長いので今回は前後編です。

なんかサナデイス・ボニファーツ編は主人公が肉体的にも性的にも襲われる頻度が高いなあ。

「人形の救世主」は特に男女どちら向けとも意識してないのですが、お気に入り登録読者様のほかのお気に入り作品を見ると、女性向けと思われるのでしょうか。でも内容はむしろ男性向けのよくな気がします。今回の変態皇子のくだりとか特に。というか、フエリシアさん強姦未遂しかされたことない。……そのうち、まともなラブイエロも頑張ります。キアランが。

いつもはこんなぬるい作品が残酷表現やらR15やらのタグつけててごめんなさい、と思いつながら書いてるんですが、こんなときは心から思います。つけてて良かった残酷表現、やっててよかったR15表示。

34・囚われの姫君（後編）

「え、ええつと、僕は、クルト・ボニファーツといいます。ボニファーツの第十…三？あ、この間、四の兄上が亡くなったから、十二だ！えつと、第十二皇子です」

部屋の外に転がる男を哨戒の兵士に片付けてもらい、クルトが運んでくれた動きやすいパンツとシャツに着替えたフェリシアは、ベツドの淵に並んで腰掛ける少年達の前に座って、まずはクルトの挨拶を受けた。

「ご丁寧にありがとう、私はフェリシア・チェンバレンです。ジークを兄上って呼んでるけど、ジークに家名がないってことは、二人は義兄弟なの？」

すると、ジークハルトが答えた。

「正確には異母兄弟だ。クルトの母君は四番目のお妃様だけど、俺の母さんはお妃様の侍女だったからな。クルトには帝位継承権があつて、俺にはない。その違いだ。ちなみに、さっきあんたを襲いかけた物好きな奴は、確か第二妃の生んだ第五か六くらいの兄だったか」

つまり身分の差はあれど、皆、帝国の皇子様である。しかし弱肉強食の掟がまかり通るボニファーツの砦では、皇子といえど下っ端は自分のことは自分でしなくてはならない。彼らは砦にいる間、食事も洗濯も自分の分は自分でこなしていた。そこへ、更にフェリシアの世話が追加されたのだ。人質に炊事場や水場を自由にさせるわけにはいかないからだつた。

「あー、何か、お仕事増やしてごめんね？」

「謝るぐらいなら、手足を撃って生かすなんて中途半端な真似、するなよ」

敵意に凝った目で、ジークハルトはフェリシアを睨みつけた。

「腑抜けたグランディールではどうだか知らないけどな、ボニファ

「ッでは負傷して戦えなくなるぐらいなら討ち死にする方が名誉なんだ。おかげで俺は面目丸つぶれ、クルトにも肩身の狭い思いをさせている。いつそあの時殺してくれればよかったのに」

「殺してくれなんて言うもんじゃないわ。死んだほうがいい事なんて、あるわけないじゃない」

フェリシアが叱責口調で告げると、クルトも同調した。

「兄上が悔しいの、よくわかります。でも僕は、兄上が生きていてくれて嬉しいです。だから、兄上を殺さないでいてくれてありがとう、フェリシアさん」

「うふふ、クルト君は素直でいい子ねー」

褒められて柔らかな笑顔を返すクルトをよしよしと撫でたフェリシアは、ジークハルトの視線を感じて気まずそうに彼へと向き直った。「でも、悪かったとも思っているのよ。あのとき、私のもっと早く魔法壁を展開できたら、ジークを傷つけなくてもすんだのにつて」そう言われて、ジークハルトは意外そうに目を瞬いた。きよとんとしている様は、クルトにも似た可愛げがあって、なるほど二人は兄弟なのだ。フェリシアは納得する。

「せめて今、魔法が使えたらその傷治してあげられるんだけど……というわけで、この首輪外してみない？」

しかし、駄目元で頼んでもみると思いつきり顔を顰められた。

「その手には乗るか」

「ごめんなさい、それは外せません。僕達には、外し方もわからないし、外したらきつと、父上がすごく怒るから」

目を潤ませたクルトにまで拒否されてしまい、何だか精神的なダメージを受けたフェリシアは頷いた。

「う、うん、私のほうこそ無理言ってごめんね……。でも、ボニフアーツってどうして魔法を捨てたの？ 万能ではないけど、便利な力なのに」

「それは、魔法が怖いからです」

言葉選びに迷いながら、クルトは語った。

「魔法が良いものなら、どうして魔物も魔力を持っているのでしょうか。それは魔力が良い物なんかじゃなくて、恐ろしい力だからって、歴史の先生は言います。僕たちは魔物が使うおぞましい力を捨てることが出来た、選ばれた民なのだ」と

「うわー、選民教育だあ。というか、帝国の人だって使わないだけで、魔力はちゃんとあるのに」

「ええっ!？」

驚いて脅えるクルトを安心させるように、フェリシアは微笑みかけた。

「私のお師匠様の言葉だよ。魔力は力。それ自体に善悪はない」

「????？」

「たとえば、そうだね。クルト君、ジークの料理は好き？」

「はい、大好きです。兄上のお料理は美味しいです」

力いっぱい頷く弟に、ジークが横を向いた。照れているらしい。その様子を微笑ましく眺めながら、フェリシアは続けた。

「美味しい料理を作って喜んでもらうのは、包丁の良い使い方だね。包丁で人を傷つけるのは、悪い使い方。魔力も同じなの。魔力自体に善悪はなくて、その使い方が大事……って、ほとんどお師匠様の受け売りだけど」

少し悪びれて付け足すと、素直に話を聞いていた兄弟は、複雑そうに表情を曇らせる。

「まあ、言ってることはわかるけど……」

「でも、やっぱり、魔法の力は怖いです」

話を理解しつつも納得はしていない様子の子に、フェリシアは苦笑した。祖母のことを思い出したのだ。

アメリカ人である優花の祖母はクリスマスチャンで、聖書を信じていた。人間は神様の作ったものであり、進化論など嘘っぱちだと断じてはばからなかった。ただ、その考え方を子供や孫たちに押し付けることはしなかったから、優花自身は無宗教である。それでいて、クリスマスは祝うし正月は神社にも行く、困ったときは神頼みもす

る、一般的な日本人の宗教観に育った。祖母に言わせればそれは不思議なことだという。優花としては進化論よりも聖書を信じる祖母の方が不思議だったが。

大好きな祖母のことも宗教という点においては理解できなかったように、ジークハルトやクルトの魔法に対する認識も、フェリシアにとっては理解しがたいものだ。それでも、正しいと教えられてきた常識に逆らうのは難しいのだろうということはわかったから、無理に納得してもらおうとは思わなかった。

（というか、こういう価値観の違いって結構宗教が絡んでくること多いよね。ボニファーツは神様への信仰を捨てた国だというけれど、魔法を捨てたことと関係あるのかな）

その辺りのことを尋ねると、ジークハルトは首をかしげた。

「俺は学者じゃないから、魔法と関係あるのかはよくわからない。

けど、俺たちは神様なんていなし、いたとしたら邪神のようなものなんだと思っている」

「どうして？」

「だって、本当に神が人を愛し慈しむものなら、どうして魔物に襲われる人間を助けてくれないんだ。先に神の方が人間を見捨たんだ。だったら俺たち人間も神を捨ててやる」

過激な考え方ではあったが、案外筋は通っている話だ。なるほどと頷くフェリシアを、ジークハルトは胡散臭そうに見た。

「あんた、本当にグランデール王国の人間か？ 奴等からしたらこれ、異端なんだろう？ 何で納得できるんだよ」

「え？ ええと、私はあまり敬虔な方じゃないからさ」

むしろ、多様な宗教観を緩やかに受け入れてきた日本人の魂を持つフェリシアだからこそ納得できた話だ。敬虔なグラノーヴァ信者であれば卒倒しかねない価値観である。

（国ごとの価値観の違いってやっぱり面白いなあ）

俄然的好奇心の刺激されたフェリシアは、その後もジークハルトたちにボニファーツの文化風習を尋ねてみた。クルトは兄以外の話

し相手が出来たのが嬉しいらしく、にこにこ話してくれる。ジークハルトの態度はそっけないものの、どこかの王弟に比べれば可愛らしいものだった。

ジークハルトとクルトのおかげで、思いがけず楽しい時間を過ごすこともできたフェリシアだったが、やはり一人になると不安がこみ上げてきた。捕らえられて二日が経過した朝、諦めきれずに首輪を弄っていたフェリシアは、ふと疑問を感じた。

（この首輪って、どういう仕組みなんだろ）

ポニファーツは魔法技術を捨てた国だ。首輪が消去の魔法道具になっているというよりは、首輪の材質自体が魔法を遮っていると考えた方が自然である。試しに水呼びの魔法を使う感覚で魔力を流し、具現化する一歩手前で強制終了させると、喉元に魔力が滞る感覚が残る。

（何か、首のところ、ざわざわする……）

なんとなく感じる不快感に顔を顰め、フェリシアは首輪の大凡の仕組みを理解した。魔法とは魔力の流れで行使する。いわば流れる川のようなものだ。それを、ダムを作って無理矢理せき止めているイメージだ。魔力そのものがすぐに消えるわけではなく、せき止められた魔力はそこから自然発散していく。

（ということは、水をガンガン流してダムを押し流せばどうだろう）
魔封じの首輪による魔力のダムは、フェリシアでも強固だと感じる。通常の魔術師なら押し流す前に魔力が枯渇してしまっただろうが、フェリシアの力は無限だ。無理をすればなんとかなる。

（うーん、でも……）

それは状況を打破し得る光には違いなかったが、現実味があるかと問われれば微妙だった。決壊したダムの水が大洪水を起こすように、魔封じを無理矢理破れば、あふれ出した魔力が暴走し周囲に甚大な被害を及ぼす恐れがあった。フェリシア自身も無事ではすまないだろう。

（痛いのは嫌だし、暴走に巻き込まれて辺り一面更地になったりしたら目も当てられない……これは本当に最後の手段にしよう）やるべきことは穏便に首輪を外して逃げるだけ、つまり結局は振り出しに戻るのだ。軽く溜息をついた彼女の元を、本日の朝食を持った皇子兄弟が訪れた。

「おはようございます、フェリシアさん」

「メシだ」

クルトに挨拶を返し、ジークハルトに礼を言っただけで食事を受け取るフェリシア。こちらでも食糧事情はグランディールのサナディス大砦と変わらないので、保存食を多用したメニューだが、ジークハルトの手料理に外れはない。

「うーん、美味しい。ジークは本当にお料理上手だね」

フェリシアの世話をするといつても、ジークハルトたちは皇帝の息子である。仕事はせいぜい、食事に着替えの用意、夕刻に体を拭くための湯と布を用意する程度だ。フェリシアの身柄をめぐって、ボニファーツとグランディールが交渉している間戦闘は行われない。その上ジークハルトは負傷、クルトはまだまとともに剣を振るえないので、時間をもてあまし気味だった。その結果、三人はしばらくおしゃべりすることになる。

「そもそも、クルト君なんてまだ小さいのに、どうして戦場に来ることになったの？」

話の始まりはそんな世間話だった。言葉に詰まるクルトに変わり、ジークハルトが答える。

「戦場に行けば、多少は箔がつくからだ。クルトの母君、第四妃様が既に亡き人ということもあって、クルトの立場は皇位継承者の中では最弱に近い。縁者である俺が功績を挙げれば、本国での待遇もよくなるからな」

「そう……それでオズワルド陛下を狙ったの」

こくと頷くジークハルトを、フェリシアは複雑な気持ちで見つめた。

「クルト君がとても大事なんだね」

「勿論だ」

聞けばジークハルトの母親は、主である第四妃より先に皇帝の子供を身ごもったため、腹を搔つ捌いて親子共々死のうとしたそうだ。第四妃はそれを阻止し、ジークハルトの母をそのまま取り立て、生まれた子のことも可愛がってくれたのだという。第四妃に大恩あるジークハルトは、彼女の息子であるクルトを守ることに全力を注いでいた。

「それにクルトは学のない俺と違って頭もいいんだ。皇帝には、出来ればクルトになって欲しい」

異母兄の言葉に、クルトは困ったような顔をする。

「僕は、兄上と二人で穏やかに暮らせれば、それでいいんですけれど」

一瞬、微笑ましさに目を細めたフェリシアだったが、ふと気になって聞いてみた。

「兄上と二人？他のご兄弟は？」

「……他の兄弟姉妹にとっては、僕は空気みたいなものだから」

クルトが儚げに笑うと、

「あいつら、他の帝位継承者を押しつけて自分が権力を握ることしか考えてねえ。極力関わり合いにはなりたくないな」

ジークハルトが憤然と悪態をつく。

「そうなんだ……」

可愛い弟しか知らないフェリシアとしては、少し想像しづらい話だ。

「あ、でも、大きな声では言えないけどオズワルド陛下が兄上だったらいいなあとは、ちょっと思います」

「クルト!？」

「あ、も、もちろん一番はジーク兄上だよ!」

裏切られたといわんばかりのジークハルトに、クルトはフォローを入れる。

「父上や兄上たちは腰抜けて言うけれど、僕はオズワルド陛下格

好いと思います。この間の会見でお話を窺って、民が幸せになれるように心を砕いておられるのがよくわかって。僕、万が一皇帝になることがあつたら、恐怖で政をする父上よりも、あんな風になりたいです」

瞳をキラキラと輝かせて語るクルトは、横柄なゼルギウスの子とは思えないほどに可愛らしく聡明だった。

「本当、クルト君って可愛いー。弟を思い出すわ」

フェリシアが思わずそう言うと、ジークハルトが怪訝そうな顔をした。

「弟？グランデールの救世主は、一人娘じゃなかったか？」

「そ、それは、その、弟は生まれてすぐ、世間に公表する前に死んじゃったのよ」

慌てて誤魔化したフェリシアは、内心で溜息をついた。

（なんか、この国に来てから嘘ばっかりついてるなあ……）

密かに気疲れていると、クルトが心配そうにこちらをのぞきこんできた。フェリシアははっと我に返り、クルトに微笑みかける。

「大丈夫だよ。クルト君、ちょっとオズワルド陛下に似てるもの。

きつとなれるよ。あ、兄と弟が逆だけど、ジークも少しキアランに似てるかも」

何気なくそう言って、自分で出した名前に心臓が跳ねた。

（キアラン、どうしてるかな。……心配、かけてるかな）

何しろこの体は、彼の想い人のものだ。何とか無傷で返してやりたい。それ以上に、初めはあんなにもいがみ合っていたにもかかわらず、会いたかった。

（キアラン……）

心の中で、名前を呼んだときだった。ガタン、と音を立てて部屋の扉が開いた。

「!？」

「失礼する」

ノックもしないで部屋に踏み込んできたのは、上級兵を引き連れた

ゼルギウスだった。

「父上……」

クルトが小さく息を吞んで兄の陰に隠れ、ジークハルトは弟を庇うように腕を広げる。しかしゼルギウスは息子たちには目もくれず、フェリシアの前までずかずか進むと、目の前の娘を高圧的に見下ろした。

「出る。グランディールの意向が決まった」

「……早かったですね」

愈々この時が来たかと、きつくズボンの脇を握り、フェリシアは呟いた。

「無駄な時間が減って何よりなことだ。行くぞ」

ゼルギウスはそんなフェリシアの様子を鼻で笑い、踵を返す。フェリシアに拒否権はない。兵士の一人が鉄格子から鎖を外すと、フェリシアは引っ立てられるように皇帝の後を追ったのだった。

34・囚われの姫君（後編）（後書き）

囚われのお姫様編、これにて終了。といつつ続きが気になる形ですみません。出来るだけ早く次の話を更新しますね。

さて、今回は再びグランデール勢登場です。キアラン辺りはひたすらボニファーツ憎しですが、

ジーク：強姦魔撃退 小僧よくやった

クルト：オズワルドりすべくと なかなか見所あるじゃないか

という感じでジークとクルトは大目に見てもらえるのかな。あ、でもジークは28話でオズワルドに剣を向けたから無理かもしれない。

引っ立てられたフェリシアは、何故か別室にて飾り立てられていた。

「……あの」

「なあに、お嬢ちゃん？」

フェリシアに化粧を施している、下の町から呼ばれたという娼婦に話しかけると、彼女は妖艶な笑みを見せた。

「何で私、おめかしさせられてるんでしょうか？」

「何か、粗末に扱ったと思われたら困るとか、偉い人たちが言ってたわ」

「鎖でつないでおいて、粗末も何も無いと思うけど」

「あらいいじゃない、綺麗な格好は楽しまないと損よ。変わってるけど楽しい仕事ね。偶にはこういうのもいいかも」

満更でもなさそうな娼婦の言葉に、フェリシアは諦めて目の前の鏡を見遣った。まずは、腰までであった髪がぱつさり切られているのが目に入る。ちょうど、斉藤優花の体だった頃と同じぐらいの長さで、毛先も綺麗にそろえられている。髪の短い女は罪人の証というこの世界で、平民の娘なら何とか許される長さだ。久々にまともな風呂に入って磨かれた肌に纏うのは、華やかな色彩のドレス。調達した場所が場所なので胸も背中も大きく開いた高級娼婦の服である。あえて髪を下ろすことで露出度を抑え、化粧は控えめだ。そして、今のフェリシアの格好からは浮いている、光沢のある皮のような素材で出来た首輪。無骨な鎖がついているために、まるで気分は売られる奴隷だった。

（いや、あながち間違っちゃいないのかも……）

支度が出来たフェリシアの鎖をゼルギウス自らが引っ張り、数人の兵士と軍師をひきつれて砦の外へと向かう。そのまま軍隊同士の戦争になることは無さそうだった。一行は船に乗り、会談が行われた

中州へと向かっている。その船に揺られながら往生際悪く首輪を弄るフェリシアを、ゼルギウスが嘲笑った。

「まだそのような無駄な労力をかけているのか。逃れられるものなら逃れてみるがいい、それには傷一つつかないだろう」

「余計なお世話です。それより、もう教えてくださってもいいんじゃないですか？私が、何と引き換えに祖国へ帰されることになったのか、それともグランディールへ帰されることはないのか」

半ばやけくそでゼルギウスに問いかけながらも、フェリシアは後者の可能性は薄いと見ていた。フェリシアが返される可能性がないのなら、わざわざ飾り立てて国境まで連れて行く意味がない。すると、ゼルギウスはにやりと笑った。

「奴らめ、こちらの要求には答えずに、戦者の決闘を申し込んできた」

「戦者の決闘……？」

「人の国が、まだ分かたれていなかったころの古い制度だ」

すなわち、グランディール初代王の時代の話である。騎士や軍人など戦いを生業とする者同士で争いがあった場合、その名において決闘を申し込み、一騎打ちで雌雄を決するという制度だ。現代でも名誉が傷つけられた際などに国を問わず行われるもので、その特性上、申し込まれた決闘を断ることは卑怯者、臆病者の謗りを受け、名は失墜することになる。軍事大国の帝王が断れるはずもなかった。

「決闘によって奪い合われるのは、無論お前の身柄だ」

「そんな事が……意外だ、あのアーデン將軍が私のために決闘なんて。あ、それともディランさんかな。どちらにしる余裕でいられるのも今のうちですからね、皇帝陛下。グランディールの將軍も騎士団長も強いんだから！」

ハロルドかディランなら、きっとゼルギウスとも対等に渡り合える。苦戦はするかもしれないが、きつと勝ってグランディールへ戻れると、希望を抱いたのもつかの間だった。

「挑戦者は、將軍でも騎士団長でもないぞ」

ゼルギウスが告げた。

「地位としては、平の騎士だ。王弟、キアラン・グランディール」
「キアランが!?!」

その名前を聞いて、フェリシアは青ざめた。今にもゼルギウスに掴みかからんという勢いで訴える。

「やめて下さい!お願いですから、その決闘、断ってください!」
フェリシアが砦を出たとき、キアランはようやく日常生活が送れる程度に回復した重病人だった。特に、大量の魔力を失った反動で魔法はまず使えないだろう。体調万全のときでもハロルドやディランに比べると危ういというのに、今の状態でゼルギウスと決闘など、とんでもない話だ。しかしゼルギウスは、寒気にするほどの無表情でフェリシアを威圧する。

「ふざけるな。余はボニファーツ皇帝なるぞ。一度受けた決闘を覆せなど、余を愚弄するにもほどがある」

「ひっ……」

「ゆめゆめ、神聖なる戦いの場を邪魔しようなどと考えるなよ、小娘」

ゼルギウスは特大の釘を刺すと、後はフェリシアから興味を失ったように前を向いた。船は静かに怒り猛るゼルギウスと打ちひしがれるフェリシアを乗せて、進んでいく。

一方、グランディール側では既に決闘の場に人員が集まっていた。決闘を申し込んだ当人であるキアランに、立会人を勤めるハロルドの他には、数名の兵士。軽鎧を纏い、愛剣を念入りに磨くキアランに、ハロルドは静かに問いかけた。

「殿下。本当によろしいのですか?」

「何がだ」

「決闘です。私が信用ならないなら、ヘイグ殿に頼んでも良さそうなものを」

「団長でも同じだ。貴公よりはフェリシアを助けるために努力して

くださるだろうが、それでもグランデールの一臣下だ。フェリシアが邪魔になれば、団長も躊躇いなく彼女を討つだろう」

それはキアランにとって許せないことだった。もし、どうしてもフェリシアを殺さなければならぬなら、せめて自分の手で。そんな狂気にも似た切望が胸を焦がす。フェリシアがゼルギウスの手に落ちてからというもの、彼女が痛めつけられてはいないか、怖い思いをしてはいないか、気が狂いそうだった。どんな形であれ、その思いも今日決着がつく。体調とは裏腹に、キアランの感覚は研ぎ澄まされていた。

「人形姫が感情を得たのは、果たしてよかったのか悪かったのか」闘志に燃えるキアランの後姿を、ハロルドは物憂げに眺めて呟いた。そのときだ。中州の東側から、数人の人影が現れた。

「！」

緊張していた人々の空気が、更に緊迫する。見ればこちらに近づいてくるのは、ボニファーツの皇帝たちだった。グランデール側と同じ数の兵士、立会人の軍師、そしてゼルギウスと彼に鎖で引かれるフェリシア。衣装だけは煌びやかであるものの、犬のように首輪につながれて青ざめている彼女の姿を目にした瞬間、キアランの中で更に怒りが燃え上がった。同時に、数日ぶりに彼女の顔を見られた喜びが心に満ちていく。

(……無理だな)

キアランはあっさりと、先程の決意を覆した。どうしてもフェリシアを殺さなければならぬなら自分の手で、などと考えたが、彼女を殺すなど無理に決まっている。

(なら、あの男に勝てばいいだけの話)

ゼルギウスを倒すぐらい、フェリシアを殺すことに比べればとても簡単なことに思えた。むき出しの闘志をゼルギウスへぶつけて睨みつけると、威風堂々とした体躯の帝王も睨み返してくる。

「ゼルギウス・ボニファーツ。フェリシアを、返してもらおう」

怒りのあまり表面上の形式すら取り繕うことを忘れたキアランを見、

ゼルギウスは口の端を笑みの形に歪めた。フェリシアの鎖を兵士の一人に預けると、愛用の大剣を抜き放つ。

「良かるう。余を打ち倒すことが出来ればの話だがな！」
そして、二人の戦士が激突した。

繰り広げられるのは、まさに死闘だった。キアランが素早い動きで打ち込めば、ゼルギウスの重い一撃がそれを打ち返し、大地に亀裂が走る。大剣が振り下ろされた隙を狙って懐に潜り込み、更にフェイントを多用して必死に食らいつくキアランに対し、ゼルギウスは獰猛な笑みを絶やさずそれを力でねじ伏せた。攻守は幾度となく入れ替わり、剣戟の劈く音が辺りに反響する。常人には目で追うことも困難な動きに、兵士たちは両国とも吞まれていた。

（さすがは王弟殿下。純粹な剣術の技量ならば、私やヘイグ殿にも並ぶ可能性もあるが……）

グランデール側でただ一人、戦いを冷静に見つめるハロルドは、キアランの善戦ぶりを評価しながら、戦いの行く末を危ぶんでもいた。キアランは王国騎士の中で一、二を争う実力者だ。しかし実戦経験はゼルギウスに遠く及ばない。豪腕と狡猾さを備えたゼルギウスの剣は、徐々にキアランを押ししていた。今のキアランでは大きな魔法も使えず、使えたところでボニファーツ自慢の魔封じに封じられることだろう。

（どうなさるおつもりか）

ハロルドは密かに目をかけている王弟に目を向け、そして今回の騒動の発端となった娘を眺めた。

フェリシアは青い顔で地面に膝をつき、両手を組んで、伏目がちに戦場を見つめていた。キアランが自分のために戦い、傷ついている姿に打ちひしがれ嘆いている……わけでは、実はない。そう見えることを期待してのポーズではあったが、彼女の意識は今、全力で自分の首輪に向かっていった。

(早く、早く早く早く！こいつを、壊さなきゃ！！！)

フェリシアは額に薄く汗を浮かべ、しかしそれと帝国側に知られないよう俯いて、魔力を練り上げ体の中へ巡らせていた。

(最強無限の魔力、今使わずにいつ使うつていうのよ！)

首輪というダムを押し流し破壊するために、魔力を増幅させているのだ。同時に、首輪が壊れた瞬間に暴走する魔力から自身と周囲を保護するための防壁も忘れない。封じられた魔力を取り戻した瞬間に魔法を構築するなど、出来るかどうかかわからないが、やるしかないのだ。

(キアランに、これ以上無理なんかさせられない！)

魔封じを破ることに全力をかけていても、キアランのことは心配だった。視界の端に大剣が打ち込まれる様や、よろける姿が映るたびに、悲鳴を押し殺して強く目を閉じる。大量の魔力が溢れ出そうと暴れ、頭が割れそうだ。しかしフェリシア自身の手にも余る魔力の洪水は、ついにピシリと首輪に亀裂を走らせた。

(やった！砕ける！！！)

最後の一押しとばかりに力を込めて、目を見開いた瞬間、グランデイル側から一際大きなどよめきが上がった。思わず顔を上げると、暴発寸前の魔力による頭痛で霞む視界の中、妙にはつきりとキアランの背中が映る。血と汚れとかすり傷でボロボロの体に、容赦なく大剣が突き立てられようとしていた。フェリシアは目を見開き、知らず悲鳴をあげた。

「いやああああああああああつ！！！」

その瞬間、辺りを白い閃光が覆い尽くす。フェリシアの耳に、ぱりんと何かが砕ける音が響いた。

突然の白い光に、その場にいた人々は呻き声を上げて目を覆った。
「ぐうっ！？」

それはゼルギウスすらも例外ではなく、突然視界を焼いた白い光に目を閉じる。次の瞬間、ドンと何かが脇腹にぶつかる衝撃、次いで

焼け付くような痛みが襲う。顔を顰めて目を開ければ、キアランの剣が腹を串刺しにしていた。

「き、さまぁアアア!!!」

キアランは、ゼルギウスの息子たちよりも強かった。それは思いがけず楽しいことだったから、騙まし討ちにあつたような気分で血と共に呪詛の言葉を吐くと、崩れ落ちる皇帝を冷たい眼差しが射抜いた。琥珀の瞳が剣の反射光を受けて、一瞬金に光る。

「決闘は、終わっていない。気を抜いたのは貴公のほうだ、ゼルギウス帝」

その言葉に、確かにキアランを恨むのは筋違いだとゼルギウスは納得した。そして、ふらりと立ち上がったフェリシアを見上げる。強くこちらを見つめ返す眼差しは、愛しい男を殺されそうになって泣き喚くような弱い娘のものではない。

「神聖な、戦いを、邪魔するなど……」

「邪魔はしていないわ。逃げられるものなら逃げてみるといったのは、貴方です。だから、自分の力で逃げただけ」

その首から、粉々になった首輪の破片が滑り落ちた。

「まあ、目晦ましになるといいなあって、暴走しかけた魔力を光に変えたのは、ちよつとずるかっただとは思っけど。あたり一面吹き飛ばすよりはマシな横槍でしょう?」

ゼルギウスは呆然と、碎けて自分の前に転がる首輪の破片を見つめた。これさえあれば魔法しか能のない小娘など恐れるに足りないと、過信した結果が招いた結果だ。

「く、ククツ……!」

「何がおかしい」

フェリシアを守るように抱き寄せて、油断なく予備の剣を構えるキアランを、ゼルギウスは愉快的気分で見上げた。そう、愉快だった。思えば父親である先代皇帝を半ば弑するような形で帝位について以来、その地位を守るためゼルギウスは帝国最強であり続けた。殺し、殺し、ただ殺す人生に、満足はしている。ただ、そろそろその終わ

りが心配な時期でもあった。最強たる自分が、老衰などというつまらない死に方をするのはごめんだ。かといって、軟弱な息子たちに首をとられるのも厭わしく、無能と見ればすぐに殺した。今や自分を殺すほど強い者と出会うことなどないと思っていたのに、世界は広いものだ。

「光栄に思え。貴様らに、感謝しているのだ」

「何だと？」

ゼルギウスの命は今、まさに消えようとしている。自分より強い二人の間によって、殺されるのだ。軍事大国の帝王に相応しい最期に、ゼルギウスは満ち足りた気分だった。

「誇れ、余を殺めた、その力……」

そして、ボニファーツ皇帝ゼルギウスは事切れた。強烈な閃光からようやく回復した兵士たちが見たものは、血の海の中息絶えた皇帝と、救世主の娘を抱きかかえてそれを見下ろす騎士の姿。グランデイル側からは歓声が上がリ、ボニファーツ側からは驚愕の悲鳴が轟いた。

「よ、よくも陛下を……！」

ボニファーツ兵の一人が槍を構えてキアランへ立ち向かう。すると、ハロルドが止める前にボニファーツの軍師が割り込んだ。

「やめないか。これは皇帝陛下がその名において受けた決闘の結果である。陛下の御名を汚す気か？」

「し、しかし閣下……！」

なおも食い下がろうとする兵士に、軍師は苦い笑みを浮かべた。

「それにな、あまり大きな声で言うことではないが……私は、これでようやく肩の荷が下りた。これで、もう、味方の若者や皇子殿下がたを殺さずにすむ……」

疲労に満ちた声に、思うところがあつたのだろう。兵士は引き下がリ、黙々と事後処理を始めた。大きな戦いが、これで一つ終わろうとしていた。

35・決闘（後書き）

お姫様を救うために戦う騎士、これも一つのロマンですよ。フェリシアが自分勝手した結果だとか、その心境だとか書いてると、現実にはそんないいもんじゃないんだろ？なあとはいいつつ。とりあえず、ボニファーツ編はおそらくあと一話で終了です。

ちなみにゼルちゃんの名前を八口たんと間違えて、危うくキアランをアーデン將軍と戦わせそうになったのは内緒だ！お、おかしいな、同じ武人とはいえ共通点はないはずなのに……。

ゼルギウス様といえば、あれだけ不敵な空気を醸しておきながら、結局ただの敵役のままお亡くなりになっちゃって残念。まあ、この後ほかにも色々控えているので、あっさりした終わりというのもしいかも！

36・戦後処理

ハロルドと帝国の軍師が今後について話し合い、兵士たちが歓声を上げたり落胆の声を発したりしている喧騒を、フェリシアはどこか遠くに眺めていた。隣では、何を考えているのか読めない表情でキアランが立っている。

「あの」

「来い」

フェリシアが話しかけようとする、腕を掴まれ引つ張られた。そのまま、傍の木立まで連行される。やんわりと掴みながらも決して逃さない絶妙な力加減は、痛くはないが居心地悪かった。

「フェリシア」

目立たない場所までつれてこられ、フェリシアの正面に立ったキアランが名前を呼ぶ。

「は、はいっ」

思わず背筋を伸ばすフェリシアを見下ろし、キアランは大きく溜息をつく、口を開いた。

「この馬鹿娘！」

久々の怒声に、フェリシアは身をすくめた。恐る恐る見上げてみれば、キアランは怒気と共にこちらを睨みつけている。だが、その瞳にあるのは以前のような侮蔑ではなく、どこか狂おしいような光だった。

「俺が、どれだけ、心配したと思っている！」

「ごめんなさい……」

キアランの怒りは、グランディールの王弟としても、フェリシアを好いている男としても至極真つ当なものだったので、素直に謝罪して俯いた。

「怪我は？奴らに何かされなかったか？」

「だ、大丈夫。キアランの好きなフェリシアさんの体には傷一つな

いいし、ええと、襲われたりもしたけど助けてくれた子がいるから！」
キアランの怒りを解こうと慌てるあまり、何か要らない情報まで喋った気がする。と、思った瞬間、キアランの眉間に特大の皺が寄った。

「そうか、俺の気持ちがあわかっていて勝手に敵地に乗り込んだのか。拳句、祖国に大迷惑をかけて命まで危険に晒したと」

「ごめんなさい！」

「……そんなに、俺が嫌だったのか？国に居たくなるほど？」
途方にくれたような声に再度キアランを見上げれば、彼は置き去りにされた子供のように寄る辺ない表情でフェリシアを見下ろしていた。思いがけない問いかけに、フェリシアは瞬きをして思い返す。
ポニファーツに自分が乗り込んだのはキアランに告白された直後だった。嫌いな男に言い寄られて出て行った、という解釈も成り立つタイミングである。

「そ、そんな、違うよ！」

「だったら何故こんなことをした!？」

「役に立ちたかったの!」

大声で言い返してから、フェリシアは感情的になってはいけなないと一瞬口を噤み、声のトーンを落として続けた。

「私はただ、皆に嫌われたくなくて、役に立ちたくて、魔法を使えば、大量虐殺なんかしなくても、ゼルギウス一人脅せばすむと思うたから……」

段々しどろもどろになりながら、事を起こした理由を話す。すると、キアランが仕方無さそうに微笑んだ。

「お前は……本当に、どうしようもない馬鹿だな。他の者がなんと言おうと、俺はお前が救世主の役目を果たせなくらいで、嫌ったりはしない。お前を知るものは、多分皆そうだ」

「キアラン……?」

「本当は、元の世界の家族の所へ返してやりたいが、俺には世界を渡る力も死者を蘇らせる術もない。だからせめて、お前に無理強い

だけはしないと約束しよう。戦いたくないなら、俺が代わる」

ちようど、キアランがゼルギウスを倒したようにだろうか、と思い当たって、フェリシアは首を振った。

「そんな、私のかわりに貴方が手を汚すことなんて」

「気にするな、俺がやりたいからやるだけだ」

「私はフェリシアさんの体を使っているだけで、貴方が好きな人とは別人なんですよ!？」

「そんな事はない」

迷いなく断言された言葉に、フェリシアはきよとんとキアランを見返した。

「何か誤解があるようだな。お前を好きになつたきつかけが、子供のころのフェリシアとの思い出だったことは否定しないが、お前が誰かなんて些細な問題なんだ。フェリシアでも、異界の娘のユウカでも。笑ったり怒ったり、賢しぶって振舞うくせに肝心なところで考えなしの上、無鉄砲で」

「ちよつと」

「そのくせ人が好くて懸命なお前が好きだ」

曇りのない目を向けられて、心臓が跳ね上がった。

(そ、そそそれはつまり私のことがちゃんと好きってことー!?)
フェリシアのことは好いていても、優花の事は嫌っているか、特に興味を持っていないだろうと思っただけに、彼女にとっては衝撃の告白だった。真っ赤になっただけと口を開閉するフェリシアの反応に、キアランが苦笑する。

「閃光の魔法が飛んでこないということは、少しは期待してもかまわないということだよな」

「う、えつと、その」

「触つてもいいか？」

「ふえつ……!？」

甘く問いかけられて、一通り挙動不審な動作を繰り返した後、フェリシアはこくりと頷いた。するとストレートな聞き方とは裏腹に、

恐る恐る大きな手が頬に触れる。

（そういえばこの人、顔は好みだったんだっけ！はじめてみた時格好いいか思ってたし！改めてみるとやっぱり格好いいし！男はやっぱり美人さん系より遅しいハンサムだよね！！！）

混乱のあまり思考がおかしな方向に飛んでいるフェリスシアの、肩から腕を撫で下ろした手は、最後に背中へ回される。軽く抱きしめられたフェリスシアは、もう一度溜息交じりの声を聞いた。

「本当に、無事でよかった」

その言葉に、フェリスシアはようやく混乱から立ち直った。同時に、すっと心に安堵が満ちていく。自分はこれで、グランディールに戻ることが出来るのだ。キアランが、助けてくれた。「君を守るよ」とオズワルドが言っていた言葉が蘇るが、披露会でも、魔狼のときも、今回も、いつだってフェリスシアを救い上げたのはこの腕だった。

（ああ、私も、本当にキアランが好きなんだ）

素直に認めれば気持ちにもゆとりが出来て、思い切ってしがみ付いてみると、強く抱き返された。広い腕の中は思いのほか、心地よい（私は、キアランに何が返せるかな）

フェリスシアのために代わりに戦うというキアランの言葉は嬉しかったが、やはり彼に無理はさせたくなかった。それでもきつと、自分のために戦ってくれるであろう彼に、何が返せるだろうと考えると、すぐに一つ思いつく。まずは自分も好きだという気持ちだけでも、返せばいい。

「あのね、キアラン、私」

しかし、言い終わる前にキアランの方から抱擁を解かれた。驚いて彼の視線を辿れば、ハロルドと数人の兵士がやってくるどころだった。

「よろしいですか、殿下？」

「何だ、将軍」

不機嫌そうな声音のキアランを気にした様子もなく、ハロルドはポニファーツ側との交渉がひとまず終わったことを告げた。フェリス

アはグランデイルに戻って構わないこと、総指揮官死亡によりボニファーツの敗戦を認められたこと、そのかわりゼルギウスの亡骸は帝国側に譲ることなど、重要な報告であるために無碍にすることも出来ない。

「わかった、詳しい話を聞こう。フェリシア、また後で」

「……うん」

頷いたフェリシアの頭を一撫でして、キアランはハロルドに向きあった。フェリシアも、ハロルドと共についてきた兵士の一人に誘導され、サナデイス大砦へ戻る船に乗り込む。名残惜しかったが、きつとすぐまた会えるだろう。二人ともそう思っていたが、現実はそれどころではなかった。

キアランとゼルギウスの決闘から、一ヶ月が経った。国中が勝利に浮かれ、歓喜し、お祭り騒ぎを繰り広げていたのもようやく収まり出したところだが、王城の人々の大部分は忙しく動き回っていた。何しろ、人の四国の一角を担う皇帝の戦死である。国境問題に賠償請求、講和条約の締結等々、仕事は後から後から沸いてくる。特にゼルギウスを倒し一躍英雄となったキアランは、諸々の会議や社交に引つ張りだこだった。

「おかげであれ以来まともにも会ってないんだよなあ……」

久々に王城の自室に戻ったフェリシアは、ぼやきと共に溜息をついた。キアランとは対照的に、フェリシアは暇をもてあましていた。この一ヶ月のフェリシアといえば、メリッサに泣いてお説教され、オズワルドに笑顔で厳重注意を受け、ディランと共に自棄酒を煽り、王都に帰ってからはダリルやシャロン、ベネディクトに叱られ、諭され、後は放置されていた。

（ただ一言、好きだって言いたいだけなのに。いつそ部屋まで会いに行こうか、でも忙しい相手に「好きです」だけ言いに行くのもなあ……そもそも一ヶ月も経ってる時点で超気まずいんですけど）
悶々としていると、コンコンと扉をノックする音がした。

「どちら様でしょうか？」

メリッサが対応に出ると、現れたのは見慣れたチェンバレン家の執事だった。

「約束もせず、申し訳ございません。旦那様が面会をお求めでございます」

「お父様が？どうぞお通しして」

ベネディクトの来訪を告げる執事に、フェリシアは慌てて立ち上がった。執事に案内されて入ってきたのは、いつもと同じ穏やかな笑みを浮かべたベネディクトだ。

「やあ、フェリシア。突然すまないね」

「とんでもありません、お父様。三日ぶりですね」

ベネディクトはつい先日、戦場から帰ったフェリシアにお説教をしに来たのだ。ベネディクトの場合、叱るというよりもただ人すら年老いた父親に心配をかけないでほしいという懇願だから、怒鳴り詰られるよりかえって厄介である。後でポニファーツの要求を知り、結果次第ではこの父までもが帝国の人質になっていたかと思うと肝が冷えた。そのため懇願と言う名の説教も甘んじて受け入れていたフェリシアだが、さすがに二回目となると辛い。戦々恐々と本日の用件を尋ねると、ベネディクトは苦笑した。

「そう警戒しなくとも、もう怒ってはおらんよ。今日は、今後のことを話し合おうと思ってるね」

「今後のこと、ですか」

「キアラン殿下が伯爵位と領地を賜ったのは、知っているだろう？」

「は、はい」

想い人の名前を出されて、フェリシアの返事が若干震える。これまで頑なに偉くなることを嫌って、地位も領地も拒否してきたキアランだったが、今回ゼルギウスを倒した功績をたたえられ、ついに貴族の爵位と領土を与えられることになったのだ。これほどの手柄を立てた者に恩賞を与えないのでは、王の名が落ちると、半ばオズワルドの泣き落としのような形で譲られたのだと、フェリシアは聞い

ている。

「殿下の爵位か領地が、チエンバレン家と何か関係あるのですか？」

「爵位や領土自体に、問題はないよ。ただ、今まで権力を遠ざけ続けた王弟殿下の叙勲だ、水面下でよからぬ期待をする輩が多くてね」

「よからぬ期待……？」

「反国王派の勢力が、殿下と接触を図るために必死らしい。あわよくば、オズワルド陛下を王座から引きずり落とし、キアラン殿下を新王に、そして自分たちがその側近に成り代わろうという野心家だ」
フェリシアは驚いて目を見開いた。

「何それ、まるつきり謀反じゃないですか。企んただけで十分捕まえる理由になりますよね？そういう人たちがいるってわかってるなら」

「無論、捕縛の準備は進めているよ。何より王弟殿下ご自身が放つて置くまい。しかし、奴らは隠れる術だけは巧妙だ。謀反のたくらみは見えないところで拡がってしまう可能性がある。そこで国王陛下とも相談して、国王派と王弟派の均衡を保とうと思うのだよ」

「そんな、派閥なんて考えなくても、キアランは謀反に加担なんて……」

「王弟殿下が関わるか否かが問題なのではない。そのような企みが画策されること自体が、問題なのだ」

政治家の顔で話を続けるベネディクトの言葉を聞きながら、フェリシアは嫌な予感がしてならなかった。

「折しもサナデイス攻防戦においてはキアラン殿下ばかりが英雄視され、国王陛下も予言の救世主もいまひとつ名声が上がらなかった。王弟派に対抗するため、私たちは国王陛下とのつながりを強固するべきだと考えた。すなわち、フェリシア、お前とオズワルド陛下の婚姻だよ」

思いがけない話の方向に、フェリシアは息を呑む。それと同時に、オズワルドの求婚問題が急激に現実味を帯びてきたことに慄いた。王と救世主が婚姻を結べば、その権威名声は双方高まる。元々王位

継承権を持たない王弟が付け入る隙などなくなると、頭ではわかるのに、フェリシアはどうしても頷くことができなかった。青い顔をするフェリシアに、ベネディクトは首をかしげる。

「どうしたのだね、フェリシア。王妃になれば、いくら救世主といえど、もう危険を冒して戦うことはしなくてもいいのだよ？」

「で、でも、お父様、私は……」

優しいベネディクトの顔は心から娘を心配するもので、無碍には出来ない。かといって、オズワルドの結婚話に今すぐ頷くこともできずにいるフェリシアに、ベネディクトは納得顔で頷いた。

「ああ、すまなかった。いきなり王妃になれといわれても、やはり不安にさせてしまうね。この話はゆっくり考えてくれれば、それでいいよ」

いたわるように言っつて、ベネディクトは部屋を出た。フェリシアは呆然とそれを見送り、すくとソファにへたりこむ。

（サナデイス大若で同じような話は聞いたときは、冗談だと思ったのに。お父様にまでそんな話をするなんて……本当に、オズワルド陛下は何を考えているんだろう）

途方にくれるフェリシアのぼやきに、答えるものはいなかった。

そのころ、自室で転寝をしていたオズワルドは、はっと目を覚まして辺りを見回した。直前まで見ていた夢の内容に引きずられて、しばらく自分の状況がつかめずぼんやりする。ややあって、完全に覚醒した彼は目の前の書類に視線を落とす。

（ここ一ヶ月、戦後処理に追われていたからな……さすがに疲れが出たか。あんな夢まで見るなんて）

溜息をつき、オズワルドは肘置きに寄りかかって頼杖をつくくと、今見た夢を反芻した。まだ彼が何も持たない、愚かな子供だったころの夢。最近、そんな昔の夢をよく見るようになっていた。

「繰り返す夢はグラノーヴァ様の啓示、か。それが本当だとしたら、神は相当な皮肉屋でいらっしやる」

自嘲気味に笑い、オズワルドは残った書類に手をつけ始めた。子供
のころ欲しかったものに、手を伸ばすために。

36・戦後処理（後書き）

これにて本当にボニファーツ編終了、そして何だか不穩に新章スタートです。あえて新章に名前をつけるなら、グランディール内政編？結構ドロドロする予定。早くウルリーク魔法共和国とか、ミネレア教国とかも出したいんですが、同時進行するとただでさえあちこち綻びまくっている話が大破綻する予感。精進します……。

なんだか引き続きシリアス路線っぽいので、この辺りで一つコメディオンリーの番外編でも挟みたいところですね。というわけで、次回の犠牲者は最近デレ期を迎えて調子に乗ってる王弟殿下です。

番外編：鷲の末姫（前編）（前書き）

10月末に公開した番外編です。

話の流れの都合上、こちらに移動しました。

番外編：鷲の末姫（前編）

夕闇の向こうから、自分の名前を呼ぶ声がする。風に揺れる草木は長い影を引き連れて昼間とは様変わりし、まるで大きな魔物が襲ってくるよう。それでもヴェロニカは、逃げ出すことなく玄関扉の隅で佇んでいた。

「声は、メイドたちが私を探しているから。黒いのは、ただの影。こわくない、こわくない」

自分を探す使用人たちに見つからないよう小さな声で歌いながら、ヴェロニカはふと視線を上げた。歴史と栄華を誇り、グランディール貴族の頂点に立つ家柄の一つであるアーデン家の扉には、家紋である鷲のレリーフが荒々しくも優美に飾られている。小柄なヴェロニカの身長よりも大きな鷲は、鋭い眼光で眼下を睥睨していた。

「ひっ……！」

うっかり苦手なレリーフを見てしまったヴェロニカは、慌てて目を逸らしてうずくまる。夜の迫る風は冷たく、恐怖と寒さで足が震えた。屋敷の中に戻れば温かいミルクが待っているとわかつてはいたが、ここまで来て逃げ帰るわけにも行かない。ヴェロニカは咳を押し殺しながら、遠くに見える門の外をじっと見つめた。

どれほどそうしていたことが、日が完全に沈みきる直前に、ヴェロニカの目的はついに姿を現した。黒塗りの大きな馬車が、門衛に出迎えられてこちらの方へやってくる。鷲の家紋を掲げた馬車は、間違いなく彼女の父のものだった。

「お父様！」

ヴェロニカはぱっと顔を輝かせて、立ち上がった。少し泥で汚れてしまったスカートの裾を丹念に払い、馬車に駆け寄りたいのを我慢して、玄関前の階段下に立つ。父を護送する兵士たちが驚きの声を上げるが、ヴェロニカは構わず馬車が家の前に横付けされるのを待った。そして、父が降り立つ絶妙のタイミングで頭を下げる。

「お帰りなさいませ、お父様」

礼儀作法の家庭教師から習ったとおりの、ピシリと背筋を伸ばした状態からの深く優雅なお辞儀。スカートをつまんだ指先にまで気を配って、我ながら完璧な出来だとヴェロニカは得意に思った。きつと、いつもは硬い表情の父も喜んでくれるに違いないと、期待いっぱい顔を上上げる。しかし、ヴェロニカの父ハロルド・アーデンは、強張った表情のまま娘を見下ろしていた。將軍職に就くハロルドはがっしりと筋肉のついた大柄な体で、瞳は鷲のレリーフよりも眼光強く鋭い。その目がじろりとヴェロニカを睨み、口を開いた。

「ヴェロニカ……お前が何故、ここにいる。日が暮れてからは外に出ないようにと、医者に言われていたはずだ」

「あ……」

怒られる、と思った瞬間、ヴェロニカは青ざめて立ち竦んだ。今日は体調が良かったからとか、教師が完璧だと太鼓判を押したお辞儀をみてもらいたかったとか、言いたいことはたくさんあるはずなのに、そのどれもが父の神経を逆なでするような気がして、言い出せないでいる。するとハロルドは深く溜息をつき、末娘のことなど視界にも入らない様子で、出迎えた執事に指示を出した。

「娘を部屋へ連れて行け」

それだけ言つてヴェロニカの脇を通り、屋敷の中へ消えるハロルド。ヴェロニカはその背中を、呆然と見送った。

ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢。社交界にデビューしてからは大勢の貴族令息や令嬢達が傅き、人も羨む地位を確立することになる彼女だが、幼少期のヴェロニカは兄妹の中では一番目立たない少女だった。ほんの赤子の頃、母親と共に流行り病を患って以来病弱で、屋敷からあまり出られないことがより一層、影の薄さに拍車をかけた。

その時の病で亡くなった、絶世の美女だったという母に一番容姿が似ているのは、皮肉にも長男のエドモンドだ。黙って立ってさえい

れば、どんな美少女も霞むような華やかな美しさに、王国史上最年少で魔道師団入りに合格したという天才少年。加えて将来は大貴族アーデン家の当主とあって、彼の花嫁の座を争う令嬢は、若き国王オズワルドのそれと比べても遜色ない。

一方、姉のマルグリットも、基本的には母親似であるものの、父親の凛々しさも少しだけ受け継いで、どんな令息にも負けない美少年振りを発揮している。ヴェロニカと違って背が高く体も丈夫な彼女は、軍に入り日々鍛えているので尚更だ。職場でのマルグリットは、兄ほど目覚ましい活躍をしているわけではないが、剣の腕はめきめきと上達し、同じ年頃の男の子は誰も敵わぬほどだという。メイドたちには「上のお嬢様はせっかくお美しいのだから、もっと着飾らせて欲しい」と嘆かれながらも、勇ましく剣を振るうマルグリットには大勢の女性ファンがいることを、ヴェロニカは知っていた。

そして、アーデン家の出来損ないがヴェロニカだった。魔力は人並みで、剣など持つことも出来ない、病弱な末娘。ハロルドが兄と姉について悩んでいることといえば、どうして二人の性別が逆ではないのか「ぐらいいいものだろうが、ヴェロニカについては数え切れない悩みがあるだろう。

(いいえ、ひよつとすると、私のことなんて悩んですらいらっしゃらないかもしれない)

無理が祟って夕食前から頻繁に咳を繰り返し、寝台に押し込められたヴェロニカは、憂鬱な気分です寝返りを打った。痛めた喉は唾を飲み込むだけで激痛を発し、微熱を出した体は頭をぼうつとさせる。それが日常茶飯事とはいえ、せっかく忙しい父が家で食事をするというのに、共に食卓につくことすらできない自分の体が酷く疎ましかった。

「お嬢様、失礼いたします。お薬をお持ちしました」

ベッドの中で悶々としていると、軽いノックと共に薬湯を持ったメイドが入ってきた。

「いらぬ。出て行って」

かすれた声でそう言って、布団の中に潜り込む。若いメイドは困ったように、主の傍らに立った。

「ですが、お嬢様。お薬を飲まないと体調もよくなりませんし……」
「だから何よ、私なんか死んじゃえばいいんだわ！」

父親に見向きも去れず、優秀な兄妹の足元にも及ばない、こんな惨めな人間は消えてなくなってしまうがいい。ベッドから身を起こしてやけくそ気味に喚くと、メイドはオロオロとうろたえた。

「お、落ち着いてください、お嬢様。お嬢様に何かあつては、旦那様が悲しみます」

「偉そうなこと言わないで、お前に何がわかるの！？そんな無能だから、お父様に疎まれてる私なんかの世話をするはめになるのよ！」

令嬢にあるまじきしわがれた声で叫び、メイドに向かってぽんぽんとクツシヨンや枕を投げつける。ヴェロニカのひ弱な腕では大した勢いも出なかったが、たまたまそのうちの一つがメイドの持った盆に当たり、まだ暖かい薬湯がぶちまけられた。

「きゃっ!?!」

「あ……」

ガシャンという音と、薬湯をかぶったメイドの小さな悲鳴に、ヴェロニカは一瞬苛立ちを忘れて体をすくませる。しかし、罪悪感を振り払うように首を振って、再び布団の中に潜り込んだ。

「お、お前が早く出て行かないから、悪いのよ」

言い訳のように呟くと、メイドがその場を片付ける気配がした。本来の計画なら今頃、立派な淑女に成長した自分を褒めてくれた父親と、夕飯を共にしているはずだったのだ。鬱屈した気分で、ヴェロニカは目を閉じた。

「失礼いたします、旦那様」

部下のメイドからヴェロニカの様子を報告された老執事は、ハロルドの書斎を訪れた。すると、部屋の主のにこりともせず迎えられる。

しかしハロルドの祖父の代からアーデン家に仕える執事は気にした様子もなく、話を切り出した。

「ヴェロニカお嬢様のことですが」

「……ヴェロニカがどうした」

ハロルドは書斎机に座って書類に視線を落とすまま、どうでも良さそうに問い返す。しかし若干の語尾の震えをきちんと聞き分けた老執事は、少し意地の悪い笑みを浮かべた。

「あのようにそっけない態度をとらなくてもよろしいでしょう。今日は熱もなくて、習っていた礼儀作法で合格点を取ったから、お父様に見て貰うのだと張り切っておられたのに」

「……」

「私から見ても、あのお辞儀は完璧でしたよ。せめて一言褒めて差し上げればいいものを」

「……そんな事をして、私が帰るたびヴェロニカが出迎えるようになったらどうする」

じろりとこちらを睨む主の眼光にも、老執事は怯まなかった。

「素直に受け入れればよろしいではありませんか。かわいげのない上のご兄妹と違って、目に入れても痛くないほど大事な姫君なのでしょう？あのままではヴェロニカ様まで性格ねじ曲がってしまいませんよ。もう手遅れになりつつありますが」

「五月蠅い」

主人の子供たちに対する遠慮のない、しかし的を射た評価に、ハロルドは苦虫を噛み潰したような顔で唸った。

「ヴェロニカに無理をさせて、妻のように、突然いなくなるようなことだけは、どうしても避けたいのだ」

「身を守って心を傷つけていては、かえってよくない結果を産むこともございます」

「わかっている」

ハロルドは頷いたものの、ヴェロニカへどう接していいかまったくわからなかった。図太く厚顔なエドモンドや負けん気が強いマルグ

リットには、厳しく接していればおのずと親子の絆らしきものが芽生えたと思っっているが、可憐で繊細な末娘には、傷つけるのが怖くてまともに言葉もかけられないのだ。散々言い淀んだ拳句、ハロルドはなんとか話題をひねり出して執事に尋ねた。

「ヴェロニカは、あの年で礼儀作法に熱心なようだが、よもや叱り付けて強制しているのではあるまいな」

「まさか。ヴェロニカ様が望んでなさっていることでございます。

幼き頃より作法の授業を嫌って逃げ出してばかりいたどこかの若君と違って、非常に優秀です」

「……そうか」

どこぞの若君、もといハロルドは気まずそうな顔をした。

「ヴェロニカ様は病弱ではありますが、気質は寧ろ外に向いておられます。城の様子や社交に高い興味をお持ちのようですから、体調のいい日に一度お連れになってはいかがですか？」

「考えておこう」

ハロルドは執事の提案に頷いて、再び書類に視線を落とした。

それから数日後、いくらか元気を取り戻したヴェロニカの元に、嬉しい知らせが届いた。

「このまま体調が悪くならなければ、お父様がお城に連れて行ってくださるのですって！」

「よかったじゃないか。でも、それなら絶対に体調を崩さないように、安静にしていなくてはね」

子供らしく顔を輝かせて報告するヴェロニカの頭を撫でて答えるのは、姉のマルグリットだ。彼女の横では、兄エドモンドが嬉々として立ち上がった。

「ヴェロニカ、お兄様の開発した魔法道具『一日十刻間全自動看病君』を使ってみないかい！？ 定時になったら強制的にお薬を飲ませて寝かしつけてくれる優れものだよ！」

「それ、打ち身をこしらえた兵士を看病して頭痛胃痛複雑骨折に追

いやったという魔法道具では……？」

ヴェロニカが恐る恐る尋ねると、エドモンドは満面の笑みで頷いた。「よく知ってるねヴェロニカ！その通りだよ！君も激しい看病を受けてみないかい？」

「そ、そんな恐ろしいものいりません！」

「えー、おもしろいのに。僕が」

打撲を重傷に変える魔法道具のどこがどう面白いのだろうか、とヴェロニカは疑問に思ったが、兄の無茶苦茶ぶりはいつものことだ。溜息と共に疑問を頭の隅に追いやって、マルグリットを見上げた。美しく凛々しい姉は、兄妹の様子を見て苦笑交じりに肩をすくめて見せる。

ヴェロニカは優秀な兄姉に多大な引け目を感じていたし、特にエドモンドにはついていけないと毎度思うのだが、それでも二人のことは好きだった。物心つく前に母親をなくし、父の関心も薄いと思っている彼女にとって、兄と姉が唯一素直に甘えられる肉親なのである。エドモンドとマルグリットも病弱な末の妹を可愛がっており、ヴェロニカが寝込めば必ず日に一度は見舞いに訪れた。ヴェロニカは、自分を優しく見つめる二対の瞳を見返して、弾んだ声で問いかける。

「ねえ、お兄様、お姉様。お城ってどんなところなのか、お話して」

「いいよ。そうだな、私たちがはじめて城に上がったのも、今のヴェロニカくらいの頃だっけ」

それを聞いて、ヴェロニカは意外そうに目を瞬かせた。できのいい兄と姉はもつと幼い頃に城に行ったことがあるのだとばかり思っていたが、今の自分と同じくらいだったという事実には、置いていかれるばかりではないのだとほっとする。マルグリットはそんな妹の頭を撫でながら、話し始めた。

「私は、当時はまだ王子殿下だったオズワルド陛下の話し相手として城に呼ばれたんだ。兄上はアーデン家の長男として軍部や騎士団の見学。でもね」

「僕はチャンバラごっこなんて興味なかったし、マルグリットは王子様の話し相手なんて退屈だって言うから」

言葉を引き継いだエドモンドとマルグリットは顔を見合わせてにやりと笑い、

「入れ替わっちゃった」

いたずらを告白する子供のような顔で声を合わせた。

「ええっ！？だ、大丈夫だったんですか？」

「昔の私たちは今以上にそっくりだったから、最初は誤魔化せたよ。結局帰る前にばれて、父上に大目玉を食らったけれど」

ヴェロニカが必要以上に父親を恐れるのは、兄姉が父の恐ろしさを誇張して話すのも一因だったりするのだが、二人は滔々と八口ルードの怖さについて語り続けた。そしてヴェロニカが震え上がるのを見計らって、楽しい話へ移行する。

「でも父上を怒らせても決行する価値はあったな。私はキアランはじめ、その場の見習い騎士や将校候補生を叩きのめしてやったし、強い人も戦えたし」

マルグリットがあでやかに笑えば、

「僕も僕も。オズワルドと親友の契りを交わして、興味深い城の秘宝や魔法道具を見せてもらって、二人で王城の七不思議めぐりの冒険の旅に出たんだ！」

エドモンドが弾んだ声で言う。

「いや、兄上のは、自分の知識欲を満たすためだけにオズワルド陛下を案内役に仕立て上げた拳句、無理矢理城中を引きずりまわしたというんじゃないかな」

「僕が楽しければ別に体裁なんてどうでもいいさ！マルグリットだってエリートのお坊ちゃんたちをこてんぱんにして憂さ晴らしたんだろ？」

「ああ。それもそうだね。ふふふふふ」

「あはははは」

実に楽しそうに思い出話に花を咲かせる兄たちを見て、ヴェロニカ

もつられて笑いながら、まだ見ぬ城への憧れを強くした。

（いいなあ、お兄様たち。私も早くお城に行きたい）

二人の話は綺麗なものや驚きに満ち溢れて、聞いているだけでどきどきしてくる。ヴェロニカは期待に高まる胸を押さえながら、王城訪問の日を待ちわびたのだった。

番外編：鷲の末姫（前編）（後書き）

お気に入り登録数100人突破御礼番外編です。アーデン家の三兄弟の昔の話。でも、主人公はあまり人気のないであろうヴェロニカ。マルグリットやエドモンド主演にすると、どうしてもネタバレになってしまうので。まあ、兄ちゃん姉ちゃんの話もまたいずね。

番外編：鷲の末姫（後編）

そして、待ちに待ったその日が訪れた。ヴェロニカは姿見を覗き込んで、一つ頷く。身を包むドレスは新調した流行のもの、メイドたちにたっぷり注文をつけてようやく満足のいく形に結い上げた金髪の輝きは、姉にだって負けはしない。細心の注意を払って整えてきただけあって、体調も万全だ。

「失礼いたします、ヴェロニカお嬢様。用意はよろしいですか？」
「当然よ」

青い瞳を自信に輝かせて昂然と告げる令嬢に一礼し、執事は彼女を屋敷の外へと導いた。屋敷の前には既にアーデン家の馬車が停まっており、ハロルドがその横で立って待っていた。

「まあ、お父様。お待たせして申し訳ございません」

「……いや、いい。大して待ってはおらん」
父が馬車の中にいなかったのが意外で、素直に驚き、丁寧に頭を下げるヴェロニカに、ハロルドはそっけなく返す。早速怒らせてしまっただろうかと不安に思っていると、老執事が失礼いたしますと断つて耳打ちして来た。

「旦那様は、お嬢様があまりにもお綺麗なので戸惑っておいでなのですよ」

いつもなら下らない気休めはやめると怒るところだが、待ちに待った素晴らしい日のせい、ほんの少しだけその言葉も信じられるような気がした。ヴェロニカはこくりと頷いて、馬車に乗り込む。すると、先に乗っていた父の大きな手が引き上げてくれた。

（今日はとてもいいことばかりが起こる気がするわ）

ヴェロニカはうきうきとした気分、動き出した馬車の窓から進行方向を眺めた。屋敷の窓から眺めるだけだった荘厳な城の姿が、どんどん近づいてくる。そして、半刻もたたないうちに、馬車は王城の門をくぐった。

「わあ……！」

馬車は父の職場である軍事棟や訓練場、使用人棟を横目に進み、中庭へと入っていく。いかめしい兵士たちが門扉を守っていたかと思えば、遠目に行き交う使用人の姿に、中枢部を訪れた紳士淑女たちの華やかな装い。無骨だと思っていた城の、近くによると意外にも精緻なレリーフが施された外壁に、垣間見える内部の重厚かつ壮麗な内装。どれもこれも珍しくて、小さく歓声を上げるヴェロニカに、ハロルドが声をかけた。

「ヴェロニカ。今日の予定はわかっているな」

「はい、お父様。まずは王弟殿下とご挨拶、それから救世主と名高いフェリシア嬢と会食でしたね」

ヴェロニカの王城訪問の目的は、彼女の兄姉がそうだったように、城に住む王族や貴族の子供との交流だった。これから、王弟のキアランと、救世主としての役目を期待され城に住んでいるというチェンバレン公爵令嬢に会うのである。本当は絶世の美少年だという新国王、オズワルドにも拜謁を賜りたかったのだが、王位についての日の浅い彼はとにかく多忙で、とても時間を割くことなどできないのだ。

（不満に思っては駄目。お城に来られただけでも、とても光栄なことなのだから）

ヴェロニカは気持ちを切り替え、到着した馬車から降りると、父の後について歩き出した。

父と娘は城の侍従に恭しく案内され、行政棟中枢部の応接間に通された。数人が議するためのそれほど広くはない部屋で、窓辺では黒髪の少年が退屈そうに外を眺めていた。

「お久しゅうございます、キアラン殿下」

ハロルドが臣下の礼をとって挨拶するのに、少年は渋々といった様子で振り返り、頷いた。整った、美しいというよりは凜々しい顔に、どこか不機嫌そうな琥珀の瞳がじろりとアーデン家の親子を睨む。

（この方が、キアラン殿下……）

ヴェロニカは慌てて腰を折りながら、キアランの顔を不安げに盗み見た。貴族階級の友人はいるものの全員女の子だったし、男の子との接触といえば彼女達の兄弟をたまに見かける程度だ。しかし、ヴェロニカがにつこり笑えば彼らは例外なく可憐な令嬢の虜になることも知っていたから、父の陰に隠れたいのを我慢して、勇気を振り絞り、許しの言葉と共に顔を上げる。

「久しいというほどでもない。アーデン將軍、本日は何用だろうか」
「殿下に娘を紹介したく、参上いたしました。次女のヴェロニカに
ございます」

父に軽く背中を押されて、ヴェロニカは前に進み出た。優雅に美しく、再度頭を下げ、小鳥の囀るようと評判の可憐な声音で名乗る。

「ヴェロニカ・アーデンと申します、王弟殿下。どうぞお見知りお
きを」

「ああ。よろしく」

完璧な笑みを浮かべるヴェロニカに、キアランはそれだけ返事をして黙り込んだ。粗雑に扱われているわけではないが、予想外の反応にヴェロニカは焦る。何か気のきいた事を言わなくてはと話題を探し、どうにか次の予定から話を捻出した。

「私、これから、チェンバレン家の救世主様とお食事させていただきますの。王弟殿下は救世主様と幼馴染なのですよね？」

それはキアランにとって地雷に等しい話題だった。話を続けることで精一杯のヴェロニカは、一気に険しくなるキアランの表情や、それに気づいて口を挟もうとする父親に気づかないまま、言葉を紡ぐ。

「もしよろしければ、お昼を三人で一緒に」

「断る」

にべもない返答に、ヴェロニカは目を丸くした。そもそも、父以外の人間に話を遮られることすら初めてだった。恐怖より先に驚きで絶句している彼女に、キアランは棘のある言葉を投げつける。

「フェリ…あいつと食事？冗談じゃない。あんな奴、顔も見たくない。ヴェロニカ嬢、貴女に非がないのは承知しているが、そんな下

らない提案は二度としないで欲しい。失礼する」

キアランの悪意は直接ヴェロニカに向けられたものではないが、甘やかされて育ったお嬢様が茫然自失の体になるには十分だった。あつけにとられるヴェロニカをつまらなそうに一瞥し、キアランは足音高く部屋を出て行った。背後からハロルドの重苦しい溜息が聞こえ、ヴェロニカは真っ青になって振り返る。

（お、怒っていらっしやる……？）

ヴェロニカにとって、失礼な王弟よりも敬愛する父を怒らせるほうが恐ろしかった。事実、ハロルドは苛立っていた。可愛い可愛い愛娘に八つ当たりのような言葉を投げつけたキアランと、それを止められなかった自分への怒りだったが、ヴェロニカにそんな事がわかるはずも無い。ヴェロニカはすっかり意気消沈して、父に促されるまま部屋を出た。

次はチェンバレン公爵令嬢フェリシアとの顔合わせと食事会だ。

外庭の塔に住んでいるという彼女とは、城の中庭で会う手はずになっっている。ヴェロニカが父と並んで外へ向かう廊下を進んでいると、不意にハロルドが口を開いた。

「ヴェロニカ。体調が悪くなったらすぐに言いなさい」

ヴェロニカはそれを、自分を心配しての言葉だと受け止められるほどに、父に愛されているとは思っていなかった。少しでも体調を崩そうものならすぐに帰らせるという意味に解釈した彼女は、硬い表情で頷いた。これでは、多少気分が悪くても申し出るわけにはいかない。父に嫌われないためにも、これ以上の失態を犯すわけにはいかないのだ。

こうしてしょんぼり歩いていたヴェロニカだったが、そんな気分も吹き飛ぶ嬉しい出来事もあった。

「アーデン将軍？」

ハロルドとヴェロニカが、行政棟の渡り廊下に差し掛かったとき。後ろから呼び止められ、二人は振り返った。振り返った先にいたの

は、数人の文官を連れ、美しい少年だ。肩で切りそろえられた金髪に、どこかで見た琥珀色の瞳、優しげな、それでいて芯の強そうな顔立ちと眼差し。ヴェロニカは生まれてはじめて初めて、兄のエドモンドと同じ位綺麗な少年を目の当たりにして驚いた。

「これはこれは、国王陛下。ご機嫌麗しく」

「公式の場ではないのだから、畏まった礼は必要ないよ」

慇懃に礼をとるハロルドに、美しい少年王は爽やかに笑って許しを与えた。

「ありがたき幸せ」

謝意を伝えて顔を上げるハロルドに頷き、国王オズワルドはヴェロニカにも視線を向けた。

「はじめまして。君はアーデン將軍のご息女か？」

「は、はい……ヴェロニカ・アーデンと申します」

「そう、素敵な名前だね。私はオズワルドだ。お父上にはとてもよく助けていただいている」

「め、滅相もないことでございます……！」

ふんわりと向けられる優しい笑顔に、ヴェロニカはただ夢見心地で答えた。

（国王陛下……なんて、素敵な方なのかしら）

キアランとのファーストコンタクトが最悪だっただけに、臣下の娘にも礼儀正しいオズワルドが殊の外立派に見える。これこそヴェロニカの望む、正しい「王子様との出会い」だった。

「君は確か、生まれてすぐに流行風邪を患ったと聞いていたけれど、大丈夫かい？小さいころにあれを発症すると、体が弱いうちは大変だろう」

「い、いいえ、大丈夫です。でも、何故それを……？」

「私も幼い頃、同じ病にかかったんだよ。おかげで子供のころは体が弱くて、自分が情けなかったな」

「まあ」

それは、今まさにヴェロニカが抱えている悩みとまったく同じもの

だった。自分と同じ苦しみを知る王に、ヴェロニカは憧れと共に親しみも覚える。

「でも、心配しないで。大人になればほとんど影響は消えるそうだから。私も成人した前後から、ほとんど体調を崩すことはなくなっただよ」

「本当ですか？では、大人になるまで頑張ります」

素直に頷くヴェロニカに、オズワルドは笑みを深くした。

「いい子だね。でも私は、そろそろ行かなければ。機会があったらまた話そう」

文官たちに急かされたオズワルドは、そう言つて親子の前から立ち去った。ヴェロニカは頬を染めて、その後姿を見送る。

（オズワルド陛下……あんな方と結婚できたら、王妃様になれたら、なんて素晴らしいことでしょう）

その思いつきは、とてもいいことのように思えた。剣も魔法も扱えないヴェロニカだが、容姿にも家柄にも社交術にも自信はある。この国の女性で一番の地位を手に入れれば、きっと父も自分を見直してくれる。

（私なら、出来るわ）

その日から、ヴェロニカの目標は社交界の女王、そしてオズワルドの正妃の地位になった。ただ、顔を輝かせて静かに燃える娘とオズワルドの去った方角を、ハロルドは厭わしそうな顔で眺めていた。

やる気に満ち溢れたヴェロニカが父親と共に中庭の東屋を訪れると、そこではハロルドよりいくつか年上と思しき紳士が待っていた。きつちりとしたスーツに身を包み、逞しくはないがちゃんと背筋の伸びた姿勢のいい体勢で、初老に差し掛かってなお甘い顔立ちには、人好きのする笑みを浮かべている。

「やあ、アーデン将軍。今日は忙しいところ、娘のためにありがとう」

「宰相位を勤める貴殿ほどではない。紹介しよう、これが次女のヴ

エロニカだ。ヴェロニカ、こちらはこれからお会いするフェリシア嬢の父君、ベネディクト・チェンバレン殿」

父の紹介に、ヴェロニカはちょこんと可愛らしいお辞儀と共に挨拶をした。

「はじめまして。ヴェロニカ・アーデンと申します」

「これはこれは、可愛らしいお嬢さんだ。今日は来てくれてありがとう」

「とんでもございません。それで、あの、救世主様は……？」

フェリシアらしき少女の姿が見えないのに怪訝そうな顔をしたヴェロニカに、ベネディクトは苦笑する。

「あの子は、少し特殊な子でね。手を引いてやれば歩かし、指示すれば簡単な動作や言葉を発することも出来るのだが、なんとさえばいいかな。自分の意思が丸ごと欠如しているから、それを知らせた上で引き合わせたいと思っただけ」

ベネディクトの言葉に、ヴェロニカは頷いた。噂で聞いたことがある。救世主として莫大な魔力を持って生まれたチェンバレン家のご令嬢は、自意識のない状態で、人形姫と揶揄されているらしい。しかし人形を相手にしているのだと思えばかえって楽だと、ヴェロニカは気楽に頷いた。

「大丈夫です。きつとお友達になれますわ、私たち」

「それは嬉しいことだ。では、娘を呼ぶことにしよう」

ベネディクトはそう言って、魔法道具らしい小さな金属の玉を東屋の外の地面に放った。玉は石に当たってはちんと弾け、赤い煙が狼煙のように細く高く上っていく。それが合図だったのだろう、程なくして、何か大きな気配が近づいてきた。それは強大で濃密な、魔力の気配。

(……！)

その空気が近づいてくるたび、ヴェロニカは息苦しくなった。ざわざわと血の流れる音が耳に響く。フェリシアの魔力に当てられたのだ。「体調が悪くなったらすぐに言いなさい」という父の言葉が一

瞬頭をよぎったが、ここまできて取りやめにするわけにもいかない。額に脂汗を浮かべてじっと待っていると、ついにその姿が現れた。

「ひっ……!!」

ヴェロニカは辛うじて、悲鳴と吐き気を飲み込んだ。魔術師らしき男に手を引かれたフェリシアは、ヴェロニカより少し年上の少女だった。ゆるく癖のある長いこげ茶の髪に、黒曜石のような黒い瞳。顔立ちは悪くないが、特別美人というほどでもない。着ている服も格式張った形で、いつものヴェロニカなら「地味でダサイ子」と一蹴するところだ。しかし、今の彼女にそんな余裕はなかった。

(何、あの子、怖い……!)

感情が一切感じられない奈落の底の様な黒い瞳に見据えられ、小さな体に収まりきらず溢れ出す魔力の塊に晒されて、ヴェロニカは蒼白になった。見てはならない化け物にでも遭遇したような気分です。一步一步自分に近づいてくるフェリシアに見入る。もう、礼儀作法も何もあつたものではなかった。

「い、いや……」

「ヴェロニカ?」

うわ言のように呟いて後退る娘に、ハロルドが眉をひそめて娘の名前を呼ぶ。

「いやああああああつ!!!来ないで!!!」

悲鳴を上げて、ヴェロニカは目の前の少女を突き飛ばした。付き添いの魔術師の手を離れていたフェリシアは、何の抵抗もなくドサリと後ろに尻餅をつく。

「フェリシア!」

すかさずベネディクトが娘に手を伸ばした。ヴェロニカは父親に助け起こしてもらったことなどいともない。その事実には傷つく隙もなく、ヴェロニカは目を閉じて蹲った。

(怖い怖い怖い!!!誰か助けて、お兄様、お姉様!オズワルド陛下……!)

「大丈夫か!?!」

すると、呼びかけが聞こえたようにオズワルドの声が響いた。まさかと思いい目を開けると、先程別れたオズワルドが、こちらへ向かって走ってくる。

(陛下……来てくれたの?)

しかし喜びは、すぐに絶望と取って代わった。オズワルドはヴェロニカのことなど見えていないかのように脇を素通りし、フェリシアの傍らに立って父親に抱き起こされた彼女の頬に手を当てた。

「大丈夫かい、フェリシア!? 怪我はない?」

「国王陛下、娘に大事はございません。それよりも……」

世界で一番大事な宝物のようにフェリシアに触れるオズワルドとベネディクトの会話をどこか遠くに聞きながら、ヴェロニカの胸に黒い感情がわきあがってきた。似たような気持ちを抱いたことは幾度もあれど、今までで一番強くて激しい気持ち。

(なによ……何よ、何よ何よ!!! あんな怖くて気持ち悪い子が、何である子のお父様にも陛下にも大事にしてもらえるのよ!)

恐怖を凌駕する、それは紛れもない嫉妬だった。自分がいくら望んでも手に入られないものを、黙って佇んでいるだけのフェリシアが持っている、その事実が許せなくて、目の前が霞む。自分が泣いているのだと気づくと同時に、ヴェロニカは意識を手放した。

ヴェロニカが気を失ったことで当然食事は中止となった。その後も城で仕事があったハオルドは、気を失った娘を先に馬車で帰らせた。夕方になってヴェロニカが自室のベッドで目を覚ますと、周囲は無人である。ヴェロニカは一瞬で、何があったのか悟った。自分は大切な王城デビューで、無様にしくじったのだ。

「あんな子が、いなければ……」

ヴェロニカは悔しさに唇を噛み締めた。それでも、抱いた目標を變更する気にはならない。

「いつか、王妃様になって、あの子もお父様も見返してやるんだから……!」

無邪気な夢はどす黒い野望に姿を変えて、小さな少女の心を蝕み始めた。

番外編：鷲の末姫（後編）（後書き）

十年くらい前の、まだ一応はかわいげがあったころのヴェロニカ嬢
スピントフ。もしくはヴェロニカ版『憎しみの理由』という感じで
しょうか。嫌なお嬢さま全開の彼女もただ闇雲にフェリシアを敵視
しているわけではなく、敵視するだけの理由があるのです。それが
正当な恨みかどうかはさておき。

嫌な奴といえばキアラン少年も対フェリシア時ほどでないにせよ嫌
な奴ですが、この頃の彼にはまだ王位継承権があります。近づく人
間、特に年頃の娘は皆継承権狙いに見える。ので、あの態度。貴族
の子弟の中では友達というか味方はほぼゼロだったり。屈折したも
の同士、ヴェロニカとキアランの組み合わせもそれはそれでお似合
いと思うのは作者だけでしょうか。

ちなみに斉藤さんちの姉弟に負けないくらい実は互いにデレデレな
アーデン家の三兄妹が描けて、作者は満足です。人形の救世主はブ
ラコン・シスコン率高めですね。そのうち仲の悪い兄弟姉妹も出て
くるとは思いますが。

番外編：王弟殿下の苦悩

グランデール王国王弟キアラン・グランデールは苦悩していた。先日サナデイスの戦いに赴いた折に自覚してしまった、恋心についてである。自分がフェリシアを好きなのだと気づいたこと、それ自体は問題ない。幼い頃の誓いどおり、これから彼女のことは守っていくつもりだ。問題は、過去のことだった。

「俺の阿呆……」

フェリシアの体に優花の魂が宿ってから彼女の身の上話を聞くまで、散々ぶつけてきた敵意が、今になってキアランの身に返って来た。目を覚ましたばかりの彼女を殺そうとしたこと、刃物を突きつけて脅したこと、掴みかかって押さえつけ詰ったときの、今にも泣き出しそうなフェリシアの顔など、思い返すたびに数ヶ月前の自分を殴り殺したい衝動に駆られる。

「アレをなかったことには出来ないものか」

キアランが悶々としていると、背後から黒い影が忍び寄ってきた。

「やあ、お悩みだね？」

「!？」

突如かけられた声にぎょっとして振り返ると、そこには金髪碧眼の美青年がしまりのない笑顔で立っていた。魔道師団のトラブルメーカー、エドモンド・アーデンである。アーデン家の兄妹は三人まとめて大の苦手であるキアランは、警戒しながらエドモンドに問いかけた。

「エドモンド、突然出てきて何のつもりだ？」

「いやあ、僕の大親友の弟君の悩みをこの頼れるお兄さんが華麗に解決してあげようというのに酷い言い草だなあ」

「当たり前だろう。貴様にかかると碌なことがない」

言い捨てるキアランの言葉など気に留める様子もなく、エドモンドは彼に指を突きつけ宣言する。

「ズバリ！フェリシア君のことでお悩みだね！」

「そ、それは」

言い当てられて、キアランは不覚にも言葉に詰まった。その反応に気をよくしたエドモンドは、にやりと口角を上げて顎を擦る。

「大方、フェリシア君へしてきた今までの酷い仕打ちが帳消しにならないかと考えていたんだらう？」

「何故そんな事がわかるんだ……？」

「だって君、全部声に出して言ってたよ」

「俺の阿呆……！」

「ははははは」

全力で自分を罵倒するキアランをしばし愉快そうに眺めたエドモンドは、見物に飽きたところでぼんと手を打った。

「そこで王弟殿下に提案さ。過去を変える魔法はないけれど、フェリシア君一人なら何とかなるかもしれない妙薬を開発しちゃったんだよね」

エドモンドの作った薬など、普段なら問答無用で取り上げた上、処方箋共々永久廃棄してやるところだ。しかし、恋する者は盲目だった。このときのキアランは本当にどうかしていた。

「……………話を、聞こうか」

長い沈黙の末、彼は重い口を開いた。

「では、魔道師団の研究室へどうぞ、王弟殿下」

美しい顔に満面の笑みを浮かべるエドモンドは、さながら人をそそのかす悪魔のようだった。

相変わらず雑然としている魔道師団の研究室。あまり入ることのないその部屋の様子をチラチラと観察していたキアランの前に、エドモンドが小さな小瓶を置いた。

「これがその、妙薬とやらか？」

「そう、人の記憶を改竄する薬、名づけて『改竄する君』さ！」

「……どうでもいいが、そのネーミングセンスは何とかならないの

か？」

「わかりやすくいいじゃないか」

えっへんと胸を張るエドモンドを黙殺し、キアランは胡散臭そうに小瓶を手に取った。金属管の埋め込まれたコルク栓が嵌った小瓶の中には、透明な液体が揺れている。

「この管、魔法金属だな。薬の中に魔力を流せるようになっていたのか」

「さすがキアラン殿下、ご明察だ。この薬をそのまま使えば単に数ヶ月ほどの記憶が曖昧になるだけだけど、イメージ映像と共に魔力を流すことで都合のいい記憶を上書きすることが出来るんだ！キアラン君ほどの魔力があれば、彼女とのキャッキャウフフ素敵妄想生活をでっちあげることも可能だよ！」

「う、五月蠅い。別に、普通でいいんだ、普通で」

キアランはそう言うと、深呼吸一つ、塔でフェリシアが目を覚ました夜を思い浮かべながら金属管へ魔力を流した。

「普通ねえ。そんなんじゃないやあ彼女をオズワルドにとられてしまうと思うけど。どれ、どんなイメージ映像を流したのかなって。再生ボタンぽちっと」

「おい、何をつけているんだ貴様！！！」

「流したイメージ映像を確認するためのボタンだよ。高機能だろう？」

「余計なことを……！」

エドモンドが金属管の横に取り付けられたボタンを押すと、小瓶はピカピカと瞬き、金属管から煙が吐き出された。煙は霧散することなく空中に留まり、スクリーンのように映像が映り始める。煙の中に浮かび上がったのは、フェリシアのいた塔だった。ベッドの上に起き上がったフェリシアと、剣を持っていないキアランが映っている。まずは映像の中のフェリシアが口を開いた。

「……ここはどこですか？」

すると、同じく映像のキアランが答える。

「ここはグランディール王国です」

エドモンドが啞然とした表情でキアランを見た。キアランはそつと目を逸らす。男二人が無言のやり取りを続けるうちにも、映像の中ではキアランが設定した「普通の男女の邂逅」が繰り広げられた。

「私は誰ですか？」

「貴女はフェリシア・チエンバレンです」

「貴方は誰ですか？」

「私はキアラン・グランディールです」

「そうですか」

「そうです」

「よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

映像の中で、何故か意気投合したフェリシアとキアランがしっかりと握手を交わし、映像は掻き消えた。フェリシアが見ていた日には、「いまだき、小学生の英語の教科書だつてもつと捻った例文載せるよ」と酷評しそうな内容だつた。

「……キアラン君、流石にこれはないと思うよ」

至極真面目な顔をしたエドモンドが冷静にツツコミを入れた。恥を重ねたキアランはやけくそ気味にエドモンドを振り返る。

「五月蠅い！改竄用の記憶なんざ、すぐに思いつくか！」

「仕方ないなあ。想像力の欠如したキアラン君の変わりに、僕が理想的な男女の出会いを演出してあげよう」

喚くキアランを押しつけて、今度はエドモンドが小瓶に魔力を流す。再生ボタンを押すと、映し出されたのは夜の塔ではなく、いきなり真昼の庭園だつた。

「ここは……？」

咲き乱れる花の中、少女マンガのように何かキラキラしたオーラを背負ったフェリシアがゆっくりと身を起こす。すると、起き上がるのに難儀している彼女を黒い人影が抱き上げた。背景に花を散らせたキアランだつた。

「おはよう、俺の可愛い人。ずっと君が目覚ますのを待っていた」
「えっ……?」

「君は俺の太陽、俺は君なしではいられない。どうか一緒に」
そこで映像はぶつりと途切れた。新車の羞恥プレイに耐え切れなくなったキアランが強制終了させたのだ。

「おや、何をするんだい？妹の愛読書を参考に乙女の夢とやらを再現してみたのに」

「やりすぎだ！何だあの恥ずかしい映像！！というか誰だよアレ！！！」

「君とフェリシア君」

「むしろさっきの映像を俺の記憶から抹消したい……」

頭を抱えて蹲るキアランを無視して、エドモンドは小瓶を持ち上げると研究室の奥に向かった。

「まあ、何はともあれこれで薬は完成だ。あとはこれをフェリシア君に投与するだけ」

エドモンドの言葉に、キアランは研究室の奥を覗き込んで目を見張った。長椅子の上に、ぐったりと意識のないフェリシアが倒れている。

「フェリシア！？エドモンド、貴様一体何をした!？」

「こんなこともあるのかと、『フェリシア君専用捕獲君』でフェリシア君を捕まえておいた。命に別状はないから安心だよ。さあ、投薬実験開始だ！」

「やめろ!!!」

実に楽しそうな笑顔で薬の瓶を開けるエドモンドを、間一髪キアランの拳が殴り倒した。吹っ飛んだエドモンドが本棚に激突し、雪崩を起こした本に埋もれて悲鳴を上げる。しかしキアランは彼には目もくれず、長椅子の上に横たわったフェリシアの傍らに膝をついた。

「おい、フェリシア、無事か!？」

軽く揺さぶると、エドモンドが本に埋もれた音で目を覚ましかけていたフェリシアが小さく呻いて目をあけた。黒曜石のような闇色の

瞳が、いつかのようにキアランの顔をぱちくりと見上げる。

「あれ……？キアラン？ここ、魔法師団の研究室？」

自力で起き上がったフェリシアは、本の山に埋もれるエドモンドと、その手に握られた小瓶を見て絶叫した。

「ああーっ、エドモンドさん！また何か変な実験しようと思いましたね！！？」

それから、キアランの方を見上げて小首を傾げる。

「ひよっとして、キアランが助けてくれたの？」

「……ああ、まあ、そんなところだ」

諸悪の元凶は自分だとも言えずに、目をそらしがちにキアランは答える。すると、フェリシアは花が綻ぶように微笑んだ。

「そうなんだ。また、助けてもらっちゃったね。ありがとう！」

無邪気な笑顔に、キアランは気まずさも忘れて思わず見入った。

「おい、君達、二人だけの世界に入っただけで助けておくれよー」

エドモンドが喚くものにも気づかず、二人はしばらくの間見詰め合う。ある平和な王城での一日であった。

番外編：王弟殿下の苦悩（後書き）

手軽にギャグやりたいときの強い味方、エドモンド兄ちゃん。彼を出せばだいたいコメディになります。貴重な人材です。

ところで昨今、意地っ張りなキャラをツンデレと呼ぶ（と思う）世の中ですが、元々は初めツンツンしていた子があるイベントを境にデレデレし始めるといふ現象を差すそうです。キアランはデレ後わりと素直なので、本来の意味に近いツンデレなのか。素直に好かれようとすると、努力の方向性は何か間違っています。

ベッドの中でごほごほと咳き込んでいたオズワルドは、はっと気がついた。

（また、この夢か）

最近よく、昔の夢を見る。少しうんざりした気分で、自分の体を見下ろせば、思った通りまだ十にも満たない少年の体があった。高価な夜着とふかふかの布団に包まれているものの、心の奥は冷えていく。それは、部屋に人の気配が皆無だったからだ。

（夢の中でも、あの人は、私に会う気はないらしい）

幼児期に流行り風邪を発症したオズワルドは、病弱な少年時代を過ごしていた。十六の成人を迎える前後にはすっかり健康体になっていたものの、幼い頃の彼にとって、寝台の上も、看病する者のいながらんとした部屋も、とても慣れたものだ。しかし、近寄る者もいないはずの部屋の扉を、不意にコンコンと叩く音がした。

「入っておいで」

答えると、小さく扉が開いて、ひよっこりと黒い髪の毛の頭がのぞいた。まだ幼いキアランが、部屋を訪ねてきたのだ。

「あにうえ、ごきげん、いかがですか。おそばにいつでも、いいですか」

舌足らずな口調で、扉の影に隠れた弟が問いかける。その姿に、オズワルドは自然と笑みを零しながら頷いた。

「いいよ。おいで」

手招きすると、キアランはぱっと顔を輝かせ、てくてこと寝台の傍まで歩いてきた。その手には、皿に乗った果物のシロップ漬けが乗せられている。

「これ、おみまいです」

「ありがとうございます」

嬉しそうなキアランの頭を撫でて、オズワルドは皿を受け取った。

くすぐったそうに、キアランが笑う。

「一緒に食べようか」

「でも、あにうえの、ぶんなのに」

「大丈夫だよ。僕一人では、食べきれないから」

「じゃあ、じゃあ、いただきます！」

本当は食べたくて仕方なかったのだろう。オズワルドがシロップ漬けを一つ渡すと、キアランは手も口もベトベトに汚しながら美味そうにそれを頬張った。オズワルドも一口、シロップ漬けをかじると、甘い味が口の中に広がる。

「美味しいね」

「ははうえが、つくってくれたんです！」

得意げに報告するキアランを見て、オズワルドは少し眉を顰めた。甘いはずのシロップ漬けが、ほんのり苦く感じる。無論、毒などではない。キアランの母親は、どこまでも彼に対して優しくあったのだから。きっと正妃の目さえなければ、彼女は自らオズワルドの看病さえしただろうと思う。

「そう。母君に、ありがとうございますと伝えてくれるかい？とも美味しかったです、って」

「はい！」

母親の味を褒められて満面の笑みを浮かべるキアランの口や手を拭いてやり、オズワルドは微笑んだ。現実がどうであれ、今も昔も変わらない事実が一つだけある。キアランは彼の大切な弟だということだ。キアランは、嬉しそうに今日あったことを話しはじめた。文字を覚えたこと、剣術の練習も始まったこと、会うたびに成長していく弟の話を、オズワルドはうんうんと聞いている。

「それからあにうえ、まえのまどうしだんちようがよげんした、きゅーせいしゅが、しろにくるんだって」

「予言の救世主が？まだ二つかそこらだろうに、父上にお目通りを……？」

「わかんない、です。でも、そのこ、なんだかへんなんだって。な

いたり、わらったり、しないんだって。だいじょうぶかなあ」

心配そうなキアランとは反対に、オズワルドは苛立った。自分ですら滅多に会えない父王に、たかが救世主だと予言されただけの幼児が会うかもしれない。ちよっとした屈辱だ。

「どうでもいいよ。僕には、キアランがいれば」

ぎゅうと弟を抱きしめると、キアランは困った顔で首を振った。

「だめです、そのこ、おんなのこだって。おんなのこはまもってあげなきゃいけないんだぞって、デイランせんせい、ゆってました。だからぼく、そのこをまもってあげるんです！」

珍しく兄の言うことに逆らって力説する弟に、オズワルドの苛立ちはますます強まった。

「キアラン、僕は」

そして、弟に何か言いかけたところで、オズワルドの意識は反転した。

ボニファーツとの戦後交渉も終盤を迎え、そろそろ城の空気も落ち着き始めた頃。フェリシアはエドモンドの呼び出しを受けて、魔道師団の研究室へと向かっていた。この一ヶ月、フェリシアと何とも怒られていただけではない。自分の偏った知識を反省して、エドモンドに魔法道具のことについて習っているのだ。エドモンドはあれでも、魔法道具作成についてはダリルを凌ぐスペシャリストなのだ。今日は話す時間が出来たからと呼び出されたところだった。

「うーん、エドモンドさんでもこうして何とか捕まるのに、キアランとの遭遇率の低さは何なんだろう……」

だが、フェリシアが思い悩むのは、相変わらず王弟の事だ。先週、エドモンドの実験に巻き込まれそうになり、キアランに助けてもらったときも、なんとか言いそびれていたお礼はいえたものの、後は見詰め合って終わりだった。

（はつきり言っただけでエドモンドさんが邪魔だったわ、アレは）
彼のおかげで会えたのだから、文句を言うのは筋違いだとわかって

はいる。しかし、何だか素直に感謝する気にもなれずに歩いているうちに、研究室にたどり着いた。

「失礼します」

ノックもそこそこに勝手の知れた研究室に踏み込むと、金髪の青年が床に倒れていた。

「エドモンドさん!？」

慌ててつかみ起こすと、魔道師団の副団長はしまりのない笑顔でへにやーと鳴いた。その瞬間、フェリシアは無言で掴みあげたエドモンドの肩を床に叩きつける。べしゃつと小気味良い音がした。

「ふがつ!？な、何をするんだねフェリシア君!？」

「それはこちらの台詞です。倒れているから心配したのに、へにやーって何ですか!偶にはまともな登場してくださいよ!」

「失礼な!僕の思考は常に真つ当かつ明瞭だよ!？今は、建物にしながら大いなる大自然と会話する方法を模索してい」

「それで、今日お聞きしたいことなんですけど」

エドモンドの話にいちいち付き合っていては日が暮れる。フェリシアは言葉の続きをばっさり切り捨てて、本題に入った。エドモンドは不満げにしながらも、自分がフェリシアを呼びつけた理由を思い出したのだろう、大人しく彼女の前に着席した。

「話の前に、お茶でも淹れようか、フェリシア君?」

「結構です。エドモンドさんが実験に使ったプラスチックで沸かしたお茶なんて、危なくて飲めません」

「ちっ」

「何舌打ちしてんですか!うっかりに見せかけてまた変な薬飲ませる気だったでしょう!？」

怒鳴ったあとで、エドモンドのペースに乗せられていることに気づいたフェリシアは、はっと我にかえって話を切り出した。

「今日お聞きしたいのは、ボニファーツの魔封じについてです」

そう言って、懐から黒い破片を取り出す。ゼルギウスの手に残ったときつけられた首輪の一部だ。触ると皮のようだが、石のように硬

く、断面は金属のように鋭い。フェリシアにも優花にも正体不明の物質だ。

「これ、エドモンドさんは何かわかりますか？」

「珍しい。魔封石じゃないか」

エドモンドは即答した。好奇心旺盛な彼には珍しいことに、破片には触ろうともしない。

「ひょっとして、君がボニファーツで捕らえられていたときに使われたものかい？」

「はい。無理矢理壊しちゃいましたけど」

「流石だね。こんなに高純度の魔封石を無理矢理魔力で押し流すだなんて、人間業じゃないよ！僕なんて、少し触るぐらいなら害は無いとわかっていても怖いのに」

「それ、褒めてます、貶してます？」

笑顔で問いかけながら魔封石の破片をエドモンドに近づけると、彼は慌てて飛びのいた。

「あ、危ないなあ、フェリシア君、僕を不能にする気かい？」

「あはは、とんでもない、エドモンドさんが私の質問にちゃんと答えてくれれば、そんなことする気はこれっぽっちもありませんよ」

「……時々、キアラン君は君のどこがいいのか不思議になるよ」

「何か言いました？」

「いいえ何も」

青い顔でブンブンと首を横に振ったエドモンドは、真面目な研究者の顔になって魔封石の欠片を取り上げた。その手にはいつの間にか、ちやつかりと手袋が嵌められている。

「話は魔封石について、だったね」

「ゼルギウス帝は他国の魔法使いに対抗するための手段だって誇らしげに語っていましたけど、エドモンドさんが知っているとということとは、別に帝国が独占している技術というわけでもないんですね？」

「まあ、そうだね。ボニファーツ帝国以外ではものすごくマイナーな、それこそ君でも知らなかったような技術だけど、存在は知ら

れているよ」

すると、フェリシアはきよとんと首をかしげた。

「どうしてですか？魔法を無効化する道具なんて、便利そうなのに」
「だって、停止や消去の魔法を使った方が早くて確實お手軽だからさ」

魔封石を手の中できると弄びながら、エドモンドは答える。

「魔封石は石とつくけど、物質としては金属だ。魔法金属とは逆に魔力を遮断する効果がある。しかし、魔法金属もそうんだけど、天然の魔封石はその力が極めて微弱だから、高温と圧力をかけて不純物を取り除き、精製する必要があるのさ。これがまた手間のかかる方法でね。魔封石は魔法の火で熱しても火の威力を減らしてしまっから、魔法を使う者にとっては魔法金属より更に加工が難しい。そういうわけで、ボニファーツ帝国以外では廃れた技術なんだよ」
「なるほど」

「まあ、魔術師が罪を犯したときに拘束するための手段として、どこの国も多少の手持ちはあると思うけどね。一般人が知っているようなものではないさ」

そうして話を打ち切ろうとするエドモンドを、フェリシアじとつと半眼で睨んだ。

「その一般人は知らないことを、なんでエドモンドさんが知ってるんですか。まさか魔封石の拘束具のお世話になるようなことをしてかしたんじゃない……」

「あはははは、僕がそんなへまをと思うかい？」

愉快そうに笑ったエドモンドは、ふと真顔になって魔封石に視線を落とした。

「魔封石について、帝国の次に研究されているのがウルリーク魔法共和国だよ。あそこは魔法に関するのなら何でも研究する国だから。僕は昔、かの国へ留学していたから、知っている」

「エドモンドさん……？」

敵国といえど、共和国やミネレア教国とはボニファーツほど険悪な

わけではないから、エドモンドに留学経験があっても不思議ではない。しかしいつもと様子の違う悲しげな彼が気になって、フェリシアが遠慮がちに声をかけると、エドモンドはすぐに陽気な笑みを浮かべた。

「なんだい、フェリシア君？」

それは深く事情を聞くことを拒むような完璧な笑みで、フェリシアはとっさに別の話題を振った。

「ええと、でも私が人形だった頃、魔力垂れ流して周りに随分迷惑をかけたって話じゃないですか。どうして魔封石が使われなかったんでしょう？」

「うーん、当時はまだ僕も子供だったから、推測だけれど、君の規格外の魔力を恐れたんじゃないかな。魔力をコントロールする意思もない状態で、無理矢理拘束を断ち切って暴走したら、大惨事だろう？」

「どの口が大惨事なんて言うかと思うけど、納得はしました」

「それから、作者がまだ魔封石の設定を作っていなかった」

「エドモンドさん、それぶっちゃけちゃ駄目ー！！！」

「あはははは」

ひたすら愉快そうに大笑いするエドモンドを睨み、フェリシアは溜息をついた。さっきの憂い顔はやはり、見間違いか何かだったのだろう。

「さて、聞きたいことはこれで全部かい？」

「あ、いいえ。頂いた銃杖なんですけど、やっぱり燃費が悪いので、今お師匠様に改造を頼んでいるんです。それで、エドモンドさんへの相談とか、質問を預かってきたので、回答をお願いしたいんですけど」

同じ魔道師団の長と副団長とはいえ、ダリルもエドモンドも多忙な身、スケジュールが合わなければしばらく顔を合わせないこともある。そこでフェリシアが中継ぎをしているのだが、エドモンドは大前提が不満のようだった。

「そんなまどろっこしいことをしなくても、団長じゃなくて僕に預けてくれればスタイリッシュかつエレガントで機能的に仕上げることができるのに」

「嫌ですよ、エドモンドさんに任せたらどんな珍改造をされるかわかったものじゃありませんから。まずは、普通の人が使っても、せめて気絶ぐらいで済む程度に出力を抑えられないでしょうか？」

「ふむ、それなら、この魔封石を使うのが丁度いいんじゃないかな。魔法金属と直接接触れわせて使うと反発が起きて危険だから、中継ぎの材料は……」

なんだかんだ言いつつも、エドモンドは魔法の話になるとすぐに夢中になった。その知識も発想の奇抜さも、奇天烈な人格さえなければ素直に尊敬できるのになあと残念に思いつつ、フェリシアは彼の提案を片端からメモしていく。それはフェリシアにとっても勉強になる有意義な時間で、気がつけば日が暮れだしていた。

「いけない、もうこんな時間！エドモンドさん、今日は忙しいのにありがとうございますでした！」

意見交換も一通り片付き、深々と頭を下げるフェリシアに、エドモンドは軽く笑って手を振った。

「気にすることはない、僕にとっても興味深かったよ。困ったことがあったら、また相談においで。お礼は一日実験台で」

「もう、最後の一言がなければ良いお兄さんなのに。でも、本当にありがとうございます」

フェリシアは頬を膨らませながらも、最後は笑って踵を返そうとした。その手首を、エドモンドがぱしつと捕まえる。

「エドモンドさん……？私、実験台になる気は有りませんか？」

怪訝そうな顔でエドモンドを見ると、彼は妙に真面目な顔つきで聞き返した。

「……本当に、相談ごとはこれだけでいいのかい、フェリシア君？」
「え？何を言ってる？」

「例えば、オズワルドに言い寄られて困っているとか。僕なら力に

なれるかもしれないよ？」

「！」

思ってもみなかった話題を出されて言葉を失うフェリシアを見て、エドモンドは相好を崩した。

「いや、こんな言い方は失礼だったね。謝るよ。ごめん」

「い、いいえ……陛下なら、話せばちゃんとわかってくださると思いますから。でも、参考までにどう力になってくださるつもりだったのか、聞いてもいいですか？」

また得体の知れない魔法道具か薬でも開発したのだろうか、それなら取り上げなければと使命感に燃えてフェリシアが尋ねると、エドモンドは至極真つ当な解決策を提示してきた。すなわち、貴族の娘が王の求婚を断る唯一つの方法。

「うん、オズワルドより先に、僕とフェリシア君が婚約すればいいかなと思つて」

「は……はいいい!!?」

驚愕のあまり素っ頓狂な声を上げるフェリシアに、エドモンドはあくまでも真面目な顔で、おっとりと言ったものだ。

「どうかな、家柄も丁度つりあうと思うけど？」

「いえ、問題はそこではなくて！」

「大丈夫、フェリシア君は楽しい友人だけど、子作りする気はないから。仮面夫婦大歓迎」

「私だつてエドモンドさんは大事なお友達ですけど、こんな奇天烈変人を旦那さんにするなんて嫌ですよ！というか異性として見られない相手に求婚まがいのことをするなんて不実です、エドモンドさん！」

「うーん、それについてはひたすら申し訳ないとは思っただけど、貴族の間では愛のない結婚なんて当たり前だし。何ならオズワルドが諦めた後に、婚約破棄したつて良いしね」

とても申し訳なさそうには見えないのんびりした口調で、とんでもないことを提案するエドモンド。しばらく開いた口の塞がらなかつ

たフェリシアだったが、なんとか思考を回復させた。

「確かに陛下の求婚を断る口実にはなりませんけど、何でまたそんな事を？エドモンドさんには特に利のない話ですよ、ね？」

「ん？君は自分の価値をわかっていないね、大貴族の令嬢で救世主なんて、オズワルドが睨みを利かせていなければ、今頃婚約の申し込み大殺到だよ？まあ、それとは別に……僕は兄馬鹿でね。オズワルドとは、妹と上手くいってほしいんだ」

その言葉に、フェリシアは彼の下妹を思い出して眉根を寄せた。

「ああ、ヴェロニカさんを応援してるんですか。でも、あの子は私が義姉になつたらそれはそれで嫌がりそうですけど」

フェリシアの言葉を、エドモンドは肯定も否定もせず、黙って微笑んでいた。それが何だか得体の知れない笑みに思えて、フェリシアは後ずさる。

「せつかくのお誘いですけど、私、好きな人がいます」

「うん、知ってるよ。僕もそうだ」

すると、フェリシアは先程とは別の意味で驚愕した。

「いるんですか？誰！？どんな人ですか！？っていうか結婚ならその人としてくださいよ」

好奇心に負けて尋ねると、エドモンドは照れることもなく答えた。

「無理だよ、彼女は存在しないんだ。一言で言えば、小さい子。髪は茶髪で、目は緑色で、年はずっと十五歳」

「は……？」

それは俗に言う二次元嫁か、おまけにあんたロリコンか、というツッコミは流石にできずに、フェリシアはただドン引きした。

「フェリシア君？」

「え、ええと、インジャナイデショウカ、人の趣味はいろいろで……うん、私、オタクの友達いたし、わりと寛容なほうだと思えますよ。友達なら」

友達、と念を押して、フェリシアはふらふらと研究室を出て行った。

何だかショックを受けている様子のフェリシアを見送ったエドモンドは、きょとんと首をかしげた。色々誤解されている気がする。しかし、あえてそれを解くために行動しようとはしないところが彼である。まあ良いかと思いついて、エドモンドも家に帰るべく研究室の片づけを始めた。すると、先週キアランをからかう為に、否、彼の恋を応援してやるために作った記憶操作薬の製作道具が散らかったままなのに気づいた。

「まったく、僕らしくもない。あの子達には、つい世話を焼きたくなってしまうね」

それを棚に戻して苦笑しながら、エドモンドは一人呟いた。フェリシアにあんな提案をしたものの、エドモンド自身は彼女とキアランが幸せな恋人同士になれば、それが一番良いと思っていた。彼らの様子はからかいがいもあるが、それ以上に微笑ましかった。自分が一度手に入れかけて、そして永遠に失ったもの。

「僕の愛する人は、もういないんだよ、フェリシア君。だから彼女は、永遠に十五歳なんだ」

エドモンドが愚かさ故に失ったものを、彼らにはちゃんと手に入れてほしかった。一方で、親友や妹にも幸せになってもらいたいという気持ちがある。

「まったく、僕のような天才にすら、世の中はままならないものだ」魔法なら、論理さえ間違わなければ上手くいくのに、と溜息をつくエドモンドだった。

37・魔封石（後書き）

エドモンドさんロリオタ疑惑。ギャグやるときは貴重な人材ですが、彼を出しながらシリアスな空気を保つのは苦労しました。案の定だいが破綻している。まあ、長男さんの過去話も色々ある（というか細部まで決まっていらない）んですが、しっかり書けるのはだいぶ後になると思います。たぶんマルグリット過去話のほうが先に来る。グランディール内政編は、なんとというか、グランディールの皆の過去の因縁的な感じになるかと。その代表がオズワルド陛下。逆にフエリシアとキアランはサナデイス・ボニファーツ編で語り尽くしたので、ピンで過去話に絡む予定はあまりないです。

白とピンクを基調とした可憐で豪華な部屋に、ガシャンと似つかわしくない大きな音が響いた。部屋の前を通る使用人達は皆、お嬢様のヒステリーが始まったと肩をすばめて足早に立ち去っていく。部屋の主　ヴェロニカ・アーデンは、高価な茶器を怒りのままに床にたたきつけた。

「どうということよ……！」

ヴェロニカは取り巻きの令嬢たちから送られた手紙を握り潰し、低く呟いた。手紙には、彼女の逆鱗に触れる内容が書き綴られている。

ご機嫌よう、ヴェロニカ様。ところでご存知でしたかしら？

国王陛下が救世主様への求婚の準備をしているのですって。

エドモンド様もフェリシア嬢へ求婚を匂わせるようなことを仰ったとか。

彼女達の癪に障る囁き笑いまで聞こえてきそうな文面に、ヴェロニカは歯を食いしばった。これが一通だけなら根も葉もない噂と断じることまでできるが、五通届いた手紙の全てが同じような内容なのだ。おかげで優雅なお茶の時間が台無しだ。

（なんてこと、陛下とお兄様があの娘に求婚するですって！？いつの間に、そんな事になっていたのよ！）

子供のころ、「僕の一番大事な女の子はヴェロニカだよ」と言っただけで、お兄様はそれでおどまらされたような気分、ヴェロニカは唇を噛んだ。だが、それでもエドモンドの方はまだまだ。フェリシアが義理の姉になるなどおぞましいことこの上ないが、二人が結婚すれば、とりあえずオズワルドとフェリシアが婚姻を結ぶ最悪の結果は免れる。

（むしろ、お兄様はそうなることを見越して求婚したのかしら……いいえ、まさかね。お兄様がそんなに気が効く筈がないわ）

一瞬よぎった、兄は味方のままではないかという考えをばっさり切

り捨てるヴェロニカ。エドモンドのことはなんだかんだで嫌いではないが、魔法研究にしか興味のない兄の考えることなど、ヴェロニカはさっぱりわからなかった。

（それにお兄様とオズワルド陛下を並べられて、お兄様を選ぶ女がいるわけじゃないじゃない）

何しろ辛うじて並ぶことが出来るのは顔だけ、地位も人格もオズワルドの圧勝だ。

「我が兄ながら悲しくなってきたわ……」

はあ、と深く溜息をついたヴェロニカは、激しく考えを巡らせ始めた。

「お兄様が使えない以上、私が何とかするしかない。王妃になるのは私よ！どんな手を使っても、あんな娘に負けるわけにいくものですか！」

「荒れているね、お嬢さん」

不意にかけられた声に、ヴェロニカはぎょつとして振り返った。怒り心頭の自分の部屋へ勝手に入って来る者など家族ぐらいのものが、父も兄姉もとうに出仕している時間だ。なにより、声音が家族のものとは全く違った。

「何者です！？」

誰何するヴェロニカの視線の先にいたのは、十歳前後の少年だった。下級貴族の子弟だろうか、最上級ではないが整った身なりに、綺麗に切りそろえた黒い髪。何の変哲もない少年だったが、目元を覆う黒い目隠しが異様だった。

「名前を聞くときは自分から名乗るって、礼法の基本だと思っけどなあ。まあいいや。僕はノヴァ」

そう名乗り、口元を笑みの形に歪める少年。曲者の類でなかったことにヴェロニカは一瞬拍子抜けしたものの、すぐに元の苛立ちも手伝って、柳眉を逆立て少年を睨みつけた。

「なんて不遜な」

ノヴァとは、神を表す言葉。創生神の名前であるグラノーヴァとは、

「偉大なる神」という意味だ。神を名乗る少年に、ヴェロニカは眉を顰める。

「お父様の部下の子供か何かかしら？勝手に淑女の部屋へ入るものではなくてよ。誰かいないの！」

ノヴァをつまみ出そうと使用人を呼びつけるヴェロニカは、ふと違和感を覚えた。先程まで部屋の外では人の気配がしていたというのに、今は不気味なほど屋敷の中が静まり返っている。すると、ノヴァが彼女の疑いを肯定した。

「呼んでも叫んでも無駄だよ、この家の人たちは全員眠ってもらったから」

「そんな、馬鹿なこと」

たまたま部屋の前から人氣がなくなっただけだろうと笑い飛ばそうとして、ヴェロニカは凍りついた。幼い頃、一度だけ同じような感覚に陥ったことがある。抜け殻だった頃のフェリシアが放っていたような、強烈な魔力の気配だ。

「うっ……」

たちまち気分が悪くなり、口元を押さえるヴェロニカに、目隠しの少年は目が見えているかのようにしっかりとした足取りで近づいてきた。

「ねえ、王妃になりたいんでしょ？協力してあげようか？」

見かけは幼い少年だというのに、ノヴァは形容しがたい禍々しさを放ちながら囁いた。神は言いすぎにしても、魔物が悪魔か、普通の子供ではありえない。ノヴァの言葉に耳を傾けるべきではないとわかってはいるのに、気がつけばヴェロニカは聞き返していた。

「何故私に協力を？お前に、何ができるといのです？」

「僕も、人形姫が王妃になるのは嫌なだけだよ。出来ることは、色々。で、どうかな？」

滲み出す濃密な魔力さえなければ普通の子供のような口調で、ノヴァは尋ねる。禁忌の道と知りつつ、ヴェロニカは答えた。

「……まずはその魔力を収めなさい。話はそれからです」

兄も姉ももはや自分の味方ではなくなり、かといって自力でフェリシアをどうにかすることもできない。ならば、悪魔に魂でも何でも売ってやるうという結論に達するまでに追い詰められたヴェロニカに、少年は邪悪な笑みを浮かべてみせた。

一方その頃、ヴェロニカの姉マルグリットは、王城の訓練場で鍛錬の真つ最中だった。ボニファーツとの戦争中は王国南部の防衛に従軍していた彼女だが、勝利に伴い中央へ戻ってきたのだ。舞うように軽やかに剣を振るう彼女を久々に見ようと、訓練場には休憩中のメイドたちや城を訪れた貴族の娘たちが詰め掛けていた。

「相変わらず女の子にすごい人気だね、マルグリット」

鍛錬を一段落終え休憩室で一息入っていたマルグリットは、友人に声をかけられ振り返る。見ると、乗馬服姿のフェリシアがやってくるところだった。彼女は週に一、二回、体力づくりのために訓練場でジョギングや軽い筋トレを行っている。時間が合えばこうして話をするのもいつものことだったが、マルグリットは近頃その頻度が高いように感じた。

「フェリシアこそ、最近よくここに来るね。皆、可愛い君の方こそ見たいのではないのかな？」

「あはは、まさか。よくこっちに来るのは、その、会えるかなあと思ってた」

本人は笑って切り捨てたが、少しはにかむ姿はマルグリットから見ても可愛らしかった。マルグリットはにやりと笑い、一人の名前を挙げる。

「会いたいわって、キアランに？」

「ふえっ!？」

凶星を差されたのだらう、目に見えて動揺するフェリシアに、マルグリットはくすくすと笑った。

「あれだけ険悪だったのに、サナデイスで何があったのやら。忙しいなどと言いつつ顔を出せばいいのに、あいつも馬鹿な奴だ」

親しみを込めてキアランを貶すマルグリットを、フェリシアは怪訝そうな顔で見つめた。

「……マルグリットは、キアランと仲いいんだね」

「おやおや、そんなに可愛く嫉妬をされてもちつとも怖くないよ？ 安心しなさい、私と奴の間にあるのはただの友情だ」

「本当に？」

「本当だとも。寧ろ、奴にとって私は恐怖の対象かもな。事あるごとに叩きのめしてやったから。そうだ、子供のころキアランを泣かせたときの武勇伝を」

マルグリットが幼い頃の話面白おかしく始めようとしたときだった。

カンカンカン！！！

平素は時間を告げるための鐘が、狂ったように打ち鳴らされた。その意味するところは緊急事態。

「何……？」

「とにかく、外へ出てみよう」

不安そうな顔のフェリシアを誘って、マルグリットたちは建物の外へ出た。訓練場には鐘の音を聞いて出てきた兵士や使用人たちが集まって、ざわめいている。すると、そのざわめきが一際大きくなる一角があった。

「何の騒ぎだ」

人々の間を縫って騒ぎの中心に進み出たのはハロルドだ。マルグリットは、父親にして上司である彼のそばへ駆け寄った。そして親子は、息切れ、恐怖で青ざめ震える兵士の姿を見る。

「お前は城下の門衛だな。なにがあった？」

息も絶え絶えに振るえる兵士の体を支えてやりながら、落ち着いた声音で問いかけるハロルドに、若い兵士は將軍への礼もとらずに告げた。

「城下町の南方に、突然魔物の大群が……！」
「何？」

グランデールの城下町は平原の真ん中にあり、幾重にも張り巡らされた城壁と堀によって守られている。見晴らしも防衛の仕掛けも十分な城下町のすぐ傍に、魔物が押し寄せるまで気づかないなど、あり得ない話だ。魔物の地がある北からではなく、南からの迫撃というのもおかしい。しかし与太話と断じるには、兵士の姿はあまりにも必死だった。

「動けるものはすぐに戦いの準備を！伝令兵は東西北の門衛達にも警戒を促せ！斥候に出られるものはいるか！？」

「將軍、私が参りましょう」

ハロルドの求めに、すぐさまマルグリットが名乗りを上げる。ハロルドは一部の隙もなく軍服と剣を装備した娘を見つめ、一瞬で頷いた。

「頼んだぞ」

「お任せあれ」

短いながらも信頼の窺える父親の言葉に、しつかり頷いたマルグリット。その背後から、フェリシアも顔を出した。

「アーデン將軍、私も行きます！」

「また貴女ですか……」

厄介事が起こると必ずいる、と言いたげなハロルドに、マルグリットはあえて娘の立場から物申した。

「父上、フェリシアは魔物相手なら途轍もなく強いですよ。それこそ、一人で魔物を殲滅して帰ってきかねないほど。十分な戦力になるかと思いますが」

「……いいだろう、お前の言葉にも一理ある。フェリシア嬢、責任は私が取ります。第一陣はお任せしてよろしいか」

厳しい口調に、萎縮させてしまうのではないかとマルグリットは危惧したが、フェリシアは神妙に頷いた。

「大丈夫です。マルグリットも一緒だし、ボニファーツのときみた

いに一人で先走るへまはしません」

「ならばよろしい」

頷いたハロルドは自分やマルグリットの部下たちからも数名の兵士を出し、戦場へと送り出した。

フェリシアはマルグリットの愛馬に同乗させてもらい、城下町を南へ疾走していた。その後から、將軍親子に選ばれた数名の騎兵がついてくる。町の主要な道路は歩道と馬車の走る車道に分かれており、人を跳ね飛ばす心配はないものの、全速力の軍馬と馬車ではスピードは段違いだ。マルグリットたちは馬車を器用によけていく。

（でも皆、驚いてる。早く行って何とかしないと）

速さだけを重視するならフェリシアが突風の魔法で皆を運んでもよかったが、兵士たちが空を移動することに怯む恐れがあった。彼らが現地で動けなくなつては意味がない。かといって、ハロルドに「一人で先走つたりはしない」と言った手前、フェリシア一人で行つてくるわけにもいかない。激しく揺れる馬上で必死にしがみ付き、風のように過ぎ去る景色を眺めながら、フェリシアは逸る心を懸命に抑えていた。

そして城下町の南門に到達した一同は、一斉に顔を顰めた。通常なら行商人や旅人達のために開かれ、賑わっているはずの大門はぴたりと閉じられ、締め出しを食らった人々が不安や苛立ちを顔に浮かべて話し合っている。

「……この先が心配だ。急ごう」

マルグリットの言葉に、兵士たちは専用の小門を通つて城壁の外へ出た。城下町は三重の高く厚い城壁と深い堀に囲まれている。堀を渡つてしばらく進むと、すぐに第二の門が現れた。この門もしつかりと閉じられ、周囲には人どころか野良犬一匹見当たらない。

「皆、腹を括れよ」

マルグリットが部下たちを振り返り、告げた。通常ならこの門は防衛の要として、多くの門衛が詰めているのだ。それが無人など、ま

すます尋常ではなかった。一行は十分に警戒しながら二つ目の門と堀を踏破し、三つ目の門を前にして言葉を失った。

ウギヤアアアアアアアッ！
グゲヤアアアアアッ！！

見上げるほど高い城壁越しに、くぐもった怪物の絶叫が響く。守護の魔法がかけられた分厚い魔法金属の扉がガンガンと外から打ち付けられ、拉げ始めていた。城壁の上に駆け上がって見れば、眼下の光景は戦場ですらない。小鬼、戦闘熊、魔狼、土巨人、炎獅子など、一面見渡す限り、種類もバラバラの魔物の群れが城門に殺到している。この中で人間が生きて戦うなど絶望的だ。衝撃からいち早く立ち直ったのは、マルグリットだった。

「国王陛下と將軍に報告を！残りは一軍を率いて直ちに住民の避難命令を出せ！急げ！！」

魔物たちがこのまま町に入り込んでは大惨事だ。上から見たところ、南門以外にまだ魔物の姿は確認できない。襲撃があったとしても、ハロルドが伝令を飛ばしたから多少の備えはあるはずだと判断し、ときはきと指示を飛ばすマルグリットに、兵士たちは我に帰り慌て戻っていく。しかし、マルグリットの側近である上級兵はその場に踏みとどまった。

「マルグリット様はどうなさるのですか？共に將軍の下へ参りましょう、城で対策を」

「私はここに残り、状況を逐一確認する」

そばに打ち捨てられていた弓を引き絞り、いざとなればたった一人でも魔物の大群に立ち向かう気迫のマルグリットに、フェリシアが並んだ。

「マルグリットのことなら心配しないで、私も残ります」

「フェリシア！？何を言うんだ、君こそ城に戻れ！」

説得するマルグリットに、フェリシアは穏やかな笑みすら浮かべて

告げた。

「出来ることがあるのに、友達を置いて逃げるわけには行かないわ。それに勝算がないわけじゃないんだよ？ここは私が食い止めます」
フェリシアはそう告げて、掌を門へ殺到する魔物と向けた。強風が吹き荒れ、詰め掛けていた魔物たちを一気に吹き飛ばす。

「おお！」

魔物たちが吹っ飛んでいく様子を見ていた兵士が感嘆の声を上げた。
「まだです」

しかしフェリシアは油断なく魔力を練り、体勢を崩した魔物たちを地中に飲み込んだ。あとは地面の中に爆風の魔法を放って仕留めるいつものやり方で、城壁の周囲からは見る見る魔物が消えていく。

「何度見ても凄まじい力だね……」

マルグリットが半ば呆然と呟く。魔物の中にはフェリシアの存在に気づき、飛び道具や魔法を仕掛けて来る物もあったが、フェリシアが展開した障壁の前には無力だった。数が多いため全てを瞬殺とまではないかないが、魔物で埋め尽くされていた平原はたちまち静かになっていく。ただ、魔物を飲み込んで荒々しくむき出しになっていく土くれだけが、惨劇の証拠として残っていた。

38・迫撃（後書き）

久々に主人公大活躍でした。内政編⇨戦闘シーンなし、というわけではありません。

完全に沈黙した平原を見下ろして、フェリシアは長い溜息をついて目を閉じた。背後では、沈む彼女とは対照的にマルグリットの側近である兵士が歓声を上げている。

「やった、素晴らしい、あの魔物の大群を一人で倒すとは！貴女は本当に、この国を救ってくださる救世主だ！」

「わかったから、早く父上たちにこのことを報告して来い。危険はもう去ったと」

普段は冷静で落ち着いている彼の感激ぶりにマルグリットが苦笑して、指示を出す。兵士はたちまち背筋を伸ばして了承の返事を返すと、踊るような足取りで城壁を駆け下りていった。

「どうしたんだい、フェリシア？さすがに疲れた？」

「どうしようもないマルグリットの言葉に、フェリシアは小さく振り返って首を振った。

「ううん、そういうわけじゃないの。でも、門衛の人が誰もいなかったってことは、皆、私たちが来る前に下で戦っていたんだなって私が最初からここにいれば、助けてあげられたと思ってる」

「そうか……大丈夫、彼らの勇敢なる魂はグラノーヴァの御許で永遠の安らぎを得るだろう。それよりほら、犠牲になった彼らのためにも、君は勝利を誇って笑わなければ」

それがマルグリットの励ましたとわかってはいたが、フェリシアは再度首を横に振った。

「マルグリットの気持ちはとてもありがたいけど、でも私は、やっぱり何度経験しても駄目だなあ。嬉しいって思えないや。例え魔物でも、殺戮を楽しんでいるようになつたら人としておしまいだと思っし」

そう言っつて、黙禱を捧げるフェリシア。彼女が悼むものの中には、犠牲になつた兵士だけでなく、自分が殺した魔物も含まれていた。

そんなフェリシアにマルグリットが声をかけ損ねていると、彼女はくると振り返って笑顔を作った。

「ごめんなさい、愚痴言っちゃった」

「気にするな、それを聞くのが友人というものだろうか？友達を置いて行けないと言ってくれて、嬉しかったよ」

今度の言葉選びは間違えなかったらしい。フェリシアはやっと心からの笑みを浮かべて、頷いた。そして再び、眼下を見下ろす。

「一応、討ち漏らしがないか見てくるね。ひよっとしたら、まだ生きている兵士の人もいるかもしれないし」

「なら、私も行こう」

フェリシアは一瞬渋ったが、ハロルドとの約束を思い出し、最後は素直に頷いた。二人の娘はフェリシアの突風の魔法で城壁の内側に下り立ち、馬を回収して門の外へ出る。

「ひどいものだ、街道がボロボロだね」

魔物を飲み込んだ地面は辺り一面掘り返したように土がむき出しになり、南へ続く街道は無残に破壊されていた。

「うっ……怒られるかなあ？」

「いいや、大丈夫だろう。あの魔物の群れが城下へ進入することを思えば、こんなもの被害のうちにも入らないさ。それにしてもあの魔物たち、どこから現れたのだろうか」

「うーん、思い当たる節は一つあるけど」

フェリシアはダリルたちと魔法の訓練に出た際、魔狼の群れに襲われた話をして聞かせた。あのときも、いるはずのない魔物が降って沸いたように現れたのだ。

「そういえば、魔狼を倒した犯人捜し、キアランが担当してたっけ。結局あれ、どうなったんだろう」

「ああ、その話なら聞いたことがある。一月以上探してそれらしい人物も魔物も見つからなかったから、調査は打ち切りになったそうだよ」

そんな事を話しながら、二人は城門の周辺を調べて回った。兵士の

生き残りは見つからないかわり、倒し損ねた魔物に襲われることもない。

「これ以上は改めて調査団でも組むことにして、そろそろ帰ろうか」「そうだね」

マルグリットに返事を返し、踵を返しかけたフェリシアの足が、不意に宙を蹴った。そして、ざらりとした大きな手が足首を掴む。

「え？」

驚きに声を上げるフェリシアの足元で、一気に地面が崩れる。しかし足を掴まれている彼女はとっさに逃げることも魔法で宙に浮くことも出来ずに、引きずり込まれた。

「フェリシア！！！」

呼びかけるマルグリットの声に、耳元で誰かの声が重なった。驚く間もなく、フェリシアはその誰かに抱きこまれ、大量の土くれと共に滑り落ちる。

「きゃああああああっ！！！」

ばらばらと降ってくる土や石に打たれ、思わずその相手に抱きつき返し、フェリシアは地面の中の空洞へ転がり落ちた。不幸中の幸いというべきか、高さはそれほどもなく、落下はすぐに終わる。

「……っ」

呻き声に恐る恐る目を開けると、黒い騎士服が目に入った。

「キアラン……？」

フェリシアは自分を抱きかかえている人物を見、呆然と彼の名前を呟いた。どこか打ち付けたのか、キアランは顰め面でフェリシアの方を一瞥し、すぐさま剣を抜いた。

「ふえ？」

「失せろ」

そのまま、呆然とするフェリシアの脇に剣を突き出す。鋭い突きはフェリシアのすぐ傍に転がる土巨人の頭を貫いていた。巨人の手は、フェリシアの足をがっちり掴んでいたが、絶命と共にその力も緩む。

「あ……これに引きずり落とされたのか……」

土で出来た巨人は地面に引きずり落とされても大したダメージがなく、爆風の魔法を叩き込んでも仕留め切れなかったのだらう。そして近くを通ったフェリシアを地中に引きずりこんだのだと納得した彼女は、気がついてしまった。ここは自分が魔物を引きずり落とした地面の中だ。土巨人の背後を見れば、無数の肉片や骨の欠片が土に埋まって散らばり、濃い血の匂いが漂ってきた。

「ひっ……!!」

「見なくていい」

凄惨な光景に息を呑むと同時、騎士服を纏った両腕がフェリシアを抱き寄せ、視界を覆うように胸元に抱きこまれた。

「まったくお前は、どうして俺がいないときに限って無茶ばかりするんだ」

咎める言葉とは裏腹に優しい口調で、頭を撫でられる。震える手ではがみ付くと、心持ち抱きしめる腕の力が強くなった。

「どうしてキアランがここに……?」

「お前が魔物の出た南門に向かったと聞いて来た。途中で殲滅が終わったとも聞いたが、城に戻らないで正解だったな」

「ええっ!? お仕事は!?!」

「お前が無事かわからないときに、仕事なんかしてられるか」

開き直って真顔で答えるキアランに、フェリシアは頬を膨らませた。

「無茶をしているのは貴方の方じゃない! 今回、私はハロルド将軍の許可を貰って、マルグリットと一緒にちゃんと注意して来たのに!」

「それで足元をすくわれて、俺に助けられたのは誰なんだか」

「う……時々キアランって、元の意地悪い言い方に戻るよね」

そう返しながらも、決して以前のように彼を嫌いにはなれないのだ。自分も大概どうしようもないとフェリシアが思っていると、穴の中に差す光が増えた。

「おおい、フェリシア、ついでにキアラン、無事か?」

穴を塞ぎかけていた土を、マルグリットが取り除いたのだ。見上げ

れば、フェリシア二人分ほどの高さの上に、ニヤニヤ笑うマルグリットの顔があった。

「大変だ、君達は怪我をしているだろうし、そんなに狭い場所では突風の魔法で上がってくることもできないだろう？助けを呼んでくるから待っていたまえ」

二人とも大きな怪我はなく、フェリシアの技術なら突風の魔法を使っても問題ないのだが、マルグリットは勝手にそう捲くし立てて立ち去って行った。その表情も口ぶりも、驚くほど彼女の兄にそっくりだった。

「マルグリット……やっぱり、エドモンドさんの妹だったんだね……」

「ああ……あいつ、あれで気を使ったつもりか……？いや、寧ろこれは罠なのか？奴が俺に親切心でこんなことをするはずがない、上げた後に地の底まで突き落とすつもりじゃないだろうな？」

「キアラン、昔マルグリットに何をされたの……？」
青ざめてブツブツと呟くキアランに、フェリシアは呆れ顔で尋ねるものの、明確な答えは返ってこなかった。ただ、血の気の引いたキアランの様子から、トラウマに触れてしまったらしいと推測するだけだ。

「とりあえず、出ようか。突風の魔法で一気に飛ぶから、掴まって」
気を取り直して手を差し出すと、立ち上がったキアランが再度抱きついてきた。

「ひぁ!？」

「嫌だったか？」

「いいえ、別に、驚いただけで、嫌では、ないです、けど……」
嫌ではないが、爆発するかという勢いで早鐘を打つ心臓の音が聞こえやしないか心配だった。

一方キアランは、フェリシアの反応に眉根を寄せた。驚かせるような真似をしたのは自分なのだから、途切れ途切れの返答が不満だったのではない。未だ全身が小刻みに震えていることに、本人は気

づいていないらしいことに胸を痛めたのだ。考えてみれば当然だ。キアランは、彼女の魂が、人どころか虫を殺すのも厭う世界からやってきたことを知っている。この心根の優しい娘が、魔物とはいえ大量の命を奪って、平気でいられるはずがないのだ。震えが少しでも収まるようにと彼女を抱く腕に力を込めると、フェリシアの魔法でふわりと足元が浮いた。

こうして穴の中から脱出した二人は、城壁の内側までやってきて、ようやくほっと一息ついた。

「助けられたの、これで何度目だろ。今日もありがとう、キアラン。怪我はない？」

「多少はな。……そんな顔するな、薬でも塗っておけばすぐ治る」

「えー、私が治してあげるのに。ほら、座って座って」

キアランは門の上に登るための石段に無理矢理座らされ、正面から打ち付けた後頭部を覗き込まれた。半分押し掛かられるような体勢といい、目と鼻の先で揺れる二つのふくらみといい、理性の限界に挑まれているような気分で、キアランとしては微妙である。

「……ひどい格好だな」

差し当たって、フェリシアの胸元から気をそらそうと別の話題を持ち出すと、彼女が身を引いた。

「やっぱり、これ気になる……？」

フェリシアが指差したのは、短くなつた自分の髪だ。

「い、いいや、よく似合っている」

しょんぼりするフェリシアに慌てて告げると、彼女は唇を尖らせた。

「短い髪の女の人は、罪人の証なんだっけ」

「そんなつもりで言ったわけでは、俺はただ」

「冗談だよ。似合っているって言うてくれて、ありがとう」

花のような笑顔を向けられては、キアランは怒ることもできない。

思わず見とれていると、フェリシアが治癒の魔法を紡ぎながら告げた。

「あのね、ボニファーツから帰ったときから、ずっと言いたかったことがあるの。聞いてくれる？」

「どうした？」

改まった空気に尋ねると、フェリシアは頬を染めてしばらく口ごもった。

「ええと、あの時、私のこと、好きだって言ってくれたよね。今もそうだって思っていていい？」

「勿論だ」

即答するキアラン。彼とてこの一月、ずっとフェリシアに会いたかったのだ。ゼルギウスを倒した英雄などと持て囃されてはいるが、あのときのキアランは国のためでも兄のためでもなく、ただフェリシアを取り戻したい一心で剣を振るっていた。英雄扱いは彼としても不本意なのだが、オズワルドにやんわりと、爵位や領地の管理、夜ごと開かれる夜会への出席を強制されたのだ。慣れない仕事はまるでフェリシアに会う事を禁じるためのもののように、兄の真意を測りかねていた。考え込むキアランを見下ろし、フェリシアが消え入りそうな声で告げる。

「……ありがとう。私もです」

不意に与えられた言葉に、キアランははっと顔を上げた。いつの間にか治癒の魔法の魔力は途絶えており、フェリシアは顔を真っ赤にして言葉を続ける。

「私も、キアランが好きなの。大好き」

告白の言葉に、一瞬固まったキアランは、立ち上がって恐る恐る彼女の方へ手を伸ばした。

「本当に……？」

「いくらなんでもこんなたちの悪い冗談、言わないわ」

触れ合った手を軽く引くと、フェリシアは素直に身をゆだねてくる。キアランは彼女の体を信じられない思いで抱きながら、呟いた。

「俺は、今までお前に、許されないようなことばかりして、言ってきたんだぞ……？」

「うん、正直、今でも許せないところはある。でも、私もやりかえしたり言い返したりしたから、お相子でしょ」

くすくすと笑うフェリシアの言葉にまったく嘘が無いのだとわかれば、次に襲ってきたのは凄まじい幸福感だった。互い、泥だらけのポロポロの姿で、ムードも何もあつたものではないのに、今キアランは世界で一番幸せな人間は自分だと断言できた。

「フェリシア」

「うん？」

「俺も、お前が好きだ。愛してる。今までの償いの意味だけじゃない、俺の生涯をかけて、お前を守ろう」

誓いの言葉に、顔を上げたフェリシアが蕩けるような笑みを浮かべた。顔を近づければ、一瞬の恥じらいの後に、濡れ羽色の瞳が閉じられる。そっと口付けると、柔らかく甘い感触がした。

「……土の味がする」

唇を離すと色気のない感想を言われたものの、真っ赤に染まった顔には「照れ隠しです」と書いてあった。あまりの可愛らしさに感極まり、額や頬に何度もキスの雨を降らせると、羞恥に耐え切れなくなつたらしいフェリシアはキアランの胸に顔を埋めた。

「キアラン」

やりすぎただろうかと不安に思っていると、くぐもつた声で呼びかけられた。

「あのね、今、私、泥だらけで汚いから。続きは今度、ね？」

「そんなこと」

気にしなくて言いと続けようとして、口を嚙む。何が何でもやめて欲しいと言われたわけではないのだから、こちらも譲歩するべきだろう。楽しみを取っておくのも悪くはない。

「わかった。……次に会えるのを楽しみにしている」

「うん」

フェリシアはやっと顔を上げて、こくりと頷いた。途端、キアランは我慢を選択したことを後悔して、意趣返しに唇を奪った。フェリ

シアが焦ったようにぼすぼすと肩をたたいて来るが、本気で嫌がって逃げる様子はない。いつしかその手も止まり、二人は長い口付けを終えたあとも、ひと時抱き合いその場に留まっていた。

39・誓い（後書き）

無事両思いになりました。

中盤以降はひたすら甘さだけを追及したよ！すとりぼらんぷ、いちやいちゃ頑張った。

たぶん、今話のキアランの脳内は半分が「フェリシア可愛い」もう半分が「フェリシア触りたい」で構成されています。

でも両思いになっても大変なのはこれからだぞ！さあ、甘々の次はドロドロだ！！！ 目を輝かせながら

40・予言の乙女

ヴェロニカとノヴァは、国内の地図が置かれたテーブルを挟んで向かい合っていた。

「国王が、君ではなく人形姫を妃に望むのは何故だと思う？家柄は拮抗している。顔は、まあ、僕は人間の美醜に興味はないけれど、君の方が可愛いと言う人間の方が多いらしいね。人柄なんて、それこそ君ならどうとでも猫を被れる」

「遠まわしな言い方は止めて。そんなもの、あの娘が予言の救世主だからに決まっていますでしょう。化け物じみた魔力を持っていて、多くの魔物を殺してきたから、陛下も重んじざるを得ない」

「そうそう、その通り。君、意外に頭がいいね」

「人を馬鹿にするのも大概になさい。無礼ですわよ」

常に人を食ったような言い回しをするノヴァに、ヴェロニカは顔を顰めた。これが本当に普通の子供なら、とっくに親類縁者共々出入り禁止にしているところだ。そんなヴェロニカの苛立ちなど意に介さぬ風に、ノヴァは唇の端を吊り上げた。

「人形姫に対抗するにはさ、こちらも超常的な力を持つのが一番手っ取り早いと思うんだよね」

「超常的な力？私に強大な魔力を授けてくださるとでも？」

そんな事できっこないし、できたとしてもフェリシアの二番煎じになるだけだ。そう考えながら尋ねると、ノヴァはこっくりと頷いた。「そうだよ。僕は神様だからね。君に百発百中の予言の力を授けてあげよう」

「予言の力？そんなもの」

ヴェロニカは鼻で笑った。予言の力は魔法ほど論理的に確立されておらず、予言の表現も曖昧で、預言者と占い師は紙一重の胡散臭い商売というのが世間の見方だ。特別な例外といえばフェリシアの誕生を予言した先代の魔道師団長くらいのものである。彼は救世主の

予言の他にも、天災や敵の襲撃を予知し先王をよく支えた家臣であったという。しかし、先代魔道師団長にしても、自身に天災や襲撃を防ぐ力があつたわけではないのだ。

「私が災いを予言しても、それを防ぐのは結局あの娘になるでしょう。それでは意味がないのよ！」

「そうかな？」

ノヴァは可愛らしく小首を傾げた。そして、唐突に告げた。

「王都から目と鼻の先。南の方に、これから魔物の大群が現れるよ」「何ですって……？」

「魔狼に戦闘熊、土巨人、他にも強い魔物がたくさんの大群。人形姫なら叩き伏せることは可能だけど、彼女が来るまでに、南の門衛はたくさん死ぬだろうねえ」

少年は嬉しそうに声を弾ませた。

「今後、各地でそういうことがたくさん起こったとしたら？そして、君の予言のおかげで被害を未然に食い止めることが出来たら？人形姫がしくじったとしても、それは予知をした君ではなく、やりそこなった本人の咎となる。そうなれば、国王陛下のお目に止まるのはどちらだろうねえ？」

残酷な笑みを浮かべてノヴァが囁く声に、ヴェロニカは青ざめた。そんなことになるはずがない、そんな恐ろしいことまでするつもりは無いと思うのに、どこかでそうなることを期待している自分もいる。

「わ、私は……」

「次の襲撃地をいくつか教えておいてあげる。二日後にここ、五日後にこつち、七日後にここだよ。じゃあね」

ノヴァは目の前の地図に懐から取り出したペンで無造作に印をつけると、現れたときと同様唐突に消えた。

「!？」

白昼夢か何かだったのでないかと思わせるほどに、部屋は静まり返っていた。否、気がつけば使用人たちが部屋の外を移動する気配

もする。ヴェロニカが恐る恐る地図を覗き込むと、王都からさほど離れていない、しかしそれ故に防衛軍など持たないであろう小さな町の名前が三つ、丸で囲まれていた。

「……」

ヴェロニカはしばらく、呆けたようにその地図に見入っていた。

その日の夕食時、アーデン家では珍しく四人の家族がそろっていた。いつものヴェロニカなら嬉しく思うところだが、今日は生きた心地がしなかった。

「まったく、なんだったというのでしょうか、あの襲撃は」

マルグリットが悪態をつけば、

「魔物が沸いて出たように襲い掛かってきたって？非常に興味深い現象だね」

エドモンドが目を輝かせ、

「不謹慎だぞ、エドモンド」

ハロルドが嗜める。彼らの会話から、今日、魔物の襲撃があったことはもはや疑い様もなかった。それにもかかわらず、貴重な戦力である三人が家で夕飯など食べていられるのは、ヴェロニカが嫌いなあの娘の手柄だ。

「まったく、フェリシアがいなかったらどうなっていたことか」

安堵と信頼の窺えるマルグリット言葉に、ヴェロニカはカトラリを強く握り締めた。

（何よ。お姉様は、いつも、フェリシア、フェリシアって）

次女の表情が沈んだことに気づかず、ハロルドも長女の言葉に頷いた。

「確かに、今日の功績は全て彼女のものだ。それは認めねばなるまい」

「フェリシア君はすごいよねえ。いつか解剖させてくれないかな！」
兄の発言に不穏なものが混じると、ヴェロニカの慰めにもならなかった。

（私のお父様とお兄様とお姉様なのに。なんでみんな、あんな子の方がいいのよ）

家族をとられた黒い感情が胸を焦がし、迷っていたヴェロニカの背中を押した。ヴェロニカはほとんど口をつけていない食事から顔を上げると、細い声で問いかけた。

「ほ、本当に……城下町が、魔物に襲われたのですか？」

これから告げることを思えば、演技などするまでもなく、顔は青ざめ声が震えた。するとマルグリットが一瞬しまったという顔を浮かべ、次に安心させるように妹へ微笑みかける。

「大丈夫だよ。魔物は全てフェリシアがやつつけてくれたからね。」

お前は何も心配しなくていいんだ」

「そんなわけには、いきません」

ヴェロニカは震える手を握り締め、俯きがちに告げた。

「私、知っていたんです。今日、王都に魔物の大群がやつてくるって」

「……？」

ハロルドが無言で鋭い視線を向けてきた。それだけで居竦みそうになりながら、ヴェロニカは告げる。

「今日の、五の刻過ぎ。王都の南に、魔物の軍勢が現れるって……」

ハロルドたちの会話だけは読み取れない情報を上乗せすると、三人の表情が真剣なものになった。

「何故、それを言わなかった？」

父親に睨みつけられたヴェロニカは、必死に恐怖を押し殺した。

「こんな荒唐無稽な話、信じていただけに思っただけです。こんなことになるなら、誰かに話して置けばよかったです……」

そっと涙を拭うふりをする、ハロルドが少し身を引いた。彼が内心で、愛娘を泣かせてしまったかと大慌てしていると、ヴェロニカは知らない。自分のような、取るに足らない娘の事で、偉大な父が取り乱すなど想像もしていないのだ。それは彼女の兄姉も同じ事で、エドモンドとマルグリットはヴェロニカを庇うように父親を非難の

目で見た。

「父上、そんなに睨んだらヴェロニカが脅えますよ」

「か弱い娘を脅すだなんて、將軍閣下ともあるう方がみつともない」
孤立無援となったハオルドは、気まずそうに子供たちから視線をそらした。

「別に、脅していたわけではない」

職場では百の魔物も千の敵兵も恐れぬ將軍がたじたと答えると、
ヴェロニカは恐る恐る顔を上げた。

「実は、次に魔物に襲われる町もいくつかあったのですが……」

「何だと？何処だというのだ？」

ヴェロニカがノヴァから教えられた町の名前を告げると、ハオルドは眉間に皺を寄せた。マルグリットも難しい顔で考え込む。

「どこも王都に近い、街道沿いの宿場町だね。防衛機能はさほど高くない小さな町だけど、本当に魔物の襲撃があるならかなり痛い」

「おそらく私は、予言の力に目覚めたのだと思います。信じて、いただけませんか？」

予言の力と魔力の強弱に関係はない。辺境の老人やほとんど魔力のない子供が突如開眼したという逸話もあり、ヴェロニカが突然予言の力に目覚める可能性はある。しかしハオルドは難しい顔で首を振った。

「お前の気のせいではないのか？」

言い捨てられて、自分の言葉など父にとっては塵のようなものなのだとヴェロニカは思い知った。だからこそ彼女には、自分が有能な預言者であると言い張るより他に、オズワルドに近づく手段がなかった。

「ですが、今日も魔物が襲ってきたせいで、多くの兵士の方が亡くなったのでしょうか？魔物が襲ってくるとわかっているのに、同じことを繰り返すのはあまりにも辛いのです」

滅多なことでは父に意見を言ったりしないヴェロニカが強く訴えかけると、ハオルドは逡巡の後、口を開いた。

「……いいだろう。その日までに、私の権限で動かせる兵を派兵しておこう。だからお前は安心していなさい、ヴェロニカ」

「ありがとうございます」

もう後戻りは出来ないと自分に言い聞かせて、ヴェロニカは頭を下げた。

そして、ヴェロニカが「予言」した日がやってきた。演習の名目で件の町の傍にいたハロルド直属の部隊は、町に襲いかかる魔獣の群れを発見。苦戦はしたが、王都を襲った魔物の大群に比べればずっと数が少なかったこと、兵士たちに戦いの備えがあったことが幸いして、大きな被害は出ずに魔物の殲滅に成功した。

七日の間に三回も同じようなことが起きると、ハロルドとしても娘の能力を認めざるを得なかった。そして、ハロルドの直属部隊が続けざまに、突然湧き出た魔物の群れを撃退したという話は、オズワルドの耳にも入った。

「忙しいところすまないね、将軍」

三回目の魔物殲滅の翌日に国王から呼び出しを受けたハロルドは、丁寧に礼をした。

「とんでもございません。私の仕事など、陛下のそれと比べれば軽いものでございましょう。ご自愛なされますよう」

自分にも他人にも厳しいハロルドが、国王相手といえど相手を気遣う言葉を口にするのは珍しかった。それほどまでに、オズワルドの姿はやつれ、終戦処理と魔物の対応で激務に追われる疲労が窺えた。

「最近、夢見が悪くてね。それより、十日にも満たない短い間に三度も、演習先で魔物の群れに出くわしたと聞いたけれど？」

「直轄領にて無断で陣を構えましたこと、深くお詫び申し上げます。そう畏まるな。目と鼻の先に魔物がいたのだろう、誰も謀反だなんて思いやしないよ。けれど、どうして魔物の出現にあわせたように兵を配ることができたのだい？」

単刀直入な問いは、ハロルドに一切のごまかしを許さなかった。ハ

ロルドは溜息交じりに、重い口を開く。

「……我が娘、ヴェロニカの予言のためにございます」

「ヴェロニカ？ ああ、あのいつも夜会に来ている子か。へえ」

ヴェロニカが先日王都を襲った魔物をはじめ、いくつか襲撃を言い当てたことを告げると、オズワルドは興味深そうに呟いた。ハロルドから見ても、ヴェロニカがオズワルドの妃の座を望んでいるのは明白だった。アーデン家としても、娘を王妃にできればよりいっそう繁栄が期待できる。しかしながら、ハロルドは娘を王妃にすることに、あまり乗り気ではなかった。

（オズワルド陛下は、あまりにも……）

大切な娘を任せるには、あまりにも危うい気がしてならなかった。オズワルドは穏やかで理知的な名君であるのに、どこかその完璧さが空恐ろしい。ハロルドは嘗て、よく似た感情を抱いたことがあった。先王の正妃、オズワルドの母親に対して。

「將軍？」

物思いにふけっていると、オズワルドが呼びかけた。その声も咎めるような響きは一切ない、臣下を気遣う優しい君主のものだ。

「失礼いたしました。私としましては、今後も娘の予言を元にした出兵をお許しただければ幸いです」

「民を魔物の手から守るためなら、勿論構わない。けれどヴェロニカ嬢は過日の王都襲撃規模の魔物ですら言い当てたのだろうか？ あの規模では、貴公一人で対処するのは無謀ではないか？」

ハロルドは不覚にも言葉に詰まった。彼はチェンバレン家と並んで王国一の貴族の当主ではあるが、直属部隊と領地の私兵をかき集めても、その兵力は正規国軍の一割といったところだ。対して先日王都を襲った魔物の群れは、国軍の総戦力でどうにか殲滅できる数だった。ハロルドの力だけでは、とても防ぎきれるものではない。

「その件に関しまして、実は提案がございます」

今度こそ王の勘気を蒙るかもしれないと思いつつ、ハロルドは申し出た。

「何だい？」

「娘の予言した先に、救世主フェリシア嬢を派遣すれば、陛下の御心を煩わせるまでもないかと」

王が執心している娘の名を上げると、案の定オズワルドは眉をしかめて見せた。しかし彼は、自分の感情だけで臣下の言葉を無下にするほど愚かな王でもなかった。

「それについては、フェリシアの意見も聞いてみないとわからないね。ご息女の功績は、王都襲撃を入れてもまだ四回なのだし、予言ではなくただの偶然ということも考えられる。フェリシアが行くというなら、私は止めないけれど。早速、令嬢も同伴させて登城するといい。フェリシアも同席の上話し合おう」

「御意」

折衷案を出すオズワルドに、ハロルドは胸を撫で下ろした。とりあえず、今すぐヴェロニカが召抱えられるということは無さそうだ。

ハロルドは厳しい表情や態度とは裏腹に、子煩悩だった。特に、幼く可憐で、体の弱かった末娘のことは、態度にこそ出さないが溺愛していた。誰が、王城などという魔窟に可愛い娘を差し出したりするものか。戦場で苦悩するフェリシアの姿を見て、その考えは更に強固なものになっていた。

「ところで、半月後に宴を開こうと思うのだが」

「宴？またキアラン殿下を讃える会ですか？」

ハロルドの口調がやや皮肉気味になるのも無理はない。オズワルドはこの一月、事あるごとに宴を開いては、皇帝を倒した弟の名を喧伝していた。国外への警告、国内の王家への信奉を深めるという意義はある。しかし、有体に言っただけでやりすぎなのだ。兄馬鹿なのか、愚王と見せかけ他に目的があるのか、ハロルドが王の真意を探るよっに見つめると、オズワルドは苦笑した。

「今回は君の娘御を讃える会だよ、將軍。偶然かもしれないなんて言っただけで、三度も魔物の侵攻を防いだとあれば立派な功績だろう。臣下の働きには報いる主義だ、ぜひ予言の乙女を招待したい」

「それは……娘も、喜びます。先程は無礼を申し上げました」
王直々の招待に舞い上がるヴェロニカの姿が目には浮かぶようだった。
ハロルドは頭を下げながら、何か漠然とした不安を感じてならなかったが、王の申し出を理由もなく断るわけにもいかない。
「ありがたく、お受けいたします」
畏まるハロルドを、オズワルドは薄く笑みを浮かべて見下ろしていた。

40・予言の乙女（後書き）

何だか最近、披露会以来忘れられていた（と思われる）ヴェロニカがでしゃばってまいりました。そのうちタイトルが「人形の救世主」改め「予言の救世主」になったりしたら……あ、それもフェリシアの別名だから、特に問題ないのか。

個人的に、ヴェロニカとハロたんのすれ違いっぷりを書くのが好きです。本当はお互い大事に思っているのに、口に出さないのてこじれる親子。あんたらもうフェリシアとキアランの十二年間のすれ違いすら超越しちゃってるだろ。何しろヴェロニカ誕生十八年前から続く誤解。年季入ってます。

あとゼルちゃんとか、厳しいキャラにやたらと可愛らしい呼び名をつけるのもマイブームです。憎たらしいあいつもこれでマイルドになるといいな。

41・再会

グランデール王城行政棟、中枢部の小会議室には、珍しい顔がそろっていた。中央の上座には、国王オズワルド。その斜め右にハロルドとヴェロニカが並び、親子に向かい合う位置にフェリシアが座っている。極秘で話し合いたいことがあるとだけ聞いてやってきたフェリシアは、この面々で何を話すのかと怪訝に思っていた。しかし、ヴェロニカが予言の力に目覚めた話を聞くと、驚きに目を見開いた。

「一週間の間に、三度も予言的中？すごいじゃないですか」
素直に感想を告げると、ハロルドが首を振る。

「貴女の力に比べればたいしたものではありませんよ、フェリシア嬢。偶然の可能性もあるのだし、私は娘の力を過信することは危険と考えております」

父親の言葉に、ヴェロニカが表情を曇らせ、次にフェリシアを睨みつけてきた。

（気持ちにはわからないでもないけど、逆恨みだよ！私が何したって言うのさ）

睨み返すことこそしないものの、内心でむっとしていると、とりなすようにオズワルドが間に入った。

「まあまあ將軍。この国にいくつ町があると思っっているのだい。襲われる町を三つも当てたのだから、ヴェロニカ嬢には予言の力があるとして話を進めようじゃないか」

現金なもので、その途端ヴェロニカは顔を輝かせてオズワルドを注視する。ハロルドは苦い顔で頷いた。それを受けたオズワルドは、今度はヴェロニカへと顔を向ける。

「ヴェロニカ嬢、君は突然魔物が発生する原因はわかるかい？」

「それは……」

言葉に詰まる彼女へ、オズワルドは鷹揚に首を振った。

「いいや、わからないなら良いのだよ。魔物の出現場所がわかるだけでも僥倖なのだから」

「お役に立てずに、申し訳ございません」

しょんぼり頂垂れるヴェロニカは、年相応の恋する少女だ。こういうところは微笑ましいのになあと思いながらフェリシアが眺めていると、更にオズワルドが問いかけた。

「君の力は具体的にどんなものなのか聞こう」

「一人でいるとき、不意に襲われる町の名前や光景が頭に浮かぶのです。それが訪れる時は、私自身もまだよく把握できておりません。預言者としてはよくあるタイプである。」

「ふむ。魔物の情報は一刻でも早く欲しい。予知を授かる時宜がわからないとなると、ヴェロニカ嬢には私の専属預言者として城に常駐してもらうのが良いかと思うのだが」

オズワルドの提言に、ハロルドが青ざめヴェロニカが顔を輝かせた。「陛下、ヴェロニカは成人こそしておりますが、まだまだ嫁入り前の子供です。恐れ多くも陛下お召抱えの預言者など、とても務まるとは」

「私は喜んでお仕えいたします、陛下！」

父の言葉を遮って、ヴェロニカが身を乗り出した。

「ヴェロニカ！」

ハロルドが嗜めるように名前を呼ぶが、彼女は一步も引かなかった。

「お父様はお黙りになって！私は、お父様には必要とされていませんけれども、陛下は私を必要としてくださっているのです。ならば誠心誠意応えるのが臣下の勤めではありませんか」

ヴェロニカの真意はどうあれ、表向きは臣下の娘として模範的な意見である。オズワルドもそれに同調した。

「よく言ってくれた、ヴェロニカ嬢。アーデン將軍も、令嬢が心配なのはよくわかるが、成人した娘御の意思をそう頭ごなしに否定することはあるまい。それにここは天下の王城だ、滅多なことは起こらないよ。ヴェロニカ嬢の身の安全は私が保証しよう」

国王にそこまで言われては、ハロルドといえど拒否することはできない。渋々了承の意を告げる彼を尻目に、ヴェロニカの城での地位や待遇、市政部の客室に常駐することなどが決められた。

「具体的な給金や福利厚生、部屋割りについて、細かいことは人事の者に通しておこう。フェリシアが先輩だから、頼るといい。フェリシア、よろしく頼めるかい？」

「わ、わかりました。よろしくね、ヴェロニカさん」

挨拶すると、ヴェロニカはオズワルドから見えないように顔の角度を変えてフンと鼻を鳴らした。

（うっわ、可愛くない）

オズワルドの頼みだから頼ってきたら助言はするが、極力係わり合いにならないようにしよう、とフェリシアは心に決めた。

（私が呼ばれた理由って、これだけなのかなあ）

そう思っただけで視線をめぐらせると、彼女の疑問を感じ取ったかのようにオズワルドが話を変えた。

「さて、ここからが本題だ。ヴェロニカ嬢、次に魔物が現れるのは？」

「はい。五日後です」

ヴェロニカは今までの襲撃地とよく似た立地の町の名前を挙げた。

「ただ、これまでと違うのは襲撃の規模です。一小隊でも撃退可能だった魔物の群れが、何倍にもなって押し寄せる様子が目に浮かぶのです。」

「ふむ……五日で魔物の大群を撃退する大部隊を組むのは少し厳しいか」

難しい顔で唸ったオズワルドは、フェリシアのほうを向いた。

「フェリシア、君に行ってもらおうわけにはいかないかな？今回だけでなく、今後もこのようなことがあれば君を頼りたいと思うのだけれど」

「私もそれがよろしいと存じますわ。救世主様が無駄足は嫌だと仰らなければ、ですけど」

嫌味交じりにでもヴェロニカが恋敵に活躍の場を与える意見に賛成したのを聞いて、フェリシアは目を瞬いた。

（ああ、私がいなければオズワルド陛下と一緒にいるチャンスが増えるもんね）

しかしすぐに納得し、頷く。

「それは勿論、行きます。無駄足になったとしても、寧ろその方がいいんですから」

「ありがとう、期待しているよ。では、細かいことは追って知らせるから、ひとまず解散としようか」

オズワルドの言葉で、その場はお開きとなった。

四人の会談後数日のうちに、グランディール王都周辺で突如魔物が現れるようになった、という話は不安を伴って密やかに噂されていた。他国に知られれば侵略の好機とも取られかねないが、幸か不幸か最も好戦的なボンファーツが帝位継承で内輪揉めを起こしているため、そこまで差し迫った問題でもない。早急に解決するべきは、魔物の方だった。

（調査団を組んでも何も収穫が無いっていうし……お師匠様たち、大丈夫かな）

魔物の調査団は魔道師団が主体となっている。連日あちらこちらの魔物出現場所へ出向いているダリルたちを思い、フェリシアは表情を曇らせた。

「フェリシア？」

するとそこへ、当のダリルがやってくる。フェリシアは慌てて火焰の魔法で出現させていた火の玉を消すと、ダリルに向き直った。

「お師匠様！おかえりなさい」

「ああ。お前は鍛錬中だったか？」

「はい、火焰の魔法の練習をしていました」

フェリシアは大きく頷いた。キアランに火が苦手になった原因を洗いざらい話したせいも、最近は炎の魔法も使えるようになって来た

のだ。いつもの魔法の練習場より少し外れた池のほとりで火を操る愛弟子の頭を、ダリルは優しくぽんぽんと撫でた。

「そうか。練習相手が出来なくてすまないな」

「とんでもないです、お師匠様はお師匠様の仕事を優先なさってください。それよりお疲れではありませんか？良かつたらシャロン先生のハーブティーをどうぞ」

心配そうな顔で差し出された予備のカップを受け取って、ダリルは苦笑を返した。

「大丈夫だ、戦闘があつたわけではないからな。ただ、まあ、気疲れはするか」

「またエドモンドさんが何かしたんですか？」

「いや、それもありませんが、まったく進展のない調査というのは精神的に堪えるものだ。魔物の奴らめ、目眩ましや突風の魔法を使った形跡もなく、降って沸いたとしか思えない現れ方をしている」
珍しく愚痴めいたことを口にするダリルの役に立ちたくて、フェリシアも首を捻った。

「突然どこからか現れたなんて、テレポートでもしたみたいですね」「テレポート？」

「ええと、私が前いた世界の想像上の魔法です。離れた場所を一瞬で行き来する……こちら流に言うなら、瞬間移動の魔法、かな」
その説明を聞いたダリルは眉を顰めた。

「それは……」

「わかっていきます、禁呪ですよ。釘を刺されなくたって、そんな決まりごとのにややこしそうな魔法、使う気はありませんから大丈夫です」

フェリシアは請け負った。

この世界には、魔法で歪めることを禁じられているものが三つある。一つは空間、二つ目は時間、そして最たる禁忌が生命を歪めることだ。それらは神の領域として神代の時代から禁じられており、

特に生命創造や死者蘇生に関しては研究するだけでも重罪となる。攻撃や日常に使われる魔法のバリエーションに比べ、回復魔法がさほど発達していないのはこのためだ。

「私としては、瞬間移動が駄目で異世界召還は問題ないっていうのも不思議なんですけど」

「空間と時間に関しては、『この世界を歪めてはならない』ということだ。召還の魔法はこの世界の物を理に外れて呼び出すわけではないからな。それでもミネレア教国辺りには歓迎されていないが。逆にウルリークでは、空間や時間に関する魔法でも、研究は推奨されている節がある。国柄だな」

「へえ。いつかウルリークには行ってみたいなあ」

フェリシアが好奇心からそう言うと、ダリルが顔を上げた。

「フェリシア。禁忌に、手を出してはいけない」

「お師匠様……？私はただ、世界一の魔法大国を見てみたいだけですよ？」

きょとんとして師を見上げれば、ダリルは気まずそうに目をそらした。

「そうか、そうだな。お前はエドモンドとは違うのだから、心配はないか」

その言葉に、フェリシアはふと副魔道師団長の言葉を思い出した。

「エドモンドさん、ウルリークに留学経験があるっておっしゃっていましたけど、まさか禁呪に手を出しちゃったんですか!？」

ダリルは僅かに躊躇った後、大きな声では言えないが、と前置きして頷いた。

「……エドモンドはウルリークにて禁忌に触れた。そしてかの国で得た、最も大事なものを失った。覚えておきなさい、フェリシア。禁呪とはそういうものなのだ」

淡々と語る師の言葉にかえって凄みを感じ、固唾を呑むフェリシアに、ダリルは力なく微笑んだ。

「いや、脅すようなことを言っただけ悪かった。私は存外、お前に元の

世界への帰り方に繋がるようなことを知ってほしくないだけかもしれない」

好奇心旺盛ゆえに突拍子もないこともしでかすが、素直に学び、いつもくるくる動いて笑い、強かかと思えば脆いところも見えるフェリシアを、ダリルは自分でも意外なほどに気に入っていた。彼女が望んでも、元の世界には帰したくないなどと思ってしまうくらいには。すると彼の言葉をどう思ったか、フェリシアはふんわりと笑った。

「大丈夫ですよ、お師匠様。私もあの世界で、大事なものをたくさんなくしました。フェリシアさんの体を奪って、この世界を捨ててまで、戻ろうとは思いません」

フェリシアはそう言うのに、まるで今にも彼女が消えてしまいそうな儂さを感じて、ダリルは思わず手を伸ばした。

「フェリシア」

ダリルの手がフェリシアの腕に触れる寸前で、第三者の音が割って入る。やってきたのはキアランだった。その顔を見た途端、フェリシアの顔が生気に輝く。ダリルは思わず伸ばしていた手を引っ込めた。

「？悪い、魔法の授業の邪魔をしたか？」

「うっん、大丈夫。どうしたの？」

「執務室で兄上がお呼びだ。会わせたい者がいるらしい」

「ふうん、誰だろ？陛下のお呼びなら早く行った方がいいよね。お師匠様、そういうわけなので失礼します」

フェリシアはぺこりとダリルに頭を下げた後、一瞬キアランと見つめあい、にっこり笑って行政棟へ歩いていった。その後姿を見送るキアランに、ダリルは低い声で問いかける。

「殿下、よろしいのですか？」

「何がだ？」

「国王陛下が貴方を使い走りだけに寄越すとは思えません。呼ばれているのは貴方も同じなのでは？」

「まあ、そうだな。しかしそう物言いたげな目で見られては、黙って立ち去るのも気が引けるだろう。お前こそ、俺に言いたいことでもあるんじゃないのか？」

逆に尋ねられ、ダリルは言葉に詰まった。散々フェリシアを傷つけておきながら、今になって親しげに言葉を交わすキアランに、言いたいことは色々ある。しばらく躊躇ったダリルは、下手に言葉を飾るより言いたいことだけを言うことにした。

「貴方にどのような思惑があつて、今更フェリシアに構うのかは存じ上げませんが。もう一度でも、あの子を悲しませようものなら、私は貴方を許さない」

フェリシアはオズワルドから王妃にと望まれている。もし国王兄弟が彼女を巡って争うようなことにもなれば、あの優しい娘はきっと心を痛めるだろう。いざとなれば、そうなる前にフェリシアを彼らの手から遠ざけることも辞さない覚悟だった。不敬を承知で挑むようにキアランを睨むと、琥珀色の瞳が面白がるように煌いた。

「なんだそれは、宣戦布告か？」

「そう思って頂いても結構です。無論、私の一番の望みはフェリシアの幸せ。あの子が自主的に貴方を選ぶのなら、私は何も申しません」

「なるほど。ならば俺は、恋敵殿に諦めてもらえるよう努力しなくてはな」

「恋敵……」

決して否定できない一言を言われて我に帰ったダリルは、冷静そうな表情の裏で慌てた。自分は年甲斐もなく、何を言っているのだ。

「私は、強いて言えばフェリシアの父親のようなもの。殿下が真にあの子を思っているなら、それでいいのです」

言い訳じみたことを告げて、ダリルはその場を後にした。

一方、キアランのほうもダリルから見たほど余裕があるわけではない。フェリシアが好きだといってくれた言葉は疑ってもしないものの、自分の嘗ての言動を振り返れば、ダリルや、エドモンドです

らフェリシアに相応しいように思う。ましてや敬愛する兄王に自分が敵うとは思えない。それでも、引く気はなかった。きっと近いうちに、自分は初めてオズワルドに真つ向から逆らうことになる。そんな予感を抱きながら、キアランは兄の執務室に向かった。

オズワルドの執務室には、部屋の主の他にベネディクトとハロルド、デイランに、王の側近や護衛騎士が数名集まっていた。宰相に將軍、騎士団長までそろった物々しい空気におっかなびっくり部屋に入ると、ベネディクトがいつものように笑って手招きする。フェリシアが彼の隣に座ると、ベネディクトは小声で娘に囁きかけた。

「今日は深刻な話ではないから、気を楽にしていなさい」

そう言われたものの、なかなか難しい注文である。しばらく所在無く待っていると、最後にキアランと、何故かヴェロニカが入ってきた。

（何かまた予言があるのかな？）

フェリシアがそう思っていると、オズワルドがゆっくりと立ち上がった。

「急の収集にに応じてもらい、ご苦労だった。今日は皆に紹介したい者達がいる」

入ってきたさい、と促される声に、奥の扉が開いた。侍従に案内されて執務室にやってきたのは、フェリシアの知った顔だ。

「クルト君にジークハルト……？」

ボニファーツで出会った皇子たちだった。小綺麗な衣装を着たクルトはフェリシアの顔を見ると満面の笑みを浮かべ、ジークハルトはクルトと本人にしかわからない程度に緊張を緩めた。

「既に顔を見知っている者もいるかもしれない。ボニファーツの第八皇子クルト・ボニファーツ殿下と彼の異母兄、ジークハルト殿下。今日よりひとまず一年間、我が王城で歓待することになった」

「よろしく願います」

オズワルドの紹介に、クルトが礼儀正しく頭を下げる。

(第八皇子……また皇位継承者のお兄さんかお姉さんが亡くなったのか)

以前聞いたよりクルトの階位が上がっていることに、フェリシアは胸を痛めた。

「ボニファーツとの戦後交渉において、賠償金の支払いや領地の譲渡の他に、彼らの身柄を人質として預かることになった。とはいえ、私は二人を客人として扱うつもりである。皆もそのつもりで振舞うよう」

用件は本当にそれだけだった。クルトたちは表向き、政治学の勉強のため留学に来たオズワルドの遠縁として扱い、姓は偽名を名乗ること、ヴェロニカの客室の近くに部屋が与えられることなどが説明され、初対面の者が自己紹介すると、後はお開きとなった。

「ヴェロニカ嬢、君はクルト殿下たちと部屋も年も近いし、話し相手になつてくれないかな」

「はい、仰せのままに」

去り際、オズワルドに声をかけられてヴェロニカはそう答えたものの、その声には隠しきれない不満が滲んでいる。

「ねえ、この後予定がないなら、皆でお茶でも飲みながらお話ししたい？」

とりなすようにフェリシアが提案したが、ヴェロニカはオズワルドの注意が逸れている事を確認してから鼻で笑った。

「野蛮人の皇子とお茶会？泥水でも出てくるのではないかしら、冗談じゃないわ。貴方達で勝手になさったら」

そう言い捨てて、部屋を出て行く。

「何なんだ、あの女」

ジークハルトが憤然とした声で呟き、クルトが悲しげに表情を曇らせた。

「ご、ごめんね、二人とも。ヴェロニカさんの言うことは、あまり気にしない方がよいよ。それより、美味しいハーブティーでも飲みませんか？お菓子もあるよ」

フェリシアが必死で取り繕うと、兄弟は顔を見合わせ、仕方ないというように笑って頷いた。

(年下に気を遣わせてしまった……)

申し訳なく思いながらも、フェリシアは二人を歓待するため目的の部屋へ誘った。

いくら客人扱いとはいえ、クルトたちは敗戦国の人質である。フェリシアの同伴があっても、城内で動ける場所は直接的に国家機密には関わらない市政部の部署周辺に限られていた。

「だからといって、本来ならここはお菓子を食べるような場所ではないのですよ?」

手製のハーブティーに焼き菓子を楽しむフェリシアと皇子たちを、シャロンは腕組みして見下ろした。ここは医務室である。

「ごめんなさい、シャロン先生。二人を王族棟に案内するわけにもいかなくて」

「お邪魔してすみません。でも、お茶もお菓子も本当に美味しいです!」

フェリシアが頭を下げる横で、シャロンの息子のような年の子供から満面の笑みで褒められては、彼女としてもこれ以上否を言いつらい。最後には、仕方ないですねと許可を出した。

「そういえばジーク、怪我の調子はどう?何ならシャロン先生に診てもらったらどうかかな」

「いらない」

クルトの口にするもの全て、先に一口かじって毒見に専念しているジークハルトは、フェリシアの提案をそっけなく断った後、ちよつと考えて付け足した。

「神経が傷ついていたわけじゃないから、傷はもう問題ない」

「そっか。よかった」

一瞬ほつとしたフェリシアだったが、すぐにまた表情を曇らせた。

「でも、二人が人質なんて。やっぱり、間接的には私のせい、にな

るのかな」

「俺はこうなつてよかつたと思つてるけどな」

ジークハルトの言葉に、フェリシアは目を瞬いた。

「今の帝国は帝位争いで荒れている。城なんざ、暗殺も日常茶飯事だ。そんな危険な場所にクルトを置いておくくらいなら、敵国とはいえこちらの方がよほど安全だろ」

さっぱりとした口調は彼の偽らざる本心を表していた。クルトも真面目な顔をして、こくりと頷く。

「帝国の荒廃は辛いですけど、父上が亡くなればいつかは起こったことです。それより僕は、ここでグランデールの政治形態を学んで、いつか故郷に帰ったときにそれを生かしたいと思います」

「そっか。二人とも偉いね」

フェリシアは兄弟の言葉に目元を和ませたのだった。

41・再会（後書き）

ポニファーツの皇子兄弟再登場でした。

はじめこそ敵意満々だったジークですが、クルトに酷いことさえしなければ過去の恨みは水に流してくれます。どこかの王弟殿下よりずっと大人。

クルトは引き続き癒し系担当です。

42・招待状

ヴェロニカの予言した日、数人の護衛兵と共に件の宿場町に派遣されたフェリシアは、西からやってくる魔物の軍勢を発見。見事蹴散らし、救世主フェリシアと予言の乙女ヴェロニカの名は俄かに王都周辺に広まりつつあった。

「とはいえっても、私たちの名前を広めるより魔物出没の原因をどうにかしなきゃならないと思うんだけどねえ」

王城へ帰還したフェリシアは、メリッサ相手にぼやいていた。一応、魔物の軍勢が出るたびに魔道師団員たちが調査に当たっているのだが、結果は芳しくない。

「魔物の地がある北から来た様子はなし、そもそも色々な方向から襲ってくるし、空を飛んでくるわけでも地下通路があるわけでもない。本当にレポートでもしてきたんじゃないかしら」

ダリルたちが纏めた資料を捲りながら眉間に皺を寄せる主に、メリッサは今朝国王から届いたばかりの手紙を差し出した。

「お嬢様、考え事も結構ですが、煮詰まっていると疲れてしまえますよ。それよりこちらをどうぞ。きっと良い気晴らしになると思うのですが」

「お手紙？陛下から？」

王の封蝋が押された羊皮紙の書状を受け取ったフェリシアは、内容を読んで目を丸くした。それは舞踏会への招待状だった。預言者ヴェロニカのお披露目を開くというものだ。フェリシアの披露会より規模は小さいようだが、国の重鎮達を招いて重大発表があるという。

(いつもは中枢部での夜会に招待状なんて来ないのに……)

なんとなく嫌な予感がする横で、メリッサはうきうきと衣装ケースの前でドレスを選んでいた。

「お嬢さまの披露会以来ですね。ヴェロニカ様がメインというのが

気に掛かりますけど、腕によりをかけて飾らせていただきますからね！」

「う、うん……主役より目立つちゃまずいから、ほどほどにね？」
主人が控え目に止めるのも聞こえない様子であちらの筆筒、こちらの引き出しと見て回るメリッサ。フェリシアもその様子を見て、メリッサが楽しいならまあ良いかと思いついた。

同じ頃、ヴェロニカも与えられた部屋で思案にふけっていた。

（まったく、首尾よく王城勤めになったのは良いけれど、当初の予定とぜんぜん違うじゃない！）

城に住めば毎日でもオズワルドと話し、公私共に彼の役に立てるのだと思っていた。しかし実際はノヴァの訪れを待ち、予言を国王の側近に告げるだけの毎日だ。座り心地の良い椅子にもたれかかり、実家からつれてきた大勢のメイドに髪や爪の手入れをさせながら、ヴェロニカは苛立っていた。

（早く、陛下のお傍近くで動けるように地盤を固めなければ）

そのために何をしたらよいだろうかと思いをめぐらせかけたところで、コンコンと扉がノックされた。取次ぎのメイドが対応すると、現れたのはアーデン家に古くから仕える老執事だ。幼いヴェロニカの世話もした爺やで、彼女が逆らえない数少ない使用人である。基本的に屋敷に常駐しているが、しばしばハロルドと共に登城してヴェロニカの様子を見に来るのだ。

「お久しゅうございます、ヴェロニカお嬢様。本日はお客様をご案内して参りました」

身だしなみを中断して不機嫌そうに自分を見つめるお嬢様へ、老執事は一歩も引くことなくにこやかに微笑みかけた。

「お客様？そんな予定は聞いていないけれど」

「縁あって隣室で過ごされているお客様ですよ、偶には交流をもたれるのもよろしいかと」

執事の言葉に、ヴェロニカは思いつきり眉をひそめた。

「帝国の蛮人が私に何の用だというのです？」

「お言葉を慎みなさいませう。敵国のお方といえど、恐れ多くも帝位継承権を持つ皇子殿下にあられますぞ」

「そのくらい知っているわ、間違っても皇帝になんかならない最弱の皇子でしょう？構うだけ時間の無駄よ」

「しかし、帝国の皇子殿下に違いはございません。ここでつながりを作っておけば、旦那様のお役に立つことにもなるやも知れませぬよ」

父の役に立てるかもしれないと言われれば、ヴェロニカは弱かった。しばし言葉に詰まり、逡巡の後、彼女は重い口を開いた。

「わかりました、会えばよいのでしよう、会えば。私に無礼を働くようなら、遠慮なくつまみ出しますからね」

「心得ております」

執事は丁寧に一礼し、一旦部屋を出た後、クルトを伴って再び部屋に入ってきた。

「失礼します」

老執事の後についてきたクルトは緊張した面持ちでヴェロニカに挨拶をした。

「本日は、突然の訪問申し訳ございません。僕のためにお時間を割いてくださって、ありがとうございます」

いつも野蛮な庶子の兄の影に隠れている印象しかなかったクルトが、案外しつかりと話したことに、ヴェロニカは僅かに驚いた。

（それにしてもノヴァといい、私はよくよくお子様に縁があるのね）
目当てのオズワルドとはちっとも話せないのに、胡散臭い子供ばかりが部屋を訪れることにヴェロニカは一人自嘲した。そんな彼女を、クルトが不安げに見上げる。

「気分を害してしまつたらごめんなさい、アーデン公爵令嬢。せつかくお部屋が隣なので、一度ご挨拶に伺いたいと思つていたんです」
「あら、それにしては随分と遅いご挨拶ではなくて？」

「それは……」

二人が隣同士の部屋で過ごすようになってから、十日は経過している。その点を突いたものの、ヴェロニカはクルトが今までこの部屋に来られなかった理由を知っていた。自分がメイドたちに、帝国の野蛮人は近づけるなと厳命していたのだ。今日はたまたま老執事と鉢合わせたので、上手く入ることが出来たのである。泣くのか怒るのか、どちらにしるクルトがみつともない姿を晒すことを期待したヴェロニカは、次の瞬間肩透かしを食らった。

「それは全て、僕の不徳のためです。ご挨拶が遅くなったこと、重ねて謝罪申し上げます。お詫びと、これからよろしくお願いしますの印に、一緒にお菓子でも食べませんか？」

無邪気な笑顔で持参した菓子の籠を差し出すクルトを一瞬真顔で見つめたヴェロニカは、慌てて不機嫌そうな表情を取り繕った。

「結構ですわ。毒でも入っていたらたまりませんもの」

無礼を承知で告げると、流石に老執事が咎めるような視線を送ってきた。しかしクルトはこれも受け流し、にっこり笑って見せる。

「大丈夫ですよ、僕も一緒に食べますから。美味しいですよ？」

子犬のように円らな瞳で小首を傾げる少年は、捻くれたヴェロニカの目から見ても善意で出来ているとしか思えなかった。ここまで言われて断れば、完全にヴェロニカが悪者である。ヴェロニカは渋々メイドたちにお茶の用意を言いつけた。老執事が笑顔でヴェロニカとクルトを茶席へ誘い、菓子を取り分ける。

「帝国の皇子殿下ともあろう方が、へらへら笑って謝ってばかりで、恥ずかしくないのかしら」

結局クルトの希望通りに事が進んだのが悔しくて、ヴェロニカは嫌味を吐いた。クルトを見ると苛々してくるのだ。きつと、自分とは違って幸せに愛されて育つたのだからこの少年が、憎たらしくてならなかった。しかし、クルトはここでもヴェロニカの思惑を裏切った。

「不快に思われたのなら、すみません。でも僕は、こうしないと多分今まで生きてこられなかったから」

はじめてクルトの沈んだ声を聞いて、ヴェロニカは自分の失言を悟った。クルトを大事に可愛がって育てた者は確かにいる。彼の異母兄を見ていれば明らかだ。しかし、本当にクルトが甘やかされただけの皇子様なら、ヴェロニカのように傲慢な性格に育ったことだろう。そもそも、弱者は我が子でも斬り殺すような父親の元で、戦場に放り出される時点で、まともに愛されているとは言い難い。

「……」

気づいてしまえば、ヴェロニカは今まで感じたことのない戸惑いに襲われた。その正体は罪悪感なのだと、なんとなく気づいてはいたが、素直に認めるには彼女はあまりにもプライドが高かった。そこでヴェロニカは、ぶっきらぼうに傍のメイドを呼んで王都の銘菓を包ませた。

「今日のお菓子の礼ですわ。これを持っていきなさい」

クルトの鼻先に包みを突きつけると、皇子様はきよとんと目を瞬いた後、曇り空から日が差すように笑顔へと変わった。

「ありがとうございます！」

「か、勘違いなならないで。別に貴方の為ではなくってよ。ただ、帝国の蛮人なんかに恩を売られたままでは気持ちが悪いですだけ。それだけなんだから」

「それでも、ありがとうございます」

どこまでも真っ直ぐな目で微笑むクルトを見ていられずに、ヴェロニカは視線を外した。そしてしばらく険悪ではないが気まずい空気が流れた後、コンコンと再びノックの音が響いた。

「城内便の配達に参りました。ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢へ国王陛下よりお便りです」

城内で文章や手紙を運ぶ官吏が取次ぎのメイドに渡したのは、オズワルドの招待状だった。それを知るなり客前にもかかわらず書状を広げたヴェロニカは、自分が主役で舞踏会が開かれるという下りを讀んだ瞬間顔を輝かせた。

「まあ、まあ！素敵！陛下が私のために舞踏会を開いてくださるの

ですって！」

喜びのあまりクルトに満面の笑みを向けると、彼も微笑み返した。

「公爵令嬢、笑っていらっしやれば、もっと可愛いですね。……笑
わせたのが僕じゃないのが、ちよっと悔しいけど」

「……は？」

さらりと言われた台詞に、ヴェロニカは固まった。容姿を褒められ
ることなど日常茶飯事だというのに、思いがけない不意打ちを食ら
って動揺する。次いで、何故か頬が火照った。

（何この子、生意気！こ、こここ子供のくせに！）

皇子のくせに卑屈だとか、純粹そうだという当初の印象はどこかへ
吹き飛んでいた。何故か先程より居たたまれない気分で内心身悶え
るお嬢様を、老執事が人の悪い笑みを浮かべて眺めていた。

42・招待状（後書き）

ヴェロニカにツンデレの定番台詞を連呼させるのが楽しかった今回です。そしてクルト君天然タラシ疑惑（？）

自分の書いたキャラクターは、皆出来の良し悪しはさておき、愛はあるのですが、共感という点においてはフェリシアよりもヴェロニカの方が上なんじゃないかなあと思う今日この頃。常に正しく、正義感と実力に溢れる主人公が大活躍する爽快さが主人公最強系の醍醐味ではありますが、嫌な部分がたくさんあって間違いを犯してばかりの、ある意味人間臭いキャラクターの方が作者の書きたいものに沿うこともあるのです。

でもグランデール内政編の主人公はある意味ヴェロニカかもしれない、と気づいてしまうと途端にフェリシアを応援したくなる不思議。

43・舞踏会

舞踏会当日。華やかに着飾った人々が行き交う煌びやかな大広間で、フェリシアは表情を曇らせて佇んでいた。隣では、急遽パートナーに抜擢されたエドモンドが料理に食らいついている。曰く、「せっかくタダ飯が食べられるのに食べないのは愚か者のすることだよ」

だそうである。着飾った彼は見てくれだけなら童話から抜け出てきた王子様のようなのに、言動はまるで三歳児だった。それでも美形というものはさすがで、時折次の料理を品定めするために顔を上げたエドモンドと目の会った娘たちは、例外なく顔を赤らめてきゃあきゃあと騒いだ。

(平和だねえ……)

なんともいえない気分でその様子を見ていたフェリシアは、目の前にぐいつと料理の乗った皿を突き出されて面食らった。

「元氣のない顔をしてどうしたのだい、フェリシア君。さあ、君もばくつと行きたまえ」

本来給仕に一切れずつ切らせて食べる肉の塊が乗った皿を差し出して、眩しい笑顔を向けるエドモンド。嫌がらせではなく一応気遣われていることはわかったので、フェリシアは困りながらも笑顔を浮かべた。

「お気遣いありがとうございます、エドモンドさん。でもそれ、絶対一人じゃ食べられないですから。給仕の人に返してきてください」

「ふむ、それなら僕が頂こう」

言うなり彼は、大口を開けて肉に食らいついた。貴公子にあるまじきワイルドな食べっぷりである。フェリシアは無駄と知りつつ、さりげなく前に出てその姿を観衆の目から隠してやりながら、溜息をついた。落ち込んでいるのはパートナーのためだ。しかし、エドモンドが悪いのではない。

(今日は、会えると思っただけどなあ)

舞踏会と聞いて、前のようにキアランがパートナーになるのだと、無条件に思い込んでいた。だから気が進まないながらも出席したというのに、彼の姿は遠い。キアランは本日の主役であるヴェロニカのパートナーを勤めているのだ。彼の腕には派手に着飾ったヴェロニカがまとわりついていていた。

(もー、貴女の狙いはオズワルド陛下なんですよ、離れてよ)

睨まないように気をつけつつ、ヴェロニカに念を送ってみるが効果はまるでない。私、何やってんだろ、と虚しく肩を落としたときだった。

「やあ、フェリシアに兄上。楽しんでるかい？」

声をかけられて振り返ったフェリシアは、目を見張った。嫣然と微笑むマルグリットが近づいてくる。彼女は淑女のドレスではなく、豪華な男物の装束を纏っていた。形としては軍服に近く、歩くたびにひらめくマントがいちいち様になっている。周囲の若い娘達からは、エドモンドのとき以上に黄色い悲鳴が上がった。傍で控えていたメリッサなど、今にも卒倒しそうに真っ赤になっている。

(うん、気持ちわかるよ、エドモンドさんが王子様ならマルグリットは超王子様だ。……これでもいいのかアーデン家)

ときめくより先に何か達観した気分になりながらも、フェリシアは頼もしい友人の登場に笑顔になった。

「こんにちは、マルグリット。相変わらず格好いいね。でも、こんなときくらいドレス着てみれば良いのに」

「ありがとう、君も素敵だよ、フェリシア。けど、私に女装は似合わないからね」

「そうかなあ。マルグリット、スタイル抜群でとっても美人なのに、呟いてから、フェリシアははっと気がついた。今、自分がおそらくこの国で一番美しい兄妹に囲まれていることに。気がつけば、周囲からの視線もなんとなく痛い。

「私だつて一人だけ一般人で肩身狭いのに！なんなのこの不公平！」

誰にもなく訴えかけるフェリシアを見、マルグリットはくすくすと笑った。

「私は社交辞令が嫌いなんだ。お世辞で可愛いなんて言わないよ。君は堂々としていればいい」

「うー、でも……」

フェリシアとて、最初こそ気乗りしなかったものの、今日は精一杯頑張って着飾ってきたのだ。メイドたちによる総磨きにも、少しきつめのコルセットにも、一刻半にも及ぶ化粧にも耐えたのは、会いたかったただ一人のため。それなのに彼の姿は遠く、エドモンドやマルグリットのような天性の美形の前では、華やかな孔雀の前のひよこも同然だ。

「ふうん？」

兄とは違つてその辺りの機微を察したらしいマルグリットは、にやりと笑つてフェリシアの手をとつた。

「兄上、少しフェリシアをお借りしてもよろしいですか？」

「うん？いいよ、何かあったらフェリシア君を守れといわれているけれど、君もフェリシア君も十分強いからね」

「ありがとうございます」

わかつているのかいないのか、エドモンドは鳥の骨を振つて答えた。

「さあ、王子様のところに行こうか」

「え？ええ？」

そしてマルグリットは、戸惑うフェリシアの手を引いて広間を突っ切りはじめた。二人が目指すのはキアランとヴェロニカのところだ。

「失礼」

ヴェロニカは予言の乙女として、キアランはゼルギウスを討った英雄として、人々の関心を集めている。このような場では大勢の貴族たちに囲まれていたが、迫力満点の男装公爵令嬢に、人々は自ずと道を開けた。

「お、お姉様……？」

「ヴェロニカ、今宵のお前も一段と可愛いね。こんな可愛いお

前が、気が効かない・辛気臭い・意気地が無い三重苦の輩と一緒にいなければならぬなんて、私はもう耐えられないよ」

さりげなくキアランを罵倒しながら、マルグリットは蕩けるような笑みを浮かべた。見慣れたヴェロニカでなければ、卒倒しかねないような艶めいた微笑だ。実際、キアランに群がっていた娘たちの何人かがバタバタと倒れた。

「さあ、こんなところにはいないでお姉様と一曲踊っておくれ」

「ちよ、ちよっとお姉様、そんな強引に」

ヴェロニカが小さく悲鳴を上げるが、マルグリットは構わず妹を攫っていつてしまった。残された人々が啞然とする中、フェリシアが咳く。

「マルグリット格好いい……」

聞き捨てならない台詞に、キアランがいち早く我に帰った。

「フェリシア」

名前を呼ばれ、加減されて腕を引かれたフェリシアのドレスから、小さな紙片が零れ落ちた。拾い上げてみると、アーデン家の鷲の紋様が捺されたメモに

『姫は届けた。あとは上手くやりたまえ』

とマルグリットの筆跡で書かれている。それを目にしたフェリシアは噴出し、キアランは青ざめた。

「この間の魔物襲来するときといい、奴は何故こんなに協力的なんだ、やっぱり何か企んでいるのか……？」

天敵から花束を貰ったような薄気味悪さに震えるキアランの袖を、フェリシアはちよいちよいと引つ張った。

「何でも良いじゃない、マルグリットがせっかく作ってくれた機会だもの」

私といるの、いや？と小首を傾げれば、キアランは猛烈な勢いで首を振った。そして、大きな手をそっと差し出す。

「俺と踊っていただけですか、フェリシア嬢？」

「喜んで」

フェリシアは微笑んで、自分の手を重ねた。

四半刻ほど踊り続けた二人は、踊り疲れてバルコニーへ出た。フェリシアが身を乗り出すと、夏の終わりの夜風がうっすら汗をかけた肌を優しく撫でていく。

「んー、風が気持ちいい。楽しかったけど、動いたらちよつとおなかすいたかな」

エドモンドさんに勧められたお料理、食べておけばよかったとフェリシアが笑う。そんな彼女に微笑み返し、キアランが尋ねた。

「少し休んだら戻ろうか。お前は何が好きなんだ？」

「何でも食べるよ、好き嫌いが無いのは自慢の一つなの。でも、そろそろ和食…ええと、日本の伝統料理が恋しいかも。お米に焼き魚海苔の佃煮ほうれん草のおひたし。納豆も捨てがたいね」

優花は四分の一アメリカ人とはいえ、日本生まれの日本育ち、和食はソウルフードである。今後日本食を口に出来る望みは無いとなれば、恋しさは増した。

「コメ？ノリ？」

「お米は日本での主食の穀物、海苔は、詳しい製法は知らないけど、乾燥させた海草かな。あ、でもこっちの小麦粉は若干米粉っぽい気もする」

「ふむ。それなら品種改良でコメに近づけることも出来るかもしれないな。島の方では海草を食す文化もあると聞くから、ノリもあるいは」

「本当に!？」

諦めていた故郷の食事が食べられるかもしれないと聞いて、フェリシアは顔を輝かせた。

「いや、俺はコメの味を知らんからなんとも言えないが……それらしいものが出来たら、一度部屋に食べに来るといい」

「キアラン、料理できるの!？」

驚愕の声を上げると、キアランは心持ち胸を張った。

「下町の食堂で働いていた母上の仕込みだ、趣味の域は出ないがそれなりだと自負している」

「自分に厳しい貴方がそこまで言うなら、本当に美味しいんだろうね。いいなあ、キアラン、良い奥さんになれそう！」

「……俺が奥さんなのか」

「奥さん？あれ？」

自分で言うにおいて混乱中のフェリシアの髪を一房掬い、キアランはにやりと笑う。

「お前が俺の妻にはなってくれないのか？」

「ふえ？え！ええつとー！う、うん！結婚するならキアランが良い！」

うろたえたままと思いきや、はつきり頷かれて今度はキアランのほうで動揺した。

「そ、そうか……ふむ……婚礼衣装……いや、まずは婚約発表、いやいやそれよりベネディクトに許可を貰ってそれから」

小声でブツブツと呟くキアランを、フェリシアがきよとんと見上げる。その視線に気づいた彼はようやく我に帰り、取り繕うように咳払いした。

「まずは何より、救世主のお役目に決着をつけるほうが先だな」

「うん……そうだね」

「心配するな、何があるうと、お前は俺が守る」

そう言っつてフェリシアを抱き寄せながらも、キアランは表情を曇らせた。戦場や魔物との戦いで、いつも青ざめて震えていた姿を思い出す。兄のため、国のためとはいえ、これ以上フェリシアを戦わせることには抵抗があった。いっそのまま彼女を攫ってしまおうかと夢想しかけると、娘の細い腕が背中に回り、ぎゅっつと抱きついてくる。

「ありがとう。私、頑張るね」

「フェリシア？」

「家が燃えて、家族が死んだときは、私にはもう何も残ってないと

思ったの。皆が喜ばないだろうから、死のうとは思わなかったけど、もう一度こんなに大事なものが出来るなんて思ってなかった」

不意にフェリシアが顔を上げる。見下ろせば、彼女はキアランが今まで見た中でも一際美しい笑みを浮かべていた。

「私もこの世界の皆と、キアランを守りたいよ。だから、頑張ろうね」

優しく強い眼差しに、キアランはただ呆ける。

「キアラン？」

「あ、ああ……すまん、お前があまりにも綺麗なんで見とれていた」しかし、呼びかけられた彼が正直に打ち明けると、凜とした顔はたちまち真っ赤になった。

「もー、もう、なんでそういうことがサラツと言えるかなあ。心臓に悪い」

台詞とは裏腹に、口元は微妙に笑みの形に歪んでいる。ころころと変わる表情が面白くて可愛らしくて、キアランは赤く染まった頬に口付けた。と、同時にぐうと腹の虫が鳴る。

「……」

何もこんなときに鳴らなくなっただって、と口だけ動かして声無く呟くフェリシアを見、キアランは苦笑した。

「夏の終わりとはいえ、夜は冷える。そろそろ戻って、何か暖かいものでも食べよう」

「うん……ありがとう」

羞恥で真っ赤になりながらも、腕を差し出せば柔らかな腕が遠慮がちに絡みついてくる。二人は緩やかに腕を組み、舞踏会の会場へと戻っていった。

どうやら友人たちが上手くいったらしいことに満足げなマルグリットとは対照的に、ヴェロニカはすっかり膨れていた。姉と踊り終わり、群がる令息達からの誘いも一蹴して、ヴェロニカは給仕に用意させた食前酒を煽る。

「そんなに勢いよく飲んだら倒れるよ？」

「構いませんわ、私なんか倒れたところで、どなたも困らないでしょう」

「そんなことはない。可愛いお前が倒れたりしたら、私の胸は悲しみと心配で張り裂けてしまうよ」

ぽんぽんと歯の浮くような台詞を繰り返すマルグリットに、ヴェロニカは辟易とした。

「それなら、どうして私の邪魔をなさるのです？王弟殿下は国王陛下に近づいたための、良い足がかりですのに」

「キアランは一応辛うじて友人だからね、踏み台にされるとわかっていて放っておくのも目覚めが悪い。まあ、それでもお前の幸せのためならあいつがどうなるうと知ったことではないが……ヴェロニカ、お前はそんな事を考えなくても良いんだよ。国政や王のことなど考えずに、ただ笑っていておくれ。私の可愛い妹」

甘い声で囁いて美しい笑みを浮かべるマルグリットを、ヴェロニカは不機嫌な顔で睨みあげた。

「お姉様はいつもそう。優しいことはたくさん仰るのに、私のやりたいことは何一つさせてくたさらないのだから」

「どうしてそんなに怒るの、ヴェロニカ？お前の事は私と兄上と、ついでに父上が幸せにするよ。どの国の、どの時代の王女や令嬢より幸せなお姫様にしてあげる。それではいけない？」

「幸せ、幸せと連呼する姉に、ヴェロニカは苛立った。彼女の幸せは王妃となり、愛する家族によくやったと褒めてもらうこと唯一つなのに、その家族は誰も自分の味方をしてくれない。その怒りから、思わず声を荒げようとしたときだった。

「ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢」

声変わり前の穏やかな少年の声がヴェロニカを呼んだ。姉妹が振り返ると、クルトとジークハルトの兄弟が立っている。やめておけと言いたげなジークハルトの視線を振り切って、クルトが一步前に出た。

「ご機嫌麗しく。お隣の方は、ヴェロニカ嬢の姉上ですか？」

「……ええ、そうよ。お姉様、こちら帝国のクルト・ボニファーツ第八皇子殿下。それと異母兄のジークハルト殿」

流石に帝国の要人である彼らを邪険に扱うことも出来ず、そっけなく紹介すると、マルグリットは爽やかな笑みを浮かべた。

「父から話は聞いていますよ。私はこの子の姉、マルグリット・アーデン。よろしく」

男装で、きびきびと話して握手を求めるマルグリットに、男尊女卑の帝国で育ったクルトは一瞬面くらい、しかしすぐに微笑んで手を握り返した。

「こちらこそよろしく申し上げます、マルグリット殿。もしよかつたら、妹さんにダンスを申し込んでも良いですか？」

その申し出に、マルグリットもヴェロニカも驚いた。先に我に返ったのは、マルグリットだ。

「これはこれは、妹を相手に選ぶとは、クルト殿下もお目が高い。いいですよ、妹が良いと言ったらね。頑張って」

ぼんと親しげに肩をたたかれて、クルトは丁寧にお辞儀をした後、ヴェロニカに向き直った。

「踊っていただけですか？」

差し出されたのは、ヴェロニカと同じかやや小さな少年の手だ。いつものヴェロニカなら、こんな誘いに乗ったりしない。

(でも……)

クルトは自分より、フェリシアと親しいはずだ。隣には美貌のマルグリットもいる。しかし、クルトはフェリシアでもマルグリットでもなく、ヴェロニカを選んだ。それがほんの少し小気味よくて、ヴェロニカは気まぐれを起こした。

「よろしくてよ」

差し出された手を重ねると、クルトは輝くような笑みを浮かべる。

そのまま二人は流れるように中央の踊り場へ進み出た。流れている曲は世界共通で使われる有名な音楽で、王国と帝国で型に若干の違

いはあるものの、二人で踊るのに支障が出るほどではない。

「意外とお上手なのね」

踊りながら、満更お世辞でもなく告げると、クルトは飼い主に褒められた子犬のように顔を輝かせた。

「ヴェロニカ嬢と踊りたくて、一生懸命練習したんです、兄上と！」
ヴェロニカとクルトでは彼の方が背は低い、クルトは男性パートを懸命にこなしている。ヴェロニカは、あのジークハルトが弟相手に女役の踊りを踊っているところを想像し、不覚にも噴出した。しかし、何故だか嫌な気分にはならない。それどころか、幼い頃兄妹に遊んでもらった無邪気な頃のように、不思議と楽しい気分ですらあった。

くるくると楽しげに踊る妹を見守り、マルグリットは感慨深い溜息をついた。

「まさかあの年でヴェロニカの手綱を握る男がいようとは。将来有望というか、あの子意外に大物になるんじゃないか？」

「当然だ。クルトはあの親父殿の子とは思えないほど賢くて利発なんだぞ」

誰にとも無く言った言葉に返事が返ってきたのに驚いて横を見れば、ジークハルトが横で仁王立ちしていた。マルグリットはその様子を観察し、ふうんと呟いた。自分に阿らない口調が若干キアランを髯髯とさせるが、敵国でこれほど堂々としているとは、王弟殿下よりよほど肝が据わっている。

「弟君が大事か？」

「何よりも」

マルグリットが尋ねると、ジークハルトが即答した。

「そうか。私も妹が大事だ」

「見てればわかる」

ジークハルトは鷹揚に頷き、マルグリットと目が合うと、にやりと笑いあった。シスコンとブラコンとの間に、妙な友情が生まれた瞬間

間であった。

「あと、クルトはあれで今年十五だぞ。ちなみに俺は十六」
「何……？ヴェロニカとたった三つ違い、だと……！？」

43・舞踏会（後書き）

明けましておめでとございます。今年も人形の救世主をよろしく
願います。

おめでたいので舞踏会前半は結構幸せな感じでお送りします。去年
は嬉しいことだけじゃなくて、悲しいことも辛いこともいろいろあ
ったけれど、今年は皆が楽しい一年になりますように、願いをこめ
て。

44 求婚

大広間を見下ろす壇上では、オズワルドが舞踏会の一部始終を眺めていた。顔は穏やかに微笑んでいるが、その目つきはいつになく険しい。

「おい、エドモンド」

先程傍に呼びつけたエドモンドが、食事の手を止めて顔を上げた。

「なんだい、心の友よ」

あるうことが国王の壇上に前食べ物を持ち込み、飲食を続けていた彼である。オズワルドの氷のように冷たい声に臆することも無く、エドモンドは小首を傾げた。

「お前にはフェリシアのパートナーを命じていたはずだが、何故彼女がキアランと談笑などしている？」

「まあいいじゃないか、舞踏会だもの。顔見知りがいたら談笑くらいするさ」

僕はこうして食べている方が好きだけどね、とデザートを恍惚の表情で口に運ぶエドモンド。オズワルドはその姿を琥珀の瞳で睨みつける。

「親友だ、心の友だと言っておきながら、私の言うことなど聞く気も無いということか」

「嫌だなあ、オズワルド。何でもかんでも言うことを聞くのは友人ではなく奴隷というのだよ？ 拗ねてないで君も、大いなるお菓子の魅力に開眼するべきじゃないかな。幸せな気分になれるよ。はい、あーん」

エドモンドは手にしたケーキの一つを差し出した。オズワルドはそれを無言で受け取り、へらへらと笑うエドモンドの口の中に押し込む。

「ふがつ、ふがつ!!!」

口の中にケーキを詰め込まれてむせ返るエドモンドを見、オズワル

ドは冷笑を浮かべた。

「いい加減、道化を演じるのは止めたらどうだ？お前達一家が、私に取り入って浅はかな末娘を妃に望んでいると、私が知らないとも思ったか？」

そう言われて、初めてエドモンドの顔色が変わった。ケーキをきちんと飲み込んだ彼は、珍しく真面目な表情でオズワルドを見上げる。「いくら君でも、ヴェロニカを馬鹿にしたら許さないよ、オズワルド」

口の周りにお菓子の欠片がついているのでいまひとつ締まらなかった。しかし本人は頓着することなく、王の顔を真つ向から見据える。「それに王妃の地位を望んでいるのはヴェロニカだ。僕はヴェロニカが王妃様になるなんて気が進まないし、多分父上も同じようなものじゃないかな。マルグリットだけは、応援したいのか邪魔したいのかよくわからないけど」

「口では何とも言える……が、お前の言うことも案外本当かもしれないな」

オズワルドが言った言葉に、エドモンドが怪訝そうな顔をする。

「ハロルドは末娘が幼い頃から頻繁に、キアランに会わせていたな。このような催しでも、おそらく私への足がかりになるとも言い聞かせて、キアランと接触を持つように仕向けている。將軍閣下が掌中の珠に嫁がせたい本当の相手は、我が弟なのではないか？」

「流石の僕も、そこまではわからないよ」

肩をすくめるエドモンドを、はぐらかすなどオズワルドが睨みつけた。

「お前達の考えていることなどわかってる。私を廃してキアランを王に、そして末娘をその王妃にせんと企んでいるのだろうか？」

「おいおい、それ、思いつきり謀反じゃないか。証拠も無いのにそんな風に疑うなんて、流石に失礼だよ」

「お前に言われずとも、証拠が無いから捕縛は出来ない。しかし私がこのような考えを持つに至った根拠なら山ほどあるぞ。例えばア

「デン將軍は未だ私を本当に王とは認めていない。才氣溢れる王弟こそ国王に相応しいと目をかけている。そして国内の重鎮で彼と同じ考えを持つている者は、決して少なくない。なぜならば、キアラが王位継承権を放棄してなお、あの子を王に担ぎ出そうなどという動きが燻って決して消えないのは、上の者が匿っているとしたか考えられないからだ」

「被害妄想も大概にしたまえ。みんな君の憶測じゃないか」
エドモンドは何を言われても飄々とした口調で受け流した。

「惚けるな。お前も、私よりキアラのほうが王に相応しいと思っているのだろうか？」

ねっとり絡みつくような声。闇に沈んだ琥珀色の瞳。それを眺めるエドモンドの表情が、ほんの僅か悲しみに沈んだ。

「そんな事思っていないよ。ねえ、今からでも方針を変えないかい？」

エドモンドはヴェロニカが王妃になることを望んでいない。しかし、フェリシアが王妃になることにも漠然とした危機感を覚えていた。

アーデン家の力が衰えることを恐れているのではない。話はそんな些細ことではないのだ。オズワルドが予言の救世主を王妃に迎えれば、王権は更に強くなる。今のオズワルドに、その力はあまりにも強大すぎるような気がしてならなかった。

「何を言っている、変えるはずが無いだろう」

案の定、提案は一蹴された。エドモンドは溜息混じりに呟く。

「オズワルド、君は今でも母君のことを気にしているのかい？」

「黙れ」

亡くなった先王妃のことを口にした瞬間、オズワルドの声に殺気が滲んだ。

「もういい、私の前から消える。事を始める。早くあの二人を引き離して来い」

どうやら国王陛下の逆鱗に触れてしまったらしい、と察したエドモンドは、憂鬱な表情で胸に手を当てた。

「仰せのままに、国王陛下」

一礼して振り返ると、オズワルドの指差す先で、楽しそうに笑いあうフェリシアとキアランの姿がある。

(あの二人を引き裂くだなんて、嫌な役目だねえ)

しかし、引き受けてしまったものはしかたがない。エドモンドはやれやれと首を振り、王の壇上から降りはじめた。

「フェリシア君」

エドモンドが声をかけると、フェリシアは驚いた表情で振り返った。

「あれ？エドモンドさん、どこに行つてらっしゃったんですか？」

「それはどちらかというと僕の台詞かなー。僕はこの会場で一番目立つところにいたよ。気づかないとは、よほどキアラン君に夢中だったんだねえ」

「も、もう、止めてください！」

フェリシアが真っ赤になつてぷりぷりと怒り、キアランが無言でエドモンドを睨む。エドモンドはエドモンドで自分がお邪魔虫であることは自覚しているので、早々に謝った。

「ごめんよ、お互い夢中なところ悪いんだけど。そろそろ本来のパートナーの元に戻る時間だよ。国王陛下から大事な話があるからね」
「……わかった」

オズワルドの名前を出すと、キアランが不承不承頷いた。フェリシアとつないでいた手を名残惜しそうに解き、キアランは姉やクルトと共に人に囲まれ談笑するヴェロニカの方へ向かつていく。

「大事なお話……そっか、愈々ヴェロニカさんのお披露目ですね。エドモンドさん、妹さんの晴れ姿ですよ、楽しみじゃないですか？」

「ん？うん……」

「エドモンドさん？」

歯切れの悪い彼の様子にフェリシアが小首を傾げる。その間に、壇上でベネディクトが進み出て、ヴェロニカの名前を告げた。

「御前へ」

重々しく命じられ、流石に緊張した面持ちのヴェロニカが、キアランと腕を組んで壇上を上がっていく。可憐で初々しい令嬢と、彼女に寄り添う精悍な騎士、二人を待ち受けるのは美貌の国王。絵に描いたような光景に人々は息を呑み、フェリシアは眉根を寄せた。

（こうして見ると、キアラン格好良いもんなあ。私が横にいるよりよっぽどお似合いだ）

ついそんな事を考えてしまい、フェリシアは頭を振る。

（そんな事考えたらダメダメ、前向きにいこう、うん）

見上げると、ヴェロニカたちが王への挨拶を済ませたところだった。オズワルドが立ち上がり、ヴェロニカの手を取って広間の人々に彼女の顔を見せる。ヴェロニカはうっとりとした表情で隣に立つオズワルドの顔を見上げていた。そんな中、ヴェロニカの紹介と、預言者としての功績をベネディクトが読み上げ、褒め称える。

「皆、王国の新しい守り手に祝福を！」

『祝福を！』

朗々としたオズワルドの声に、人々が唱和した。声援と拍手を浴びながら、ヴェロニカとキアランが壇上から降りてくる。これで舞踏会再開、と誰もが思ったときだ。

「皆、今日はもう一つ重大発表がある」

オズワルドの言葉に、会場は俄かにざわめき出した。オズワルドは人々を宥めるように、話を続ける。

「深刻な話ではないから安心して欲しい。寧ろとてもめでたい話だ。諸君らには聴衆というより、立会人になってもらう」

エドモンドがフェリシアの手首をつかんだ。

「フェリシア君、行くよ」

彼はそのまま、フェリシアの手を引いて壇上へと突き進む。

「え、ちよつと、エドモンドさん!？」

慌てて呼び止めようとするフェリシアを、エドモンドの哀れみに満ちた目が一瞥した。オズワルドの元へ行く二人を、咎めるものは誰

もない。当のオズワルドが両手を広げて、フェリシアを歓迎する姿勢を示しているためだ。フェリシアは何が何だかわからないうちにオズワルドの前まで連行された。

「私の治世は今年で十一年になるが、長らく妻を持たず、皆に心配をかけたこと、まずは謝ろう。しかし案ずること無かれ、神はこの国を見捨てなかった！王妃にこのうえもなく相応しい救世主を遣わせて下さった！」

「オズワルド陛下……？」

熱弁を奮うオズワルドに呼びかけるが、返事は無い。

「皆、知つてのとおり救世主フェリシアの勲功はどんな武人にも魔術師にも劣らない。その上、人柄も極めて清廉な人物であり、長らく王家を支えてきたチェンバレン公爵家の出身。私は彼女を我が妃に望む！」

人々は戸惑いながらも歓声を上げた。思わぬ話の展開に後退しかけたフェリシアの手を、逃すまいとするかのようにオズワルドが掴みあげる。

「フェリシア、どうか私の妃となって、共にグランディールに尽くしてはくれまいか？」

問いの形は成していたものの、それは実質王妃になれという命令だった。大勢の観衆の前で、婚約者のいないフェリシアがオズワルドの求婚を断ることができないはずが無い。逃げ口上を与えない完璧な布陣だった。

（どうしよう、てつきり忘れられているものだとばかり思ってたのに、まさか陛下がここまで本気だったなんて。どうやって断ったら、せめて返事を先延ばしに）

そこまで考えて、頭の中が真っ白になった。顔からは血の気が引き、フェリシアが何も言えないまま、広間に一瞬の静寂が訪れる。それを、不意にガタンという大きな音が破った。人々が一斉に振り返ると、椅子を後ろに倒して立ち上がったヴェロニカの姿があった。

「申し上げます、オズワルド陛下」

フェリシア以上に青ざめた顔で、しかしはつきりと彼女は告げた。

「たった今、予言を授かりました。明日、再び魔物の大群が攻めてまいります！」

ヴェロニカは王都から近い町のひとつを告げて、今までの侵攻に比べて数が多いこと、時間が無いことを訴えた。集まった人々は不安げに囁きあい、広間は再び混迷の様相を呈してきた。

「どうか救世主フェリシア様による出陣を！さもなければ多くの方が命を落とすことになります！！」

ぎしりと齒軋りの音がする。ほんの一瞬にも満たない間、忌々しさに顔を歪めたオズワルドは、すぐさま冷静な国王の顔でヴェロニカに尋ね返した。

「ヴェロニカ嬢、その予言、真なのだろうね？今まで、予言を授かるときは一人でいるときだったと聞いているが」

「そ、それは、今までが偶然一人のときだったということも考えられます。陛下、どうかご決断を」

必死に頭を垂れるヴェロニカを見下ろし、オズワルドは重々しく溜息をつく。逆に、フェリシアは勇み立った。話を逸らすのに丁度いいタイミングで、しかも魔物が出るとなれば自分の出番なのは間違いない。

「私、行きます！」

オズワルドが何か言う前に勝手に名乗り出ると、人々がおおっとどよめいた。完全に、空気は魔物討伐に移っている。

（このどさくさに紛れてさっきのが無かったことになればいいんだけど）

漠然とした不安を抱えながらも、フェリシアはひとまず返事を先延ばしできたことに胸を撫で下ろしたのだった。

その後、舞踏会の会場は混乱のまま解散となった。ヴェロニカも、詳しい話を聞くために呼ばれるまで、自室にて待てと帰された。着替えもそこそこに部屋から全ての使用人を追い出したヴェロニカは、

険のある眼差しで周囲を一瞥し、口を開く。

「いるのでしよう、ノヴァ。出てきなさい！」

返事がなければ、自分の命運もそれまでだ。そう思いながら呼びかけると、黒髪の少年はいつものように真意の読めない笑みを口元に浮かべて現れた。

「やあ、君から呼び出しなんて珍しいじゃないか」

「こんな時に茶化さないで」

「やれやれ、怖いお姉ちゃんだ。それで、僕に何をして欲しいのかな？」

ヴェロニカは怒りに満ちた目で、挑むようにノヴァを睨みつけた。オズワルドがフェリシアへ求婚の言葉を口にした瞬間から、怒りで気が狂いそうだった。否、本当に狂っているのかもしれない。あの求婚を無かったことにするためだけに、ありもしない予言を勝手にでっち上げたのだから。そして予言を事実に出来るのは、ノヴァだけだ。

「殺しなさい」

きっぱりとヴェロニカは言い切った。

「殺すのよ、あの女、フェリシア・チェンバレンを！どうせ舞踏会の顛末は見ていたのでしよう？私が予言したとおりの魔物の大群を出して！！あんな女に王妃の座を奪われてなるものですか！！！」

お前なら出来るでしよう、とノヴァに詰め寄ると、少年は冷笑を浮かべた。

「君を預言者に仕立ててあげたのは僕だよ？いつの間に、僕に命令が出来るほど偉くなったのかなあ、ヴェロニカは？」

ねっとり絡みつくような魔力を帯びた声に、ヴェロニカの背筋が凍る。しかし今の彼女は、それをも打ち払う憤怒の感情に支配されていた。

「だからなんだというのです、私が神の怒りに触れたというなら、今すぐ消してみせるがいいわ！王妃になれないなら殺されるのと同じことよー！」

するとノヴァは、意外そうに眉を上げた。

「……ふうん。所詮、世間知らずのお嬢様、僕が怒れば震え上がると思いきや、なかなか肝が据わってるじゃないか。……いいよ、今回だけ特別に、君の言ったとおりに魔物を出してあげる」

まだまだ君には駒になってもらわなきゃならないしね、と呟いて、ノヴァの姿が掻き消えた。彼の消えた虚空をしばし呆然と眺めたヴェロニカは、徐々に口元を笑いの形に歪めていく。

「あ……あはつ、あはははは！上手くいった！！これで終わりよ、フェリシア・チェンバレン！！お前なんか、王妃の座は渡さないわ！」

高笑いを上げ勝ち誇るヴェロニカの頭上。城の屋上に移動し、ちょっと淵に腰をかけたノヴァは、彼女以上に禍々しい笑みを浮かべた。

「やれやれ、いつの時代も人の欲や嫉妬は醜い醜い。だからこそ僕が付け入る隙もあるのだから、感謝しなければいけないかな？」
黒い目隠しの裏側で、神を名乗る少年は目を細めた。

「まずは手始めに、王様に悪夢を贈ってあげよう。オズワルド、君の境遇は気の毒だと思わないでもないけれど。……君もあの男の裔だ、せいぜい苦しむといい」

言い残して、少年の体は強風と共に掻き消える。グランディールの王城を、不穏な嵐が襲おうとしていた。

44 求婚（後書き）

ついに陛下の求婚が来た、と思ったらヴェロニカが愈々悪役になってまいりました。

でも次回から、一旦現在の話から逸れて過去の話になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1582u/>

人形の救世主

2012年1月8日23時48分発行